

1. コヨーテはどんな風にして火を盗んだと思う？

アメリカインディアンの伝説

ずっとずっとその昔、人類がまだこの世の中に生まれてまもなくのころ、彼らは、あらゆる動物たちの間でもっとも幸福だった時代がありました。それは、春のそよ風が柳の小枝の先をそっと吹きぬけてゆく日々、あるいは、子供たちが夏の太陽のブルーベリーを口いっぱい頬張るような日々、いやいや、秋の霞のなかで、麒麟草が満開になるようなそんな情景の日々だったのです。

しかし、いつものことですが、秋の夕べのもやは日増しにだんだん冷たくなり、太陽の日差しは少しずつ短くなってゆきました。そして、人々は冬が間近に来ていることを知り、恐ろしくて、不幸がやってくるように感じたのです。彼らは、子供たちと、そして、部族の神聖な話を語り伝える自分たちのお爺さん、お婆さんたちのことが心配でなりません。彼らのうちの多くの人達が、老若男女を問わず長い、冬のあの凍りつくような寒さの中で死んでいったのです。

残された人々のように、コヨーテは、火を必要としませんでした。ですから、彼は、人間達の部落を通り過ぎる春の日まで、自分は殆ど火が必要だなどということを感じなかったのです。そして村には、冬の間に死んだ赤ん坊達や、年寄りを悼む、そんな唄を歌っている母親たちがおりました。彼女たちの歌声は、コヨーテの首の上の髪の毛をチクリと刺し、そして、バッファローの頭蓋骨をすり抜けてゆく西風のようなうめきだったのです。

“太陽が、今、どんなにか我々の背中に暖かいものであるのかを感じなさい”とある1人の男が言いました。“どれほど、この大地とそこいらにある石を、手にするのも熱いくらいに暖めているかよく知りなさい。ああ、もし、その太陽のほんの一かけらでも冬の間、我々のテントの中に持ち込むことができたのならなあ。”

コヨーテがこの言葉を聞いていました。そして、男たちや女たちにすまないなと思ったのです。と同時に彼は、なにか彼らのためにできることがあるのではと考えました。彼は、そこからずっと離れた山の頂に、3人の火の精が住んでいることを知っていたのです。これらの精は、人間達が何時か火を手に入れ、彼らがもっと狂暴になるかもしれないと心配しながら、それを用意して守っていたのです。コヨーテは、こうした自分勝手な火の精を犠牲にして、人々のためになにかしてやることができるのではと思いました。

そこで、コヨーテは、火の精たちが住んでいるという山に行き、精たちがどんな風にして火を守っているのか見極めるために、その山の天辺まで上ってゆきました。彼が近づいてゆくと、精たちはそのの足音で飛び跳ね、そして、彼らの小屋の周りを疑い深く見張っていたのです。彼らの目は、まるで血石のようにぎらぎらと輝き、そして、手は、あの恐ろしい真っ黒なハゲワシの爪のように鉤の形をしていました。

“なんだ？ なにか聞こえたぞ？”と1人の精が喚きました。

“親分、なにか、藪の中で動いているものがいますぜ！”と別の精が金きり声でつぶやきました。

と、三番目の精がもっと近づいてきて、そこにコヨーテがいるのに気がつきました。しかし、彼が、四つんばいになって 山の天辺のほうに行ってしまいましたので、その精は、彼のことを林のなかでのそのそ歩き回っている、普通のコヨーテなんだなと思いました。

“誰もいませんよ。なんともないですよ！”と叫び、のこりの2人も彼女が指差す先に、灰色をしたコヨーテがいるのを見ただけでした。そして、彼らはまた、自分たちの火の周りに座り、コヨーテのことなどそれ以上少しも気にかかけませんでした。

そんな調子で、コヨーテは、夜も昼も、火の精たちがどんな風にして火を守っているかを観察することができたのです。彼は、彼らが、松かさや、スズカケの木の乾いた枝をどんな風にして火にくべているのかを見ました。そして、彼らがどんな風にして、飛び散っていき乾いた草の端っこのところに飛び火するのを一生懸命踏み消しているのかを見ま

した。また、夜になったら、順番に火の横に座って番をしているのを見ました。一人の精が起きて番をしている間、2人は寝ているのです；また、ある時間になると、火のそばにいる精が、それを手にして、彼らの小屋の中に入っていく、そして、次には別の精が出てきて、火の番をしているというのを知りました。

コヨーテは、その精たちが1日のあるとき以外は、とても神経質になって火を守っていることを知りました。そのあるときとは、朝一番の風が、山を吹き降ろす時刻でした。そのあと、火のそばに居る精たちは、身震いをしながら、“姉さん、姉さん、外にでて火を見ていて頂戴”と叫びながら小屋のなかに飛び込んでゆくのです。しかし、二番目の姉さんは、自分の番になるといつも決まってユックリユックリでてくるのです。というのは、彼女の頭のなかは、眠いのと朝方の浅い夢でくらくらしていたからです。

こんなことをすべて知ったコヨーテは、山を下り、人間達の中にいる自分の友達にこのことを話しました。彼は、冬の寒さと恐怖におののいている禿頭の仲間に話しました。そして、火の精のこと、それから、火のぬくもり、輝きなどについても話をしました。そこで、人間達も火を持つべきだということになり、コヨーテの計画に手助けをすると約束しました。

こうして、コヨーテは直ぐにまたあの山に頂上に登ってゆきました。そして、彼が近づくと、やはり火の精たちは飛び上がって、その中の1人が、“なんだあれは？ お頭、お頭!”と叫びました。

そこで、他の者達がまた近づいてよくよく見たのですが、その藪のなかで狩りをしているのは、たかが灰色のコヨーテではないかと思ひ込み、また、腰を下ろして、それ以上コヨーテを警戒するようなことはありませんでした。

コヨーテは、昼の間はじっと我慢をし、夜になり火の精のうちの2人が眠るために小屋の中に入っていくまで待っていました。そして、あの吹き降ろし風が確かに起きるまで、夜の間中その様子を伺っていたのです。

そして、ついに、火を守っている精が叫びました。“姉さん、姉さん、起きて、火の番をお願い。”

すると、火の番をすることになっていたほかの精がゆっくり、いかにも眠そうに、ベッドからでてきて、“分ったわよ、分ったわよ。直ぐに行くから、大きな声をださないで。”といいました。

ところが、彼女がテント小屋から出てくる前に、コヨーテは、藪の中から飛び出してきて、火の燃えている薪を一つ掴み、山の下り道を急いで駆け降りて行ったのです。

火の精が金切り声を上げて彼の後を追いかけて行きました。コヨーテが走るのに負けず劣らず物凄い速さで走り、彼らはとうとう彼に追いつき、そして、彼らの1人がコヨーテを捕まえようと手を伸ばしたのです。彼女の手がやっとのことで尻尾のところまで届くほどでしたが、それでも、かきむしって白い毛にしてしまうにはそれで十分だったのです。ですから、コヨーテの尻尾の先が今でも白いと言うわけです。コヨーテが喚いて、その火を放り出してしまいました。しかし、彼の回りにいた他の人間たちが、山の麓のところでそれが必要なときには寄せ集めたのです。リスは、火が、落ちていくのを見ていました、そして、それを掴むと自分の背中に乗せて、木の天辺に逃げ込んで行きました。火はリスの背中を痛くてたまらなくなるほど焦がしてしまいました。ですから、リスの尻尾は、皆さんが見ても分るようにくるくると輪を描いて、そっくり返っているのです。

火の精たちは、火をシマリスに投げ渡したリスを追求しました。シマリスの方は、恐ろしさでガタガタ震えて、精たちが彼女のところにやってくるまで、まるで、足に根が張ったようにじっとして立ちすくんでいました。そして、シマリスは逃げ出そうと振り返ったとたんに、1人の精がそれを捕まえて、その背中一杯に皮を弾きむしりましたので、いまのシマリスのように背中に三本の縞模様ができてしまったのです。シマリスは火をカエルに投げ渡したのです。すると、火の精たちは今度はカエルの方に向かって行きました。そして、その1人がカエルの尻尾を掴んだのですが、カエルのほうは、思い切って飛び跳ね、その尻尾が火の精につかまれていたものですから、それを引きちぎって逃げて行きました。ですから、今でも、カエルには尻尾がないんですよ。

火の精たちがカエルのあとに追いかけていってみると、カエルは、その火を森の木のほうに投げ出したのです。すると、その森が火を飲み込んでしまったのです。

火の精たちは、それを集めて回りました。が、しかし、彼らは、火をどうやって森から取り出したらいいのか知っていなかったのです。しかたなく、彼らは、それをプレゼントすると約束して、歌を唄いながら、そんなことを口にしていました。かれらは火をねじったり、はたいたり、ナイフでもって切り刻んだりしたのですが、でも、森の火は消えることがなかったのです。そして、とうとう、火の精たちは諦めて自分たちのあの山の天辺に帰って行き、そこには、人間達だけが残っていたというわけです。

でも、コヨーテは、森からどうやれば火が取りだし、消すことができるか知っていました。そして、彼は、人間達の村に行って、彼らにその方法を教えたのです。彼は、人間達に、こすり合わせるための乾いた二本の木をみせてやり、そして、先を尖らせて、糸を巻きつけ、それを穴のあいた別の木に通すようにしたのです。そうです。こうして人間達は火を起こすことを知り、あの殺人的な寒さの冬の間も、温かく、安全に過ごすことができるようになったのです。

コヨーテは、インディアン達にはとても知恵のある動物として尊敬されています。彼らが、あの厳しい寒い冬の間を森のなかで生き抜いていく、その力強さにこんな伝説が生まれたのではないのでしょうか。インディアン達の観察の素晴らしさを感じます。

2 カエルとナベ鶴の話

Native American Lore

森の真ん中あたり、そこに、とても静かで、緑溢れる池がありました。その池の縁には、風でぱりぱりと音を立ててなびいている背の高い葦の群れと、狭くなった浅瀬には、スイレンの広い葉っぱが沢山浮かんでいました。そして、そのイグサと葦のなかの、静かな水のなかには、非常に沢山のカエルたちがすんでいたのです。

春になって、温かい夜にはいつも、カエルの鳴き声がとても可愛げに声をそろえて鳴いていたのです。その声のなかには、とても低くて、太い声をしたものがあつたのですが――これは、カエルたちの中でも、比較的歳をとり、ちょっと賢いカエルたちのものでした；少なくとも、そのカエルたちは賢さを知っているだけの歳を取っていたという意味ですが。そして、鳴き声の中には、ちょっと甲高く、キーキーという感じのものがありましたが、これは若くて、まだ、自分たちが尻尾を持っていて足のない頃のことを思い出したくもないと思っているような連中の鳴き声だったのです。

“げろ！ げろ！ わしゃ、この池の主なんだ！”と、とても図体の大きな一匹のカエルが、スイレンの葉っぱの影の下に座りながら、しわがれ声でいました。

すると、反対側の土手のほうからも、“げろ！ げろ！ わしゃ、この池の主だわい！”と、かすれた声がしました。

と、今度は、もっと池のずっと向こうの方からも、“げろ！ げろ！ わしこそ、この池の主だわい！”と、三匹目の年取ったカエルの声が響き渡りました。

と、そのすぐ近くに、長い白い足をしたナベ鶴が、水辺の端の所のがさがさになった草の影に上手に隠れて、じっとしていたのです。かれはその晩はとてもお腹が空いていて、その最初の図体の大きなカエルの音の低い鳴き声を聞いたときに、すくっと立ち上がり、その長くて、むごいくちばしでもって、幅の広い葉っぱの間をすつつついたのです。その年とったカエルは恐怖にみちた鳴き声を張り上げ、そして、あらん限りの力を振り絞って飛び跳ねて逃げ、静か

な池の周りに、ばしゃ、ばしゃと水しぶきを上げ、仰天したカエルは水の中にもぐって行きました。

そのナベ鶴は、なにか冷たい、べとべとした傷の付いたものが自分の足の回りに来たときに、それをもうすこしで捕まえるところでした。が、彼は、一瞬、戸惑ってしまいました。というわけで、そのカエルは、なんとか逃げ切ることができたのです。しかし、ナベ鶴のほうは、自分の足に、一匹の大きな黒い水蛇がまつわりついていて、それが随分と素敵な餌になりましたので、結局はその日の晩のご馳走がなかったというわけではありません。

そこで、彼は、一本足で、鳴き声を聞きながら暫く休んでいることにしました。最初のカエルは静かになったのですが、今度は、反対側の土手にいた二番目のカエルが、声だかにかすれ声で鳴き始めました。

“げろ！ げろ！ わしこそ、この池の主だわい！”

ナベ鶴は腹が立ちはじめました。そこで、そっと音を立てずに池の反対側にまわってゆき、平らな場所に座って、自分がその池の真の主だとばかり信じ込んで、誇らしげに胸を震わせながら鳴いているその二番目のカエルめがけて、くちばしでつついたのです。

ナベ鶴の頭と、その長く首の殆どが水のしたにもぐって行き、そして、その小さなカエルが池のなかをあちこち、パシャ、パシャと水しぶきを上げて逃げ回り、とうとう、深い穴のなかに逃げ込んで行きました。

丁度、鶴が片方のあと足で取り押さえたその時、ナベ鶴は、なにかそこに居ることに気づき、そちらに気を惹かれました。そして、大きな羽をバタバタとさせ、ちょっと離れた岸のほうに物凄い勢いで飛んで行きました。それは、ほっそりとした、茶色の色をした体といたずらっぽい目をしたミンクだったのです。ミンクは、自分の餌にするために捕まえようと思って、そのナベ鶴のすぐ近くまで這いよってきていたのです。というわけで、二番目のカエルも無事に逃げることができました；でも、彼は、自分のこのとてつもない恐怖を経験してから、それ以後、二度と自慢げに鳴いたりはしなくなりました。

ナベ鶴は長いこと飛び、また、お腹がとても空いて来ました。その池は、とても大きなものでしたので、まだまだ沢山のカエルたちが、綺麗に鳴き声をあわせて鳴いていました。と、そんな鳴き声のなかに、あの三番目の図体の大きなカエルが鳴く、

“げろ！ げろ！ わしこそ、この池の主だわい！”

という低い声が響いていました。

ナベ鶴は、その叫び声からそう遠くないところに立ち、かれを完全に泣き止まそうと考えました。次の瞬間、彼が泣き出したときに、ナベ鶴が彼を足で掴みましたので、カエルは、かろうじて、“げろ！”と鳴くのがやっとでした。彼は、悲鳴を上げ、無駄な抵抗をしました。そして、そのあとは、彼はそのナベ鶴の長い喉のなかを滑り落ちていくだけでした。ところが、丁度その時、一匹のキツネがナベ鶴を捕まえようと、彼の直ぐそばまでやってきていたのです。ナベ鶴は、キツネを追い払おうとしましたが、結局、キツネの夕飯のご馳走になるために、森の中に悲鳴を上げて消えて行きました。こうして、三番目のカエルも逃げることはできたのです；が、彼は、ナベ鶴の強いくちばしでつつかれたために、体が不自由になりました。そして、それ以後彼は、殆ど口を開くことができなくなったということです。

ですから、あまり大きな声で喚くのは、決して利口なことではないですよ。

私たちのまわりにも、こんなカエルの主のような人が沢山いますが、この話は、そんな人たちに是非とも聞かせたい話ですね。

3 ノッポ大男のトウモロコシ畑の話

Native American Lore

ノッポの大男は、山から戻ってくるなり直ぐに、植えてあるトウモロコシとメロンを見るために自分の畑に行きました。彼は、やがてやってくる冬のために大きな穀物の種を植えていたのです。ところが畑にやってきて、彼はトウモロコシの茎の半分がむしりとられ、実が盗まれていたのです。そればかりが、大きくなったメロンもそのつるから切り取られていたのです。彼は怒りました。

“一体、だけがワシのトウモロコシとメロンを盗んだんだ?” 彼は、独り言を呟きました。“よし、そいつをきつと捕まえてやるからな。”

彼は、いろいろとたくらみを考えました。次の日、彼は、畑のまわりに柵を作ったのです。しかし、その柵はうまくできてはいませんでした。次の日も、また、次の日も、トウモロコシの茎がむかれていたのです。

とうとう彼は、その泥棒を捕まえようと考えました。そこで、彼は、大きな松脂を固まりを沢山集めてきて、それで人間の形をこしらえたのです。それをトウモロコシ畑の真ん中に立て、そのあと、自分の小屋に戻って行きました。

その日の晩のこと、スカンクが夕飯のごちそうにと、トウモロコシの一片を手に入れようとやって来ました。彼は、アナグマから、長身の大男が山に行っていると聞いていました。ですから、彼は、その柵の下からもぐりこんだのです。そして、よたよたとトウモロコシの茎を上って行きました。彼が、よく実ったトウモロコシの実のあるところまでたどり着いた、丁度その時です、彼は、あの柵のところに人が立っているのに気がつきました。スカンクは、トウモロコシの実を空中に投げたのです。彼は、月夜の光のおかげで、その男が長身の大男ではないと分ったのです。そして、今度は、柵によじ登って行き、その人形に話しかけたのです。

“お前さんはいったい誰なんだい、あの長身の大男のトウモロコシ畑で何をしているんだい?” とスカンクが冷やかしました。

勿論、人形は何もこたえませんでした。

“おまえは、誰なのさ?” とスカンクが、ずっと近づいてまた言いました。

人形は何も応えません。

“何か喋りなさいよ!” とスカンクが大胆にいいました。“でなきゃ、お前さんの顔にパンチを食らわすからな”

それでも、人形は一言も返事をしません。じっとしているだけで身動き一つしません。

“自分が誰か言っでござんよ。” 握りこぶしを振り上げて、しつこくスカンクが言いました。“言わないなら、顔を殴るからな”

それでも、人形は月夜のトウモロコシ畑のなかで、何も言わずにじっとたっているだけでした。風が吹いてきてもそこにたっているだけでした。

スカンクの一発目のパンチが松脂でできた人形の顔めがけて飛んで来ました。と、そのこぶしが柔らかい松脂のなかにめり込んでいったのです。松脂はまるで糊のようにべとべととしており、そのうちに硬くなっていったのです。スカンクは手を抜こうと必死になりました。

“お前さんが私の手を自由にしないのなら、今度は、左のこぶしをもう一つ食らわせるからな” と叫びました。

でも、松脂は、硬くなっていくばかりでした。

と、スカンクの左手のこぶしが飛んで行きました。さあ、たちまち両手とも捕まってしまったのです。

“私の手を離せ、でないと、今度は蹴飛ばすからな。” スカンクはもうこのときには気も狂わんばかりになって、叫んだのです。

でも、松脂でできた人形は彼を放すことはありませんでした。

スカンクが、右足でこれでもかというくらい強く蹴り上げました。すると、やっぱりその足も、手と同じ様に固まってしまったのです。

“もっときつく蹴るぞ”とスカンクはいうなり、全身の力を振り絞って、今度は左の足で蹴飛ばしました。松脂でできたその人形は、その足もまた固めてしまいました。スカンクは賢明にもがきましたが、でも、どうすることもできませんでした。とうとう彼は、にっちもさっちも行かなくなりました。もう手も足もどうにもならなくなっていたのです。彼に残された武器といえば、そうです、歯が残っていました。

“よし、こうなったら、お前の喉にかみつくからな。” こうして彼は、叫ぶと同時に歯をむき出しにしてその松脂でできた人形の喉をがぶりとやりました。

“うぐーっ!” 彼は、ごぼごぼというだけで、もう言葉がでませんでした。彼の舌も歯も、途端に松脂で固まってしまったのです。

次の日の朝、長身の大男がトウモロコシ畑にやってみると、そこには、スカンクがその松脂でできた人形に抱きつかれていたのです。ただ、尻尾だけは、その背中で右に左にどうにか動いているようでした。

“あゝ、”と大男が言いました。“そうだったのか、お前だったのかスカンクよ。私のトウモロコシを盗んでいった奴っていうのは。”

“うぐーっ。”とスカンクが応えました。口中が松脂だらけになって。

そこで、大男は彼を松脂の人形から引っ張り出し、今度は、彼の首にロープを巻きつけました。そして、彼を小屋のほうに引っ張っていったのです。彼は、水の入った大きなポットで湯を沸かそうと、それをストーブの上に置き、そして、スカンクの首にかけていたロープを外してやりました。

“なあ、スカンクよ。森に行って木を取って来るんだ。”と彼は言いました。

スカンクは、小屋の後ろにある森の方に歩いていくと、丁度、そのそばをキツネが通りかかりました。彼はあの大男のトウモロコシ畑に行く途中だったので。スカンクは、急に大きな声で泣き始めました。と、キツネは走るのを止め、そして、彼の鋭く尖った耳をピンと立てました。

“誰だ、そこで鳴いているのは?”と、彼が言いました。

“泣いているのはわたしですよ。”とスカンクが言いました。

“なぜ、泣いているんだね”とキツネが聞くと、

“実は、私は、あの大男のために木を運んでこなくてならないんだ。彼は私に私が食べたいぶんだけ、自由にトウモロコシをくれるとிட்டんだ。でも、わたしは、木は運びたくないんだ。”

その時、キツネはお腹が空いていたのです。もし、彼がトウモロコシを盗めば、彼は、お尋ね者になるということを知っていました。“どうすれば、簡単にトウモロコシが手に入るかだ。”彼は考えました。“わたしは、木を運ぶぐらい、なんてことはないではないか。”

彼は、合点がゆき、大きな声で、“兄弟よ、じゃあ、御互いにいれかわろうじゃあないか。お前さんは家に戻り、私がおその大男のところに木を運ぶことにしよう。わたしは力仕事が好きなんだよ。それに丁度わたしは、あのトウモロコシ畑にトウモロコシを失敬しにいく途中だったんだ。”

“分った。”とスカンクが言いました。“でもね、トウモロコシを食べ過ぎちゃいけないよ。私は、お腹が痛くなったくらいなんだから。”彼は、実際、お腹が張っていて、苦しかったのです。ですから、彼は、よたよたとしてしてはいましたが、喜んでどこかに行ってしまうしました。キツネのほうは一生懸命沢山の松の小枝を集めて回りました。そして、いそいであの大男の小屋に行っただのです。大男は、驚いて彼を見ました。

“分った、分った、スカンクくんよ。お前さんはキツネに化けたんだね、そうだろ？ 傑作だよ。”

キツネのほうは一言も喋りませんでした。かれは、なにか不都合なことをうっかり喋って、肝心のトウモロコシが手に入らなくなっはたいへんと思っていたのです。大男が、スカンクの首に巻いていたロープを持ってきて、今度はそれをキツネの首に巻きつけました。

キツネはそこに座って、じっと我慢をしていました。と、あの大きなポットの中の水が、ぼこぼこと沸騰を始めて、蒸気が出てきたのです。とうとう、キツネが我慢しきれなくなり、“まだ、トウモロコシは煮えてませんか、大男のどんな?”

“トウモロコシだって?”と大男が言いました。“いったいどんなトウモロコシなんだね?”

“なぜ、あなたが私のためにトウモロコシを料理しているかというと、”とキツネが言いました。“スカンクが、もし私が木をここに運んでくれば、だんなが私が好きなだけ食べられるトウモロコシをくれるといったんですよ。”

“あの、いたずら野郎め。”と大男が言いました。“彼はお前さんをだましたのさ、そして、私もね。よし、分った、キツネくん。じゃあ、お前さんはこのための支払いをしなくてはならないよ。そういいながら、彼は、キツネの耳を掴み、つるし上げました。そして、彼を沸騰している水の中に漬けたのです。ところが、その沸騰した水は、あまりにも熱かったものですから、なんと、彼の体の毛がすべて抜けてしまったのです。そして、大男はキツネを一分間ポットの中に残し、そのあと、耳を掴んで引き上げると、ドアの外に放り出してしまいました。

“こんりんざい、悪巧みをして、私のトウモロコシを盗もうなんてかんがえるなよ。”と大男が言いました。

キツネはキャンキャンと言いながら一目散に自分の巣のほうに逃げて行きました。彼は怒り狂っていたのです。自分の巣に戻る途中、彼は、赤い指標の所を通りました。その赤い指標は、赤土でできた、谷のなかで単独で突き出た高い塔だったのです。その岩の頂上には、ワタリガラスが止まっていて、あのトウモロコシ畑から盗んできたトウモロコシの実を食べていたのです。また、谷底には、コヨーテが爪で必死に岩にしがみついていた。そうです、そこで、ワタリガラスが食べ損なって落としてくるトウモロコシの粒を拾おうとしていたのです。そこにキツネが現れたとき、彼は、キツネが自分の後ろに姿を見せたとき、そちらをチラッと見ました。でも、彼は、キツネが自分の居る場所を取ってしまうかもしれないと思ったものですから、かれは岩から離れることができなかったのです。彼は、キツネがそこに来たことにとってもびっくりしていました。

“お前さん、毛皮は一体、どこにあるんだね、キツネくん?”と肩越しに聞きました。

“私は、食べすぎるくらいトウモロコシを食べたんだ”と、キツネが悲しそうに言いました。“トウモロコシは食べ過ぎないほうがいいと思うよ、コヨーテくん。食べ過ぎると苦しいんだから。”キツネは、自分のお腹を抱えてよたよたと歩きました。“トウモロコシは、誰の毛皮にもよくないんだ。私を台無しにしたんだ。”

“しかし、兄弟よ。お前さんは一体どこでそんなに沢山のトウモロコシを手に入れたんだね?” と、コヨーテが、それでも岩にしがみつきのながら聞きました。

“なんだ、君は聞かなかったの?” とキツネが逆に聞き返しました。“あの、大男が、彼のところに木を運んでくる動物達には、誰だろうがトウモロコシを挙げるのがなぜかってことを。彼は、君にだって、君が食べられるだけ、否、それだけじゃなくもっと沢山のトウモロコシを君に上げるさ。さあ、いまこそ、両腕に一杯の松の木の枝を集めて、彼の小屋に急ぐんだ。”

コヨーテは一瞬考えました。彼は食い意地がはっていたのです。そこで彼はその大男の所に行くことにしました。でも、彼は、どういうわけかキツネと一緒に行動しようとはしませんでした。なぜなら、彼は、すべてを自分の物にしたかったからです。

“兄弟よ。お願いがあるんだけどね。私がその大男の所にいって、ちょっとトウモロコシを食べてくるまで、この岩を持っていてくれないか? 実は私はとてもお腹が空いるんだ。でも、この岩からは離れたくないんだ。この岩はそのうち倒れて、誰かを下敷きにするかもしれないんだ。” と彼は言いました。

“分った。分った。” とキツネが笑いながらいいました。“じゃあ、私がその岩を支えていることにしよう。でも、食べ過ぎてはいけないよ。” 彼は、岩の反対側に自分の爪をひっかけ、そして、コヨーテはそこを去っていきました。と、僅かしかたたないうちに、コヨーテが夢中であの大男の小屋に向かって走って行きました。これを見て、キツネはおかしくてたまりませんでした。しかし、直ぐに彼は、岩をささえているのが苦痛になりました。そこで、彼はそこから降りることにしました。

“ワタリガラスくんよ。見ていてご覧” と彼は叫びました。“その岩が直ぐに倒れるから。” キツネは、そこから離れると大きく飛び退きました。彼は、岩が倒れてきて自分の尻尾を踏みはしらないかと心配だったのです。もし、キツネが振り返ってみれば、岩はちゃんとしっかりそこに建っているということが分ったんですがね。

いまや、キツネが、あの大男の小屋から戻ってきていました。彼は、ありったけの早さで走ったのです。そして、恐ろしそうな声で遠吠えをしました。なんと彼の体には一本の毛も残っていなかったのです。彼が、あのレッドモニュメ

ントのところに来たときに、ワタリガラスが、止まり木に止まってトウモロコシの鞘をかじっているのを見たのです。

“あのキツネはどこに行ったんだ?” と、コヨーテがおこって怒鳴りました。

ワタリガラスは、そのコヨーテを見下ろして、“キツネだって? 彼は、どうして家に帰ったか考えてみるよ。でも、お前の毛皮は一体何が起こったんだね。コヨーテくんよ?” といいました。

コヨーテは一言も返事をしませんでした。彼は、その岩の根もとに腰を下ろし、つきでた鼻を上げ、ワタリガラスがトウモロコシの粒を落とすのをじっと待っていたのです。

“何時か、きっとあのキツネの奴をとっ捕まえてやるからな” そう、彼は低い声で呟いていました。

スカンクも、キツネも、そして、コヨーテも結局は欲深だったのですね。欲張りはいけないということではないでしょうか。さて、この話、あなたの心にはどんな印象がのこりましたでしょうか。

4 バッファローと野鼠の話

Native American Lore

昔、昔、のねずみが寒い冬に備えて木の実を集め回っているときに、そこへいつも一緒にいるバッファローが草原の様子を見ようとやって来ました。

ところが、この小さな野鼠は、そのバッファローがざらざらした舌で周りの高い草をなぎ倒してしまい、隠れ場所がなくなってしまうので、あまり彼のことを快く思っておりませんでした。

そこで、彼は、まるで人間のように彼に戦いを挑もうと決心したのです。

“やあ、兄弟のバッファローよ。私はお前さんに戦いをいどうじじゃないか!”と彼は、小さなかすれ声で宣言しました。

一方、バッファローのほうは、そんなことはない、これは冗談に過ぎないと、のっけから無視していました。と、ねずみのほうは、まるで腹をたてたかのように、何度でも戦いを挑んだのです、が、彼の敵は全くの無関心かのように睨んでいただけでした。そこで、小さな野鼠は、まるで彼が、侮辱しているかのように軽蔑の笑いをしたのです。と、バッファローはついに彼のほうを見て、そして、なにげなく返事をしました。

“何言ってるんだい。ちびさん、今のままで居たほうが良いに決まってるさ。それとも、そっちに行って、お前さんを踏みつぶしてやろうか。跡かたもなくなってしまうぞ!”

“そんなことができるもんか!”とねずみが言い返しました。

“じっとしてろって言ってんだろ。”と、バッファローが少し腹を立てた風に言いました。“もし、もういちど、そんな風な口をきくなら、今度は、お前さんをお陀仏にしてやるからな!”

“おお、良いじゃないか。やってごらんよ!”とねずみは挑戦するような言い方をしました。

そこで、彼を踏みつぶそうとバッファローは、そのあたりの草を彼の前足のひずめで不恰好にズシンズシンと踏みつけて回りました。

それが終わると、バッファローは野鼠を探しましたが、結局、彼はどこにも居なかったのです。

“だから、言っただろう。もう、何にも残っちゃいないさ!”と彼が呟きました。

と、そのとき彼は、自分の右の耳が何かに引っかかっているような気がしました。そして、ありったけの力で自分の頭を振りました。そして、耳を前に後ろにと動かしました。だんだんそのかじりがひどくなってきて、バッファローは半分気が狂いそうになって来ました。すると、彼は、ひずめで、地面を叩き始め、角で土を引っ掻きまわしたのです。

バッファローは、気が狂わんばかりに吠えながら、最初は真っ直ぐに突進し、それから、回りを回り始めました。しかし、そのうちに止まると、そこに身震いしながら立ち止まりました。すると、のねずみが彼の耳から飛び出し、こう言いました：

“どうだい。私が超能力の持ち主だと言うことが分かったかい？”

“分るもんかい！”と、バッファローは唸り声を上げ、また、足で踏みつけんばかりにねずみのほうに突進して来ました。ところが、そのちびさんは最初はどこにいるか見えたのですが、たちまちのうちに、バッファローは野鼠がもう一方の耳の中にもぐりこんだのが分りました。そして、またしても頭ががんがんなり始め、その痛さで、時に空気中に飛び跳ねたりしながら、草原のあちこちを走り回り始めました。最後には彼は、大地に倒れ、そのまま、静かになってしまったのです。なんと、彼の耳から出てきたねずみは、死んだバッファローの体の上にいかにも誇らしげにたっていたのです。

“えへん!”、と彼は鼻たかだかに、“同だ、私は、猛獣達のなかで一番つよいやつをやっつけたんだぜ。どうだい、これで私が超能力だということがみんな分っただろう。”と言いました。

死んだバッファローの上にたって、彼は、自分がしとめた獲物を捌こうと、大きな声でナイフを持ってくるように言いました。

一方、草原の別のところでは、赤いキツネがとてもお腹をすかしていたのですが、彼は、自分の朝食のねずみの狩をしているところでした。そして、一匹のねずみを見つけると、四本の足で捕まえようとジャンプをしたのですが、しかし、小さなねずみは、逃げてしまい、取り逃がしたキツネはひどくがっかりしていたのです。

と、丁度その時、彼は、ずっと向こうのほうで、“ナイフをもって来い!、ナイフを持って来い!”という声がするような気がしました。

そして、二度目の声がした時、赤いキツネはその声のするほうに向って走り出していました。最初の小山にきた所で、彼は、立ち止り、ちょっと耳を澄ました。が、しかし、それ以上は何も聞こえませんでしたので、また、もとのところに戻ろうとしました。と、その時、彼はまた、はっきりとした声を聞いたのですが、ところが今度の声は、とてもか細いものだったのです。“ナイフを持って来い!” 赤いキツネは、もう一度気を取り直して、もう、これ以上は走れないというくらいはやく走り出しました。

と、彼は、大地に横たわっているバッファローの巨大な体のところに辿りついたのです。小さなねずみはその体の上にたっていました。

“おまえさん、私のためにこのバッファローを捌いてくれないかね、そうすれば、お前にも肉のかけらをご馳走するぜ。”とねずみがまるで命令でもするかのように言いました。

すると、“ありがとう、兄弟よ。私は喜んで、君の言うとおりにするよ。”と彼は、丁寧な言葉で返事をしました。

そこで、キツネはバッファローを捌きはじめ、その間、ねずみのほうは、近くにあった小屋の上に、キツネの仕事を見ながら、なにやかやと指図をしながら座って居ました。
“君、君、肉はもっと小さく刻むんだよ”、と彼はキツネに言いました。

そして、キツネがすべての仕事を終わると、そのねずみは、彼にレバーの小さなかけらを渡したのです。すると、キツネは、そのかけらを素早く飲み込み、そして、唇の周りをなめながら、

“お願いだ、もうちょっと私にくれないかね?”と、ねずみにおそろおそろお願いをしました。

“何、もっと大きなかけらをくれだど! お前さんはなんて、卑しいやつなんだ!”と、ねずみがののしりました。“じゃ、その血の塊のところをやるから、それをとりな、”と彼は馬鹿にしていきました。そこで、哀れなキツネは、その血の塊のところをとり、そして、草までなめまわしました。それほど彼はお腹が空いていたのです。

“お願いだから、肉のかけらを家に持って帰ってでもいいかい?”と、彼は頼みました。
“家には、小さな子狐が六匹もいるんです。家には何にも食べるものがなくて彼らは飢えているんです。”

“じゃ、バッファローの四本の足のところを持って行っていいよ。それだけあれば、お前さんたちには十分だろ!”

“はい、はい! ありがとう、ありがとうございます!”とキツネが言いました。“でも、ねずみさん、私には女房も居るんですよ。そのうえ、このところ獵がどうもうまく行かないんです。もう、自分たちは餓死寸前なんです。ですから、もうちょっとだけ、何とかありませんでしょうか?”

“なんだと、”と、ねずみが怒鳴りました。“わたしは、お前さんがした仕事からすれば、もう、十分すぎるほどあげたさ。でも、まあ、いいさ。じゃ、頭のところを持っていくが良いいさ。!”

と、突然、キツネは、ねずみに襲いかかったのです。が、ねずみは、かろうじて難を逃れると、どこかに消えていなくなりました。

だから、あんまり偉そうに、自分勝手なことばかりしていると、最後には、なんにもなくなってしまうよ、ということさ。

欲張りが、最後にはどんなことになるかという話し。わたしたちもよくは程ほどにしなくてはと、反省をした次第です。

5 仲間の話

Native American Lore

Mashtinna, うさぎの名前なのですが、彼は、とても顔立ちのいい青年でした。その上、さらに彼は、とても気が優しくかったです。ある日のことですが、彼が狩をしているとどこからともなく、小さな子供のかすかな泣き声が聞こえてきたのです。そこで彼は、急いで、その泣き声のするほうに跳んでゆきました

そこで、彼が森を出てゆくと、そこにはある者が、見るからに楽しそうに、そして、お母さんの子守唄に鼻歌をあわせながら、ムチと挟み棒で1人の赤ん坊を痛めつけているのを見ました。

“君は、この可愛げな子供に乱暴するということがどういうことかわかっているのかね？”とうさぎが問いたされました；が、しかし、そこにいて尋ねられたものは、笑顔をつくり、嬉しそうに返事をしました。

“何を言っているんだ。君こそ誰について話をしているか知らないのか！ その子供はな、とても気難しい奴で、黙らせようとしてもこれがなかなかできないんだ。”

Mashtinna は、自分で、これは、か弱いものをいじめて喜んでいる、二つの顔をもつ男だと思っていたので、この言葉に感わされませんでした。

“その子供を私によこしなさい!”ときつく言いましたので、;その二つの顔を持った男は怒って、もうひとつの顔を出しました。それは、黒く、そして、しかめっ面をした顔だったのです。

“この子は、私のものなんだ、だから、もう一度そんなことを言ったら、今度は、こいつと同じ様にお前を痛い目にあわすぞ!”と怒鳴りました。

こんな具合でしたので、Mashtinna は弓に矢をあてがい、それで、その悪人の心臓めがけて射ったのです。

そうしてから、彼はその子供を腕に抱えてある小さな、古ぼけたテントの小屋のほうに向かって帰って行きました。そこには、ある老人が彼の妻と暮していたのですが、ところが、彼らは共に盲目で、彼らの子供も、そしてまた、幼い、一番小さな孫までもみんな、あの忌まわしい二つの顔をもった男に連れ去られてしまったので、生きる希望を失っていました。

“ほら、お爺さん、お婆さん! あなたがたのところに子供を取り返してきましたよ!”と、うさぎがドアのところにたって、言い聞かせてあげました。

でも、その哀れな、盲目の夫婦は、あの心無い二つの顔を持った男にそうたびたびだまされていたので、彼らはもう何も信じようとしなかったのです。ですから、2人とも、なかば泣き声で、“あんたはうそつきだ! 私たちはお前さんの言うことなんか信じやしないよ! さっさと出て行って、なんとでもしてくれ!”と叫んだのです。

彼らが子供を引き取るのを断ったので、そして、その時にはもう日が殆ど暮れかけていましたので、その親切な若者は自分の来ていたマントでその子供を包み、そうしてそこに横になり眠りにつきました。次の日のこと、彼が目を覚ますと、なんと驚いたことに、その子供は、夜の間に大きく育って、もう立派な若者の姿になっていました。しかも、2人はあまりにも似ていたので、まるで双子の兄弟のようだったのです。

“私の友よ、いまや、僕たちは、生涯の友人だ!”と、その不思議な若者が言いました。“私たちは、御互いに自分たちでできるあらゆるひとのためになることをしながら、この世のなかの別の方向に進んで行くことにしようじゃないか;でも、もし、僕たちのどっちかが、もう一方の兄弟の助けを必要としたときには、直ぐに助けに戻ってやることにするんだ!”

こうして、2人はこのことに同意をして、2人とも反対の方向に向って進んで行きました。それから、まもなくのこと、そのうさぎはまるで沢山の人たちが、苦痛をともなうて喚き、泣き叫んでいる大きな声を聞きました。そして、その場所に行ってみると、なんと、そこには、1人の男が風が吹くたびにゆらゆら揺れる木の枝でできた櫛で体をひどく突き刺されていたのです。彼は、もうどうにも逃げ出すことができず、それはもう、これ以上はないと言うくらい惨めな姿でした。

“よし、私がそこに行くから待っているんだ、兄弟!”と、親切な若者がいいましたが、刺さっている木と別の枝がおそってきたのです。木は自由に締め付けができたのです。Mashtinna が彼のところに行くと、こんどは、木は彼の上に襲いかかり、万力のように締め付け、彼をきつくはさみつけてきたのです。

その苦痛は、彼が創造したよりもずっと悪いものでした。しかし彼は、泣き声一つ出さず、できるだけ長いことがまんをして、押しのけたのです。汗が玉のように彼の顔を流れ、彼の血管はもう破裂寸前の状態でした;とうとう、彼は、もうこれ以上は持ちこたえられないと判断して、そこで、大きな声で彼の友に助けを求めたのです。と、たちまち、そこに若い男が現れ、その木を打ちのめしたので、木は離れて、おかげで Mashtinna は助かったのです。

彼は、ある森のはずれに、まさしく、彼自信である小さなテント小屋を見つけ出すまで、なおも旅を続けました。その小屋のドアの下がり上げてみると、そこには、感謝して彼に挨拶をした歳寄りの盲人のほかは誰もいませんでした。

“ほら、私の孫よ! 分るだろ、わたしは歳寄りだし、とても哀れなんだよ。一日中、わたしは誰にも会うことはないさ。自分が喉が渇いてなにか飲みたいときには、この革でできた縄が私を川のところまで導いてくれるのさ。また、私が火にくべる乾いた薪が必要なきには、今度はこの別の縄を伝わっていけば、その木のあるところに行き着くことができるのさ。ここにある袋には、私が食べる分だけの乾燥した肉が詰まっているので、これで食べるものには不自由しないさ。でも、悲しいかな、孫よ、私は、ここでは一人ぼっちなんだよ。それに、私は盲人なんだ!”

“お爺さん、僕の目を上げるよ!”と、すぐにこの親切な若者は応えました。

“そうすれば、あなたは自分の行きたいところに、どこにでもいけるでしょ。私はあなたに代わって、ここに残りますよ。”

“ほら、ほら、私の孫よ。お前さんはなんと優しいんだね!”とその老人が応えました。そして、そのうさぎの目を喜んで取り出し、どこかにいってしまいました。若者は目が見えなくなって、そこに留まることになりました。そして、お腹が空いて来ると、彼は、あの袋の中から乾燥した肉を取り出して、それを食べたのです。

すると、今度は彼は非常に喉が渇きましたので、あの革でできた縄を掴み、それを辿って小川のほうに行きました；、しかし、彼が水を飲もうとして立ち止ったときに、その縄が切れてしまい、**Mashtinna** は、川の中に倒れてしまいました。

水が冷たく、そして、土手はとても滑りやすかったのですが、しかし、彼は、何とか、川から抜け出すことができ、そして、服から雫が滴り落ち、とても惨めな格好でしたが、また、自分の小屋に戻ることができました。そこで、彼は、火を起こして、自分の服を乾かそうと思いましたので、別のロープを探り、小枝を集めに森に行ったのです。

しかしながら、彼が小枝を集め始めたときに、そのロープを見失ってしまい、すっかり、何の手がかりもなくした彼は、どうすることもできず、挙句に、そこに倒れていた木に躓いてしまいました。そして、木の幹に嫌というほど体を打ち付けてしまいました。沢山の茨やキイチゴの刺で顔は擦り傷だらけになって、もうこれまでだということまでできてしまいました。そこで彼は、兄弟の助けを求めて大きな声で泣き叫びました。

と、たちまち、あの若者が目の前に現れて、前と同じ様なことを言いながら彼の目をあげたのです：“わが友よ、もうこれからはあまり無茶をしてはいけないよ。確かに、困っている人を助けることは正しいことなんだが、でも、あなたは、自分が最後まで、持ちこたえることができるかどうかということも、よく考えなくちゃ。”

自分の目を人にあげるという話は、ほかでも聞いたことがありますね。親切も程ほどにということですが、とても考えさせられる話でした。

6 雄鴨とその子鴨たち

Native American Lore

雄ガモと彼の妻が、やっと半分だけ成長した彼らの子ガモをかなり北の地方にある湖の岸に集めたのは、すでに冷たい風がヒューヒューと吹き始め、湖の水面には波が立ち始めていたころでした。

“おまえさんよ”、雄ガモが、“彼らにとっては、まだ経験したこともない温かい南の国だけど、もう、そろそろそこに子供たちを連れていく時期が来たようだね!”と言いました。

そして、次の日の朝はやく、彼らは、大空に“V”の字を描きながら飛んで、長い南の国への旅に飛び立ちました。母ガモがその群れの先頭に立ち、そして、父親の方は、一番後ろで、落伍者がでないかどうか大変気遣いながら飛んで行きました。

彼らは、大草原の、そして、広大な北の松の森の上にひろがる、厳しく寒い大気のなかを、夕方、かれらが自分たちのしたにちょうど黒味の掛かった青い石が一行に繋がってぎらぎら輝いているように沢山の湖が見えるまで、空高く一日中飛んで行ったのです。

半円を描くように丸く飛びながら、彼らは少しずつ、少しずつ下に下りてゆきました。そして、その一番近くにある湖の滑らかな水面に舞い下りて、そこで休息をとろうとしたのです。

と、その時、突然彼らの先頭にいる母ガモは、まるで弾丸が空気を突き破るような音を聞き、直ぐにみんなに注意をするように言いました。“ガア!、ガア! 危ない、危ないよ!”そして、全員が、くるくると輪を描きながら湖のほうに降りて行きました。と、そこに大きなハヤブサが彼らのほうに羽を広げてサーッと飛んできたのです。子ガモたちは、びっくりしてあちこちにばらばらに散らばって行ったのです。年取った雄ガモが最後にやってきたのですが、打たれたのは彼だったのです。

“ガア、ガア!”、恐ろしさのあまり、沢山のカモたちが鳴き騒ぎました。そして、たちまち、あたりの空気は、粉雪のように舞う柔らかい羽毛で一杯に成りました。しかし、風の力は、とても柔らかいその雄ガモの体の上で止み、彼は直ぐに、また飛び上がり、そして、彼の家族とともに南のそらに飛び続けて行きました。一方、ハヤブサのほうは、羽が傷ついて、そのまま水際のところにひどい勢いで落ちていったのです。

そこで、かれは留まって、暫くのあいだ彼ができる最良の獲物であるねずみを捕まえていました。そして、夜は、キツネやイタチに見つからないように木の洞穴のなかで過ごしました。自分のもっているすべての知恵をしても、それだけでは、彼が長い厳しい冬を生き抜くには十分ではなかったのです。

しかしながら、春になるに従い、ハヤブサの羽はだんだん回復し、彼はなんとか少しは羽ばたくことができるようになりました。太陽が、青空にだんだん高く昇るようになり、カモたちは、また、北の地方の涼しい場所に戻り始めました。毎日、幾つもの群が、湖の上を渡って行きました；しかし、ハヤブサは、何とかそれをしたかったのですが、あえてその群を襲おうとはしませんでした。彼は、飢えて弱っていたのですが、でも、傷の付いた羽で襲う自信がなかったのです。

ある素晴らしくよく晴れた日のこと、ガアガアと鳴き騒ぎながらマガモの群れが彼のいる直ぐそばに、つやのある胸を穏やかにさざなみのたっている水面で冷やそうと、舞い下りて来ました。

“さあ、子供たちよ”と年取った雄ガモが、“ここが去年の夏のこと、お前達のお父さんが一匹の残酷なハヤブサに襲われた、まさしくその場所なんだ! 自分の命を救うために、私はありったけの技を使い、とても素早くたくみに身をかかわしたのさ。そして、とどのつまり、私たちのあの忌まわしい奴は、自分の羽を傷つけて大地にまっさかさまに落ちていったんだよ! 間違いなく彼が飢えて死んで、もう、随分日にちがたっているさ、それとも、キツネとか、ミンクがこの意地汚い生き物の肉を食べたに違いないさ。”

この言葉を聞いて、ハヤブサは、かれが自分の昔の獲物だったということを知りました。そして、彼に勇気が湧いてきたのです。

“なにを、ワシはまだここに居るのさ!”と、彼は、眩き、鋭いまなざしを、間一髪、逃げ延びたことをいかにも誇らしげに、してやったりとばかり話しをし

ながら、羽を休めている、間違いなくあの年取った雄ガモに、突進して行きました。

“ガア!、ガア!”、とカモたちが一斉に騒ぎ出し、まるで秋の死んだ枯葉がひらひらと舞うように、あちこちに飛び去って行きました；しかし、ハヤブサの狙いは、あの年取った雄のカモでした。そして、執拗な追跡をしたのです。彼らは、急旋回をして複雑な輪を描き、あつちに飛んだかと思うと、今度はサーッと大きく羽ばたいて反対の方角に飛んで行きました。そして、この追いかけっこは、ハヤブサが相手のきらきらして広がっている首筋に、目にも止まらぬ一撃を加え、態勢を整えた羽で力強く羽ばたき、相手をわしづかみにするまで続いたのです。

確かめもせずに、直ぐにぬか喜びをしてはいけませんね： それに、自分の手柄話を、敵の聴いているところで話しをするなんて、あんまり利口な人のすることではないのですよ。

私たちの社会のなかにも、同じ様なことは沢山ありますね。インディアンはこうして、何が一番勇敢なことかということを言い伝えていたのですね。

7 バッファローダンスの起源

Native American Lore

バッファローたちがこの世に始めてやってきた頃は、彼らは、まだ人間と仲良くやることはできませんでした。狩人たちが、自分たちの部落で使ういろいろなものを調達するために彼らを崖の上に誘い出しましたが、そのときには、彼らは自分たちを人間立ちのために差し出すことにあまり気が進みませんでした。彼らは、自分たちが毛皮として使われたり、あるいは、冬を越すための食糧である乾燥肉になることを好まなかったのです。自分たちのひずめや角がいろいろな道具や家具用品にされるのが嫌であったばかりか、彼らの腱が、いろいろなものを縫い合わせる糸として浸かれるのを喜ばなかったのです。“だめ、だめ、”と彼らは言いました。“もう、私たちは君たちの罠には乗らないよ。もう君たちのごまかしにはだまされないさ。” というわけで、狩人たちが彼らを最後の崖ッ縁まで連れ出してくると、彼らはいつも、最後の最後になってそこで向きを変えてしまったのです。こんな風にして、協力関係が壊れてしまうと、村人たちは飢えと寒さに襲われ、厳しい冬を越さなければならなかったのです。

ところで、村の狩人のなかに、自分の父親が素晴らしい弓の使い手であることをとても誇りに思っている娘のいる狩人がおりました。夏の盛りの間には父親の方はいつも彼女の所に毛皮のベストを持って来ました。一方、彼女の方は、そのお返しに鹿の皮をととても柔らかく、そして、真っ白になるまでなめして、それを外套にして父親に上げました。彼女の身に纏っている服は、まるで雪のようなガチョウの羽のようでした。そして、彼女が村の子供たちやお年寄りのためにつくったモカシンは、一番喜ばれる贈り物だったのです。

しかし、いまや、風に乗って待ってくる雪の知らせと、折れた柳の木々の間に殆ど見ることをできなくなった鹿たち、こうしたことから、彼女は、バッファローの群れの一部が始めたこの拒絶は、本当にたいへんな問題になるということに気がついていたのです。

そこで、狩人の娘は、そのことについて何かをしようところに決めました。

彼女は、その崖の麓のところに行き、上のほうを見上げました。そして、低く、優しい声で歌を歌いはじめました。“さあ一つ、バッファローたちよ、私の所に下りてきて頂戴。もし、降りてくるなら、そして、私の結婚式の宴の時に親戚の人たちに沢山のご馳走をだしてくれるなら、私は、あなたたちのなかで一番勇猛な戦士の花嫁となって、あなたたちの家族になるわ。”

そして、歌をやめ、耳を澄ましました。と、彼女は、ずっと離れたところで、かすかに雷の鳴り渡る響きが聞こえたような気がしました。

そこで、彼女はもう一度歌を唄いました。“あ一つ。バッファローさんたちよ、私のところに降りてきて頂戴。結婚式の時に沢山の料理を私の家族に振るまって頂戴。そうすれば、私は花嫁になるわ。”

雷の響きはいまや、ずっと大きくなりました。と、突然、バッファローの群れが天から彼女の足元に降り始めたのです。

一匹のとても大きな雄のバッファローが最初に降りてきて、自分の仲間たちの後ろを横切って、狩人の娘の前にやってきました。

“お前に、私の嫁になってもろおうじゃないか。”と大きな雄バッファローが言いました。

“あら。でも、私、あなたと今一緒にいくのはこまるわ。”と狩人の娘が言いました。

“あー。でも、お前さんは約束を守らなくてはいけないだろ、”と大きなバッファローが言いました。“こうして、我々の仲間が結婚式の時の宴にお前さんたちにご馳走を上げようと来ているんだから。見ても分るように、彼らは、自分たちを捧げるつもりで来ているんだよ。”

“分ったわ。でも、私は、この素晴らしい知らせを私の仲間に知らせに行きたいの、”と娘が言いました。

“駄目だ。”とバッファローがいました。“もう、何も言いわけは言う必要はない。そう、やすやすと逃げたりすることはできんぞ。”

そう言ったかと思うと、その大きなバッファローは彼女を自分の角の間に挟んで持ち上げ、彼女を草がなびいているその草原の中にある自分たちの部落の方に連れて行ってしまいました。

次の日の朝、村人達は、居なくなった狩人の娘さんをみんなで探して歩きました。そして、あの崖の麓のところで、バッファローたちの沢山の足跡を見つけると、腕のたつ狩人たちと同様、素晴らしい追跡の技を持っている彼女の父親は、その土ぼこりの中に、彼女の足跡を見つけ出したのです。

“娘は、バッファローと一緒にいったんだ。”と彼はいい、“よし、これから追いかけて行って、彼女を取り戻してくるぞ。”と決心しました。

こうして、その狩人の父親は、彼の弓と矢を携えて、草原を越えて娘を探しに行きました。来る日も、来る日も、彼は、歩きました。そして、やっとなこと、バッファローたちの群がる直ぐそばまで来て、そこで始めて疲れた体を休めることができました。

そこにカササギがいたので、彼は近づいて行き、その横に座りました。

そして、狩人は、恭しくカササギに言葉をかけました。“おーっ。何でも知っている賢い鳥のお方よ。私のむすめは、バッファローに連れて行かれたのかね？ お前さんは、彼らを見なかったかね？ 彼らがどこにいったか教えてくれないかね？”

カササギは、心得ていると言わんばかりに返事をしました。“そのとおりさ。私は、彼らがこの道を通っていったのを見たさ。彼らは、今、この丘の向こうで休んでいるところだよ。”

“そうですか。ありがとう”と狩人がいい、“じゃ、親切のついでに、わたしの娘に私の伝言を伝えてきてくれませんか？ 私が、あの丘の向こうに来ているとね？”

そこで、カササギは、大きなバッファローが乾いた草原の真っ只中で、自分たちの仲間に囲まれて、横になって眠っているところまで飛んで行きました。そして、彼は、狩人の娘が、眠っている夫のそばにいかにも従順そうに座り、モカシンを縫い上げているところまで跳ねて行きました。“あなたのお父さんがあの丘の向こうで待っていますよ。”とカササギがその娘さんに囁きました。

“まあ、なんて、危険なことを”と娘はカササギに言いました。“ここにいるバッファローたちは、私たちに好意をもっているところか、私のお父さんがここに来るなら、たちまち、かれを痛めつけようとするでしょう。どうか、お父さんに、私を待っているように言ってください、そのうち、私がお父さんに会いに抜け出して行きますからと。”

丁度そのとき、彼女の夫である、あの大きなバッファローが目を覚めました。そして、彼の角を外したのです。“さあ、あの丘の向こうにある水のみ場まで行って、飲み水を汲んでくるんだ。”と彼女の夫が言いました。

そこで、彼女はその角を手にして、回りに注意をしてその丘のほうに歩いてゆきました。

彼女の父親は、草の中に低くかがみこんで、彼と一緒にくるようにと、無言で合図をしました。“駄目だわ、”と彼女が呟きました。“バッファローは私たちが、彼らを沢山殺したので、私たちのことをとても怒っているのよ。彼らは、きっと、私たちの後を付いてきて、そして、私たちを土のように踏みじめるわ。私は、いまから戻って、彼らの気持ちをどうすればなだめることができるか、それをさがしますわ。”

こうして、その狩人の娘は、水の入った角を持って、いつも水を飲むときには大きな声を張り上げる彼女の夫のところに戻って行きました。その水を飲む声が唸り声になり、そして、他のバッファローたちが目を覚ましたのです。彼らは自分たちの尻尾を空中に跳ね上げ、そして、バッファローたちの水のみ場の近くで彼女の来るのを待っていた、その哀れな男を粉々に踏み潰しながら丘の向こうまで、バッファローダンスをして行進していったのです。

彼の娘は、その水のみ場の端に座り、そして、涙に暮れました。

“どうしたというんだね?”と彼女のバッファローの夫が聞きました。

“あなたがたは、私のお父さんを殺してしまったんですわ。その上、私は罪びとになってしまったの。”と彼女は泣きじゃくりました。

“一体、私たちが何をしたというんだい?”と彼女の夫が応えました。“我々はお前さんがここにくるといって、それと交換に、自分たちの子供を、親達を、そして、自分たちの妻でさえ、お前さんたちの仲間のために差し出したんだ。取引は、取引だ。”

しかし、彼女の気持ちを察したあと、大きなバッファローは彼女の傍らに膝をついて、こう言いました。“もし、お前さんがお父さんをもう一度生き返らせることができるなら、われわれは、彼をお前さんの仲間たちの所に返してやろう。”

そう、聞かされたものですから、狩人の娘さんはちょっとした歌を唄い始めました。“カササギさん、カササギさん、私を助けて頂戴。私は、お父さんの体のかけらを探しているの。それがあれば、お父さんをまた元に戻すことができます。”

すると、カササギが現れて、首を横に傾けて彼女の前に腰をおろしました。

“カササギさん、カササギさん。どうか、あなたなら見つけられるってわかって頂戴。”彼女は草原の草をかすかに分けるように吹いている風に向かって優しく唄いました。カササギは彼の首を横に傾け、そして、風がもう一度さーっと吹いたときに、その横になびいた草のなかを注意深く探したのです。すると、直ぐに彼は、そこに隠されていた彼女の父のかけら、それは、小さな骨のかけらでしたが、それを見つけ出したのです。

“ああっ。それだけあればじゅうぶん魔法がかけられますわ。”と狩人の娘が言いました。そして、彼女がその骨を大地の上において、それを彼女のまっとうている毛布でくるんだのでした。

それから、彼女は、おもむろに、死んだ人を再びのこの生の世界に呼び戻す魔法の力をもった生き返りの歌を唄い始めたのです。彼女は、彼女のお婆さんが教えてくれた歌を静かに唄ったのです。そして、ほんの僅かの小節を唄い終わると、その毛皮のしたにひとつのこぶができたのです。そこで、彼女とカササギが毛布の下を覗いてみると、なんとそこには、1人の男の体があるではありませんか。でも、まだその時には、その男は息をしていませんでした。彼は、只、冷たい石のようにそこに横たわっていただけです。そこで、なおも娘さんは唄を唄い続けました。そおーっと優しく。と、なんと、さして時間が経たないうちに彼女の父が動き出したのです。彼は、生き生きと、しかも、とても強そうに立ち上がったのです。これを見て、バッファローたちは、驚いてしまいました。そして、彼らは狩人の娘さんに、“どうか、この歌を、どんな狩が終わったときでも、我々のために歌ってはくれないだろうか？ そうすれば、私たちは、あなたの部族の人たちにバッファローダンスを教えてあげます。そして、そのダンスを狩に行く前に踊れば、あなたがたは必ず、沢山の獲物を手にする

ことができますよ。そして、あなたが私たちのためにこの歌を唄ってくれば、私たちはみんなまた、元のようにいきかえるんだから。”

これは、**Blackfoot** に伝わる、バッファローダンスが彼らにどうやって伝わったかという伝説の話なのです。

バッファローは、人間のために食料を提供してくれますが、人間が狩に出かけるときにバッファローダンスを踊れば、また、バッファローが生き返るというのは、バッファローに感謝して、いつまでも自然の恵みを大事にしようという彼らの気持ちなのですね。

8 アライグマとミツバチの巣の木

Native American Lore

そのアライグマは、一日中、心地よく、木にできた洞穴で眠りについていました。そして、夕暮れがやってくると、彼は目をさまして、2・3度背伸びをすると、その木の高いところから自分のねぐらのある切り株のところにとびおり、それから、やおら自分の夕飯のご馳走を探しに出かけるのでした。

その森の中ほどには、湖があり、その湖にアライグマが近づいていくと、その岸という岸に沿って水鳥たちが、気をつけろという警戒の泣き声を出して騒ぎだしたのです。一番初めに、警戒の鳴き声をだしたのは白鳥でした。すると、そのあと直ぐにナベ鶴たちが騒ぎ出し、そしてその次には、湖の丁度真ん中あたりから、水もぐり鳥が、泳ぎながらやってきて、その警戒の鳴き声を引き継いで、水のなかにも鳴り響かせたのでした。

アライグマは、容器にスピード上げて走ったのですが、結局彼は、捕まえることができるような油断をしている鳥を捕まえることができず、そこで、水際でカラス貝を見つけ、それを丁寧に砕いて、その甘い身を食べていたのです。それから、彼は、長く育ってもつれた草のなかをあちこち跳ね回っているうちに、丁度、スカンクの家族のところに、四本足で飛び降りたのでした。その家族は、父親と母親と、そして、十二匹の子供たち、彼らは、みんなで、枯れて乾いた草の柔らかいねぐらで、体を丸めて寝息をかきながら寝ていたのですが、が居ました。

“へいっ!”と、父親スカンクがむっとして言いました。“お前さんは、これで一体どうしようって言うんだい、えっ?”そして、彼が警戒の態度でそこに立ちあがりました。

“ああ。ごめん、ごめん。”とアライグマが謝りました。“これは失礼をしました。そんなつもりではありませんよ! 私は、いま、飛び回っていただけなんです。あなたたちがいるなんてちっとも気がつきませんでした。”

“今度は、自分がどこに飛び降りるか、気をつけたがいいぞ。”と、スカンクが苦情を言うと、アライグマは急いでそそくさとどこかに行ってしまいました。

次に彼は、二匹の赤いリスが巣籠もっている、その上の高い木に飛びつきました。しかし、彼らのうちの一匹を掴む寸前に、彼らは一番上にある枝のところに逃げ、そこから、腹を立ててののしっていました。

“降りておいでよ、友達だろ!”と、アライグマが呼びました。“そんな高いところに昇ってどうしようというんだい。どうして、私がお前さんたちをいじめたりする理由があるんだい、そんなものあるわけないだろ!”

“うーッ。お前さんは私たちを馬鹿にしちゃいけないよ。”とリスたちが、口によると、アライグマは、しかたなくそこから立ち去りました。そして、長いことかかり森の奥深くまで来て、彼は、とても甘い匂いにひきつけられ大きな穴のある木を見つけたのです。鼻をくくんくん鳴らし、あたりを見回すと、小さな裂け目から何かが滴り落ちていたのです。彼がそれをちょっとだけなめてみると、なんと、それはとても甘い味がしたのです。かれは、その木を昇ったり、降りたりして、そして、ついに何とか自分の指の中に入れることができるほどの穴を見つけることができたのです。なかから蜂蜜が一杯ついた巣を引き出しました。このとき、彼は随分幸せだと思いました。そして、彼の可愛げな斑点のある顔が、顔中べとべとになるまで、前足を使い、その黄金色の滴り落ちる蜂蜜を、食べては搦み、すくっては、なめたのです。ところがそのとき、突然かれは指を自分の耳の中に入れようとしたのです。何かが、かれを我慢しきれないほど傷つけていたのです。そして、次には、彼の敏感な鼻が嫌と言うほど刺されたのです。彼は、べとべとになった両方の指で顔をこすりました。その鋭い刺し傷がますますきつくなり、どんどん広がって行きました。そして、彼は、荒々しく大声を張り上げたのです。そして、とうとう彼は、もはやその木の枝を支えていることさえ忘れてしまうほどでした。そして、悲鳴とともに大地にもんどりうって落ちたのです。

そのあと、彼は枯葉の上を転げ回りました。枯葉は、彼のみごとにべとべとになった毛皮に引っ付き、そして、彼の目といい、筋の入った頭といい、それらをみんな包んでしまったほどでした。そして、恐怖と苦痛で気が狂いそうになり、彼は、自分の仲間の誰かが助けてくれることを求めて森のなかを走り抜けて行きました。

その時、月がとても明るかったので、森の多くの人達は出かけていました。その一瞬、アライグマは、呼び声を聞きました。そして、その声のするほうに

行ってみました。しかし、彼は自分の方に真っ直ぐむかって追いかけてくるこの乾いた葉のついた恐ろしい化け物を見ると、向きを変えて、一目散に逃げだしてしまいました。彼は、これが一体何だったのか分からなかったのです。

アライグマは、一生懸命彼の後を追いました。彼に追いついて、そして、自分の体についている葉っぱを取り除いてもらおうと思ったのです。

彼らは、走り、そして、また走り、森の外にある湖の白く輝いている岸のところまでやって来ました。ここで、一匹のキツネが彼らと会ったのですが、びっくりしている人々を追いかけているその得体の知れない化け物を見ると、彼もまた、やはり向きを変えて、猛烈な勢いで逃げ出したのです。

今度は、若い熊が森の法からノソリノソリとやってきて、そばを走っていく彼を見るために、尻を地べたにつけてでんと座りました。しかし、彼は、枯葉がべっとりとついたアライグマを見ると、今度は、その通り道からよけるように木の上によじ登ったのです。

このときまで、その哀れなアライグマは、半狂乱の状態でしたので、自分が何をしているのか分からなかったのです。彼は、その熊のあとをついて、木に登り、そして、彼の尻尾を掴んだのです。

“うーッ、うーッ!”と熊が歯をむき出して、アライグマを振り放そうと怒鳴りました。アライグマは、疲れきり、とても恥ずかしくなっていました。彼は、こうして初めて自分がまず何をすればよいのか分かりました――彼は、湖に飛び込んで、その枯葉を全部洗い落としたのです。それから、かれは自分の巣のある木に戻り、そして、自分の毛を巻き上げ、そのあと、体中の毛が綺麗になるまでなめあげたのです。こうして、彼はやっと眠りにつくことができました。

アライグマは、さんざんな目に合いました。欲をかくのもいい加減にしないとひどい目に合うということですね。

9 Geow-lud-mo-sis-eg : 妖精の話

A Native American Lore

Geow-lud-mo-sis-eg というのは、不思議な魔力を持った小さな生き物で、ある原住民達の間で、ある時代に、ある人たちの前に確かに出現する、アイルランドの国の **Leprechauns** に似たようなそんな生き物なのです。

妖精: GEOW-LUD-MO-SIS-EG

By Pat Paul

多くの原住民たちの社会に入ると、あなたは、いつも、個人的に伝わる話だとか、あるいは、**Geow-lud-mo-sis-eg** に会ったとか、何らかの接触をした人のことを話してあげるなどという人のひとりやふたりに会うことがあるでしょう。

ある人たちは、**Geow-lud-mo-sis-eg** のことを、それを信じている人たちに将来に起こる、幸不幸の、ある種の前兆をあらわすようなものだと言っています。彼らは、ある種の人たちから、知恵を引き出すことができますが、そのほかの人たちは、彼を見ることに気を取られて何も手にすることができないのです。

この畏敬の念の多くは、人々のある種の躰による、あるいは、個人的な信仰に基づいたものです。仮にあなたが、いつも、厳しく、そして、究極的に精神の鍛練を追及しているような、なんとなく迷信深い人に出会うようなときには、**Geow-lud-mo-sis-eg** が出てきて、今度はそれとは反対のほうに導いてくれるように、不安とか威嚇の陰を取り除いてくれるのです。

こうした反論的な結末が、多くの場合、幾分かは、ある種の個人的な不安定さ、あるいは、不調和に道引いてくれるのです。というのは、あなたは、無意識のうちに、自分が、消極性がにじみ出ていくことを認めているからです。一方、**Geow-lud-mo-sis-eg** が、積極的で、開放的な気持ちを持ち、包容力があり、あま

り宗教的な拘束力を持たないような人たちのところに現れる時には、その結果は、やりがいのあるものになることは間違いない。

別の言葉でいうなら、それらのすべては、彼らの存在を信ずる人のこころのもち方一つによっています。彼らに対する畏敬の念は、否定的な衝撃を与えることができ、一方、解放的であり、許容幅が広いということは、まさに、1人の人間に対してはとても好ましい結果となるのです。

ある記録

1950 年台の後半に遡ると、Edmond Wilson によって書かれた「イロコイ族に対する謝罪」、これは、こうした妖精に関係するようなイロコイ族に伝わる神話、ないしは伝説について解説しているものですが、という本がありました。その本の中で、Mr. Wilson がイロコイ族のなかで、いわゆるニューヨーク州の Tuscaroras 族と共に生きていたこれらの妖精の少なくとも二つの部族の存在について語っています。この本は、Healers 族と Tricksters 族のことについて話しています。それによれば、どうも、Healer 族は、ある種の物的な苦痛、病気、あるいは、軽い怪我、皮膚の異常、さらには、こうしたものとは異なるよくある肉体的な機能の不全といったもので苦しみ、傷ついている人たちに対して、ある種の超能力的な処置をすることができるようなのです。

伝えられるところによれば、Healers 族の人たちは、こうした体の機能不全や体に障害を、その人たちの願いと、そして、彼らに対するタバコの贈り物によって、いとも簡単に直すことができるのだそうです。

もう一方、Tricksters 族の方は、人々に対して、いたずらをしたり、あるいは、悪ふざけをすることにより、彼らの存在を示して来ました。彼らは、よく、真夜中に人々の髪の毛をその先端まで逆立てるようなそうした悪ふざけをしていたのです。あなたがたのキャンプやカヌーの横をどんどん叩いたり、馬のたてがみをより合わせたり、服の線に沿って結んでしまったら、あるいは、あなたが、静かに魚釣りをしているその水面に小石を投げたりするようなそうした小さいいたずらは、Tricksters たちが人間に対してするいたずらなのでしょう。こうした悪ふざけは Tricksters 族の存在を暗示するような、特に害を与えるようなことのないちょっとしたいたずらなのです。

彼らも、**Healer** の部族と同じ様に、悪さをした場所、あるいは、その近くにちよつとしたタバコの贈り物をすると、それでおとなしくなるのです。こうして、タバコをあげたあとに直ぐ、いたずらが終わるのです。

Maliseet の人々の間では、**Geow-lud-mo-sis-eg** は、川の土手とか、じめじめした沼地、小川のほとり、あるいは、湖の湖畔に、しばしば姿を現します。牛や、馬など、家畜の動物達が、彼らに気を引かれるようになるといわれていました。

彼らのいたずらは、家畜の動物達の尻尾の毛をととても綺麗に編んだものを必要としていたようです。ですから、納屋とか家畜小屋が、彼らが姿を現して、彼らのできばえを示す場所だったのでしょう。

Geow-lud-mo-sis-eg を恐がっていたり、あるいは、いたずらや悪さの被害を被るような人々は、その妖精たちが彼らの前に姿を現したりすると、とても恐ろしく感じて、見るからに動揺し、たいていの場合は、よからぬ結果になるのです。しかし、そのほかの人々は、彼らと接触したあとには、個人的な病気がよくなったり、あるいは、健康的な体になったり、さらには、幸運な出来事が起こるなどの体験をしていました。

ところが、なんらかの理由で、**Geow-lud-mo-sis-eg** は、今世紀の初め頃にはよく出現したのにもかかわらず、近代の 1994 年頃からは、以前のようにはその姿を現さなくなりました。たとえば、この文献は、研究の中では、本当に歳寄りの人たちだけが、彼らの網紐の技を見たという話に関係しているようです。ある特定の 70 歳を越えたお歳寄りが、彼の家族が彼らの訪問を受けたという時代のことについて話をしています。

そのような場合には、**Geow-lud-mo-sis-eg** は、もの干しの紐にのった彼の母親の衣装のうえに、こうした素敵な、丸い組みひもを残して行きました。そしてその組み紐を彼や彼の兄弟が、その干したのから解いて持っていたのです。あとからよく見ると、それは、全くの噂にすぎず、次に出てくるような例外的な事項を除いて、確認されていないのです。

飛び込み台とトンネル

THE STEP AND TUNNEL

Tobique のある年長者達は、彼らのずっと昔から泳いでいた川の流の縁を “mus-kum-odesk” とよんで、そこでよく泳いだり、遊んだり、はしゃいだりしていました。Mus-kum-odesk、この不思議な岩の姿が見られた場所は、非常に硬く、そして、川の流に突き出た棚のようになったところでした。

この大きな岩の棚の真ん中から右のほうには、18” x 18”の黒い部分があり、ここは、丁度、誰かが、鋸か、あるいは何かナイフのようなもので、挟り取り持って行ってしまったかのようにくぼんでいて、飛び込み台かあるいは、椅子のような形になっていたものですから、水遊びをするものたちは、そこで一年中遊びまわっていたのでした。

丁度、その“飛び込み台”、もしくは、“椅子”の下は、トンネルのように口が開いていて、その口の大きさは、丁度 18”程度で、その穴の先は、神だけが知っているところに通じていました。そして、そこはいつも真っ暗で、ちょっと薄気味悪いという感じでした。確か、そのトンネルのなかは、ob-o-dum-kin(言い伝えられた伝説、あるいは、神話のなかでは水の精と言われている)、あるいは、Geow-lud-mo-sis-eg に対する恐ろしさから、誰も探検したものがなかったはずです。誰かがこんなことを言っていました。その飛び込み台も、また、トンネルもそれらは、湖や川や小川などの辺にある水遊びの場所にいつも出沒すると言われているあの妖精たちが作ったものなんだと。まるでそれは、あのアイルランドの有名な妖精の Leprechauns のようなものなんだと。

1953年から1959年にかけて、二つの水力発電用のダムがTobique地区に作られ、原住民達がよくいきつけた場所、そして、その飛び込み台とトンネルの場所もまた、水没してしまっただけです。もはや、私の知る限りでは、かつては沢山の人々に神話として伝わっていたこの不思議な場所の存在を示す写真すら何も残っていません。その飛び込み台とトンネルもまた、もはや二度と研究されることもないでしょうし、また、彼らの物語のいわれなども Geow-lud-mo-sis-eg の観点を除いては、再び、説明されることはないでしょう。

(訳者の一言、 難しい!!!!!!!)

RAIN FIRE

すでに人生の大部分を通り過ぎたある1人の老人が、自分の後ろの窓から外をみて、自分の家の後にある火起こしの場所にまつわる“旧きよき思い出”を持

ったこれらの **Geow-lud-mo-sis-eg** の三つのことについて調べごとをしていました。しかし、この話の異常な部分は、それは、真夜中をすぎるとよくなるというもので、真夏の嵐のなかにどっと出てくる“猫たちと犬達”でした。そして、妖精たちの火は、明らかに、その上に注いでくる数トンもの水に少しも影響を受けるようなものではありませんでした。その歳寄りはこう言います。彼は、自分と彼の妻がこの見慣れぬ光景を見たとき自分は、なんとというか、ヒンヤリとするような気分になったと。でも、そこにそのままにして、彼らは、自分たちの知恵を絞り、じっくりと考えて眠りについたので。これは、紛れもなく、ある一つの真実の情景なのでした。

不思議な訪問者

VISITATION

これまでに述べた話の中に出てくる家と同じ様な家でおこる、これらとは違った不思議な現象は、そこに住んでいる女のところにこうした **Geow-lud-mo-sis-eg** が出現するというものでした。この場合には、その女は、たまたまあるどんよりと曇った日の夕方に、入り口のドアの窓から外を見ていたのですが、彼女は、その時に四人の子供がそこに居るのを見ました。そのうちの3人は少年で1人が少女でした。そして、彼女は、少女が着る黄色のブラウスをきちんと着ていたのです。彼らは家のほうに向かって車の道を歩いて上がってきました。家の中にいた婦人は、一体何が起こったのかと不思議に思っているうちに、それがだんだん奇怪なものになって来ました。普通、家に入る玄関は、後ろのドアのほうだったものですから、彼女はその小さな子供たちが後ろのドアの方に回るものだとはばかり思っていました。が、なんと、彼女は、彼らが角を曲がったところでどこかに姿を消してしまったことに気がついたのです。そこで彼女はその四人の妖精たちがどこに行ったのかを見るためにそのドアのところまでやって来ました。彼女がドアを開けてみると、そこには、2人の子供のような妖精が、丁度、腕を広げ、まるで空を飛んでいるように羽ばたく格好をして、楽しそうにジャンプをしながら、庭で遊んでいたのです。

彼女はもう恐ろしくなって、その小さな妖精たちが飛び跳ねるときにどんな音をたてているのか言うことさえできなかったのです。

暫くして、我にかえって、彼女は自分の夫を呼びに行きましたが、その時には妖精は、もう消えて見えなくなっていました。次に彼女は、彼らが自分家の前の車道を自分たちの村に帰っていく姿を見ました。しかしながら、彼女は彼らがその家の前の道路を横切るときにスピードに注意しているということに気がついたのです。そして、その女は、1960年代になると耳が聞こえなくなってしまうましたが、しかし、彼女はなお、その話を完璧にすることができるのです。彼女は、彼らが道路を横切って、彼らの住んでいる窪地の川のあるほうに姿を消すのをじっと見ていたのです。彼女が言うには、そのあと、何人かの若者が亡くなったということです。

ですから、結論を申し上げますと、この大陸のほかの場所と同じ様に、**New Brunswick** の原住民の社会には、こうした妖精たちが居たのだという確かな証拠があるのです。前にもお話ししたように、人間の多くは、ある状況の中では良く報われますが、それとは反対、あるいは、否定的な成り行きのもとでは、また、違った結果になるようです。こうしたことは、とりもなおさず、すべて、人々が **Geow-lud-mo-sis-eg** を見るときにどんな態度、あるいは、気持ちを持つかということにかかっています。

もし、あなたが偶々、あるとき、その1人の妖精をみたら、その時には、肯定的な気持ちになりなさい、そうすれば、**Geow-lud-mo-sis-eg** はきっとそのことであなたに何らかの形で報いるようになるでしょう。

PAT PAUL について

ここで述べているのは、**New Brunswick** の **Tobique** インディアン保留地に住んでいる **Pat Paul** についての簡単な描写です。

数年にわたって **Pat Paul** は、丁度よいタイミングで、文化的な題材から、インディアン政治的な事柄にいたるまで、様々なことを対象に沢山の著作をして来ました。そして、それらの著作物がこの国のいたるところで、様々な時代にいろんなところで発行されてきています。

Pat は、四人の息子と 2 人の娘の **Malisee**、**Nation** の父親の名のです。2 人の娘、彼女たちの歳は十歳と六歳ですが、彼女たちは今でも **Pat** と彼の妻の **Abby** とともに同じ家で生活しています。

Paul さんは、その居留地の中にある **Tobique Adult Learning Centre** の雇用人で、そこで、数学、英語、読み書き、それらにくわえ、原住民達の独特の生活の知恵などの素晴らしい科目といった基本的なことを教えています。

五十代から七十代にかけて、**Pat** は、コネチカットで、ぶどう酒の製品の出荷から、希少金属会社の研究所で研究補助員のような仕事など、いろんなことをして働いていました。かれは、その研究所で働いているときに、彼に著述の深くかかわるように進めてくれた、年配の科学者達や研究者達と非常に密接な関係で仕事をしていました。この研究室での仕事をしている間、時間とともに技術的なことを記述する **Pat** の能力が非常に重要なものとなり、それがなくてはならないような状態になりました。その時点から、一般的なことを書くということに関する興味が次第に大きくなり、そして、次第にうまく行き始めたのです。

そして、1970 年に、**Pat** は、**Fredericton** にある **Thomas University** に入学し、三年間で学士号を取得し、1973 年に卒業したのです。70 年代から 80 年代にかけて、**Mr Paul** は、**Ottawa** にある、連邦政府のある機関で働き、そこで、再び、**Indian News** と呼ばれる、**Indian** たちに拘わる出来事を出版する部門でのチョットした仕事も含め、膨大な量のもの書きの仕事に携わることになりました。

Mr Paul は、その後引き続いて、1983 年には彼の居留地(**tobique**)に戻り、そこで、1989-901 まで **Transfer Program** という健康問題の本の編集をしていました。また、このほかにも、三年間にわたり、部族のために、隔月発刊の **Lookin-Good**, **Feeling-Good** という健康関係の本も発行していました。

1990 年には、彼は、**Learning Centre** で教えるという現在の職業を始めたのです。この仕事は、**Pat** に、**Learning Centre** でおそわった沢山の彼自身の事柄についてまとめるという格好の機会を与えてくれたのです。

Mr Paul は、US ならびに **Canada** の両方で **Native Media** のなかに沢山の論文を発表しています。

そうした沢山の話のなかで、**Pat Paul** が書いているのは、彼の過去についてのこと、彼の先祖のこと、個人的な経験談、彼が教えていた主題、新聞や、定期

的に発表した論文、政治的な論説、詩、民族に伝わる神話や伝説、それに、北アメリカにもともと居住していた原住民達がもつ歴史についての簡単な記述などです。

Pat Paul の論文は、最近では、**Canada** に住む先住民族に関する月刊出版物に特徴付けられます。そして、それらは、時には海外での出版もされております。

なお、こうしたことについて、さらに詳しいことを知りたい方は、次に掲げる方法で **Pat Paul** 自身に接触することができます。

P.O. Box 33, Perth-Andover, NB, Canada, E0J 1V0, or

Tel. (506) 273 5411, Fax. (506) 273 5428,

E-mail ramseyc@nbnet.nb.ca.

こうしたアカデミックな論説を訳すのは、只、日本語にするだけではなく、その言わんとしていることが、本当にこんなことかなといつも疑問に思いながら、精一杯、原文の意味を伝えようと思っているのですが、これは、英語の力不足もあり、いささか自信のないところ。このあたりの事情を察してどうか誤訳などをご容赦ください。それにしても、この解説には苦勞をしました。

10. Glooskap どうやって夏の精を見つけたのでしょうか。

Native American Lore

ずっと昔のことですが、とても勢力を持ったインディアンの種族が太陽の昇るところの近くに住んでいました。そして、彼らは、自分たちのことを **Wawanik**—つまり、光の子孫と呼んでいたのです。**Glooskap** は、その部族の酋長でした。彼の自分たちの部族のものにはとても優しく、彼らのために沢山のよいことをしてあげていました。

その **Glooskap** が治めていたあるとき、とても厳しい寒さがやっていました。雪がふり、一面が凍りで覆われてしまいました。火はあったのですが、それだけではとても暖をとることができませんでした。トウモロコシは枯れて育たなくなってしまったのです。寒さと飢えのために彼の部族の沢山の者が死んでしまいました。

Glooskap は、すべてが凍り付いているという、北の地に向って出かけてゆきました。そこで彼は、小屋のなかでさえ、とてつもなく寒い冬の精をみつけたのです。冬の精の凍てついた息が大地を凍らせていたのです。

Glooskap は、その小屋の中に入ってゆき、そこに腰をおろしました。すると、冬の精が彼にパイプをあげ、彼らはタバコをすいながら、その怪物が大地のすべてを仕切っていた古い時代の話、その頃は、どこも静かで、真っ白で、そして、非常な素晴らしかったことを話しました。彼の白い霜の呪いが **Glooskap** を包み、その怪物が話しを続けていると、**Glooskap** は眠気に襲われ、そのまま眠ってしまったのです。そして、そのあと、六ヶ月ものあいだ、まるで、熊のように眠り、そのあと彼は呪いから解かれました。すると彼は、その呪いのためになずっとたくましくなって目を覚ましたのです。

すると、そこへ、**Glooskap** の子分である、水もぐり鳥、この野鳥は湖の岸に巣を作っていたのですが、彼が、不思議な知らせを持って来ました。彼は、こう言うのです。ここからずっと南の方に行くと、一年中温かい国があると言うの

です。そこには、あの冬の精の怪物なんて、簡単にやっつけてしまう、万能の力をもった夏の精が住んでいます、と。そこで、**Glooskap** は、彼の部族のものを寒さと、飢えと死から救うために、その夏の精を見つけに行こうと決心しました。

彼は南の海岸に向って旅立ちました。そして、鯨が僕になり、昔からの友達になったという魔法の歌を唄いました。—— 鯨は、自分が海に行きたいと思いましたので、彼を運んであげたのです。

この鯨というのは、いつも旅行者に一定のしきたりを申し入れました。鯨はこう言うのでした—— “あなたは、私が背中に乗せて運んであげている間は目を瞑っていないくてはなりませんよ。もし、あなたがその約束を破るのなら、私は、浅瀬とか砂洲の上に乗上げてしまい、そこから抜け出すことができなくて、あなたは、必ず溺れてしまいますよ。”

こうして、**Glooskap** は鯨の背に乗り、そして、何日も何日も彼らは一緒に旅をしたのです。旅の間、日に日に暖かくなり、大気は優しく、そして、香のもととなる海岸からは、いい匂いがして来ました。その匂いは塩の放つものではなく、果物とか、花のにおいだったのです。

まもなく彼らは、自分たちが狭い海に来ていることに気がつきました。その砂浜に下りてゆくと、貝殻がなにか警告をするような歌を唄っていました：“海に行きなさい、この入り江は狭いから。”

そこで、鯨が **Glooskap** に聞きました。というのは、かれは、どんな生き物の言葉も理解することができたからです：“彼らは、なんと言っているのですか？”

一度、鯨の背中からおりたいと思っていた **Glooskap** はこう返事をしただけでした。“彼らは、嵐がきているから、お前さんに急ぐようにと言っているんだ。”

そこで、鯨は、自分が、陸地に取り残されてしまう前に何とかしなくてはと、言われるままに先を急ぎました。いまや、**Glooskap** は、許されないことをしたのです；彼は、こっそりと見るために左の目をあけました。直ぐに鯨は、浜辺を一度力強く叩くのと、**Glooskap** は、鯨の頭から飛びおり、そして、乾いた土の上の岸辺を歩くことができるようになったのです。

自分は、決して遠くに行くことはできないと思って、鯨はおこりました。しかし、**Glooskap** は、自分のもっていた強固な弓の片方の端を、鯨のあごに押し当て、そして、もう一方の端を握り、足を高い土手に踏ん張り、慢心の力を振り絞って、鯨を深い海の中に押し出してやりました。

Glooskap が大またで内地のほうに向って歩いてゆくと、一步ごとに大地は暖かくなっていったのです。そして、木の生い茂る森にきて、彼は、若い娘達の間で、その中心になってダンスをしているとても素敵な女のところにやってきました。彼女の長い茶色の髪には、花飾りがされており、そして、彼女の腕には、沢山の花が溢れていました。彼女は夏の精だったのです。

Glooskap は、こここそ、彼女の魅力で、かつての冬の冷たさを解かしてしまったところであるということを知りました。彼は、彼女を捕まえようと飛んでゆき、そして、捕まえるとどこにもいかせようともしませんでした。こうして、彼らは、前にいた冬の精に支配されている村に、長い旅をして戻って行きました。

村にいた冬の精は、**Glooskap** を歓迎しましたが、彼は、もう一度 **Glooskap** を眠らせてとしまおうと考えていました。しかしながら、今度は、**Glooskap** が、話を聞かせたのです。彼の魔力は、紛れもなく以前よりもずっと強くなっており、そして、直ぐに甘い匂いが冬の精の顔の上に漂い始めたのです。彼には、冬の精の力が弱くなり、そして、氷りつかせる呪いはすでに利かなくなっているということが分りました。彼の凍りついた小屋は、もう、解けていました。

夏の精が、いまや、彼女のもつ独特な力を発揮し、そして、冬の精のために寝ていたものすべての目を覚まさせました。草木は、青々と生い茂り、雪は解けてせせらぎとなり、枯葉を遠くに流していました。年取った冬の精は自分の力の消えうせたのを知って嘆き悲しみました。

しかし、夏の精が言いました。“さあ、お分かりになったでしょ。私があなたの魔法よりもっとずっと強いということが。だから、私は、あなたにずっと北のほうの大地を差し上げようと思いますのよ。わたしは、そこにいて、あなたを悩ますようなことはしませんから。毎年の六ヶ月間は、あなたは、この **Glooskap** の国に戻ってきてもいいですよ。そして、前と同じ様に、寒さで村を包んでしまいなさい。でも、それは、それほど厳しいものでなくですよ。あとの残りの六ヶ月間は、私が南からここにやってきて、この大地を支配しますからね。”

年老いた冬の精は、なす術もなくこのことを受け入れました。というわけで、**Glooskap** の村は、一年の半分の六ヶ月間は、寒さの世界であり、その残りの半年は、穏やかな季節となったわけです。彼がくる時には、夏の精は、彼女の南の国に戻って行くのです。そして、六ヶ月がすぎると彼女が再び戻ってきて、冬の精を追いやるのです。こうして、彼女は、北の地を目ざませ、そして、彼女が唯一授けることのできる喜びを恵んであげるのです。

夏と冬がこんな風にして大地を支配しているというのは、とても分りやすく、楽しいものです。それにしても、インディアン達の伝説のなかには、春と秋が出てこないのは、まさしく自然の厳しさそのものを物語っているのではないのでしょうか。

さて、この話、あなたのここの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

11 ハエはどんな風にして川を救ったのでしょうか。

A Native American Lore

ずっと、ずっと昔のこと、まだこの世の中ができてまもなくの頃、そこにはとても素敵な川が流れていました。この川にはそれは、それは沢山の魚が泳いでおり、そして、回りのあらゆる動物達がここに来て飲むほど、その水は綺麗で、甘いものでした。

一匹の巨大な体をしたムースがこの川のことを聞き、彼もまた、ここに水を飲みに来ていました。しかし、彼は、あまりにもおおきかったので、そして、また、その飲む水の量もとてつもなく多かったので、たちまちのうちにその川の深さが浅く、浅くなってしまったのです。

ピーバーたちが心配をしました。なぜなら、彼らの住みかを隠していた水がな

くなってしまったからです。たちまちのうちに彼らの住みかがつぶれてしまいました。

ニオイ鼠もまた、心配していました。もし、水が干上がってしまったらどうしようかしらんと、どうやって彼らは生き延びて行くのでしょうか。

魚のほうも、彼ら自身で心配をしていました。他の動物達は、例え水が乾いてしまっても、何とか生き延びることができるけれども、かれらには生きる術がありません。

こうして、動物達みんなが、何とかそのムースを川から遠ざけようと考えました。が、彼は、あまりにも大きな体をしていましたので、恐くてなんともすることができなかったのです。熊でさえ、彼を恐れていました。で、とうとう、ハエが、何とかムースを遠ざけようと口にししました。みんな、冗談じゃないと馬鹿にして、嘲り笑いました。どうやって、その小さなハエが、巨大なムースに戦いを挑むことができるんだい？ ハエはなんとも応えませんでした。が、その日のこと、ムースが現れるや否や、ハエは行動を起こしたのです。

彼は、ムースの前足に降りると、そこをきつく咬みました。すると、ムースは自分の足を強く叩き、そして、彼が叩くたびに、今度は、大地が沈んでゆき、水がだんだん嵩をまし、あふれ出してきたのです。すると今度は、ハエは、ムースの体中に飛びつき、ムースが、狂乱状態になるまで、咬んで、咬んで、咬みまくったのです。すると、彼は、川の土手のほうに無我夢中で、首を振り振り、自分の足を叩き、喚き、大声を出しながら飛び跳ねて行きました。でも、彼は、そのしつこくつきまとうハエを追い払うことができませんでした。で、とうとう、ムースは、川から逃げ出してしまい、二度と戻って来ませんでした。こうしてハエは、自分が成し遂げた仕事にとっても誇りを持ち、他の動物たちのところに行き、自慢したのです。“どんなに体が小さくたって、頭を使い、知恵を絞れば、決して負けやしないさ。”と。

私たちの社会も、同じことが言えるのではないのでしょうか。知恵を働かせれば、何でもできるのでね。

さて、この話、あなたのここの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

12. 光の起源

アメリカインディアンの Lore

an Alaskan Myth from the Inuit

ずっと、ずっと昔のことです。この話は、この世の中に、まだ、光というものが全くなかったころの話です。ですから、世の中は真っ暗闇でした。そして、海の端のところに1人の娘さんが、彼女のお父さんと一緒に住んでいました。あるとき、彼女は水を汲みに出かけました。そして、雪を一生懸命かき集めていたときです。彼女は、自分のほうに鳥の羽がふわふわと舞って落ちてくるのを見つけました。彼女が口をあけたその時です。その羽は、彼女の開けた口の中に、スーッと入ってしまいました。それを彼女は思わず飲み込んでしまったのです。すると、それから何日かたって、彼女は自分のお腹のなかに赤ん坊がいることが分かりました。

やがて、その彼女に可愛い子どもが生まれたのです。その赤ん坊は、何でも食べてしまうような子どもでした。ですから、お母さんは、その子にどんなおもちゃを上げたらよいのかとても苦勞をしていました。住んでいた家の壁には、膨らんだ空気袋が掛けてありました。これは、お父さんの道具でした。これを見つけた、ツルガーク(ホシガラス)という名前のその赤ん坊が、それを見つけて、どうしてもそれがいいと泣いて欲しがりました。お母さんは、それをとってやりたくはありませんでしたが、あげないと何時までもなきやまなかったのです。とうとう、お母さんはそれを壁からはずして、彼に上げることにしました。すると赤ん坊はそれで嬉しそうに遊んでいたのですが、遊んでいるうちに、それを壊してしまいました。すると、あたりが、一瞬のうちに明るくなったのです。こうして世界中が明るくなり、暗闇の中にも、光がとどくようになりました。

ところが、お父さんが家に帰ってきて、その空気袋を壊れてしまったことで、壁からはずして、赤ん坊に上げた彼女を厳しく叱り付けました。すると、光がさっと消えてしまったのです。そして、赤ん坊のツルガークもどこかに居なくなってしまいました。

13. 魔法の矢

アメリカインディアンの物語

昔、昔、そのまた、昔、ある1人の旅をすることが好きな若い男がいました。彼のお母さんは、彼のために肉を乾燥した食べ物の包みと何足かのモカシンという靴を作ってあげました。しかし、かれの父親は彼にこういいました。

“息子よ、ここに四本の魔法の矢がある。これは、お前が必要になったときに、獲物の一匹を射止めるために使うのだ！”

その若い男は、1人で旅に出ました。そして、何日か、森のなかで狩をして過ごしました。いつもなら、狩はうまくいくのですが、その時には、なかなか狩がうまく行かず、彼はとうとう食べるものがなくなり、獲物も見つけることができなくなってしまいました。そこで、彼は、父がくれた魔法の矢を一本取り出し、それを射てみると、その日の夕方、彼の横にはその矢に当たった太った熊が横たわっていたのでした。狩人は、その熊のタンを取り、食料にしました。そして、熊の胴体のほうは、その偉大なる魔法に感謝の意をこめて捧げものを作るのに使いました。

また、何日か経って、彼は、やはりその魔法の矢を使わなくてはならないような状況になりました。そして、また、一本の矢をその日の朝、射ました。すると、夜には、彼がキャンプをしていたその火のそばに、心臓に矢の刺さったエルクが横たわっているのを見つけました。今度も彼は、そのエルクのタンを食べ、体のほうは、自分の食料の犠牲となったことに感謝して、それを捧げました。三度目にもおなじようなことがおこりました。今度は、彼の矢に射止められていたのは、ムースでした。四本目の矢に刺さっていたのは、バッファローでした。

四本の矢を使い果たした若者は、そのあと、森から出てきました。彼の前には、毛皮でできた家が沢山集まった、大きな丸く囲まれた集落がそこにありました。そこで、彼は、その村の外れの、みんなの家からは少し離れたところに、小さな、みすばらしいテント小屋があるのに気がつきました。その小屋には年老いた夫婦が二人だけでひっそりと暮していました。森のはずれで彼は自分の

着ている着物を脱ぎ、それをくぼみのある木に隠しておきました。それから、彼の持っていた石膏で自分の頭の上に塗りまわし、小さなみすぼらしい子どものような格好に身なりを変えて、貧相な小屋のほうに向かって行きました。

自分の家のほうにやってくる彼のことに気がついたおばあさんが、お爺さんに向かってこう言いました。“お爺さん、どうですか。あの小さな子どもを私たちの息子として育ててみてはどうでしょうかねえ！ あの子はとてもいい子のようだし、それに目が耀いていますよ。私達は、2人きりのことだし。”

“お婆さんよ。なにを考えているのかねえ？”とお爺さんが不平がましく言いました。“私達は、自分達だけで、食べるのが精一杯ではないかね。なのに、あんたは、どこの誰とも分からないようなあんなみすぼらしいいたずら小僧の面倒まで見ようというのかね？”

暫くして、その少年は、ずっと近くまで来ました。そこで、お婆さんは、小屋の中に入ってきてもいいよと合図をしました。

“まあ、まあ、お座り。あんたは私の孫だよ。お座りな。”と優しい声でお婆さんは言いました。そして、お爺さんが背中を向けていたのにもお構いなく、彼に小さな皿に炒ったトウモロコシの実を入れて差し出しました。そのトウモロコシは自分達が持っていたありったけの食べ物だったのです。

少年は、暫くそこで、食事をし、生活をしていました。そして、だんだんとお婆さんに話をするようになりました。：“お婆さん。何とか、お爺さんに弓矢の矢を作ってもらいたいだけだよ！”

“お爺さん、聞こえたかね？”とお婆さんがいいました。“この子は、矢が欲しいんだと。矢を作るのはお爺さんにも楽しみになるとおもうんだがねえ。”

“なんだと。なぜ、わしがそんなどこから来たかも分からないよそ者の小僧っ子的のために、矢を作らなければならんのだ？”。やっぱり、お爺さんは不満でした。

しかし、お爺さんは、何とか言いながらも、2・3本の矢を仕方なくつくって、その少年にわたしました。少年は、それを持って森に狩に出かけました。暫くして、その少年は、小さな鳥を何羽が仕留めて帰って来ました。お婆さんは、

それをもって、彼にお礼を言いながら、そして、彼女がしたように彼をほめながら、その鳥の羽をむしって集めました。小さな鳥は、彼女が上手に料理をしてスープにしたので、お爺さんは大喜びでそれを食べ、柔らかい鳥の羽は、小さな枕に詰めました。

“お前さん、本当によくやってくれたよ。私の孫だよ、お前さんは。” お爺さんは、本当に貧乏でしたので、そう言って感謝していました。

それから、あまり月日のもたたないうちに、自分を迎えてくれたお婆さんに向かって、少年はこう言いました。：“お婆さん、お婆さん。お願いがあるんですが。今度、ずっと向こうにあるあの森の端で僕を見たら、大きな声で、こう叫んで。” あっ！ 熊だ。あそこに熊が走っていく！“って。”

お婆さんは、言われたとおりにしました。そして、その時、少年は、魔法の弓矢を思い切り放ちました。それは、かれが自分が仕留めた獲物から抜いて、持ってきたものでした。すると、どうでしょう。まもなく、彼は、前にかれがしとめて、その胴体を捧げたあの熊よりももっと大きな熊が、自分の前に、やはり前と同じように弓矢に当って、横たわっているではありませんか。

こうして、あの貧しいお爺さんとお婆さんの小屋は、喜びで溢れていました。彼らが熊の皮を剥ぎ、薄く小さくきって、乾燥食料にしているあいだ、その少年は、小屋の中に一人で座っていました。火の上に置かれたなべの中には、彼が干しかった熊のタンが入っていました。

と、その時、1人の若い娘さんが入り口のドアのところに立っているではありませんか。彼女は、自分が着ている毛皮を顔の前に引っ張って、小さくかすかな声で、こういうのです。

“私は、あなたのお婆さんのすり鉢を借りに着たんですが！”

その少年は、彼女にお婆さんのすり鉢を渡し、自分が食べるつもりで料理していたタンを少し分けてやりました。そして、彼女は帰って行きました。

食糧の蓄えていた熊の肉を食べつくしてしまいました。そこで、少年は、また、二番目の矢を放ったのです。今度は、エルクにあたりました。同じようにして、三番目の矢、四番目の矢を射ると、どうでしょう。これも、また、前

のときと同じように、それぞれの矢には、ムースと、バッファローが弓矢に当たっていました。そして、少年は、その矢をまた、大事に抜いてしまっておきました。

そんなことをして毎日を過ごしているときに、少年は、村のほうで大勢の人が困っているという話を聞きました。「赤いワシ」といわれる大きなワシが、毎日、村に飛びまわってきて、いるというのです。村の人たちは、そのワシがでくると狩がうまく行かないので、その鳥は、悪いことがおこる前兆だと信じていたのです。村には、そのワシを射止める勇敢な人は誰もいませんでした。そこで、酋長が、もし、そのワシを射止めたならその男に自分にたった一人の娘をお嫁さんにしてやるといういました。

この話を聞いた少年は、次の日の朝早く、村のほうに出かけて行き、その「赤いワシ」が、飛んでくるのを、じっと座って待っていました。彼の足元には、あの魔法の矢がついた弓が置いてありました。そして、彼はその弓矢を思い切り放ち、誰にもそのことは話さずに小屋に帰りました。

しかし、村の人たちはそのことを知っていて、みんなでお礼を言いながら、お爺さんとお婆さんの住んでいるあの小さな貧相な小屋までついてきました。そして、みんなが彼を見つけて、酋長の娘さんを彼の嫁さんにしたのです。そう。なんと、その娘さんは、お婆さんのところにすり鉢を借りに来た、あの娘さんだったのです！

それから、彼は、自分の服を隠しておいた森の木のにいき、結婚するにお似合いの素敵な服を着て、若くて、凛々しい男になって戻ってきました。

とさ。

2006/03/26

14. 逃亡者

アメリカインディアンの Lore

昔、あるところに冒険を求めて、長い旅を続けている若者がいました。ある日、その若者は大きな森のはずれにある不思議な村にたどり着きました。まだ人々が住んでいる家からはかなり離れているところで、彼は、ふと上のほうを見上げました。そこには、ちょうど彼の頭の上にすこし出たぐらいの木があり、その木の大きな枝のなかに、簡単な足場があるのを見つけました。そして、その足場には、針仕事をしている若い乙女が座っていたのです。

彼は、最初は大胆に村に入っていくつもりでいましたが、すこし歩いたところでふと立ち止まり、また、森の方に戻って来たのです。そして、何度も何度も同じようにしてその木の下を通るたびに、彼は、木の上に座っている娘さんを見上げました。彼はこれまでこんなにかわいい娘さんに会ったことがなかったからです。

かれは、これまで、ほかの人に自分自身の態度を示したことはありませんでした。そして、こうして森のはずれで何日間かをぐずぐずして過ごしていましたが、ついに、彼は決心をして思い切ってその娘さんに話しかけることにしました。そして、自分のお嫁さんになってくれるように頼んだのです。娘さんのほうも、彼に悪い印象を持っていたようには見えませんでした；しかし、彼女が彼にこう言ったのです。：

“是非、気をつけてください。私のおばあさんは私が結婚することに反対をしているのです。彼女はとても意地の悪い年取った女の人で、これまで、私に結婚を求めてくる人は誰でも殺してしまっていたのです。”

“それなら、一緒に逃げたらいいでしょう”、若い男はそう応えました。“今晚、おばあさんが寝込んだら、テントの留め金を上げて、出てきてください。私が待っていますから。”

娘さんは彼が言うようにしました。そして、その日の夜、二人は一緒に逃げ出し、朝までにその村から随分と離れたところまで来ていました。

でも、若い娘さんは、今にも後から追いかけてくるのでは、自分の肩越しに何度も振り返って、後ろの様子を見ていました。その姿を見て、ついに彼女の恋人は、彼女にこう言ったのです：

“どうしてそんなに後ろばかり気にしているんだい？ みんなは明るくなるまであなたがいなくなったことに気がつかないよ。もう、こんなに遠くまできているんだから、誰も追いつきはしないさ!”

“でも”と、彼女は言いました。“おばあさんは、とても強い魔法を使うの! 彼女は、ほかの人が一日かかって進むところを、一足で飛び越すことが出来るの。だから、私にはおばあさんが二人の後を追いかけてくるのがわかるの”

“もし、そうなれば、僕も何かの魔法を使えるってことがわかるよ”若い男はそう応えました。そして、たちまち、自分の手袋の片方を投げたのです。すると、どうでしょう。見る見るうちに、彼らが来た道はバッファローが通った足跡になっているではありませんか。そして、もう片方の手袋も投げつけました。すると、今度は、その手袋が、その道のはずれに倒れたバッファローの死体になったのではありませんか。

“おばあさんは、ずっと追いかけてくるだろう。でも、それも、ここまです”と若者は言いました。；でも、若い娘さんは頭を回して、いつまでもいつまでも、後ろを警戒しながら、先を急ぐのでした。

そして、やっぱり、そんなにときが経たないうちに、彼女はおばあさんが森の外れまできているのに気づきました。おばあさんは大きな足取りで、彼女の杖を片手に、白髪の混じった頭をしてこの二人の逃亡者のところにやってきました。

“今度は、私の番ねッ!”と若い彼女は大きな声を張り上げました。そして、彼女の頭にあった櫛を投げたのです。すると、その櫛は、二人のすぐ後ろに、深い森となったのです。怒ったおばあさんは、足元の小枝のある木が邪魔をしてずっと後ろの方に追いやられてしまいました。

でも、おばあさんは何とか、その森を抜け出し、また、二人の後に追いつきました。そのとき、娘さんは、自分の肩越しに、今度は、刺し櫛を投げつけました。すると、今度は、その櫛が、険しい崖で出来たたくさんの山になりました。今度も、おばあさんは、前よりもずっと後ろに後もどりをさせられました。でも、彼女の魔法は、こんなものには負けませんでした。そして、しつこく、しつこく二人の後を追いかけてきたのです。

こうしているうちに、一生懸命に逃げている二人は、とても広くて、そして、深い川の土手のところまで来ました。二人は、この川を渡るボートもなければ、歩いて渡る事の出来る浅瀬もありません。どうすればよいのかわからず、立ち止まってしまったのです。すると、すぐ近くに二羽の鶴がいるのが目に入りました。そして、若い男がその鶴に自分達の方に来るように合図をしたのです。

“私の友よ”と彼は言いました。“あなた方に御願いがあるんだが。どうだろうか、君たち、お互いに川の両側に立って、そして、この川をまたぐように首を伸ばして橋を作ってくれないだろうか。そうすれば、僕達は安全にここを渡ることができるんだが。たったそれだけだけど、そうしてくれるなら、僕は、君たち、両方の胸のところに素敵なお飾りを、そして、足には長いふち飾りをつけてあげるんだが。そうなれば、君たちはこれからずっと、間違いなく鳥の中では一番素敵なお鳥だと言われるようになるよ。”

鶴たちは喜んで彼の言うとおりにしました。そして、川の両側に立って、首を伸ばし、川を越えるようにお互いのくちばしを結びました。こうして、2人の恋人は、彼らの長い首のおかげで無事川を渡ることができました。

“ところで、鶴くんたちよ”、川を渡りきると若者は大きな声でこう言いました。“私は、もう一つ君達にやって欲しいことがあるんだが！ もし、お婆さんがこの川まで来て、君達に助けて欲しいと言ったら、その時は、お婆さんが川を渡れるようにもう一度首と首を繋いで欲しいんだ。ただ、今度は、お婆さんが君達の丁度半分のところまできたら、さっと首を離して、お婆さんを川の中に落とすようにしてくれ。そうすれば、僕は約束するよ。もうそれ以上のことはしなくて済むようになるだろうから！”

暫くして、お婆さんが川のところまでやってきました。息せき切って、さっ

きよりももっともっと怒っている様子でした。お婆さんは、二羽の鶴を見つけると直ぐに、怒鳴りちらして、彼らに橋になるように言いつけました。

“こっちにおいでッ。その首の長い無様な格好をしたお前さん達だよ。ここに来て、私の言うようにおし。私はこの川を渡りたいんだ。”

二羽の鶴は、もう一度、くちばしとくちばしをつなげて、橋となりました。しかし、この意地悪なお婆さんが丁度その橋の真ん中に来たときに、自分達の首を引っ込めて、しまいました。さあ、お婆さんはたいへん。そのまま、丁度、空を飛ぶような勢いで、わめき、大きな声でキャーと言いながら、川の中に落ちてしまいました。急な川の流れは、お婆あさんをたちまちのうちに水の渦のなかに巻き込んでしまいました。それは、本当の愛情の邪魔をする程強い魔法はなかったからです。

とさ。

15. Wountie の伝説

アメリカインディアンの Lore

この話はカナダの西海岸の海岸にある Squamish 州の Salish というところに伝わるものです。Squamish の町の北を Cheakamus という川が流れていて、この川は、ハウ湾に注いでいます。

Wountie の伝説

これは、ずっと、ずっとその昔、まだ、大洪水が起こる前の話しです。Cheakamus 川は、Squamish の町に住む人たちのために沢山の食料をもたらしてくれていました。毎年、夏の終わりには、それはそれは沢山のサケが卵を産む

ために故郷の川に戻ってくるのでした。そして、人々はヒマラヤ杉の根でつくった網を使って、そのサケを捕まえていました。こうして、冬が来るために十分な魚を取っていたのです。

ある日、1人の男が冬に自分の家族の食物を準備するためにサケを捕りにやってきました。彼が川のなかを覗いてみますと、いつもの年と同じように、多くの魚が今年もこの川に帰ってきていました。彼は「ありがとう」と言って、家族の食物として自分たちにサケをこうして与えてくれる魚の聖霊に感謝をしました。そして、川の中へ網を投げて、待ちました。やがて、彼が網をたぐって引き揚げてみますと、網の中には、サケが一杯捕れていました。それらは家族のものが、長い冬の間食べていくのに十分なものでした。彼はヒマラヤ杉の樹皮でできたかごの中にとれたサケを詰めて、みんなが待っている家に戻る準備をしました。

でも、ふと、彼が川の中をもう一度見てみると、まだまだ、沢山のサケが泳いでいるではありませんか。その魚を見て、俺は、もう一度網を投げてもっと沢山のサケを捕まえようと決心しました。そして、今度もまた、魚がいっぱい捕れました。とれた魚を入れる籠はもういっぱいでしたので、彼はそれを岸に投げ出しました。でも、まだ、魚は沢山泳いでいます。そして、今度は3回目。また、彼は水の中へ網を投げて、待ちました。

そして。彼がネットを引きあげた時です。たいへんなことがおこっていました。今度は魚どころか、彼の網は棒や切り株、そして、この小枝で一杯になっていました。網はズタズタに破れ、もう、修理をしてももとのようには魚がとれなくなっていました。それどころか、がっかりした彼は、岸に広げておいた魚も、そして、ヒマラヤ杉のかごに入れておいたサケも、棒と小枝になっていることに気がつきました。彼には一匹の魚もいなくなっていました。網はもう使い物になりません。

彼は山を見上げました。そこは、**Cheakamus** の守護神である聖霊の **Wountie** がいるところです。**Wountie** は彼に言いました。「お前は、自分と家族が必要とするだけのサケよりももっとたくさんのサケをとろうとして、その川との約束を破ったのだ。そして、自然との約束をも破ったのだ。こうなったのは当然の罰なのだ。」と。

こうして、**Wountie** は、今でも、高い山の上で **Cheakamus** と **Paradise** 谷を見下ろしながら、**Cheakamus** 川を守ってくれているのです。

漁師がどうなったかって？　いいですか。彼の家族はその冬の食べ物がなにもなく、空腹になって、やがて、餓死してしまいました。これは、かれの家族の話だけではなく、全ての人々が知っていなくてはならないことです。

とさ。

16. 大きな足のあるヘビ

アメリカインディアンの Lore

ずっとずっと昔のそのまた昔のこと、まだ、この世界が出来たばかりの新しく、とても、楽しい世界と言えなかった頃の話です。インディアンと動物たちだけが暮らしていて、白人がまったくいなかったその頃、他のヘビと姿の違う一匹のヘビがいました。なんと、そのヘビは足を持っていたのでした。ほかのヘビたちは、彼の格好がみんなと違っていたので、彼が大嫌いで、彼のために惨めな生活をしていたのです。そのために、とうとう彼らは、その足を持ったヘビを自分達の住んでいた村から追い出して、こういいました。“ここからずっと離れたところに、お前のように足をもった醜い動物達がいるよ。さっさとそこに行って、彼らと一緒に住むがいい。”　いじめられたかわいそうなヘビは、こうして、村をでて行かなければならなくなりました。

何日も、何日も、彼は旅しました。気温が段々下がって寒くなってきました。そして、食物を見つけるのも難しくなって来ました。とうとう彼は疲れきり、足は傷つき、しもやけになってしまいました。そこで、彼は死のうと思い、川の土手に来て横になっていました。

そこに、**E-se-ko-to-ye**、という名前のシカが、柳茂みから用心しながら出てきて、ヘビが川の土手の上に横になっているのを見ました。彼をかわいそうに思って、シカはヘビを彼自身のロッジに連れて行って、彼に食物と出血している足にぬるの為の薬をあげました。

そして、シカの **E-se-ko-to-ye** はヘビにこう言いました。あなたの友達になれるようなあなたと同じように足をもった動物がたくさんいます。でも、彼らのなかにはあなたの敵もいます。だから、自分が安全でいるためには、やられる前に彼らを殺してしまわなければならないんです。と話しました。

また、鹿はヘビにどうすれば寒さが凌ぐための巣穴を作るのかを見せてやり、そして、彼の足を守るために鹿の皮でも足袋のつくり方も教えてやりました。こうしてヘビはまた旅に出ました。

こうして、ヘビが次の日にねぐらを作るときには、太陽は西の空にもう沈んでしまい、辺りはかなり寒くなっていました。ねぐらを作るために枯れ枝を集めているときに、**Kais-kap** という名前のヤマアラシが現れました。そして、ぶるぶると震えながら、彼に頼みました。“今晚、君の家に入れてくれないだろうか。”と。

すると、ヘビは、“私が持っているのはとても小さな家だけれど、もしよければ、歓迎しますよ。”と応えました。

“おおっ。それはありがたい。”と **Kais-kap** は言って、“ひょっとしたら、君のためになるようなことができるかもしれない。ここに綺麗なモカシンがあるんだけど、ただ、ちょっと君には合わないかもしれないが。とにかく、まあ、私の張りを抜いて、それでそれらの上にちょうど合わさるように足の格好を書いてごらんよ。” こうして、二人はモカシンの上にヤマアラシの針で足の形をつけました。そして、その足にあったモカシンをつけてヘビはまた旅に出ました。

鹿が話していたように、ヘビは敵に出くわしました。三回もかれは、凶暴なインディアンたちの攻撃を受けました。そして、三度ともかれは、その敵を殺しました。

やっとのこと、彼は優しく迎えてくれる一人のインディアンに巡り会いました。ヘビはこの親切な酋長にあげるプレゼントを何も持っていませんでしたので、かれは、自分のはいっているモカシンを揚げることにしました。するとその鳥よ

りの酋長は、言うには、自分達は鹿の皮を使ってモカシンを作る方法を教えてもらい、ヤマアラシの針で、ちょうどヘビの背中に描くように、模様の飾りをつけていたのであった。こうして、その日から、ヘビは、集会所の火で戦士たちが手柄をたてた戦利品の品々を数えながら、その酋長の家と一緒に住むようになりました。それは、とても楽しい、幸せな時間でした。

ところが、酋長には、とても綺麗な、個々の優しい娘さんがいて、ヘビは、彼女がとても気に入って、愛するようになったのです。かれは、自分が人間であればと仕切りに思いました。そうすれば、彼は、その娘さんと結婚することもできるし、楽しい家も持つことができると思ったからです。かれには、そんな望みは、大神様、徳の高い聖霊が、かれに哀れみを持たない限り、そして、かれのために魔法を使ってくれない限り、かなえられないということを知っていました。

そこで、かれは断食をし、来る日も、来る日も祈りをささげました。しかし、かれの努力は何の効果もなく、むなしい結果に終わり、とうとう、ヘビは思い病にかかってしまいました。

すると、この部族の中に、`Mo'ki-ya`という非常に優れた、年老いた一人の祈禱師がいて、どのくらい、歳をとっているかって、そんなこと誰もわかるわけがないが、彼は、自分達の住んでいる村の中で起こるすべてのこと、そして、聖霊に関係することは何でも、見て、知って、理解していたのでした。彼の住んでいる家が、霊の風で揺らいでいるのが何度も見られ、祖手、その声が、ズーッと Sand Hill の丘を越えてゆき、かれに話かけていたのでした。

`Mo'ki-ya`が酋長の家で横たわっているヘビのところに来て、ほかのものはみんな底から追い払い、そして、かれのが抱えている悩みは何かと尋ねたのです。

“私の願いごとは、あなたの魔法でもかなうようなものではないのです。”とヘビは言いました。しかし、それでもヘビは自分が若い娘さんに対して抱いている恋心を打ち明けました。そして、彼女と結婚するにはどうしても若い男になりたいんだと。

`Mo'ki-ya`はしばらくじっと座って考え込んでいました。そして、おもむろにこういいました。“わかった。よし、兄弟よ。私がしばらく旅にでることにしよう。もしかすると、私の魔法でお前の望みがかなうかもしれないし、もしかすると、だめかもしれない。それは、私が戻ってきたときにはっきりするだろう。”

そう言って、その祈祷師は、魔法の入った包みを集め、どこかに消えていなくなってしまうしました。

祈祷師は、長く、そして、厳しい試練の旅を続けました。そして、大きな湖のほとりにたどり着いたのです。それから、かれは、高い山に登り、その頂で **Nato'se** という太陽の神に供えものをささげました。

Nato'se は、この男が聖霊をととても敬う態度でいるのと、持っていた魔力がとてもすばらしかったので、じっと聞いていましたが、しかし、かれは何も頼もうとしませんでした。決して、自分のために頼もうとしなかったのです。そして、蛇を自分たちの部族にの勇者に変えてやることは、天の大神様にしてみれば、たわいもないことでした。`Mo'ki-ya`が`Sun`の住所に着てから三日が過ぎました。そして **Nato'se** がかれに言いました。“`Mo'ki-ya`、自分の家に帰りなさい。そして、小さな薪に火をつけるがいいだろう。そして、その炎のなかに、甘草をくべて炊きなさい。そして、ヘビが何とか起き上がったら、その体をその火の中に横たわせるとよい。”

こうして、`Mo'ki-ya`は、彼の家に戻ってきたのでした。

そして、太陽の神が教えたように、その祈祷師の家の真ん中に焚き火が灯されました。そして、甘草の残り火で、テントの中に大きなうねりとなってその煙が渦巻きを作り、漂い始めると、`Mo 'ki-ya`は、ぐったりとなり、半分死んだようになっているヘビを大事に抱き上げて、煙でその姿が見えなくなるようにその火の真ん中に、そっと置いてやりました。

祈祷師がその家の暗がりのなかで、何かをつぶやきながらおまじないの太鼓をたたき続けました：老人達の歌う声が段々大きくなって近づいてきました。煙は、丁度、カーテンのようになって炎を見えなくしていましたが、そのなかから、なんと、若者が 歩いて出てきたのでした。

その晩、キャンプは喜びに溢れ、大騒ぎになりました。いまや、若い勇敢な好青年に生まれ変わったあの蛇は、あの聖霊にたいへんな好感をもたれた者としての待遇に相応しい儀式が催され。その部族に大歓迎されて、受け入れられたのでした。酋長は、大喜びで自分のかわいい娘を彼の花嫁として嫁がせ、素晴らしい新しい息子ができたことを心から喜びました。

多くの勇敢な息子たちと、綺麗な娘達が、その蛇の家をあがめ、称えました。そして、その老人が言うには、彼の家族は、やがて新しい部族となったのだそ

うです。それが、**Pe-sik-na-ta-pe** 族、あるいは、**Snake** 族と呼ばれたインディアンになったのです。

Snake 族は、実際にロッキー山脈の西側の高原地帯に、**Snake** 川の周辺に住んでいた、**Shoshone** 族の別名です。山の中に住んでいたのは、もともと正確がおとなしい部族で、周りの騎馬インディアン達の襲撃を受け、山奥に逃げ込んで、そこで住んでいたようです。**Lewis** と **Clark** の探検隊のインディアンとの通訳をした **Sacagawea** は、**Shoshone** の出身で、彼女が山のなかで、行く手を阻まれ、途方にくれていたときに、幼い頃の思い出が蘇り、その土地が太平洋に続く道に通じていることを確認できたという話があり、また、陸路で、ロッキーを越えるときには、多くの馬と食料を提供し、探検隊がコロンビア川にでて、船で川を下るときには、帰りのための馬を翌年まで預かるというほどの好意的な協力をした部族です。まさしく、**Shoshone** 族と遭遇しなければ、**Lewis** と **Clark** の探検隊の成功はおぼつかなかったのではないかというのは、私だけの推測ではないようです。

17. 渡りガラスの大きな冒険

アメリカインディアンの Lore

Innu は、人々や、動物、鳥達、魚、そして、自然を超越したものを代表するような不思議で、そして、美しい形のものを彫って、そして明るい色でそれらに色をつけていました。一番高い杉の木が、トーテム・ポールに選ばれて、お年寄りから子どもたちに、何世代にもわたって語り継がれる伝説のように、みんなから愛される目印となりました。

そして、そのトーテム・ポールの一つに目を見張るほどの渡りガラスが彫られていましたが、なぜか、彼にはくちばしがありませんでした！

アラスカの渡りガラスは普通の鳥ではありませんでした。彼は、特別に不思議な能力を持っていて、彼がこれになりたいと思ったものには、何にでも姿を変えることができました。彼は鳥から人間に変わることができたし、ただ空を飛んだり、大地を歩き回ることができるばかりでなく、どんな魚よりも速く水の中を泳ぎまわることもできたのです。

ある日、その渡りガラスは、森を通り抜けるために、小さくて、腰の曲がった老人になりました。そして、白くて長い髭を生やして、ゆっくり、ゆっくり歩いていきました。暫くするし、渡りガラスは自分がお腹が空いているのに気がつきました。その時、彼は、浜辺にある村の近くの森の外れに来ていたのです。そこでは、多くの人々が、ヒラメの漁をしていました。

一瞬、ワタリガラスは、ある考えが浮かびました。彼は、海の中にもぐり、猟師達が釣り針を垂らしている場所に泳いでいきました。渡りガラスは、その針についている餌を次から次へと急いで食べて回りました。こうして、渡りガラスが餌を食べるときは、いつも、猟師達は、自分達の釣り糸が引かれているのを感じていました。でも、釣り糸が引かれても、魚が釣られていないばかりか、餌もなくなっていたのです。

でも、渡りガラスはこのからくりをあまりにも何度もやりすぎました。とても釣りが上手な Houskana(ハウスカナ)は、釣り糸が引かれたとき、何か大きな獲物が掛かっていると、とても素早くそれを引き揚げました。さあ、たいへんです。渡りガラスのあごが釣り針に引っかかってしまいました！そこで、ワタリガラスは、海の底の岩に必死にしがみつきました。そして、こう叫んだのです。“オーっ。岩さんよ。何とか助けてクレーッ!”と。しかし、しがみついた岩は何も気に留めませんでした。

あまりにも痛みが激しかったので、渡りガラスは、自分のあごに言いました。“オーっ。私のあごよ、外れてくれ。私はもう耐えられない。”彼のあごは彼の言うとおりにしました。そして、外れていったのです。

Houskana(ハウスカナ)は、急いで釣り糸を引き揚げました。針にかかっていたのは、長くて白いひげのある人間のあごでした。それは、誰が見ても恐ろしくなるような恐ろしいものでした。Houskana(ハウスカナ)も、そして、他の漁師

達も非常に恐りました。というのも、彼らは、あごには、悪魔の霊がやどっていると考えていたからです。彼らは、その場から逃げ出し、これ以上速くは走れないくらい一生懸命に走って、酋長の家に行きました。

渡りガラスは、水からあがり、漁師たちのあとを追いかけてきました。自分のあごがないので、痛くてしょうがありませんでしたが、かれが自分の顔のしたの方を毛布で隠していましたので、だれも、彼がどこか具合の悪いところがあるなど、気がつきませんでした。

渡りガラス、何がおこったのか誰も気がつかないくらい速く、彼の魔法をつかいました。なんと、彼のあごが、また、元の位置に戻ったのです。すると彼は直ぐに鳥に戻り、酋長の家煙突から逃げ出したのです。その時、漁師たちは気がついたのです。彼らの釣り糸の餌を盗んで食べていたのは、あのずるがしこい渡りガラスで、それが、**Houskana**(ハウスカナ)の釣り糸に引っかかったのだと。

トーテム・ポールに渡りガラスが彫られています、それは、老人の姿ではなく、老人がどのようにしてあごがなくなったのかを思い出させるような、くちばしのない彼自身なのでした。

とさ。

Raven というのは、カラスの一種で「渡りガラス」と呼ばれています。ずるがしこい、とか、略奪といった意味があり、ある意味では、悪者の代表みたいなものです。しかし、インディアン伝説のなかには、悪者役として、あまりにたびたび出てきますので、逆に愛着さえ感じているような気がします。

渡りガラスを題材にした伝説はこれからも沢山でてくるでしょう。

これから、トーテム・ポールを見たときには、渡りカラスが彫られているかどうか、もし、彫られていたら、くちばしがあるかどうか、よく観察してみてください。

18. ヤマアラシのバッファロー狩り

アメリカインディアンの Lore

この話は、昔、昔、そのまた、昔の話です。その時代には、この地球上には、それはそれは、沢山の動物があちこちと歩き回っていました。あるところに一匹のヤマアラシがいて、彼は、バッファローを追いかけて旅に出たのでした。彼は道端に落ちていたバッファローの糞をみつけ、こう尋ねたのでした。“やあーっ。糞くんよ。君は一体ここにどのくらいそうやってじっとしていたんだね?” こう何度も、何度も尋ねるものですから、最初のうちは相手にしなかった糞が応えました。“ちょっと前からだよ”

その場所から、ヤマアラシは、バッファローが通った同じ道を追いかけることにしました。そして、かれがさらに進んでいくと、そこには、まだ、通ったばかりの足跡があったのです。彼は、尚も後をつけて、川のところまで来ました。そこで彼は、その川を向こう岸にまで渡っているバッファローの一群を見つけました。

“これは、一体どうすればいいんだろう?” と、ヤマアラシは座り込んで考えていました。そして、“私を運んで、川を渡らしてくれーっ” と大きな声で叫んだのです。すると、一匹のバッファローがこう応えました。“僕のことを言っているのかね?” ところが、ヤマアラシは、もう一度叫びました。“お前じゃない。べつのバッファローに言っているんだ。” こうして彼は、次から次へと、バッファローが“それは、私に頼んでいるのかね?” と聞くたびに、そのつど、そのバッファローの一匹一匹に断ってしまいました。

そして、とうとう、そのバッファローの一群のなかでももっとも優れた最後の一匹の番になりました。彼は、“私がこの川を横切って運んであげよう” と言ったのです。こうやって、そのバッファローは川を横切ってこちらにやってきてヤマアラシにいいました。“背中に乗りなさい。” すると、ヤマアラシは、“いや、途中で川の中に落ちてしまいうんではないかとかわいんだよ。” と言いました。バッファローは、“それなら、ずっと前の方の角と角の間に乗ればい

いよ。”“駄目駄目”とヤマアラシはそれでも載りませんでした。“絶対に川に滑り落ちてしまうような気がするんだ。”

バッファローがあれこれ、かれを 運んであげるいろいろな方法を考えてやりました。しかし、ヤマアラシはそれでもあれこれ言い訳をして乗ろうとしませんでした。すると、バッファローは、“なんだ、君は、私のお腹のなかに入りたくないんじゃないの?”と聞いてみました。“そのとおり”とヤマアラシは応えると、バッファローのお腹の中に自分から飲み込まれてゆきました。

こうして川を渡り始めると、“いま、どのあたりかな”とお腹のなかのヤマアラシが尋ねました。バッファローは、“丁度、川の間くらいかな。”と応えるのでした。暫くして、また、ヤマアラシが同じことを聞くのです。“もう、そろそろ川を渡りきるころだよ”とバッファローが応えました。“さあ、川から出たよ；もういいから、でておいでよ”ところが、ヤマアラシは、“いや、まだだよ。もうちょっと先までいってよ”と行って出てきませんでした。

そして、暫く歩いたあとで、バッファローが立ち止まりこう言いました。“もう、十分川から離れたよ。さあ、でておいでよ”すると、お腹のなかのヤマアラシは、バッファローの心臓を彼の重い尻尾ではたいたのです。これにはバッファローもたまりません。猛烈な勢いで駆け出しました。しかし、途中で倒れてしまい、そこで死んでしまったのです。こうして、ヤマアラシはバッファローを殺してしまいました。他のバッファローたちは、ヤマアラシを角でつついて出そうとしたのですが、彼はバッファローの肋骨の下に隠れてしまい、角につつかれないように身を守っているのです。

暫く、バッファローたちは何とかしようとしたのですが、結局諦めて、また、自分達の道を歩き始めました。

バッファローたちが行ってしまうと、ヤマアラシはお腹のなかから出てきて、大きな声でこう叫んだのです。“この上等な大きいバッファローを解体できる、なにかいい方法があればいいんだがなあー” さあ、近くでコヨーテが眠っていましたから、その声で目を覚ますと、早速このことを聞きました。そして、ヤマアラシのところに近づいてきて、こう言いました。“ここに、解体するためのナイフがあるよ” こうして、2人は、死んだバッファローのそばまで行きました。

“こうしよう。このバッファローを飛び越えられるほうが、解体することにしようよ”とコヨーテが持ちかけました。そこで、早速、ヤマアラシが勢いをつけて、飛び越えようとしたが、大きなバッファローの途中までしか飛ぶことができません。今度はコヨーテが挑戦しました。すると、彼は、死んだバッファローを何のことはなく飛び越えてしまいました。こうして、コヨーテがバッファローの体を切り開いて、解体を始めたのでした。

少し、解体が進んだときに、コヨーテは、バッファローの胃袋を取り出して、それをヤマアラシに渡して、“川に行って、それを洗ってきてくれないか、ただ、まだ、食べちゃ駄目だよ”と言いました。ヤマアラシはそれを川まで持って行って、一生懸命洗いました。そして、ちょっとだけ、その切れ端をつまみ食いしてしまいました。それをコヨーテは見ていたのです。彼は、頭にきてかんかんに怒りました。そして、彼のところに来て、“胃袋の一欠けらも食べるなといったろ!”と言い、はさみを持ち出してきて、ヤマアラシを殺して、それをバッファローの横に並べて、自分の家に帰ってしまいました。それから、コヨーテは自分の家族にこういったのです。“私は今日、バッファロー一匹と、ヤマアラシー匹を殺してきた。いまから行って、それをここまで運んでこよう。”

ヤマアラシは、バッファローのお腹から出てくる前に、あるお呪いを言ったのでした。それは、“ここに、赤松を速く大きくしよう”そんなわけで、赤松が、肉の下とヤマアラシの下で、一度に育ち始めていたのです。それは、どんどん育ち、今ではとても高くなり、まだまだ成長していました。全部の肉とヤマアラシは、なんと空高く、その赤松の天辺に乗っているではありませんか。そして、ヤマアラシは魔法を使って、また生き返っていたのです。

コヨーテと彼の家族がやってきて、これをみてびっくりしました。なんと肉が全部なくなっていたのです。彼らは、それを探し始めました。“何とか、彼らに気づかせてあげたいなあ”とヤマアラシは言いました。すると、暫くして、一番小さな子どもが見つくて、こう言いました。“見て!” 家族は気づいてみんな、高い赤松の木の先の肉の上にヤマアラシが座っているのを見つけました。

コヨーテが叫びました。“私たちはお腹がぺこぺこなんだ。同化、首のところの肉の一欠けらを投げてくださいな”

“よし、わかったよ”とヤマアラシが応えました。“その一番小さな子どもをもう少し離れたところに連れていってくれ”。“これでいいかい”と、応えて、かれを横につれていきました。

“ようし。じゃあ、みんなで輪を作り、手をつないで上に上げるんだ。”とヤマアラシが言いました。言われたとおりに、コヨーテの家族はみんなで手をつないで、それを頭の上に上げました。ヤマアラシがバッファローの肉をいくつか投げると、コヨーテと輪のなかの彼らは死んでしまいました。するとヤマアラシは、残りのバッファローの肉をまた放り投げて、自分は木から下りてきました。

彼は、子どものコヨーテの面倒を見ることにしました。そして、かれが欲がる分だけの肉を分けてやりました。ヤマアラシは、持てるだけの肉を集めると、それを自分の家に持って帰りました。そして、若いコヨーテととても仲のよい友達になったのです。それからはずっとずっと、2人で助け合って狩をし、楽しく暮したのだそう。

とき。

19. 熊家族の伝説

ペノブスコット

アメリカインディアン Lore

熊家族に関する話は、次のような話の元となったヒーローの子孫を通して明らかにされたものです。彼は、カヌーの舳先に座って、夫と猟場を移動している彼の母親(実は彼女は熊だったのですが)の姿を彫刻した非常に古い角でできた火薬の粉入を持っていました。

何世代も、何世代も前のことになるのですが、ペノブスコットと、彼の妻、そして、彼らの小さい息子たちがカナダに行くために村を出発しました。彼らはペノブスコット湾から出発して、素晴らしい評議会とお祭りの踊りが開かれるコグナウォガのイロコイ族の村に向かって旅を続けました。彼らは、自分達をセントローレンスに連れて行ってくれるもう一つの川の上流のある地点まで、20 マイルほどの陸の道を行かなければなりませんでした。

熊の家族の物語は次の話に出てくる奇想天外な英雄の子孫を通じて語り継がれてきたものです。彼の母熊は夫の熊と一緒に狩りをしながら旅をしていたのですが、そのお母さん熊がカヌーの舳先のところに座っている姿を刻み込んだとても古い角でできた火薬入れを持っていたのです。

昔、昔、そして、もっと昔のことです。ペノブスコットという男が、彼の妻とそして、小さい息子の三人はカナダに行くために自分達の村を出発しました。彼らは、ペノブスコット湾から、大事な会議と踊りの祭りの開かれるコグナウォガのイロコイ族の村に向かって旅をしました。彼らがセントローレンスまで行くには、自分たちが今居る川を溯っていき、そこからさらに 20 マイルも離れたもうひとつの川まで、大変な道を歩いていかなければなりませんでした。

男は、かれの妻を最初の夜にキャンプを張った場所で荷物をまとめさせるために残して、自分はカヌーを背負って先に出かけました。小さな子供はお母さんのそばで走り回っていました。彼女が荷物の片付けで忙しい間、この子は、今度はお父さんに追いつこうと先に歩き出しました。

ところが、お父さんがあまりにも先に進んでいましたので、この子はとうとう道に迷ってしまったのです。そして、彼女が次の宿泊する場所に来たときに、子供がどこにもいないことに気がつきました。さあ、大変。すぐに辺りを探したのですが、子供の姿はどこにもみあたりませんでした。

そこで、お父さんとお母さんは、仕方なく自分達の村にもう一度引き返し、子供が行方不明になったことを話しました。そこで村の男たちは、みんなで協力して、あちこちその子供を捜して回りましたが、何ヶ月も何ヶ月も子供を見つけることができませんでした。そして、とうとう冬を越してしまい、次の年の三月になって、ペノブスコットは、川の近くで鋭くとがった棒を何本か見つけました。みんなは、少年はきっと生きている。槍で魚を取っているに違いない

と思いました。近くに熊の足跡があったからです。そして、子供は、熊の家族と一緒に生活しているものだとして期待しました。

村で、子供の捜索に加わらず、只、辺りをぶらぶらとしている怠惰な男性がいました。「君はなぜ少年を捜すのを手伝わないのかね？そんなことをしていると役立たずだと思われるよ」と皆が彼に言いました。

“分かった。分かった。よし、手伝いましょう”と彼は返事をしました。そして、熊の墨かのほうに真っ直ぐ歩いて雪、そして、彼のひじでその入り口の岩でできた扉をノックしました。父熊、母熊、赤ん坊熊、そして、一緒に育てられていた少年たちが居たその巣の中には、とても大きな音が響き渡りました。父熊がカバノキの樹皮でできた水差しを持って、入り口の方に行きました。すると、その怠け者の若者は、それを射撃して熊を殺してしまいました。

お母さん熊が、“さあ、ここを出なくては”といい、別の水差しを持って入り口の方に向かいました。そして、やっぱり入り口のところで殺されてしまいました。小熊も同じようにして、これも殺されてしまいました。洞穴の入り口のところで、熊たちはみんな同じように殺されてしまい、そこに横たわっていました。そして、その怠け者の男が中に入ってゆくと、そこには、恐怖におびえて、隅の暗がり隠れるようにして体を丸め、自分の仲間のことを悲しみ泣きながら、一生懸命隠れようとしている少年を見つけました。

怠け者の猟師は、その少年を優しく抱き上げ、そして、村に連れて帰り、彼の両親に渡しました。誰もが、その怠け者の若者をほめ、そして、贈り物をしました：二枚の上掛けや、カヌーや、弾薬、そして、そのほか、たくさんの品物をプレゼントしました。彼は、こうして、一夜のうちに、裕福になったのです。

その少年の両親は、しかしながら、彼らの息子が、もはや、まるで熊のようになっているのに気がつきました。彼の背中や肩には、動物の毛が生えているかのようにだったし、彼の生活の仕方がまったく変わってしまっていたのです。が、結局、彼らはかれを元の人間にもどそうと必死に努力をし、彼を彼の父親のように **Penobscot** インディアンとして育て上げました。やがて、成長した彼は結婚をして、子供ができました。そして、彼のあと、彼の子孫は末代までみんな、熊部族と呼ばれるようになったのです。

彼らは、カバノキの樹皮の上に墨で熊の絵を描きました。そして、それを彼らが行くところ

ろには、何処のキャンプにでもそれを残して行きました。彼らの子孫は、みんな、同じようにこの伝統を受け継いで、“私は、熊部族の一人である”と、宣言していたようです。

これは、インディアンと熊とのかかわりの物語です。この話を聞くと熊にとっても親近感を覚えますが・・・。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

20. コヨーテと転がり続ける岩の話

アメリカインディアンの Lore

あるのどかな春の日のこと、コヨーテと狐が散歩に出かけました。そして、ある大きなすべすべした岩のところに来た時に、コヨーテがさっと自分の毛布を広げてその岩の上に敷いて、ここで彼は休むことにしました。しばらくしていると、太陽が照り始めて、とても暑くなってきました。そこで、コヨーテは、もう毛布はいらないだろうと思ったのです。“なあーっ。兄弟よ”とかれは、

岩に向かって言いました。“私の毛布をあげようか。君はあんまり物持ちではないようだし、私をその上で休ませてくれたのだから。それを 持っていなよ。”

そして、コヨーテたちは、また歩き続けました。けれども、空がどんよりと雲で覆われてきましたので、彼らはあまり遠くまで出かけませんでした。そうこうしているうちに稲妻がひかり、雷がとどろきわたり、雨が滝のように降り始めたのです。かれらが何とか雷と雨を避けるために見つけたのは、深く狭い谷間だけでした。そして、コヨーテは狐にこういいました。“さっきの岩のところまで走ってもどろうよ。そして、彼に上げた毛布を貸してくれるように頼んでみようよ。そうすれば、それでずぶぬれにならないようにできるから。”

こうして、狐はその岩のところまで走って行って、“コヨーテがかれの毛布を欲しいと言っているんだが。”と言いました。

“だめだよ”と、その岩は応えました。“だってかれはプレゼントとしてそれを私にくれたんだもの。だから、私はずっとそれを持っているんだ。かれにもう、それはかれのものではないよと言ってくれ。”

狐は、コヨーテのところに戻ってきて、岩が言ったとおりのことを彼に話しました。“わかった。”とコヨーテは言い。“あんまりいい気のしない岩だね。私は、雨が止むまでのすこしの間だけそれを借りただけなのに。”彼は、急に怒り出して、その岩のところまで戻ってゆきました。そして、その毛布をむしりにとってしまいました。“私は、ぬれた体を乾かすためにこれが必要なんだ。”とかれは言いました。“君は、毛布が必要ではないんだろ。だって、雨だろうが、雪だろうが、君はいつだって平気で外にいるんだし、それで、傷ついて困ったりするようなことはないじゃないか”

こうして、コヨーテと狐は、その毛布にくるまり、雨がやむまで、ぬれずに居ることができました。そして、やがて太陽が再び現れました。それから、彼らは、谷間を朝にして、川のほうに向かってまた歩いてゆきました。すると、しばらくして、丘の別のほうからかれらを追いかけてくる大きな音がすることに気がつきました。“身軽な狐くんよ。”とコヨーテが、“ちょっと戻って、あの大きな音はなんなのか確かめてきてきれないか”と言いました。

その丘の天辺まで行った狐が、今度は、一目散に駆け出して、かれのところに戻ってきて、こう叫びました。“走れ!、走るんだ!” “大変だ。さっきの大きな岩がやって来るんだ。”コヨーテが、振り返ってみると、あの岩が、いまその

丘の上までの上がってきて、これから、彼らのところまでまっすぐ転げ落ちてくるところだったのです。狐は、アナグマの穴に飛び込みました。しかし、その岩は、彼の尻尾の先をすりつぶしていたのです。狐の尻尾が今でも白いのはこのためなのです。

ところで、コヨーテのほうはどうしたかという、かれは、懸命に丘を下っていき、川の中に飛び込みました。彼は、川の向こう岸まで泳いで逃げたのです。というのも、岩は川を渡れば沈んでしまうことを知っていたので、それが一番安全だということを知っていたからです。しかし、岩はその川にためらいもなく入っていくと、なんと、泳ぎだしたではありませんか。コヨーテは、あわてて、すぐ近くにある森のほうに逃げ込みました。かれは、深い茂みの中に入るやいなや、横になって一休みしました。しかし、かれは、木がつぶされている音を聞くと、のんびりしているわけには行きませんでした。岩はまだ必要にかれを追いかけてきているとわかっていましたので、コヨーテは、急いでその森から飛び出し、今度は広い草原を逃げて走りました。

すると、ちょうどそのとき、何匹かの熊が草原を横切っているのに出くわしました。コヨーテは彼らに助けを求めました。“わかった。わかった。何とか君を助けてあげよう”と、熊たちは大きな声で叫びました。しかし、岩は、猛烈な勢いで熊たちを踏み潰してしまいました。そして、そのときに今度は、コヨーテは大きなバッファローが何匹かいるのに気がつきました。“おーっ。兄弟たちよ。”と、かれらと呼びとめ、“助けてくれ。御願いだ。あの岩を何とかとめてくれ。”すると、バッファローたちは頭を地面にこすり付けて、その岩のほうにめがけて突進をしました。しかし、岩はそれでも、バッファローの頭を打ち砕き、まだ、こちらに転がってくるのでした。すると、そこに、ガラガラヘビの一团が、投げ縄のような形を作って、コヨーテを助けにやってきました。しかし、彼らは岩を捕まえようとしたのですが、投げ縄の端にいたガラガラヘビが、みんなちぎれてばらばらになってしまったのです。

しかたなく、コヨーテはなおも逃げまわりましたが、岩はもうすぐのところまで追いかけてきています。それは、時々かれのかかとをつつくくらいに近づいていたのです。もう、コヨーテがこれまでと観念をしようとしたとき、彼は、自分が逃げている道の反対側の道端に魔法使いの魔女達が建っているのが見えました。彼女たちは、手に手に石の手斧を持っていたのです。“私たちがあなたを助けてあげるわ”と彼女達が言いました。そこで、かれは、岩が彼を捕まえる寸前に彼女達の間に走りこみました。コヨーテは、魔女達が、手斧で岩を

打ち砕いている音を聞き、やがて、かれが、よくよく見てみると、小さな砕けたたくさんの石が回りに一杯転がっているのを見ました。

そして、コヨーテは、大きな家がたくさんある場所に通じる道があることに気がつきました。彼が一息つこうと腰を下ろしてとき、頭の上で魔女の一人が自分達の仲間にこういっているのを聞きました。“かれは、おいしそうだし、十分に太っているようだよ。これで、夕飯のご馳走ができそうだよ。すぐにかれを食べてしまわない？”

コヨーテは、このとき、何にも聞いていないようなふりをしました。しかし、かれは、彼女達が小屋を出て行き、料理をするためのいろいろな道具をそろえ始めるのを、じっと半分閉じた目を開けて様子を伺っていました。そして、かれは、時が来ると飛び出していき、彼女達の水の手桶を全部からにしてしまいました。

彼女達が外から戻ってくるとすぐに、かれは、“僕は、今、喉が乾いてたまらないんだ。おいしい水がほしいんだけど、何とかしてくれないだろうか。”

“ああ。みずはここにたくさんあるよ。” 一人の魔女がこう応えました。“この水桶のうちのどれからでも、お前さんは好きなだけ飲んだらいいよ。” でも、彼女がその水桶をのぞいてみると、どの水桶も空っぽでした。

“あそこの谷間のとこまで降りて行けば、水があるよ。” と、コヨーテが言いました。“じゃー。私があそこまで行って、あなたの方のために水を汲んで来てあげますよ”

かれは、水桶をとって、そして水汲みにでかけました。しかし、かれは、彼女達から見えなくなるとすぐに、もう自分ではこれ以上速くは走れないくらいの勢いで走りだしました。その後、彼は、年老いた魔女たちが、彼は彼女達をだましたのだということに気がついたということ、そして、彼女達がお互いに、彼を逃がしたことの責任を擦り付け合っているということを知りました。そして、彼女達は、いつまでも諍いをおこし、喧嘩を続けて、しまいには、とうとう、自分達の仲間同士で殺し合いをしてしまったのでした。

(April 27, 2006)

21. MikMaq の国の創造の話

Native American Lore

この物語は、太古の昔から語り継がれてきた話で、どうやって MikMaq の人々が北アメリカに住むようになったのかを教えてくれる物語です。この話は、偉大なる精神の創造の主と、人間の体と、そして、それを取り巻いている周りとの関係を語るものです。それは、また、もともと北アメリカにいる人たちに生まれつき備わった生命についての哲学的な考え方を説明するのです。こうした考え方というのが、原住民達の言葉や文化の中に、そして、精神的な行動のなかに確たるものとして存在しているのです。

Mik'Maq の人たちの言葉、文化、そして、精神的な考え方が、何世紀にもわたって生き延びてきたという事実は、その創造の物語を基盤としたものであった。彼らの年寄りを尊敬

する気持ちは、生活の智慧、そして、彼らを取り巻く世界によってもたらされたものであった。彼らが持っている若さの強みは、彼らに生き残る勇気を与えた。彼らの母に対する愛と信頼が、彼らに、日々の生活のなかでの特別な理解を与えたのであった。

Mik'Maq の人たちにとっては、七という数字がとても重要な意味を持つものでした。New Brunswick, Prince Edward Island そして Nova Scotia も含めて、Quebec の Gasp 海岸から、広がっている大地を囲むように、まったく異なった七つの地方がありました。そして、最も強力な精神的な魔法は、七つの樹皮と木の根っこから作られています。それぞれの地域と Grand Council District から選ばれた七人の代表者たちは、蒸し風呂の小屋のなかで、パイプでタバコを吸い、甘い草を燃やします。その蒸し風呂の中では、MikMaq 達は、7つ、あるいは、14 の、そして、21 の熱した石の上に、蒸気を発生させるために水を注ぐのです。ここでは、心を洗い、そして、浄化が行われます。生まれ変わりの象徴ともいえることが行われるのです。そして、男達は、聖霊の創造の神に、太陽に、そして、地球に感謝をします。。さらに、部族の中の首領の家族である、Glooscap, Nogami, Netaoansom、そして、Neganagonimgoosisgo にも感謝の気持ちを捧げます。さあ、その話を聞いてください。

第一の話

GISOOLG

Gisoolg は、すべてのものを創造する主なる神の創造主です。MikMaq のなかでの **Gisoolg** の仕事は、“あなたが創造されたものである。”ということを意味しています。そして、“あなたが存在するために作られたものである。”ということも意味しているのです。

その言葉は、必ずしも、性別を言っているのではないのです。**Gisoolg** は、具体的に彼とか、彼女ではないのです。主なる神が彼とか彼女であるということは、大した問題ではないのです。

MikMaq の人々は、その主たる神がどのようにして存在するようになったのかを説明することはありません。ただ、Gisoolg が、今日の全ての生き物に対して責任を持っているといいます。Gisoolg が全てのものをつくったのです。

第二の話

NISGAM

Nisgam は、周回しながら旅をする太陽で、isoolg に対しては、自分が存在しなければならないという責任を持っています。Nisgam は、生命の根源を与えているのです。そして、光と熱を与えてくれるのです。

MikMaq の人々は、Nisgam が地球上の人々の創造についての責任を持っています。Nisgam は、Gisoolg の協力者なのです。Nisgam の力は、MikMaq の人々の、そして、そのほかの原住民の人たちにたいへんな尊敬の意であがめられています。Nisgam は、主たる神の創造主である Gisoolg に対して、存在しなければならない責任を持っています。

第3の話

OOTSITGAMOO

Ootsitgamoo は、MikMaq の人々が生活をし、動物や植物とともに沢山の資源を共有しているこの地球、もしくは、大地そのものなのです。MikMaq の言葉のなかにある、Oetsgitpogooiin というのは、“この大地の上に存在している人々、あるいは、1人の個人”、もしくは、“この大地の上で生命を与えられた人”ということを意味しています。Ootsitgamoo は、MikMaq の人々が歩き回ることのできる、あるいは、これまで、歩きまわってきた全ての地域を取囲んでいる MikMaq の世界を現しているのです。

Ootsitgamoo は、Gisoolg によって創造されたものであり、それは、Nisgam、つまり、太陽が回っているその中心におかれたものでした。Nisgam は、MikMaq の世界、あるいは、Ootsitgamoo をいつも監視している責任を負わされました。

Nisgam は、自分が通り過ぎるときには Ootsitgamoo に上にきらきらと輝く光で照らしています。そして、昼と夜とを運んでくるのでした。

第四の話

GLOOSCAP

MikMaq の世界が創造された後に、動物達、鳥、そして、植物がこの地球の上に出現して来ました。**Gisoolg** は Ootsitgamoo の大地を打つために稲妻を発生させたのでした。この稲妻が、砂の大地から、人間の体となる元を作り上げました。それは、**MikMaq** の世界である砂の大地のなかの大事な要素から生まれた最初創造物の **Glooscap** でした。

Gisoolg は、**Glooscap** に生命を与える別の稲妻を解放しました。しかし、まだ、それでも、彼は動くことはできなかったのです。彼は、その周りで動いている世界を見るためにだけ大地に打ちつけられたのでした。そして、**Nisgam** は来る日も来る日も、天を旅していたのです。**Glooscap** は動物達が、鳥達が、そして、植物が生長し、彼の周りを通り過ぎて行くのを見ていました。彼は、**Nisgam** にこう頼んだのです。自分を **MikMaq** の世界の近く行けるように自由にして欲しいと。

それでも、まだ、**Glooscap** が動けないでいる間、彼は仰向けになって横になっていました。彼の頭は、太陽が昇ってくる方角、つまり、東の方向、**Oetjgoabaniag** あるいは **Oetjibanoog** の方向に向いていました。**MikMaq** では、これらの言葉は、それぞれ、“太陽が昇ってくるところ”そして“夏がやってくる方角”という意味を持っています。彼の足は、代用が沈む方角、あるいは、**Oetgatsenoog** のほうに向いていました。**MikMaq** の言葉で西を言い表す言葉は、**Oeloesenoo**g、“太陽が神聖なところに沈むところ”あるいは、**Etgesnoog** “冷たい風がやってくる方角”が使われていました。

Glooscap の右手は、北の方角、**Oatnoog** の方をさしていました。一方、左手は、南、**Opgoetasnoog**”の方角でした。そして、**Glooscap** が動けるようになり、その大地の上に立つことができるようになったのは、三番目のとても大きな稲妻が落ちたときでした。

Glooscap は自分の足で立ち上がったあと、七回、その周りをぐるっと周りまわした。彼は、それから、空を見上げて、**Gisoolg** に自分に生命を与えてくれたことを感謝しました。そぎに、足元の大地、地球の方を見て、**Ootsitgamoo** に **Glooscap**

が創造するために砂を用意してくれたことを感謝したのです。彼は、自分自身を振り返り、そして、**Nisgam** に自分の魂と精神を与えてくれたことを感謝しました。

Glooscap は、それから、四つの方角、東と北と西と南にも感謝をしました。彼は、自分の感謝の気持ちを七つの方角全てに捧げたのでした。

Glooscap は、それから、太陽が沈む方角に旅を続け、海までやって来ました。そして、南の方に向かい、大地が狭くなっているところに着きました。そして、そこも海になっていました。さらに南に進み、もっと狭くなると、今度は、両側が海になっていることに気づき増した。彼は、もう一度彼が、最初に旅を始めたほうに戻り、そして、今度は、北に向かい、氷と雪の世界に来ました。その後、東に方角に戻り、そこで、彼は、留まることにしました。そこに彼は住むことにしました。彼は、再び、動物達と、鳥達、そして、植物がいることに気がつきました。そして、そこには、水と空もありました。**Gisoolg** が彼に、自分の周りの世界に目を向け、それを学習するように教えたのでした。**Glooscap** は、一生懸命観察したのですが、自分の周りの世界を煩わすことはできませんでした。そして、ついに彼は、**Gisoolg** と **Nisgam** に、彼が生きている目的は何なのか尋ねたのです。彼は、自分が直ぐに誰か他の人に会おうと教えられました。

五番目の話

NOGAMI

ある日、**Glooscap** が東に向かい旅をしている時に彼は、非常に年をとった老婆と出会いました。**Glooscap** は、その老婆にどうしたら **MikMaq** の世界にたどり着けるのかと尋ねました。すると、その老婆は、自分は **Nogami** だと名乗りました。彼女は、**Glooscap** にこう言いました。“私はお前のお婆さんなのだよ。” **Nogami** は、自分が岩と露と、そして、太陽である **Nisgam** に対して、生きていく責任をもっているのだといいました。そしてさらに、こんな説明をしてくれました。ある寒い朝、岩が、低い谷の中にすわっていて、露に覆われてしまったのです。それから、太陽がもっとも力強くなる昼になると、その岩は暖められ、そして、熱くなりました。**Nisgam** の太陽の力と、**Gisoolg** の助けで、その岩は、老婆の体を与えられました。この老婆が **Nogami**、つまり、**Glooscap** のお婆さんだったのです。

Nogami は、Glooscap に、彼女は MikMaq の世界に 1 人の老婆としてきて、そして、すでに、非常に賢くて、知恵のある人になったのだと話をしました。彼女はさらに、Glooscap が、稲妻の閃光を浴び、そして、彼のお婆さんをととても尊敬する気持ちを持つことにより、精神的な強さを身に付けるだろうと説明をしました。Glooscap は、彼のお婆さんが MikMaq の世界に到着するのを状に喜んだのです。そして、川で泳いでいるテンの、Abistamooj を呼んで、向こう岸に行くために、上に乗せてくれるように頼みました。Abistamooj は Glooscap が彼にお願いしたようにしてくれました。Abistamooj が Glooscap と Nogami が立っている岸のところまでやって来ました。Glooscap は Abistamooj に彼の妻を見放すように頼みました。そうすれば、彼と彼のお婆さんは生きて行くことができるからです。Abistamooj は、このことに同意しました。すると Nogami は Abistamooj を捕まえ、急いで彼の首をポキンと折ってしまいました。彼女はそれを大地の上におきました。Glooscap は、動物立ちと仲良く生きてゆきたかったので、初めて Gisoolg に、彼の力をつかって Abistamooj の命を生き返らせるように頼みました。

テンが犠牲者になることにより、Glooscap は、その時から、全ての動物を彼の兄弟、姉妹と呼ぶようになりました。そして、Nogami はこう付け加えました。動物達は、いつでも食料として、衣服として、道具として、そして、守護神として利用されるようにこの世界のなかに生きているのだよと。Abistamooj が、川に戻って行くと、彼の代わりに別のテンが横たわっていました。Glooscap と Abistamooj は友達に、そして、永遠の兄弟になるでしょう。

Nogami が直ぐに食べられるように動物をあらっていました。彼女は、Glooscap が命を授かったあの時の大地をうった稲妻のためにまだ熱くなっている火花を集めました。そして、火をおこすために炭の上に乾いた木を何本か置きました。この火がやがて主なる神の火となり、そして、後に偉大なる会議の小屋の火として知られるようになったのです。

肉の最初の祝宴は、この偉大なる火、ないしは、Elijibuctou といわれる火で料理されました。Glooscap はこのお婆さんの生き残り力、知識、そして、知恵に頼って生活していました。Nogami は経験があり、非常に賢かったために、Glooscap は、彼女をととても尊敬してその知識を懸命に学びました。彼らは御互いにどうしたら永遠に協力し、そして、ともに生きてゆけるのかを知ったのです。

六番目の話

NETAOANSOM

ある日、Glooscap と Nogami が森に沿って歩いている時、1 人の若い男の所に辿りつきました。この若い男は、背が高い大男でしたので非常に強そうに見えました。彼は、茶色の目をしていました。Glooscap はその若い男に名前はなんというのか尋ねました。そして、彼が、どうやって MikMaq の世界にたどり着いたのかと。すると、その若い男は、自分の名は、Netaoansom で、Glooscap の姉さんの息子だと名乗りました。つまり、彼の甥にあたるのです。彼は Glooscap に、自分は非常に強い男だといい、彼らは一緒に生活するようになり、とてもよい気分の日々を送りました。Netaoansom は、ムースや、鹿、そして、カリブーなどを追いかけて、素手でそれらを捕まえて、持ってくるのです。彼はとても強かったです。Netaoansom は、東の風が強くと、海が荒れと、波が高くなり泡となると言いました。この泡が砂浜の岸のところまで吹いてきて、最後には高い草を覆ってしまうと言いました。この高い草とは甘草のことでした。その香がとても甘い匂いがしたのです。その甘草は、Nisgam、つまり、太陽が、真昼の空に高く昇ってくるまで、その泡を抱えていました。Nisgam は Netaoansom に、人間の体の中に、強い精神と、強い力を与えたのです。

Gisoolg は、Glooscap に、もし、彼が彼の甥の強さと力に信頼するなら彼は、強さと、彼の周りの世界の理解を得ることになるだろうと話しました。

Glooscap は、彼の甥が MikMaq の世界にたどり着いたのを非常に喜んだので、彼は、彼は川の鮭を呼び、海の岸に行くように、そして、命をくれるように頼みました。このようにした理由(わけ)は、Glooscap も、Netaoansom も、そして Nogami も全ての動物は生き返られるように、全部を殺したくはなかったからです。かれの甥の到着を祝う祝宴の時に、彼らはみんな、魚の料理を楽しみました。そして、彼らがこの世にいることを感謝したのでした。彼らは、森や水のなかに住んでいる兄弟たち、姉妹達にこれからもずっと信頼を寄せることになりました。みんなが生残るために御互いを信頼したのでした。

七番目の話

NEGANOGONIMGOSSEESGO

Glooscap が火の近くに座っている間、Nogami は、動物の毛皮を繕い、衣服を作り、Netaoansom は森に言って食料をとって着ました。一人の女が火のところ

に来て、Glooscap の横に座りました。彼女は自分の手を Glooscap の体に回し、こう聞きました。“あなたは寒いのですか？ 私の息子よ ” と。Glooscap はびっくりし飛び上がりました。して、彼女はいったい何者なのかと聞き、どこからやってきたのか訪ねました。彼女は、自分は Glooscap の母だと言うのです。彼女の名前は、Neganogonimgooseesgo だといいます。Glooscap は、彼のお婆さんと甥が戻ってくるまで待って、そして、彼の母にどうやって彼女が MikMaq の世界に来たのか説明するように頼みました。

Neganogonimgooseesgo は、自分は、大地の上に落ちる木の葉だと言いました。朝露がその葉の上にできて、太陽の Nisgam か真昼の空の上に向かって旅を始めると、きらきらと輝くのです。Nisgam が命を与え、Glooscap の母としての人間に形にしてくれるのは、昼間なのでした。Nisgam の精と力が Glooscap の母の中に入っていったのです。

Glooscap の母は、彼女が彼女の子どものために世界中の色をもってくるのだと言いました。彼女は、それと一緒に力と調和をもってくるのです。地球の自然の力に持ちこたえる強さと、MikMaq の世界；その動物達と、彼女の子ども達、そして MikMaq の世界の調和です。彼女は彼らにこう話しました。あなた方は、みんなが御互いに一緒に平和に暮していくことができるように調和をし、そして、協力しあう必要があるのですよと。

Glooscap は、彼のお母さんが自分たちの世界に来てくれてことを非常に幸せに思いましたので、彼女が木の葉から来たというので、彼の甥に頼み、Nogami が祝宴の用意をしている間に、木の実、果物を集めてくれるように頼みました。Glooscap は、Gisoolg, Nisgam、Ootsitgamoo、Nogami、Netaoansom、そして、Neganogonimgooseesgo のみんなに感謝をしました。彼らは、みんなで Glooscap の母が MikMaq の世界の来てくれたことを称えて楽しい食事をしました。

この物語は、さらに、大地の砂から創造された男、Glooscap が彼の家族とともにずっと長い年月の間生き続けたという話にまで続いています。彼は、自分の家族のそれぞれを大事に思うことにより、精神的な強さを得ることが出来ました。彼は、お婆さんの知恵に耳を傾けました。そしてね彼は甥の持っている強さと精神的な力を信頼しました。彼の母の愛と調和は彼に気品と崇高さを与えました。森や海に住む Glooscap の兄弟・姉妹が、彼に、生残る意思の強さと食料を与えたのです。Glooscap はこうして、Glooscap は、彼の家族と彼を取り巻いている世界のみんなが御互いに尊敬しあうということが、彼らが基本的に生き延びてゆく大切な心構えであることを知りました。Glooscap の役割は、

この知識を彼の次の世代の **MikMaq** の人々に伝えることでした。そうすれば、彼らもまた、**MikMaq** の世界で生き延びてゆくことができるからです。このことが、グルすが **MikMaq** の話を言い伝えるなかで主人公となった理由なのでした。

ある日、**Glooscap** は、**Nogami** に話しをしているときに、彼らはすぐに彼らの母と甥をあとにして去ってゆくという話をしました。彼は、彼女に対して、その準備をしなくてはならないと話しました。**Nogami** は、北の方に向かって旅をするのに必要なものを全て集め始めました。ある晩、みんなが、偉大なる火の回りに座しているときに、**Glooscap** が彼の母、そして、甥に向かって、彼と **Nogami** は、**MikMaq** の世界を後にして去ってゆくつもりだと、言いました。自分たちは、みんな、北の方に向かって旅をして行くことになるが、もし、**MikMaq** の人々に危険なことがおこるようなことがあれば、その時にはもどってくるといいました。そして、**Glooscap** は、彼の母と甥に、偉大なる火の面倒を見てくれるように話、その火を絶対に絶やさないように頼みました。

七度目の冬、“**elwigneg daasiboongeg** ”のあと、七つの火花がその火から舞い上がり、そして、彼らが大地に落ちてきたときに、七人の人が生命を持つことになるであろう。そして、さらに、あと七つの火花が大地に着き、また、七人の人が生命を得、生きていくようになるだろう。こうして、火花は七人の女たちと七人の男達を創造するだろう。そして、それは、七つの家族を生むことになるだろう。やがて、その七つの家族がその創造の火の場所から、七つの方角にむかって散らばってゆくことになるであろう。**Glooscap** は、一度、七つの家族が彼らの居場所に住み着くと、それは、やがて、さらに、七つの部族に分かれていくだろうと言った。

それぞれの部族は、彼ら自身の生きてゆくための場所を得るだろう。そして、彼らは、他の部族に迷惑を与えるようなことはしないだろう。彼は、彼の母に、小さな部族ほど、動物や、植物、そして、人間達も含め、この地球の沢山の資源を共有するようになるだろうと話した。

Glooscap は、彼の母に、七度目の冬が過ぎたあと、七つの部族のそれぞれが、偉大なる火の場所に戻ってくるだろうと話した。その火のあるところで、全ての人々が、ダンスを踊り、歌を歌、ドラムを叩いて、彼らが **MikMaq** の世界でともに生きていることを喜び合うことだろう。**Glooscap** は、さらに話を続けた。その偉大なる火は主たる神の創造主の力を示しているのであると。そして、太陽である **Nisgam** の光と熱の力と強さの象徴であると。偉大なる火は、この地球である **Ootsitgamoo** の強さを持っているのだ。そして、その火は、**Glooscap** が命

を与えられたあの大地を打つ稲妻の強さを表しているのである。その火は、MikMaqs にとっては、まことに神聖なものなのである。それは、この地球上でもっとも強力な精なのである。

Glooscap は、彼の母と甥に、MikMaq にとっては、七つの精に対して、誉と尊敬と感謝の気持ちを捧げることが非常に大事なことであったと話した。その火は、創造の四つの段階、Gisoolg と Nisgam と、Ootsitgamoo とそして、Glooscap を象徴しているのだ。火は、残りの三つの段階では、Nisgam の代用の力のように、重要な役目を演じているのである。

Nogami が MikMaq の世界に来たことを褒め称えて、Glooscap は、彼の母に、七つの、そして、14 の、さらに、21 の石が、偉大なる火の上で熱せられなければならないと教えた。これらの熱くなった石は、ムースや、カリブーの毛皮、あるいは、泥で覆われてテント小屋のなかにおかれるのだろう。その小屋の入り口は太陽の昇る方角を向いていなければならない。そこには、七人の男達が、真ん中に 21 ヶの石が置かれた堀を囲んで心地よく座ることができるようになっていなければならない。七つのハンノキと、七つの野生の柳、そして、七つのブナの木が、その小屋の骨格を形づくるのに使われる。その小屋は、ムースや、カリブー、そして、鹿の毛皮、あるいは、土で覆われていなければならないのだ。

七つのもっとも最初の家族を代表する七人の男たちがその小屋に入るだろう。そして、彼らは、七つの方角に向かい、創造の七つの段階と、健康で生きていくことに感謝と賞賛の気持ちを捧げるだろう。男達は、その小屋のなかで蒸気が立ちこめ、非常に熱くなるように石の上に水を注ぐのだ。そして、ほとんど我慢できなくなるくらいまで汗をかき始めるのだ。精神的な強さを信じているものたちだけが、その熱に耐えることができるのである。それから、彼らは、まるで、いま生まれたばかりの赤ん坊のように輝いて、その蒸気で一杯の小屋から出てくる。これが、彼らが自分たちの精神を清め、そして、Nogami の到着を称えるやり方なのである。

汗をかいている間は、その七人の男達は 7 日間の間何も食することはない。彼らは、ただ、黄金の根と蜂蜜の混ざった水を飲むだけである。蒸し風呂に入る前に、七人の男達は、甘草を燃やす。そして、七つの方角と、七つの創造の段階を称えるだろう。それは、MikMaq の世界に Netawansom の到達を祝うためではない。甘草の火は、偉大なる火からとったものでなければならない。

Glooscap のお母さんが木の葉から、その世界に来た時に、彼女の到達の榮譽を称え、タンニンの木の樹皮と葉から作られたタバコが吸われるだろう。タバコは木の枝で作られた管と石で作られた詰め容器で吸われるのだ。

パイプには、偉大なる火からつけられた甘草の火からつけられる。タンニンの樹皮とその葉、そして、甘草は、それぞれ、Glooscap のお婆さんと、甥と、そして、お母さんを意味しているのである。“spebaggan ” と呼ばれるそのタバコは、煙となり、そして、その煙が、風に吹かれて七つの方角に運ばれて行くのだ。

Nogami が MikMaq の国に来たのを称えて、祝宴、もしくは、食事会が持たれるだろう。Netawanson の榮譽を称え、彼らは魚を食べるだろう。果物と木の根、そして、植物が、Glooscap のお母さんを敬うために食べられるだろう。

Glooscap は最後に彼のお母さんに、彼女がどうやって、樹皮や七つの異なる種類の植物の根から薬を集め、作るかということ話をした。七つの植物が一緒になって、“ektjimpisnn ” と呼ばれているものを作るのだ。それは、MikMaq の世界のほとんどの病気を治すことができるのです。この薬の要素は、：

“wikpe ” (alum willow 雌の柳) と、“waqwonuminokse ” (野生のクロイチゴ)、 “Kastuk ” (大きなドクニンジン)、そして、“kowotmonoksw ” (赤いトウヒ)です。MikMaq の人々は、いまは、次のような七つの地域の別れて住んでいるのです。

1.Gespegiag

2.Sigenitog

3.Epeggoitg a, Pigtog

4.Gespogoitg

5.Segepenegatig

6.Esgigiag

7.Onamagig

22. 熊にはどうして尻尾がないの？

アメリカインディアンの Lore

古い日々にさかのぼると、熊は彼の最も誇りが高い所有だった尾を持ってい

それは、それは、昔のことになりますが、ずっと昔には、熊は、とてもすばらしい自慢のできる尻尾を持っていたのです。長くて、黒くて、そしてつやがあるとても立派なものでした。熊は、回りのものに見えるようにそれを自慢げに波のようによく揺らしていたものです。そんな熊を狐が見ていました。狐は、誰もが知っているように、すこし悪賢い動物で、他人をだますこと以外にあまり楽しみがありませんでした。そうです。その狐は、熊をだましてやろうと決心したのです。

それは、ちょうど **Hatho** という、霜の精が、氷で湖を多い、そして、かれの大きな小槌で木々をドンドンと打ちながら、この大地を横切り、サーッと広がってゆくその頃のことでした。狐は、熊が好んで歩き回る場所のすぐ近くの氷に穴を開けました。ちょうど熊が狐に彼が何をしているのか尋ねようとしたときです、狐は氷に開けた穴に入れ突き刺していた彼の尻尾をぐいと引っ張り、大きなマスを上吊り上げました。

“イヤーッ、兄弟よ。”と、狐は言いました。“こんなすばらしい日に、どうですか、ご機嫌は？”

“やー。”と熊も、その丸々と肥えた魚をみて、応えました。“ああ、とても気分はいいよ。兄弟。ところで、君はそこで何をしているんだい？”

“ああ、私は、いま、釣りをしているんだ。”と狐が応えました。“どうだい、君もやってみるかい？”

“おーっ。もちろんだとも。”と、ドタドタと熊は狐が魚を釣っている穴のほうに進みながら返事をしました。

しかし、狐は、“兄弟、ちょっと待つて。”と彼を止めて言いました。“この場所はあまりよくはないんだ。見てのとおり、私は、もう、この辺りの魚をみんな捕まえてしまったし。どうだろう、熊君がたくさんの大きなマスを捕まえることができるような、新しい釣り場にゆこうではないか。”

こういわれて、熊もそのとおりと思いましたので、彼は、狐といっしょに新しい場所に行くことにしました。その新しいところは、狐が良く知っている場所でした。——そこは、湖がとても狭くなっているところで、Hatho が魚たちの池の表面を覆っているときには、彼らはずっと水の深いところに沈んでしまっていて、彼らを捕まえるには、あまりよいところではありませんでした。熊は、狐が氷に穴を開けている間、すぐに彼が捕まえることのできるであろう魚の味見をしていました。“さあ、できた。”と狐が言いました。“じゃー。僕の言うとおりにするんだよ。まず、魚のことを考えている頭のなかを空っぽにするんだ。歌のことも忘れるんだ。さもないと、魚がその歌を聴くからね。そしたら、逆戻りをして穴のほうにいき、君の尻尾をその穴の中に入れるんだ。そうすれば、すぐに魚がやってきて、君の尻尾に食いつくから、そしたら、すぐに引っ張り上げるんだ。”

“しかし、自分がひっくり返っているのにどうやって魚が食いついたかどうかわかのかな？”と熊が聞きました。

“よし、じゃ、私が魚にわからないように個々に隠れていることにしよう。”と狐が言いました。“魚が君の尻尾に食いついたら、すぐに叫ぶから。そしたら君は、その魚を捕まえるのに、できるだけ力を使って引き上げるんだよ。だけど、そのとき、ちょっと君には辛いかも知れないが、私が合図するまで、どっとしていなくてはだめだよ。”

熊はうなずいて、“よし、わかった。すべて君の言うとおりにするよ。”と言って、穴のそばに腰を下ろし、かれの長くて、りっぱな黒い尻尾を氷の張った水の中に入れて、そこに仰向けになりました。

狐は、熊がかれの言うとおりにちゃんとやるかどうかを確認するため、しばらくその様子を伺っていました。そして、熊がそのとおりにしたことを確認して、こっそりとその場を抜け出し、自分の家に帰って行き、ベッドに入って寝てしまいました。次の日の朝、目がさめて、熊のことを思い出しました。“彼

は、まだ、あそこにいるのかな”と狐は一人ごとを言いました。“よし、行ってみよう。”

そして、狐は氷の張った池までやってきました。そこで、彼は何をみたか皆さんはお思いですか？ かれは、その氷の真ん中辺りに、小さな白い丘のようなものを見たのです。それは、一晩中降った雪が、狐が、尻尾に魚がついたと声をかけてくれるのを待っている間に眠ってしまったあの熊の上に積もっていたものでした。そして、熊は、いびきをかいていたのでした。かれのいびきがあまりにも大きかったので、氷は、がたがたとゆれていました。それがあまりにもゆかいだったものですから、狐は笑いこけてしまいました。しかし、そうして彼が笑いまわっている間に、かれは、この哀れな熊をもう起こしてもよい頃だと思いました。彼は、そっと熊の耳のところに這って行き、大きく息をつくと、大きな声で叫びました：“今だ、熊くん!!!”。

熊は、はっとして目を覚まし、そして、思いっきり、ありったけの力を振り絞ってかれの長い尻尾を引っ張り揚げました。ところが、かれの尻尾は、夜の間に張った氷のために、しっかりと固められていたのです。そして、彼がひっぱったときに、それが砕けたのです。——バシッ——ちょうど、そんな感じでした。熊は起き上がり、彼が釣り上げたはずの魚を探しましたが、魚の代わりに彼が見たものは、氷で固められて自分の自慢の長い尻尾でした。

“おお一つ。”とかれはうめき声を出しました。“おお一つ。狐くん。君のおかげでこんな風になってしまったよ。”しかし、狐は、もうこれ以上ないくらいに笑いこけていましたが、熊くんよりもすぐに冷静になり、そして、さっどこかに消えていなくなってしまうしました。

そうです。この日から、熊は自分の尻尾が短くなったばかりではなく、狐を心から愛せなくなりました。そして、もしあなたが、これまで、熊のうめき声を聞いたことがあるなら、それは多分、彼が、ずっと昔狐の仕掛けたわなのことを思い出し、そして、彼のなくなった尻尾のことを嘆いているからなのです。

とさ。

この話は、インディアンの間では、非常に大切に思われて、愛されている熊についての伝説です。熊に尻尾がないのは、ここに話を聞くまで、あまり気にしていませんでした。でも、こう、言われてみると、なるほどそうだったのかと改めて熊のことを考えてみました。熊には、愛情を感じているインディアンですから、熊の尻尾のなくなったいきさつでも、熊の人(?)のよさが伺えるのは、ますます持って親しみを感じてきます。

23. Ableegumooch(気だるいうサギ)

アメリカインディアンの Lore

むかーし、むかーし、のことですが、あなた方も知っているように、**Ableegumooch** は **Glooscap** の森林ガイドをして、森の中で迷った旅人たちを助けていました。しかしながら、だんだん時がたつと、インディアンたちも、また、動物たちも森に慣れて、自分たちで道を見つけることができるようになり、ウサギにたびたび助けてもらう必要がなくなりました。すると **Ableegumooch** はだんだん太りだして、怠けるようになりました。簡単にできることや、やることが楽しいときにかぎって、彼はそれをするようになりました。難しい仕事や、疲れるような仕事はしなくなりました。そして、いまでは、食料を蓄えておくテント小屋に食べ物を集めてくる方法も忘れてしまいました。彼は、お婆さんの、貧乏で年寄りの **Noogumee** と一緒に住んでいました。そして、彼は、時々食料を探すために狩をしなければならなかったのです。そうしないと彼らは

飢えてしまうからです。お婆さんはどれだけ彼に小言をいったことでしょう。それでも、**Ableegumooch** は、自分の態度を改めようとはしませんでした。

Glooscap は、そこから少し離れたところにある **Blomidon** の彼の家ですんでいたのですが、彼は、そこからそのウサギが、殆ど役に立たない動物であるのを見ていました。彼は、怠け者がどれだけ危険なものかについて、注意をされていたに違いありません。だから、これ以上時間を無駄にできませんでした。**Glooscap** は、彼の家から、大またで三步ほどで下って岸に着き、そこで、彼のカヌーに乗り、**Fundy** の湾を横切り、ウサギの家の近くの岸まで漕いで行きました。

それは、とてもさわやかな明るい朝でした。カナダの太平洋岸がいつもそうであるように、その日も空気は冷たく、潮の匂いがしていました。そして、すぐに、いい気になって歌を歌っているウサギのところに飛んで行きました。

今日も一日、

何もしなくて、

いい気分!

彼は、夕食のために集めて置かなくてはならない、かぐわしい木の葉にも、おいしそうなイチゴにもなんの注意も払いませんでした。他の人が働くのを見ているほうがよほどたのしかったのでした。そこに、大きなかえでの木に駆け上っているリスの **Miko** がいました。彼の頬は、ナッツで一杯に膨れがっていました。そして、彼の貯蔵小屋にあまりにも近くに來た **Ableegumooch** を叱るため、休みを取っていました。また、ぶんぶんミツバチの **Mechipchamooech** は、アキノキリンソウのところで、彼の巣箱に入れる蜜を集めるのに忙しくしていました。そして、アオカケスも、大きな松の間を彼の家族のため虫を集めて飛び回っています。そうした情景がとても面白そうでしたので、**Ableegumooch** は、たいそう立派なモミの木のそばに立ち止まって、その光景を楽しんでいました。その時です。突然、彼は自分の後ろから声を聞きました。

“**Ableegumooch**、気をつけろよ!”

ウサギは、飛び上がり、そしてあたりを見回しました。が、そこには誰の姿も見えませんでした。でも、どこからかまた話しかけてくる声が彼の耳に入りました。

“気をつけろよ、**Ableegumooch**、でないと、お前の怠け癖がそのうち、辛く、悲しい目にあわせるから。”

ウサギが見上げてみると、モミの木が嵐の時の木の葉のように揺れていましたが、でも、あたりをざわざわとさせているのは、風の息吹ではありませんでした。彼は、びっくり仰天して、慌てて走り出し、——彼は、自分の家について安全になるまで走り続けました。そして、家にいたお婆さんに、自分が体験したことを話しました。

“それは、**Glooscap** がお前に忠告をしに来たんだよ。”とお婆さんはいいました。“彼の言うとおりにするんだよ。孫よ、でないと、お前はひどい目に合うよ”

ウサギの足は、恐怖と、あまりにも一生懸命走ったので今でも震えていました。そして、彼は、一度は、これからは自分の怠け癖を治すように心がけると約束したのです。そして、本当に、暫くの間、彼は、忙しそうに狩に出かけ、そして、テント小屋には食料が一杯たまったのでした。しかし、秋がやってくると、彼は、また、怠け癖がでてきて、昔の悪い態度に戻ってしまったのです。

今日も一日、

何もしなくて、

いい気分!

秋の森に木の葉が一杯茂っているなかをぶらぶらしながら、**Ableegumooch** はこんな歌を歌っていました。**Noogumee** は、かれに頼んだり、時には小言を言って叱ったり、何とかするようにと説得しました。が、しかし、彼は、食料を集めるどころか、友達のところに行って無駄な時間をつかい、一向に態度を改めようとはしませんでした。そして、ついに、冬が訪れてきたのです。彼は、カワウソの **Keoonik** のテント小屋にやってきました。**Keoonik** は、丁寧にかれに食事に招待してくれるように御願いしました。そして、ウサギもすぐにそれを承知しました。**Keoonik** は、かれのところにいるやや年上のお手伝いさんのところに戻り、そして、いつものようなインディアン衣装を指示しました。

“**Noogumee**、食事の支度をたのむよ”

こうして、かれは、釣り糸を持って魚をとりに出かけました。ウサギは、彼がどんなことをするのか興味深々、その後をついで、はねて行きました。**Keonik** は、雪の積もった川の土手にすわり、そして、氷の道を滑って、水の中に入って行きました。しばらくすると、彼は、かれのおばあさんのところに持ってゆくうなぎを一匹捕まえて戻ってきました。そして、彼女はすぐにそれを夕飯のために料理したのです。

“これは、すばらしい”と **Ableegumoooc** は思いました。“もし、活きているのを捕まえるのがやさしいことでないとしても、私は、**Keonik** と同じように捕まえることができるだろう”。かれは、カワウソを次の日の夕飯のお客として招待しました。そして、かれはいそいで家にもどりました。

“こっちに来て”とかれは、おばあさんに言いました。“これから、僕たち、川の近くに引っ越しをしよう。”そして、おばあさんには何も言わずに、かれは引っ越しを始めました。**Noogumee** は、自分たちの食料の倉庫が空っぽで、そして、彼が獵に行かなくてはならないことを思い出しました。しかし、**Ableegumoooc** は、なんの気にも留めません。かれは、**Keonik** のようなすべり道具を作るのに忙しかったのです。天気は非常に寒いときでした。ですから、彼がしなければならぬことは、まず、水を雪の積もった土手に流し、そこを凍らせて、かれの魚とりのためのすべり道を作ることでした。そして、次の日になると早々に、招待した客が来ました。夕食の時間になると、**Ableegumoooc** はお婆さんにいいました。

“**Noogumee**、食事の用意をして”

“料理をするものなんか、何もないよ”と彼女が悲しそうに応えました。

“そんなことは分かっているよ”とウサギは自信ありげに言いました。そして、彼は、魚を取るために滑り道の天辺の自分の場所に座りました。ところが、彼が、さあ、と滑り出そうとしてそのときになり、彼は、それが簡単には行かないことに気がつきました。彼の着ているコートはごわごわしており、そして、がさがさに乾いていて、カワウソのようにずっと滑っていくことができなかったのです。彼は、自分が滑り道を下り、川の中に入るまで、自分の足で必死に蹴らなければならなかったのです。冷たい空気で彼は、息が絶え絶えです。そして、ハッと気がついたのは、自分が泳げないということでした。もがき、そして、這い回りながら、彼は、もう、魚とりはこりごりだと思いました。もう少しのところでおぼれそうになったからです。

“一体、彼は、何をしているんだろう”と **Keoonik** がお婆さんに尋ねました。

“多分、彼は、誰かと同じようなことをしようと思っているんですよ。”と **Noogumee** がいいました。“自分が、同じようにできると思ってね。”

Keoonik は、水のなかで凍り付いて、半分おぼれかかっているウサギを助けてあげました。そして、食べるものが何もないので、お腹を空かしたまま、うんざりして家に戻りました。

しかし、あなたは どう 思いますか。その冷たい水のお風呂で、**Ableegumooch** は改心した と思いますか？ と一んでもない。もう、次の日、彼は、森のなかを目的もなく駆け回っているのです。そして、あるメスのキツツキの小屋に来ました。彼は、**Antawaas** たちが彼を夕食に招待したので、とても喜んだのでした。

彼は、彼らが どう やって食物を集めているのか必死に見ていました。

一匹のキツツキが皿を取り出し、そして、旧いブナの木のところに行き、素早く沢山の食料を掘り出してきました。そして、それを直ぐに料理して、ウサギの前に差し出したのです。

“なんと、なんと、これは素晴らしい”と、**Ableegumooch** は思いました。“なんと簡単に、みんなは食料を手に入れていることだろう。私も同じようにして自分のものを取り出して来ようと思うが、それを邪魔するものがあるだろうか？”そう思うと、彼は、**Antawaas** に、彼の家に、是非、食事をしに来るように言いました。

次の日、みんながウサギの小屋に集まると、**Ableegumooch** は、彼のお婆さんにもったいぶって言いました。

“**Noogumee**、食事の用意をなさい”

“お前、馬鹿なウサギだよ”と彼女はいい、“何にも、料理するものなんかありあしないじゃないか”

“火を起こしなさい。”とウサギは、偉そうに言いました。“後は、私に分かるから”

彼は、うなぎのヤスから石の鑊を取り、それをキツツキのくちばしをまねて自分の頭に結び付けました。そして、木に登っていき、自分の頭をこつんこつ

んと木にぶつけはじめました。暫くしすると、彼の頭は、あざだらけになり、そして血が出てきたのです。そして、彼は、自分を支えきれなくなり、いやというほど強く体を打って地面に落ちてしまいました。Antawaas たちは、これを見て、笑わずにはいられませんでした。

“彼は一体、あそこで何をしようとしたのかしら?”

“私が思うには、彼は、誰かのやることをまねしたんだ”と Noogumee が彼女の頭を振りながら言いました。“そして、彼は、それができているんだよ”そして、彼女はみんなに家に帰るように促しました。その日は、みんなに振る舞う食べ物が何もなかったからです。

さあ、彼はあれだけひどい目に合いましたが、皆さん、ウサギはしっかりと学習したとお思いでしょうか。いやいや、それから、1日か、2日もしないうちに、彼は、また、いつものように森をぶらついていました。そして、今度は、熊の Mooin のところにやってきたのです。そして、熊が彼を夕食に招待しました。彼は、普段、熊がどうやって肉を集めてくるのか非常に興味をもっていたのです。Mooin は殆ど切れるナイフを使わずに、自分の足で肉の固まりを小さな断片に切っていました。そして、それらを火にかけた鍋の中に入れるのです。こうして、暫くすると彼らは、おいしい肉を存分に味わうことができたのでした。

“これは、夕食をするにはこれまでのなかで一番簡単なやり方に違いない”と Ableegumooch は、びっくりして、そして、また、Mooin を次の日にかれと一緒に夕食をするように招待しました。でも、ウサギが知らなかったのは、熊が、彼らの足のところに食料を保存しているということでした。彼らは、自分の足で、熟したブルーベリーの実を押しつぶし、そして、その上で固まったお菓子ができると、それを切って食べていました。おろかなウサギは、Mooin が実際にそれを自分の足を切り取ってきたものと思いました。

約束した時間が来て、Ableegumooch は、彼のお婆さんに食事の用意をするように言いました。そして、彼女が料理するものは何もないというと、彼は、お婆さんに鍋を火にかけるように言うと、残りの仕事に掛かりました。彼は、石のナイフを持ってきて、そして、Mooin がやるのを見ていて、その通りに自分の足を切り出したのです。なんとまあ、どうしましょう。その痛いこと、痛いこと。あまりの痛さに涙が彼の頬をつたって流れています。それでも、彼はまだ切り刻んでいます。最初は彼の片方の足を、そして、その次にはもう一方の足

をどんどん切っていきました。熊の **Mooin** は、これを見てとてもびっくりしました。

“こいつは、一体、何をしようというのだろう”と彼は、尋ねました。

Noogumee は弱々しく首を横に振りました。

“同じようなことが前にあったんだよ。彼は、誰かがそうやるのを見たのさ。”

“そうなのか”と **Mooin** が近づいて言いました。“夕飯に招待されて、何も食べるものがないなんて、これほど侮辱的なことはないよ。あいつにとって問題なのは・・・あいつが怠け者だということさ!”と彼は腹を立てて家に帰ってしまいました。

こうして、とうとう、**Ableegumooch** は、自分の腫れあがった足を介抱しながら、**Glooscap** が言ったことを思い出していました。自分がどれほどおろかだったのか、このとき気がついたのです。

“ああ、!”と彼はいいました。“食べ物を集める自分のやり方は厳しいものだ、しかし、他の人たちのやり方はもっときびしいようだ。私は、これからは、自分のやり方でやることにしよう”といい、そのようにしました。

それからは、**Ableegumooch** と彼のお婆さんの食料の倉庫は、冬も、そして、夏も、いつも沢山の食べ物が一杯入っていました。こうして、かれはやっぱり歌を歌うのですが、今度は歌の文句が変わっていました。

いつも、いつも

せっせと、忙しくしていることのほうが、

よっぽど賢いよ。

Blomidon, Glooscap は、ずっと離れたところから、あのばかなウサギが彼のやり方をとうとう変えたのを見て、パイプに火をつけ、そして、満足そうにタバコを吸っていました。

24. バッファローとイーグルが飛びます

アメリカインディアンの Lore

ずっと、ずっと、そして、もっとずっと昔のことです。それは、まだこの地球に石のなかった頃の話です。山も、丘も、そして、谷もごつごつしていませんでした。だから辺りを歩きまわるのはとても楽だったのです。また、その頃には、小さな木も生えていませんでした。そんなわけで、森の木は背が高く、まっすぐに、そして、同じような間隔で生えていました。だから、だれもが、森のなかを決まった道がなくても歩いて旅をすることができたのです。

その頃、一匹のとても大きなバッファローが平原を自由に歩きまわっていました。彼は、水から霊の力を得ていました。その力は、どんなものでも別の形にしてしまうとてもすごい力でした。彼は、その力を、ある泉から水を飲んでいる限り、持ち続けることができたのです。

そのバッファローは、時々、高い山を乗り越えて旅をすることがありました。かれは、この山がとても気に入っていましたので、ある日、その山に尋ねたのです。“どうかね、君。一度別のものに姿を変えてみては？”と。

“ああ、いいよ”と山は返事をしました。“私は、誰ものぼりたがらないような、そんな山になって見たいなあー。”

“よし。わかった。”とバッファローは言いました。“私が、君を、私が‘石’と呼ぶようなとても硬いものにしてあげよう。”“君は、それはすごい硬いものになるので、誰も君を砕いたりしようと思わないだろうし、その表面はすべてしているから、誰も上ろうとはしないよ。”

こうして、バッファローはその山を大きな石にしてあげました。“それから、もし君がそこで壊れるようなことがないなら、君がほかのどんなものにもでも変身できる魔法の力をあげよう”といいました。

その場所には、ただバッファローたちだけが住んでいました。ほかには誰も住んでいなかったのです。一方、山の向こう側には、残酷で平気で動物たちを殺してしまう人間達が住んでいました。バッファローたちは、彼らのことをよく知っていて、できるだけ彼らには近づかないように生活をしていました。ところが、ある日、バッファローは、その人間たちを見てみたいという気持ちになりました。かれは、人間達と友達になり、何とか、バッファローを殺させないようにしようと思ったのです。

そこで、かれは山を越えて、川の流に沿い、人間達が住んでいる小屋のところまで来ました。そこには、年老いた女と、彼女の孫が住んでいました。その小さな子供はすぐにバッファローが好きになり、また、バッファローもその少年とお婆さんが好きになったのです。そして、彼らに言いました。“私は、あなた方がこうなりたいと思うものなら、何にでも変身させてあげる魔法の力を持っているんだ。あなたたちは、一体何に一番なりたいと思っているのかね？”

“私はね、いつまでもこうして孫と一緒にいたいさ。だから、彼が行きたいと思うところに彼と一緒にいてゆけるならどんなものでもいいから、そういうものになりたいね。”

“分かった。なら、あなた方をバッファローの家に連れて行ってあげよう。”と彼らの客は言いました。“そして、彼らに、どうしたら、この子供がとてもすばやく走ることができるようになるのか教えてくれるように頼むことにしよう。そして、水の精には、お婆さんが子供と一緒にいつもついてゆけるようななにかに変身してくれるよう御願いしよう”

こうして、バッファローとお婆さん、そして、その孫の子供は山を越えてバッファローの住んでいる国に行きました。

“よーし、わかった。私達がどうすれば早く走れるか教えてあげよう。”彼ら、子供にそう話してくれました。“もし、お前が、自分たちの仲間がバッファローの狩をしたり、殺したりしないようにしてくれると約束するならだ。”

“わかった。約束するよ。”と少年は応えました。

そして、バッファローは子供に、その約束のことを考えながら、彼らの誰一人として追いつくことができないほど早く走る方法を彼に教えたのです。こうして、かれは、自分たちの仲間の仲でも、誰にも負けないような走りのできる男になりましたので、やがて彼は狩の指導者になりました。そして、かれは **Eagle Wing** (ワシの羽根) と呼ばれるようになったのです。

ある日、酋長がイーグル・ウィンググを呼んで、かれに言いました。“わが息子よ、私はお前をバッファローたちのいる国に狩につれて行ってあげたいのだ。われわれは、これまで、バッファローがあまりにも早く駆け回るので、彼らをしとめることができなかったのだ。しかし、お前は違う。とても早く走ることができるのだ。もし、お前がバッファローを仕留めて、その肉と毛皮を持ち帰って来たなら、私は、お前を私の息子として受け入れるだろう。そして、私が死んだら、お前は、われわれの部族の酋長になるのだ。”

イーグル・ウィングでも酋長になりたかったので、バッファローとして約束を自分の心から押しやってしまいました。かれは狩人たちと一緒に狩に出かけたのです。しかし、彼が山をととても早く登って行きましたので、みんなはすぐにずっと後ろのほうにおいていかれてしまったのでした。山の反対側に来た時に、かれは、バッファローの群れがいるのを見つけました。かれらは驚いて、必死に逃げ回りましたが、イーグル・ウィングはすぐに彼らに追いつき、そして、群れのほとんどを殺してしまいました。

あの、水の精から強力なパワーを授かっていた偉大な一匹のバッファローは、その狩のときには、そこからずっと離れたところに居ました。かれが戻る道すがら、とても喉が渴いたので、かれの特別の泉からそう離れてはいない山の反対側の川で喉を潤しました。そして、かれが家に戻り、狩人たちがなしたことを見て、非常に怒りました。かれは人間たちのところに引き返そうと草原のほうに行こうとしましたが、彼はそれができませんでした。なぜなら、かれはいつもと違う水を飲んだために、自分が動いて何処にでも行くという力がなくなっていたのです。

そこで、バッファローは、あのもと山だった大きな石のところに行き、こう相談しました。

“狩をした連中になにか仕返しができないだろうか？”

“私が、森の木たちに、枝を絡ませてくれるように頼んでみよう。そうすれば、彼らは、簡単に森を通り抜けることができなくなるだろうから。”と石が応えました。“そして、私も、粉々に砕けて、そのあたりの大地一杯に散らばることにしよう。石があれば、あのすばしこい男も、また、かれの仲間達も自分たちの足に傷がつくので、私の上を走りまわることができなくなるだろう。”

“確かに。それは、彼らの懲らしめになるな。”とバッファローは賛成をしました。

こうして、石は、たくさんの小さなかけらになって、あたり一面に散らばったのです。あのすばやい男のイーグル・ウィングが、そして、かれの仲間が、山を乗り越えて走りまわろうとするといつも、その石ころが彼らの足に傷をつけたのでした。森の木を彼らに引っかかり、体中に傷をつけたのでした。

これが、イーグル・ウィングがバッファローとの約束を破ったためにどんな仕打ちを受けたかという話です。

とさ。

25. コヨーテとマルトノーマの滝

アメリカインディアンの Lore

アメリカの北西部に住んでいるインディアンたちの伝説のなかに出てくる、大きな川、とか、あるいは、偉大なる川というのは、コロンビア川を指しているのです。そして、大きく輝ける山々とはロッキーの山々のことを指しています。

“昔、昔、そのまた、昔、この世界は、まだ若く、そこには人間はまだ生まれていませんでした。”と、一人の年老いたインディアンが数年前に話していました。“そして、動物達も、また、小鳥達も、この国に住む生き物だったと言うわけです。彼らは、そう、今私達がしているように、お互いに話しかけ、一緒に生活していたのです。そして、彼ら同士が結婚することもありました。”

コヨーテ(ki-o-ki という名前でした)は、聖霊の酋長から特別の力を授かっていたので、そうした動物達のなかで、最も力の強い生き物でした。たとえばこんな具合です。かれは、Dry Falls(水のなくなった滝)をそのままにして、偉大な川の流れを変えることもできたのです。たくさんある伝説の中では、かれは、動物でしたが、そのほかに、かれは人間だったという話もあります。また、時によっては、ハンサムな青年でもありました。

もう、ずっと昔のことになりますが、すべての人と、そして、すべての動物達が同じ言葉を喋っているころ、コヨーテは、よく旅をしていたのですが、あるとき偉大なる川のほとりを歩いていました。そしてかれは、大きな橋の下の流れのところまで来ると、そこで立ち止まりました。その橋は、こちら側にある高い山々と、そして、橋の向こう側の高い山々をつなげるような格好でかかっていた。そこで、かれは、ハンサムな青年の狩人の姿に変身したのです。

かれは、この前に旅をしたときに、その橋からあまり離れていない部落で、綺麗な少女にあったのです。彼は、彼女のお父さんに彼女を自分の妻にもらうことができるかどうか、聞こうと決心をしていたのです。彼女のお父さんというのは、その酋長でした。そのハンサムな青年は酋長の家に来たときに、娘さんが自分のお嫁さんになるお礼にとお父さんのために選んだみやげ物を持ってきました。

そのみやげ物は、いろいろな動物達の皮や毛皮で、コヨーテが持つことができる精一杯のものでした。かれは、少女の夫となる男は、やがて、その部族の酋長になるということを教わっていたので、プレゼントはたくさんの、そして、見栄えのするものにしました。

酋長は、彼が立派な狩人らしいと言うこと以外には何も知りませんでした。そのプレゼントはお父さんの目を大変楽しませてくれました、が、彼が望んだのは、少女の喜ぶ顔でした。

“彼女は私の一人娘だ”と酋長は若い男に言いました。“彼女は、私の最も大切なものだ。わたしは、ほかの父親と違い、彼女の変りに毛皮の束をもらうようなことはしないのだ。私は、彼女に幸せになってもらいたいので、お前は、彼女の気持ちを射止めなければならないのだ。”

そこで、コヨーテは、今度は、彼女がよろこぶものと思われるような小さなプレゼントを持って、毎日、酋長に家にやってきたのです。しかし、かれは、決して、これだという確かなものをもってきたようには思われませんでした。彼女は、かれのプレゼントを恥ずかしそうに受け取り、そして、女達が鹿の毛皮を作ろう陽のあたる場所とか、子供たちがゲームをして遊ぶ場所に隠れてしまいました。

こうして、コヨーテは毎日、綺麗な彼女を何とかしようとやってくるのでした。彼は、どんな贈り物が彼女の気持ちをひきつけるのか、あれこれ考えに考えていました。“ヒットしたら、森の中で一番かわいらしい花かもしれない。”とある日、かれは独り言をいいました。“その花こそ、彼女に私と結婚する気にさせてくれるだろう。”

彼は、偉大なる川のほとりにある森のなかをその花を求めて一日中探しまわりました。こうして、かれは、自分が見つけた最も綺麗な花を持って酋長に家までやって来ました。そして、彼に会ってくれるように御願いをしました。

“私は、あなたの娘さんのために、一日中この花を探して歩きまわりました。”とコヨーテは酋長に言いました。

“もし、これでも彼女の気持ちがつかめないのなら、どうすればいいのでしょうか？、彼女の気持ちを捉えるのにどんな贈り物を持ってくればよいのでしょうか？”

その酋長は、偉大なる部族のなかのどんな酋長よりも賢い人でした。その彼の答えは、“なぜ、お前さんは、それを彼女に直接たずねないのかね？ 今日、彼女に聞きなさい。どんな贈り物が彼女の気持ちを一番喜ばしてくれるのか。”

二人は、会話が終わったそのとき、森から彼女が出て来るのを見ました。コヨーテは、改めて彼女の美貌と若さに感激し、気持ちが高ぶりました。彼は、彼女の方に近づいて行き、そして、尋ねました。“おお、なんと美しい娘さんよ、あなたが、いま一番欲しいものはなんですか？ あなたが言うものなら、私は何でも持ってきます。この花も、私が森の木陰の隠れたところに咲いているのを見つけてきたものですが、これは私の愛の証です。”

それを聞いてびっくりしたのか、驚いたような振りをしたのか、その少女は、若い狩人を見、彼女に差し出された、滅多に見ることのできない白い花に気づきました。

“私は、プールが欲しいの、”と、彼女は恥ずかしそうに言いました。“誰からも見られずに隠れて、毎日楽しむことのできるプールがほしいのよ。”

こうして、コヨーテが何時間もかけて彼女のために探し回った花を受け取らずに、彼女は走って逃げてしまいました。そして、以前と同じように彼女は、彼女と同じ年頃の友達と遊ぶのに夢中になってしまいました。

コヨーテは彼女の父親のところにとって返し、“よく、わかりました。7度太陽があがるまでに、私はまたあなたの、そして、娘さんのところに戻ってきます。そのときには、彼女が頼んだプールのところにあなたを連れて行く積りです。そのプールは彼女のためだけのものなのです。”

コヨーテは、七日間の間、自分が結婚したいと思っている彼女の気持ちを掴むために一生懸命プールを作りました。まず、偉大なる川の南がわの川岸の丘に深い割れ目をつけました。その割れ目のところに木と灌木を一行に植え、川の方に面して、非常に高いところまで塀を作りました。

それから、彼は、岩でできた壁の底のところまで行き、広いプールを作るに十分な巾で、ずっと長い距離をななめに掘って行きました。その岩の壁をもう一度登ってきて、今度は丘の上に方に戻って行きました。そして、そこで大地から湧き出してくる泉をつくり、その水を彼の作ったとても大きな割れ目に、斜めに掘った溝が一杯になるほど流しこみました。その岩の壁の淵からは水が滴と霧になって落ちてゆきました。こうして、その底のところでは、そのプールが誰からも見えないような巨大な水滴の幕をつくったのです。

こうして、たくさんの仕事が終わると、コヨーテは、彼が作ったものを見せるために、酋長と彼の娘さんと呼びに村に行きました。そして、その新しい滝を

見た彼らが褒め称えと、彼は、その滝としぶきの後ろにあるプールを見せました。彼は、彼女の目をじっと見つめていました。

彼女が、自分の目の前に広がっているプールと滝を見て、それから、彼女のためのそれを作った若い狩人をうれしそうな目をして見つめました。彼は、彼女が喜んでいるのを確かに見ることができました。彼は、とうとう、彼女の気持ちを射止めたと確信することができたのです。彼女は、自分の父親にその若い狩人のお嫁さんになってもいいと言いました。

このことがおこるずっと前のころに、二人のお婆さんが一日中高い山の天辺に座っていました。一人は、偉大なる川の北に位置した一番高い山の上に座っていたのです。そして、もう一人のお婆さんは、その川の南側の一番高い山の天辺に座っていました。北の山に一人が話しをすると、彼女の声は、東のほうには、巨大な光輝く峰々のずっと向こうでも聞くことができました。西のほうには、毎日、太陽が沈んでいく大きな海のずっと向こうでも聞くことができ、そして、北のほうには、その世界の天辺でもその声が届いたのです。

一方、川の南がわの山の上のお婆さんの声も、大きな海のずっとずっと西の方でも、そして、南には、人が住んでいる何処までも遠くまでその声が聞こえました。二人のお婆さんたちは、世の中の出来事をすべて見ていて、それを、毎日、その川の両側にすんでいるすべての人々に話しをしていたのです。

そして、やっぱり、この二人のお婆さんたちは、酋長の娘さんが、毎朝、プールに浴びに行き、その間、滝としぶきの幕の外側でコヨーテが彼女の出てくるのを待っているのを見ていました。そのお婆さんたちは、二人が歌をお互いに歌い合い、そして、楽しそうに笑い合っているのを聞いていました。その二人を見て、お婆さんたちはおかしくなり、声を大きくして、自分たちが見たこと、そして、聞いたことを、人々に聞かせてしまいました。

まもなく、酋長の娘は誰もが彼女のことを嘲り笑っているのを知りました。——偉大なる川から、大きな光り輝く山々のほうまで、そこに住んでいるみんなが、そして、自分たちの部落の者から、ずっと南のほうの人が住んでいるところまで、すべての人たちが笑っていたのです。

彼女は、もはや、幸せどころではありませんでした。そして、彼女は、楽しく歌を歌うこともできなくなりました。そして、ある日、彼女はコヨーテに、自分を一人でプールに行かせて欲しいと頼みました。そのお婆さんたちは、彼女

が滝の裏側に消えていくのを見ていました。そして、彼女がプールから出てきて、その偉大なる川の中に入って行くのを見ていました。彼女の部族の人たちは、それ以後、彼女の姿を見ることはありませんでした。

急流を下ることのできるカヌーに乗って、コヨーテは彼女を探すために偉大なる川を下って行きました。そして、彼女が自分の前を流されながら、泳いでいるのを見つけました。彼は、できる限りの力を振り絞り、櫓を漕ぎました。こうして、夜になるとあの太陽が隠れる巨大な海に押し流される寸前に彼女に追いつくことができました。

そこには、彼ら二人が、そう、コヨーテとその少女が、小さなカモになっていました。水面に揺られながら泳いでいるかわいい夏カモでした。

これは、ずっとずっと昔にあった話です。しかし、今でも、太陽が偉大なる川の南の高い崖を最後に照らしているときには、二羽の夏カモが高い山から落ちてくるあの一続きの滝を眺めるために泳いでいるのです。かれらは、彼らの後で、木で飾られたプールを隠してくれる水しぶきの幕のできる、滝の一番したのところで、一番長く眺めているのです。

もし、本当に知りたいと思って、静かに耳を済ませて聴くなら、酋長の娘さんとコヨーテが、彼女がプールで水を浴びた後に、毎朝、お互いによく歌い合っていたそのかすかな歌声を聞くことができるでしょう。その歌は、はじめのうちは、とてもやわらかく、そして、低い音なのですが、やがて、それは、急に高い音程になり、そして、緩やかに、薄れて消えて行くのです。

この話は、少し悲しい物語のような気がします。でも、カモになっていつまでも仲むつまじく過ごしているのは、ある意味では、うらやましいような感じもしました。さて、あなたのところには、どんな風な思いが残りましたでしょうか。

26. お腹を空かした狐と自慢屋の若者の話

アメリカインディアンの Lore

ある日、狐が辺りを歩きまわるために出かけてゆきました。彼は、ずっと狩を続けていたのですが、なかなか幸運にありつけませんでした。そんなわけで、かれは随分とながいあいだ何も食べてはいなかったのです。そんなわけで彼の胃袋がしょっちゅうごろごろ言うものですから、彼はほかのことがほとんど耳に入らなくなりました。と、突然、彼は誰かが歌を歌いながら、こちらにやってくるのを見つけました。ミソサザイの尻尾を持った狐は、ピシッと人うちするや否や、自分の居る道から飛びのいて、森影の中に、腹の方からうずくまりました。歌は段々、大きくなって着ました。そして、狐は、なにかが山の天辺辺りに現れてきたのを見ました。それは一匹のサギでした。狐は、その羽のある鳥に飛び掛り捕えようと前の道を卒と進んで行きました。しかし、その鳥がドンドン上に上ってくると彼は、それが只の鳥ではないと言うことがわかりました。それは、馬にまたがりやってきてわかったのは、ショートカットした顔の Iroquois の男の頭飾りをした *gustoweh* の頭をつけた若者だったのです。

もし、彼が私を見つけたら、とキツネは考えました。私は、お腹のすいているところではなかっただろう。キツネの皮が Iroquois の間では、とても高価なものであることがよく知られていました。だから、キツネは、彼に見つからないようにと、ねずみより小さくなるくらい一生懸命縮めました。

その男は、ますます近くまでやって来ました。みれば、彼はとても素敵な衣装をつけていました。そして、キツネは彼が歌う歌を今でははっきりと聞き取れるようになりました。それは、誇り高い歌でした。

“この世には、ウサギより勇気のあるものはいないんだ。”と若者は歌っていました。

“そして、私は、私が彼になったとしたら、誰も私より素敵な服を着ているものはいないだろう。誰も、私より上手な魚を取ることはできないだろう。もし、お疑いなら、来て、よく見るがいいよ。”

かれは、時々見つめている若いおんなの家に行く途中でした。それは、彼女と彼女のお母さんに良い印象を与えて、彼女が彼に自分と結婚するように頼むように思わせるためでした。彼の歌は、そして、彼の素晴らしい衣装は、そのためのものだったのでした。

しかし、キツネは、もう、このサギの羽飾りをつけた若者の歌を聞くどころではありませんでした。キツネは、彼のほうから漂う匂い、そのことばかりを考えていました。魚だ。その若者の背中に担がれている荷物袋の中は、魚で一杯でした。キツネの口にはよだれが溢れ、したはだらりし口から垂れ差がっていました。彼が魚は食べてからどれほど月日がたっていたのでしょうか。かれの恐怖が彼を留めました。その若い男が馬に乗り彼のそばを通り過ぎました、しかし、キツネの思いはもっとずっと先の方にいていたのでした。

そうなんだ。狐は、一人ごとを言いました。いい方法がある。彼はできるだけ早く、自分の姿が道の方からは見えないように森影に隠れながら走って行きました。まもなく彼は、Iroquios の男の前にほうにきました。ちょうど曲がり角に来たときに、狐は、その道の端のところに横になりました。彼は、目を閉じ、そして口をあけ、彼のしたがにごれてままだらりと下がるようにしました。体をピクリとも動かさず、じっとしていました。すると、彼は、サギの羽飾りの若者の誇らしげな歌を段々近くに聞超えてくるようになりました。

サギの羽飾りをつけた若者は、今まさに、その狐のそばを通り過ぎんばかりの彼の身に着けている新しい白い毛皮の腰布をみにつけた自分がどれだけ素敵か、言い表すもっと適当な言葉を見つけようとしながら、歌を続けようとししました。彼は、目の片隅で狐を見たときに、立ち止まり、そして、“エッ、ナンだこれは？”とつぶやきました。そして、馬から下りたのです。

“ケーッ。死んだ狐か？”彼は、注意深く、長い棒をとりあけて、そして、その動物の横を突き刺しました。でも、それは何も動きませんでした。“何っ。”と彼は、いいました。“間違いなく、死んでいるな。”彼は、腰を曲げ、そし

て、もっと近くでじっくりと見ました。それは、やせこけてはいましたが、生皮はなかなかいい感じでした。彼は尻尾をつかみ、それを取り上げて見ました。

“フーム。これはまだ死んでからそう経ってはいないな。只ほんのちょっとばかりいやな匂いがするだけだ。” そう、彼が言ったときに、狐の口が少しばかり開き、そして、その唇がまくれあがり、歯がむき出しになりました。しかし、そのサギの羽飾り若者は、そのことには気がつきませんでした。

“うーん。” その若者はいいました。“これは、今、毛皮をはいだほうがいいかもしれないな。” 彼がそういったときに、狐の片方の目が少しだけピクピクと動いたのですが、彼は気がつきませんでした。“いやいや。” と彼は続けていいました。“私は、いま、毛皮を剥ぐときではないかもしれないな。もし、そんなことをしたら私の素敵な服を汚してしまうかも知れない。ここは、ただ、持っていくだけにしよう。” こう言って、彼は馬のところに戻り、袋の紐を解き始めました。“イエー、イエーツ” 彼は、うれしくなりました。“Swqying Reedのお母さんがこの狐を見れば、私はたいした狩人だと思わせられる。そうすれば、彼女は、彼女の娘さんが、私を結婚するのを許してくれるだろう。” 彼は、その狐を魚の入った袋の中に押し込み、紐を締めて馬にまたがりました。そして、また歌を歌いだしました。今度の歌は、サギの羽飾りをした若者はとてもすばらしい獵人だというものでした。

袋に閉じ込められた狐は、しばらくの間じっとおとなしくしていました。が、やがて、その袋のはじをかじりだしました。彼は、そこそこの穴を開けると、今度は、そこから魚を一匹ずつ落とし始めたのです。そして、とうとう、全部の魚を落してしまうと、今度は、もう少し大きな穴をあけて、その穴から自分も抜け出してしまいました。こうして、狐はそれから長いことおいしい大好きな料理を食べることができたのです。

ところで、若者のほうはというと、彼は、自分の歌のことばかりに夢中になっていたので、こんなことになっているとは少しも気づかなかったのです。彼は、Swaying Reedの住んで居る村まで馬に乗ってやって来ました。そして、彼女のお母さんの家の前まで来ると、そこで止まり、馬にまたがったまま、たくさんの人々がまわりに集まって来るまで得意になって歌を歌っていました。自分の衣装の自慢と、かれが捕まえたたくさんの魚(実は、これらの魚は、かれが、お母さんのビーズの飾りのついたモカシンと交換したものだのですが)、そして、かれが、射止めて、捕まえたいろいろな獣のことなどの歌を歌っていたのです。Swaying Reedと彼女のお母さんが小屋から出てきて、彼が袋

に手を伸ばすのを見ていました。そうです。彼は、自分がどんなに素敵なものを彼女のために持ってきたか示そうとしたのです。

かれがその袋を取り上げてみると、なんと、そこに穴の開いた袋は空っぽになっているのに気づき、彼は、あわてて歌を歌うのをやめました。そして、くると向きを変え、馬にまたがって静かにその場から逃げ出しました。彼がこの日学んだのは、自慢ばなしは決してほかのひとを喜ばすことはないということでした。これは、狐やほかの動物のけがわを剥いだりしようとしてわかったひとつの戒めの話でした。

さて、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

ある日、一緒に歩いて、フォックスは出ていました。狩りをしていましたが、彼は運勢にあやかりませんでした。彼が食べた時から長い時間でした。彼の胃は彼がほとんど他のものを聞くことができないほどうるさくうなっていました。突然彼は誰かが歌を歌って来たことに気付きました。フォックスが道から離れての跳び越えて、低木の彼の腹でうずくまったミソサザイの尾のワンタッチより速く、ますます大声で歌を育てました。そしてフォックスは何か丘の頂上の上で現われ始めるのを見ました。単一のサギ羽毛でした。彼が羽毛が付けられたと思った鳥で目に留まる準備ができて、フォックスは彼の前部足を動かしました。しかし羽毛がますます高く上がったように、彼はそれが全部の鳥のわけでないことには気付きました。gustoweh のトップに付けられた羽毛だっ

た イロコイ族の髪飾り 彼が馬に乗って丘を通過した時その顔が今眺めの中に激しく揺れた人。

もし、フォックスが思うには、彼が私に会えば、私は永遠に飢えを忘れることができます！ キツネ皮革〔皮〕がイロコイ族によって高く評価されていたことがよく知られていました。彼が見られないだろうことを望んで、フォックスは自分をマウスより小さくしようとしました。

ますます接近していて男性が来ました。彼は細かい衣服を着ていて、フォックスは今非常にはっきりと人の歌の言葉を聞くことができました。自慢している歌でした。

「誰もサギ羽毛より勇敢ではありません」と青年は歌いました。

「そして彼であるので私はそれを知るべきです。誰もより素晴らしい衣類を身に付けていません。誰もより良い漁師ではありません。もし、あなたがこれを疑って、見て、見れ」ば、.

彼は、いくらかの時間彼が見ていた若い女性のロッジへの道にいました。彼は、少女が彼に彼女と結婚するように頼むように彼女と彼女の母を印象づけようとするところでした。彼の歌と彼の素晴らしい衣類は計画の一部でした。

しかしフォックスはもはやサギ羽毛の歌を聞いていませんでした。彼はそれらの細かい衣服を見ていませんでした。フォックスの注意の全てが、彼がにおいをかいでいたものにありました。釣りをしてください。青年の **blanketroll** からのその大きなバッグ絞首刑は魚でいっぱいでした！ フォックスのよだれは出て、彼の舌〔ことば〕は住みました。彼が魚を食べた時からそのような長い時間でした。彼の恐れは彼を残しました。馬の上の青年は彼を無視しました、しかし、フォックスの考えは前へ遠かったです。

「はい」とフォックスは自分に言いました。私は、方法〔道〕があると思います。彼がそうすることができたのと同じほど速やかに、道の眺めに入らないでいて彼が林を通過して出て行きました。すぐにいやはや彼はイロコイ族の前にいました。ちょうど屈曲の周りで、フォックスは自分を道の端〔刃〕のそばに寝かせました。彼が目を閉じて、口を開けたので舌〔ことば〕が土ぼこりで住みました。筋肉を動かさないで、彼は待ちました。すぐに彼はサギ羽毛の自慢している歌に近づき始めました。

サギ羽毛が歌うことにとっても没頭していた。彼がただどの位細かくほとんどすぐフォックスを通り過ぎて乗馬をしたことの新しい白いバックスキン腰布を見たかを描写するためによりもっと少数を見つけようとするのが表わす。目の角からのフォックスを見た時、彼は止まりました。「Enh」と彼が言って、「これは何ですか」？ 彼は馬から誤りを認めました。

「Kweh、死んだキツネ」 長い棒を受け取って、彼は慎重に動物の側面を突きました。それは動きませんでした。「Nyoh」と彼が言って、「間違いなく死んでいます」。彼はかがんで、きっちりとそれを見ました。骨と皮ばかりでした、しかし、毛皮〔皮膚〕は結局状態でした。彼は尾でそれを受け取りました。「うーん長い間にとって死んでいません。それはただ少し不快です」。彼がそれを言った時、フォックスの口は幾分か開けて、ゆがめられた口は彼の歯から後退する、しかし、サギ羽毛は気付きませんでした。

うーんとサギ羽毛が言って、「多分、私は今外でその皮を剥ぐべきです」。彼がフォックスの目の1つが幾分かぐいと引いたと言ったが、サギ羽毛が気付かなかった時、彼が続けた「Neh」、「私は今外で彼の皮を剥ぐべきではありません。もしすれば、私は細かい新しい衣服を汚すかもしれません。私は単に私と彼を連れて行きます」。彼は馬歩いて、バッグのひもを解き始めました。

「Weh-yoh」彼がほほえんで、「リードの母を揺ることが私が捕らえたこのキツネを見る時彼女は私が素晴らしいハンターであることを知ります。そして、彼女は間違いなく娘が私に結婚パンを持って来ることを許します」。彼は、馬登りました。中に魚とキツネを落として、閉まったバッグをひもで締めて、すぐに彼は再び歌っていました。今回ハンターのサギ Feather がどの位素晴らしいかったかについての歌でした。

猟犬訓練用キツネがまだ数分の間置く内部。そして彼は側をかじり始めました。穴〔ホール〕を十分に大きくしていた時、彼は順次魚を外に落とし始めました。最後に全ての魚がいなくなっていた時、彼は穴〔ホール〕をより大きくして、多くの日に外で自由と最も良い食事に飛びました。

サギ羽毛は歌うことで忙しすぎて予告〔通知〕さえしました。彼は、ずっと揺れることリードが住んでいた村に乗って行きました。彼は、彼女の母のロッジの前で止まって、そこで馬(多くの人々が辺りに集めていた鳴いている til)の上に座りました。彼は、彼が彼が狩りをして、わなに掛けた全ての動物で捕らえた(実際に母の玉で飾られたモカシン〔ヌママムシ〕をそれらと交換していた)多くの魚の美しい衣服の詩を詠みました。揺れることリードと彼女の母がロッ

ジから出て、彼がバッグのための後ろに達した時見ました。今彼はそれらに何という良いプロバイダだったのか教えます！

彼はいつバッグ及びのこぎりの上へそれが彼が歌っているのをやめさせた底〔一番下〕の穴〔ホール〕で空っぽであると思ったか。振り向いて、彼は静かに離れて乗って行きました。彼は、その日に自慢している歌が人を素晴らしくしないことを学びました。キツネともう1つがその皮を剥ぐと分かるために1つの事〔物〕です。

27. ワタリガラスと彼のお婆さんの話

アメリカインディアンの Lore

大きな村のはずれにある彼女の昔からのふるさとの家(バーラバラ)に一人のお婆あさんが孫息子の渡りカラスと一緒に住んでいました。その二人は村人から嫌われていましたので、すこし離れて暮らしていたのでした。その村人の男達がタラ漁から戻ってくると、渡りカラスはそこにやってきて、食べ物を恵んでくれるように頼みましたが、彼らは絶対に自分たちのとった魚をあげるようなことはしませんでした。しかし、その浜からみんなの姿が見えなくなると、渡りカラスがやってきて、そこに残されたくずの魚や、病気で弱った魚までも拾っていくのでした。こうして、渡りカラスと彼のお婆さんは暮らしていました。

ある冬の事でした。その冬はとても寒かったのです。猟もほとんどできず、食料がなくなって村中がまるで飢饉のようになってしまいました。かれらの酋長でさえも、手元の残っているものはわずかのものしかありませんでした。そこで酋長は、村の人々を集め、なんとか、みんなが食っていけるだけの食料を手に入れるように頑張ろう、そうでないと、自分たちは飢え死にしまうと話し合いをしました。

そして、曾長は、自分の息子に花嫁を持たせようと考えていること、そのお嫁さんは村の娘の中から選ぶつもりだと知らせました。すると曾長の息子のお嫁さんになれるチャンスがあると思い、みんなが自分たちの持っている一番いい服を着て、そして、綺麗な飾りを身にとっても元気になりました。

こうして、少女たちがコンテストに参加し、そして、彼女たちは、自分の息子のために、誰よりもすぐれた一番綺麗な娘さんを選ぶという曾長の鑑識の目があるわずかの間、自分たちが御腹を空かしていることを忘れていたのです。そして、結婚の儀式に続いて、曾長は祝宴を催しました。しかし、その後すぐに、また、飢えが始まりました。

渡りカラスは、かれのバーラバラの家のそとに立っている柱の止まり木に止まって、ここで起こっていることを注意深く見、そして、耳を傾けていました。宴が終わったあと、かれは、家のほうに飛んでゆき、そしてお婆さんに言いました。“私も、お嫁さんがほしいな。” しかし、お婆さんはなんの返事もしませんでしたので、かれは、自分たち二人だけの分の食料を集める仕事に出かけて行きました。彼は、毎日、浜のほうに飛んで行き、死んでさかなや小鳥を見つけていました。そして、いつも二人が食べるには十分なほどの食料を手に入れていたのでした。彼が村に居た間、村の飢饉はますますひどくなっていることに気がつきました。そこで彼は、曾長にこう尋ねました。“もし、私が食べるものを持ってきたら、私に何をくれますか？”と。

曾長は、この言葉にびっくりして彼を見ました。そして、“わかった。それなら、私の一番上の娘をお前のお嫁さんにしてあげよう。” 渡りカラスをこれ以上喜ばす言葉はほかにありませんでした。慶び勇んで、彼は、飛んで家に帰り、お婆さんに言いました。“このバーラバラの家を綺麗にしようよ。私の結婚のために何でも綺麗にするんだ。あたしは、曾長に食べ物を持って行き、その代わり、曾長は、私の一番上の娘さんをお嫁さんにしてくれると約束したんだ。”

“エッ、ほんと！ あんたは、結婚するの？ それじゃ、私たちのバーラバラはせますぎやしないかね。それに、汚れすぎているよ。一体、お前さんは、自分の嫁さんを何処におくつもりかいね？”

“カー、カー、カー。気にしない気にしない。僕の言とおりにして”と、お婆さんに、催促するようにわめき泣くのでした。そして、そして、彼女をせかすようにくちばしでこつんこつんつつくのでした。

次の日の朝早く、渡りカラスは、どこかに飛んでゆきました。そして、その日の遅くなって、自分の鍵爪に、たくさんの yukelah(乾燥した鮭)の塊を持って帰って来ました。“お婆さん、僕と一緒に来て。曾長のところに行くんです。”と彼は、お婆さんと呼びました。こうして、魚を曾長の所に持って行き、彼は、曾長の一番年上の娘を嫁に迎えたのでした。

渡りカラスは、お婆さんに花嫁さんを自分の家に連れてくるように言って、自分は先に帰りました。そして、家につくと、バーラバラの中の古い藁の家具や、寝具をみんな放り出してしまいました。お婆さんと花嫁が帰ってくると、その小さな家は、すっからかんになっていました。驚いたお婆さんは、小言をいい、“なんてことをするんだかねえー？ どうして、お前さんは何でもかんでも放り出しちまったんだねえー”

“僕は、家を綺麗にするんだよ。わかんないの。” 渡りカラスが、そっけなく言いました。

夜が来て、渡りカラスは、自分の一方の羽を広げ、花嫁にその上に横になるように言いました。そして、もう一方の羽で彼女を包んでやりました。彼女は、渡りカラスが息も詰まるくらい魚のにおいをさせるものですから、彼女はとても惨めな夜を過ごしました。あまりにもひどかったので、彼女は朝になったら出てゆこうとここに決めたのでした。

しかし、朝までに、彼女は考え直し、もう少しここにいて、彼をもっと親しくなるように努力しようと考えました。そんなわけで、彼女は昼の間は、あまりうれしいような顔をせず、また、心配ばかりしていました。渡りカラスが彼女に食べ物を差し出しても、彼女はそれを食べようとしませんでした。二日目の晩になると、渡りカラスは彼女を自分の胸に引き寄せ、彼の腕のなかで憩いの時を持つようにやさしく招きました。何とかやつのことで説得すると、彼女はようやく彼の気持ちに従ったのでした。二日目の夜も彼女にとっては少しもいい日ではありませんでした。そんなわけで、彼女は、次の日の朝、彼のところから逃げたてしてしまいました。そして、彼女の父親の所に戻り、ことの一部始終を話しました。

目が覚めてみて彼女が居ないことに気がついた渡りカラスは、お婆さんに、彼女が何処に居そうなところを知っているか聞きただしました。お婆さんは何も知らないと言った。渡りカラスは、曾長のところに行き、彼女を私のところに連れ戻してよ。”と渡りカラスは叫び声を出しました。お婆さんは彼の

ことを心配して、彼の要望どおりにしました。彼女が曾長の家に来ると、彼女は、部屋にもいれてもらえませんでした。家に帰って、お婆さんは、このことを自分の孫にしっかりと伝えました。

夏は、暖かく、そして、楽しく終ったのですが、しかし、厳しい冬がまたやってきて、飢えが始まりました。前の冬と同じように、お婆さんと渡りカラスには、沢山の食べ物とたぎ木があったのですが、他のものたちは、とても食べるものに事欠いていたのでした。渡りカラスの考えは、もう一度結婚しようということでした。そして、今度の彼女は、村の別の端に住んでいる若くて、美しい娘さんでした。彼は、お婆さんに彼女の話を話し、自分が、彼女と結婚するつもりだと言いました。そして、“お婆さん、彼女のところに行って、彼女をここに連れてきておくれよ、そして、私は彼女と結婚するんだよ。”と頼みました。

“アーッ、アーッ、ハイヨ。あんたは彼女と結婚するのかね？ 最初のかみさんは、お前が臭くて一緒に住めなかったのではないかね。彼女達はお前とは結婚したがるんだよ。”

“カー！、カー！、カー！ 心配しないで！ 私の臭いのことは気にしないで！ 行って、僕が言うとおりにして。”

自分の言うことをしっかりとお婆さんにいい、彼女が言うとおりにするよう何度も教えて、お婆さんが喜んで行くように彼女をつつきはじめました。お婆さんが行っている間は、渡りカラスは落ち着いてはいられず、そわそわしていました。自分のこれからする結婚の情景を一生懸命頭のなかに浮かべながら、バーラバラの周りや、近くの小高い丘を飛んで回っていました。

急いで、彼は古い麦藁や、ベッド、かご、そして、そこにあるものは全部、外に放り出しバーラバラの綺麗にし始めました。戻ってきたお婆さんが叱りましたが、彼は、彼女の言うことには少しも気にかけませんでした。

若い花嫁は、彼女の前の花嫁と同じように、彼の羽にしっかりと抱かれ、そして、やはり、彼女も嫌な思いの眠れない夜をすごしました。しかし、彼女は、できるなら、彼の臭いを我慢するように言い含められていました。彼女は、少なくとも彼と一緒にいれば、沢山の食べ物を食べることができると思っていました。2日目の夜は、最初の晩と同じようにやっぱりよい夜ではありませんでした。

た。しかし、彼女は、そこに留まり、そして、密かに、決心したのです。春が来るまでここにいるように何とか頑張ろうと。

三日目の日に、渡りカラスは、まだ自分と一緒にいる彼女をみて、こう言いました。

“お婆さん。明日、僕は、大きくて、太った鯨を取ってくるよ。私が行っている間、私のお嫁さんのために、一本の帯と、一对のトルバルザール(原住民の靴)をつくってね。”

“アーッ、アーッ、ハイヨ。一体、お前さんはどのくらい大きくて、太った鯨を取ってくるというのかね？ 獵師は、一匹だって殺せやしないよ。一体、どうやるつもりかね？”

“カーッ、カーッ、カーッ。静かにして、そして、言うとおりにして。私が鯨をとりにいっている間に、帯とトルバルザールをしっかりと作って。” 彼は、彼女を黙らせる最も効果的なやり方を使って、おこりながら大声を上げました。

次の日の朝が明けるまえに、渡りカラスは海のほうに飛んで行きました。彼が居ないあいだ、年寄りの夫人は、忙しく、一生懸命、その若いお嫁さんのために言われたものを作ってやりました。そして、それをじっと見ていた彼女が話しかけました。昼ごろになり、彼らは、鯨を運んで、海岸のほうに飛んでゆく渡りカラスを見たのです。

お婆さんは、大きな火を起こし始めました。そして、若いお嫁さんは、彼女のバルカ(原住民の着ているドレス)の裾をまくりあげ、それを、彼女の新しい帯で結び、新しいトルバルザールをはき、石のナイフを磨ぎました。そして、彼女の夫に会うために浜の方に向かいました。彼は、近くに引っ張って着て、そして、叫びました。“お婆さん、村に行って、みんなに私が大きな太った鯨を家に運んできていると言って。” と。

彼女は、できるだけ一生懸命に走り、そして、この素晴らしいニュースを村の人たちに告げました。すると、半分死んだような状態だった村の人たちは、生き生きしてきました。ある人は、石のナイフを磨ぎ、他の人たちは、自分たちのもっている一番良い服を着ました。しかし、彼らの殆どの人たちは、彼らなりに走りだし、そして、ナイフを持って鯨を見ようと浜のほうへ走って行きました。

こうして、村人が争って鯨の飢えで、腹いっぱい食べている、まるで、修羅場のような情景を眺めながら、鯨の背中で飛んだり跳ねたりしている渡りカラスの突然の重要性が再認識されたのです。"

少しの間隔で、チョコチョコと渡りカラスは自分の袋から小石を取り出し、そして、暫く考えてから、また、それをもとに戻していました。酋長と彼の親戚の者が近くに来た時に、渡りカラスは、彼らを寄せ付けませんでした。彼らは、村人達が腹いっぱい食べて、余った肉を自分たちの家に持ち帰るのを眺めているしかありませんでした。村にかえった村人達は、あとで、それを酋長と一緒に食べたのです。

酋長の娘の、渡りカラスの最初のお嫁さんには、小さな渡りカラスの彼の息子がいました。彼女はその息子を腕に抱いて、浜にやってきて、彼が気がつくように渡りカラスの前に進み出てきたのです。"これは、あなたの息子ですよ。良く見てください。" 彼女は叫びました。しかし、彼は彼女を無視しました。そこで、彼女は彼を何度か呼び、そして、この赤ん坊を彼に見せました。ついに、彼が言ったのは、"もっとこっちに來なさい。" しかし、彼女が彼の臭いのためにこれ以上我慢できなくなると、彼女は、言葉もなくそこを去ってしまいました。

みんなが腹一杯食べた、その結末は、誰もが死んでしまいました。殆どの人が一度にあまりに沢山のものを食べたので、すぐ、その後死んでしまったのです。残った人々も、腹いっぱい食べ、自分達のバーラバラにいっぱい詰め込みましたので、夜の中に、彼らは窒息してしまっただけです。こうして、村人の中では、たったの三人しか生きて残ることができませんでした。——渡りカラスと、彼の新しい妻と、お婆さんです。そして、彼らは生き延びて、いま、その彼らの子孫が生きているのです。

とさ。

さて、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか？

28. 神聖な喜びが人に授けられた話し

アメリカインディアンの Lore

昔、むかし、まだ人々が喜びを知らなかった時がありました。彼らの生活は、仕事をして、沢山食べて、それを消化するために運動をして、そして、夜、睡眠をとること、これが全てでした。来る日も来る日も同じような日の繰り返しでした。彼らはせっせと働いて、眠って、目が覚めると、また、せっせと働くのでした。こんな単調な日の繰り返しでしたから、そのうち、彼らも精神的に段々疲れてきました。

こんな時代の時に、海からそう離れていないところで生活している男とその妻がいました。そして、彼らには三人の息子がおり、みんな、元気の良い若者で、自分達の父親と同じように立派な猟師になろうと頑張っていました。そして、彼らはまだ完全に大人になっていたわけではないのですが、自分達を鍛え、そして、我慢をして頑張る強い精神の持ち主に育っていました。彼らの父も、そして、母も、その少年達を自慢に思い、自分達が歳をとったときに面倒を見てくれ、そして、自分達では、どうにもならなくなった時には、食べ物を見つけてきてくれるものと信じていました。

しかし、大変なことが起きてしまいました。一番上の兄さんが、そして、しばらくすると、二番目の兄さんも、狩に出かけたまま帰って来なかったのです。二人が何処にいったか、なんの手がかりもありませんでした。みんなで、懸命に探したのですが、けっきょく、なにも見つけることはできませんでした。お父さんも、そして、お母さんも、自分たちの息子が二人もいなくなったのでとても嘆き悲しみました。そして、もはや今では、お父さんが狩に出かけるときに、そのお供ができるくらいに十分大きくなっていた、一番下の子供に大きな期待をよせるしかありませんでした。その子供の名前は、エルミン(Teriak)といい、お父さんが、海の魚を取っているときには、カリブーを追いかけて楽しんでいました。そして、狩をする人たちがなんでもかんでも心配をしてばかりいられなくなると、その息子は、お父さんがカヤックに乗り、海に漕ぎ出しているときには、自分の好きな島に行くことがゆるされるようになりました。

．ある日、いつものようなカリブーを追いかけていると、エルミンは、突然、巨大なワシに出会いました。その大きくて若いワシは彼の上を、輪を画いて飛ん

でいました。エルミンは持っていた弓に矢をつけ、思い切り張りました。が、彼が射ろうとしたときにそのワシが彼より少しはなれたところに舞い降りてきましたので、矢を放つのをやめました。頭にかぶっているフードをとると、ワシは若い男になり、こちらにやってきてその少年に言いました。

“お前の2人の兄を殺したのは、実は私だったのだ。もし、お前が家に帰ったときに歌の宴を持つと約束しなければ、私はお前も殺すだろう。さて、お前は、どうするかね？”

“喜んで。でも、私にはあなたの言っていることが理解できません。歌って何の歌ですか？ 宴というのは何ですか？”

“お前は、するのか、しないのかどっちだね”

“喜んでします。でも、それがなんのことか分かりません。”

“もし、お前が私の後を付いてくれば、私の母がお前に、お前の分からないことをおしえてあげるよ。お前の2人の兄は、歌を馬鹿にして、お祭りを軽蔑したんだ；彼らはそれを習おうともしなかった、だから、私は2人を殺したのだ。いま、お前が私に付いてきて、そして、言葉をつけて歌を習えば、そして、それを歌うなら直ぐに・・・楽しくするために踊りを習うなら直ぐに、自分のすんでいる家に自由に帰ることができるんだ。”

“私は、一緒に行きます”とエルミンは応えました。そして、2人は出かけたのでした。

そのワシは、もはや鳥ではなく、ワシの羽根の素晴らしいマントを纏った一人の剛健な若者でした。彼らは、何日も、何日も歩き、ずっと、ずっと離れた島を渡り、そして、溪谷を、谷を越し、ある高い山のところに着て、その山を登り始めました。

“あの高い、山の頂上に私達の家があるのだ。”と、若いワシが言いました。そして、彼らは、カリブーの狩人たちの平原を一望に見渡すことができる、その山の頂上に向かって必死によじ登っていきました。

ところが、彼らが山の頂上付近に着くと、突然何処からか、ドシンドシンという音が聞こえて来ました。そして、その音がドンドン大きくなり近づいてくる

のでした。それは、いかにも、大きなハンマーで打ち下ろすような響きで、その音があまりにも大きくて、エナミンの耳にうなりとなって聞こえてきました。

“なにか聞こえるかい？”　ワシが尋ねました。

“ハイ。耳をつんざくような不思議な音が聞こえてきます。私はこれまでこんな音を聞いたことはありません。”

“荒れは、私のお母さんが叩いて出している音なんだ。”とワシが応えました。

こうして、彼らは、ちょうど山の頂上に建っているワシの家に着いたのです。

“私が戻ってくるまで、ここに居なさい。私のお母さんに先に言っておかなくてはならないから。”と、ワシは言い、中に入って行きました。

暫くして、彼が戻ってきて、エルミンを中に連れて行きました。大きな部屋に入ると、そこは、まるで人間の家のように綺麗に作られていて、寝台の上には、静かに1人で、ワシのお母さんが座っていました。歳をとり、体が弱り、そして、悲しそうな顔をしていました。そして、息子がこう言いました。

“自分の家に帰ったら、歌を歌って楽しくなるようにすると約束した男が居るんです。しかし、彼は、楽しくやるためにどうやって太鼓をたたき、踊りを踊ればよいか分からないばかりか、その歌の歌詞をどうしたらいいのかも分からないと言うのです。お母さん、男達は、どうやって楽しむかも知らないんです。だから、この若い男がここにそれを教わりに来たんです。”

この言葉が、体のよわったお母さんに新しい生きがいを与えました。そして、彼女が話しをしている間、彼女の疲れた目つきは突然生き生きとしてきました。

“お前さんは、まず、大勢の人が入ることのできる宴の広間を立てなくてははいけないよ。”

こうして、2人の若い男たちは、早速仕事に取り掛かり、宴を開くホールを建てました。それは、kagsse(カグセ)と呼ばれるもので、普通の家よりも大きく、そして、素敵につくりでした。そして、それが終わると、お母さんワシは、彼らに歌の歌詞を一緒に教えました。歌がうまく歌えるように、その歌詞にあわせて歌の調子も教えました。次に、かのじょは太鼓を作り、彼らに音楽にあわ

せてリズムの叩き方を教えました。さらに、歌と一緒に踊るダンスを教えたのです。エルミンが全てのことを教わり終わると、彼女はこう言いました。

“いつも宴を始める前に、十分な料理を用意しなさい。そして、準備ができたらみんなを呼びなさい。これが、まずあなたがあなたの宴の広間を立て、歌を覚えたらしなければならぬことです。というのはね、宴に集まって人は、来ると直ぐに贅沢な料理を欲しがるからね。”

“しかし、私たちは自分達以外に、他の人をしらないよ。”とエルミンが応えました。

“男達はね、まだ、喜びの贈り物を受け取っていないので一人で寂しくしているんだよ。”とそのお母さんのワシが言いました。“私が言ったとおりにちゃんとみんな用意をするんですよ。そして、全部準備ができたら、そとに出かけて行き、男達を捜してごらん。そうすれば、直ぐに何人か会うはずだから。そしたら、大勢の人になるまで彼らを集めるの。そして、来るように招待するの。そして、歌を歌いながら宴を開きなさい。”

歳をとったお母さんワシは、こう話しながら、彼がなすべきことを丁寧に教え、そして、最後にこう言いました：

“私はワシのように見えるかもしれないがね、私は、他のおんな達と同じように喜びを持っている歳をとった婦人なのだよ。贈り物は、見返りを求めるの。だから、別れるときにあなたは私にほんのちょっとした腱の筋をくれれば、それだけでいいの。それは、だけど、ほんの僅かのお礼なのだけど、それがとても渡しには嬉しいのよ。”

エルミンは、さいしょ 悲しくなりました。なぜなら、ここがどこだろうと彼が腱の筋を手にいれるにはあまりにも自分のうちから遠くに来ていたからです。しかし、突然、彼は自分の弓の先が腱の筋で結ばれていることを思い出しました。彼は、これを紐解いて、そしてワシにその筋を与えました。こうして、彼がお礼として渡したものは、大して価値のないものだったのです。それから、若いワシは、もう一度、彼のまばゆいばかりの上着を着て、彼のお客を自分の背中に跨り、腕を自分の首に抱きつくように言いました。そして、山を一飛びしました。うなるような音が、彼らを取り巻き聞こえてきました。エルミンは最後の時間が来たと思いました。しかし、これは、ほんの一瞬続いただけでした。そして、ワシは、舞い降りると彼に目を開けるように言いつけました。こ

うして、彼らはまた彼らが最初にあった場所に戻ってきたのです。友達になった彼らは、いまや、別れの時が来ました。そして、御互いに心から親愛をこめて別れの言葉を言ったのです。エルミンは、急いでお父さんとお母さんのところに駆けて行き、自分が体験したことについて、こう言おうと話す言葉を決めていました。

“男たちは、1人で寂しくしているんだ。かれらはどうやって楽しむか知らないから、喜びも持たずに生きているんです。いま、ワシが僕に素晴らしい喜びを与えてくれたんです。だから、私は、この喜びをみんなで楽しめるように男たちをみんな招待する約束をしたんだ。”

お父さんとお母さんは、息子のこの話を聞き、びっくりし、信じられないような衝撃を受けました。こんなに彼の息子がしっかりと育っているとは考えてもいなかったし、嬉しくてドキドキしている彼の気持ちは、それがワシの贈り物だとは考えることもできませんでした。しかし、年取った2人は、もう、すでに2人の子供をワシに連れて行かれていましたので、彼の言うことを反対するわけにはいきませんでした。そして、彼らは、この最後の息子を守るためにもこの言葉に従わなければならないと考えました。そこで、彼らは、ワシから言われたことを実行しました。

ワシが言ったような宴のホールが建ちました。そして、食料を入れておく倉庫は、海で取れたものやカリブーの肉で一杯になりました。お父さんと息子は、曲に合わせて歌詞のなかに、彼らは大好きな、そして、心からの言葉をいれて、喜びの言葉を並べてゆきました；そして、太鼓と、周りに木の枠をつけてカリブーの皮革をピンと張ったゴロゴロ音のするタンバリンを作りました。そして、その歌にあわせたドラムの叩く音のリズムに合わせて、彼らは腕を動かし、陽気に跳ね回り、おどけた格好をして足を踏みまわりました。こうして、心も体もだんだん温かくなってくると、自分達の世界に全く新しい光が見えてきたような気になりました。いく晩も、いく晩も、喜びと、笑いに溢れた、楽しい、そして、愉快的日が続きました。そして、彼らはすっかり疲れると、一晩中いびきをかいていました。

全ての準備が整うと直ぐに、エルミンはこれからする宴に人々を招待しに外に出かけてゆきました。彼がびっくりしたのは、彼と彼のお父さん、お母さんがもう、以前のように自分達だけではなくなっていることが分かったからです。楽しそうな男達が集まってきています。こうして、彼は、あちこちに沢山の人、そして、いつもカップルでいる人たち、見慣れない顔をした人たち、狼の毛皮

を纏った人たち、クズリ、オオヤマネコ、赤キツネ、銀キツネ、雑種のキツネなどの毛皮に身を包んだ人たち、其の他、ありとあらゆる動物の毛皮を着た人たちに会ったのです。エルミンは、彼らを新しく作った家でご馳走を食べに来るように招待しましたので、みんなが嬉しそうに彼について来たのです。こうして彼らは、それぞれが自分たちの歌を作り、宴の歌を歌い続けました。そこには、笑いと、語らいと、歌声があり、人々、これまでに経験したことのないような、解放感と幸せを感じていました。テーブルの上のご馳走は素晴らしいものでした。そして、肉の贈り物が交換され、友情が結ばれました。なかには、毛皮の貴重な贈り物を交換している人たちもいました。夜は更けましたが、宴のホールに朝の光が差し込んでくるまでには招待されたお客たちはそれぞれ家に戻りました。

そして、かれらが揃って廊下を出て行くと、みんなが前倒しとなり手をついて、そして、四方八方に走っていきました。彼らは、実は人間だったのではなく、狼や、クズリ、オオヤマネコ、銀キツネ、赤キツネだったのです。そして、みんなが森の木の中に入っていってしまいました。彼らは、あの年取ったワシが送ったお客だったのです。だから、お父さんも息子も全く気がつかなかったのでしょう。そうです、偉大なのは、動物達でさえも人間に変えてしまうほどの喜びの力だったのです。こうして、人間達よりもいつもずっと気楽な動物達が、宴のホールの最初のお客となったのです。

このことがあってから少し経って、エルミンは、狩に出かける機会があり、そこで、もう一度あのワシに会いました。直ぐに頭巾を取り人間になると、彼らは一緒にワシの家に登ってゆきました。年老いたお母さんワシが人類愛のために最初の歌の宴を開いた男にもう一度会いたいと思っていたからでした。

彼らが、高台に着くまえに、お母さんワシが来て彼らにお礼を言いました。そして、見よ!、なんと。

あのよわよわしかった年取ったワシがもう一度若返っていたのです。

男達が楽しんでいる間に、全ての年取ったワシが若返ったのです。

ここに出てきた話は、**Kanglanek** という、**Colville River** の源流の周りに森が広がっているところにある村の、昔からの言い伝えです。この不思議な、そして、想像もできないようなやり方が、とみんなが言っているのですが、人間に喜びを持ってきてくれたのです。

そして、ワシは、歌と踊りと、そして、すべての宴の中の神聖な鳥となったのです。

この話は、「喜ぶこと」がどれだけ大事なことを教えてくれています。それにしても、ワシがいつも話しの主人公であることを認識するのは、インディアンの文化を理解するのにとても大事なことはないかという気がします。が、・・・。

さて、この話、あなたのここの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

29. イエローストーンの谷と大洪水

シャイアン

アメリカインディアンの Lore

“私は、その話がモンタナのシャイアンの保留地区と、フロリダの **Everglades** の中のセミノレのキャンプで話されているのを聞きました。そして、北極圏のエスキモーや、南半球のインディアン達からもその話を聞いたことがあります。大洪水の伝説は、沢山ある伝説の中でも最も共通の伝説です。アジアで、アフリカで、ヨーロッパで、北アメリカで、そして、南太平洋で伝わっている話で

す。” Eastern Montana College の Professor Hap Gilliland 氏は大洪水のこの伝説を記録した最初の人でした。

ここに出てくる話は、彼が世界中のいろいろな場所で記録した 15 の洪水の伝説の中の一つです。

あるところに 1 人の年老いたインディアンがいました。彼の顔は、やつれていましたが、しかし、彼の目は光り輝いていました。私は、彼がどこの部族の出であるのか、想像はできたけれども、決して知ることはありませんでした。後に私が話しをしたほかの部族からも彼の話について聞くことはありませんでした。

われわれは、若い男達の展望について話をしていました。彼は、話を するまえに降り注ぐ雨のなか、イエローストーンの谷に目をやり、長い間じっと座っていました。

“彼らは、戻って来はじめた。” と彼は言いました。

“誰が戻ってくるって?” と私が聞きました。

“動物” と彼がいました。 “こんなことが、前にも起こった。”

“そのことを、私に聞かせてください。”

彼は、手と、そして、目を上げる前に暫く考えていました。 “偉大なる創造の神は、彼がそれを作ったときにこの大地を見て微笑んでいました。そこには、山があり、平原があり、森が、そして、草原がありました。沢山の動物達が、——そして、人間も住んでいました。

その年よりの男の手は、彼の声よりももっとしっかきその物語を話ながらゆっくりと動きました。

偉大なる創造の神が人々に、 “これらの動物達は、みんなお前の兄弟なのだ。だから、この大地も彼らと共に使いなさい。そうすれば、彼らはあなた方の食

料にもなってくれるし、また、着るものも差し出してくれるようになるのだ。彼らと一緒に住んで、彼らを守ってあげなさい。”

“特に、バッファローは、あなた方に食料もそして、身を守る盾にもなってくれるのだから、大事にしなくてはいけない。バッファローの皮革は、寒さからも、暑さからも、いやいや、雨からだってあなた方を守ってくれるのです。あなた方がバッファローとともにいる限り、他に必要とするものはないでしょう。”

何回もの冬を過ごす間、人々は動物達と、そして、その大地で平和に暮していました。彼らがバッファローを殺したときには、偉大なる創造の神に感謝をし、バッファローの体のすべての部分を利用しました。そうして、なんでも必要なものができたのでした。

ところが、そこに他の部族のものがやってきました。彼らは、動物達を自分達の兄弟だとは思っていませんでした。だから、彼らは自分達が食べ物を必要としないときでもバッファローを殺してしまいました。森の木を切り、森を焼いてしまったので、動物たちは沢山死んでしまいました。かれらはバッファローを銃で射ち、それを、スポーツだと言っていました。沢山いた川の魚もどんどん殺してしまいました。

それを じっと見ていた偉大なる創造の神は、悲しい気持ちになりました。そこで、彼は、火の煙で谷を包んでしまいました。人々は、咳き込み、息苦しくなったのでした。それでもまだ、彼らは、森を焼き、動物達を殺し続けました。

そこで、偉大なる創造の神は火を消す、人々を滅ぼすために雨を降らしたのです。

雨が降り続き、川の水が溢れてきました。こうして人々は、水が溢れた谷から逃げ出し、もっと高いところに移って行きました。

魔術師の、「汚れた熊」という男が、みんなを集めました。そして、こう言ったのです。“偉大なる創造の神はわれわれに、バッファローとともにある限り、われわれは、暑さからも、寒さからも、そして、雨からも安全に暮すことができるのだ。しかし、いまや、ここにはバッファローは一匹もない。われわれがバッファローを見つけ、自然と共に平和に一緒に生きていかない限り、われわれは死んでゆくだろう。”と。

それでも、雨は降り止みません。そして、ますます水が増えました。人々は、水の溢れた高原から丘の上に移りました。

若い男達がバッファローを求めて狩に出かけました。彼らは、出かけている間、火を焚きました。そして、もう一度動物達と友達になりました。汚れた川は綺麗に掃除をしました。

それでも、雨は降り止みません。そして、ますます水が増えました。人々は、今度は水の溢れた丘から山の上に移りました。

2人の若い男が「汚れた熊」のところにやってきました。“自分達は、バッファローを見つけました。”と彼らは言いました。“一匹の母牛、一匹の子牛、そして、大きな白い雄の牛がいました。その母牛と、子牛は山の安全なところに登っていきました。彼らは雨が止んだら戻ってくるに違いありません。しかし、土手はなくなっています。そして、雄の牛は、溢れた水のために流れにのまれてしまいました。自分達は、その後を追い、彼を捕まえて岸に連れてきましたが、その時にはすでに溺れ死んでいたのです。だから、自分達は、そのバッファローの皮革をあなたのために持ってきたのです。”

こうして、彼らは、一枚の大きな白いバッファローの皮を広げて見せました。

「汚れた熊」はその白いバッファローの皮を取り上げ、“沢山の人が溺れたに違いない。”と言いました。“きっと、われわれの食べ物は持ち去られてしまったに違いない。しかし、われわれの若い人々は、自分達のために作られたこの世界をもはや壊したりしないだろう。彼らは、白いバッファローを見つけたのだ。それは、残された人々を助けてくれるだろう。”

雨はなおも降り続いています。水がだんだん増えてきました。人々は、水の溢れた山から、その一番高い頂上に移りました。

「汚れた熊」は、その白いバッファローの皮を大地の上に広げ、彼と、そして、他の魔術師達も一緒に、その皮をこすっては広げ、広げてはこすりました。

尚も雨は降っています。バッファローの皮は、広げられて、雨に濡れると、まるで生皮のようでした。「汚れた熊」は、それを谷いっぱいに広げて張りました。残された人たちはみんな、こうしてその下に集まったのです。

雨が降っているときには、魔術師達は、バッファローの皮を山から山へし張り巡らしました。いつも彼らは、それを遠くのほうまで張ったのでした。

そうして、「汚れた熊」は、皮の一つの角を **Big Horn Mountains** の頂上に結び付けました。その縁を **Pryors** の山に結びました。次の角は、**Bear Tooth Mountains** に結んだのです。**Yellowstone** の谷を挟んで、彼は、もう一つの角を **Crazy Mountain** に、そして、最後の角は、**Bull Mountains** の中の **Signal Butte** に結び付けました。

こうして、**Yellowstone** の谷全体が、広いバッファローの皮で覆われました。雨は上のほうではまだまだ降り止まなかったけれど、**Yellowstone** の谷には、もう降りませんでした。

水は何時しか引いてしまいました。どこかに非難していた動物達が、白いバッファローの皮の下谷にもどって来ました。人々は、その動物たちと仲良く谷で暮らすようにしました。

バッファローの皮の上では、まだ雨が止みませんでしたので、張ってあったその皮がだんだんたるんできました。

「汚れた熊」が **Bridger Mountains** の上に立ち、バッファローの皮の西の端を持ち上げ、西風をとらえようとしてしました。西風が突然吹き込んできて、バッファローの皮の中に閉じ込められました。すると、西風は、谷に大きなドームができるまで、その皮を持ち上げたのです。

偉大なる創造の神は、人々が大地とともに平和に暮らしているのを見ていました。そして、雨は止み、太陽が照り始めました。太陽が白いバッファローの皮に陽を差し込むと、それは、赤、黄色、そして、水色の色に輝いていました。

生皮に太陽の光が当たると、その皮は縮まり始めました。ドームの端が縮み、最後に、谷を横切るように偉大なアーチがそこに残っていました。

その年とった男の声は、しおれていましたが、；しかし、彼の手は、“見なさい”と、言っているように、谷のほうに伸びてゆきました。

雨が止み、そして、**Yellowstone** の谷に立派な虹ができていました。バッファローの母牛とその子牛がその下で草を美味しそうに食べているのでした。

動物も人間もみんな仲良くしなくてははいけませんね。インディアンにとっては、この世に生きているものはみんな友達なのです。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

30. Lakota の平和のパイプのおこり

Lakota

アメリカインディアンの Lore

ずっと、ずっと、昔のこと、Lakota 族というインディアンの部族の若くて、立派な男が二人、バッファローが何処にいるのか、探しに行くためにみんなか

ら選ばれました。男達が、バッファローの国で馬を乗り回していたときに、ずっと遠くで彼らの方に向かって歩いてくるバッファローを見たのです。

いつものように彼らはどんな敵がやってくるか見ていたのです。ですから、彼らは、木陰に隠れ、そして、じっと動かずに居たのです。そして、その物影が坂のところまでやって来ました。なんと、驚いたことに彼らのほうに向かってくるのは、一人の女だったのです。

彼女は、近づいてくると、やがて立ち止まり、そして彼らをじっと見ていました。彼らは、彼女が自分たちが隠れているにもかかわらず、自分たちを見つけてくれたのだとわかりました。彼女の左手には、ヤマヨモギの束の中にステッキのようなものを持っていました。その彼女の姿はとても綺麗でした。

男達のうちの一人が、“私はこれまで、彼女より綺麗な人にあつたことがない。私は、彼女を是非妻にしたいと思う。”

しかし、もう一人の男が応えました。“一体、君はどれほど真剣にそう思っているのかね？ 彼女は、普通の人とは比べ物にならないくらいに綺麗だし、ずっと気品が高いんだよ。”

まだ、ずっと離れてはいたけれど、彼女は彼らの話しを聞いていました。彼女は自分の 束を横に置き、そして、彼らに話しかけました。“こちらにいらっしゃい。あなた方が欲しいものとはなんですか？”

最初に話した男が彼女の方に近づいて行き、そして、彼女の上に、あたかも彼女を求めるように手を置きました。すると突然の、何処からか上の方から猛烈なつむじ風が吹いてきました。そして、もやがかかり、そのもやが彼と彼女を包んでしまいました。もやが晴れると、もう一人の男が見たものは、そこに、あの束を持っているその女だけが立っているだけでした。彼の友達は、彼女の足元で一本の骨になっていたのです。

その男は、不思議に、そして、恐ろしくなり黙って立ちすくんでいました。そして、その美しい娘さんが彼に言いました。“私は、あなた方の所にいく途中です。彼らの中に、**Bull Walking Upright** という正直な男がいるはずですよ。わたしは、その彼に会いにゆくところです。”

“先に村に行きなさい。そして、私が来るとみんなに言いなさい。みんなに、キャンプを移動して、丸い形にテントを張るように頼みなさい。それから、そ

の輪に北の方に向けて入り口をつけてください。輪の真ん中には大きなテピーを作るのです。そして、そのテピーも北の方を向くようにしてください。そこで、私は、**Bull Walking Upright** と彼の部族のものに会います。”

その男は、自分が彼女から言われたことがすべてそのとおりになっていることを確認しました。彼女がキャンプにやってくると、自分が持ってきた贈り物からヤマヨモギを取り除きました。その贈り物は、赤い石でできた小さなパイプでした。そこには、バッファローの子牛のかわいらしい絵が彫られていました。

彼女は、そのパイプを **Bull Walking Upright** にあげ、彼に、偉大なる天の人に祈る祈禱のことを教えました。“偉大なる天の人に祈るときには、その儀式でこのパイプを使わなければいけません。食料がないときには、パイプの飾りを取り、それを空気にさらしなさい。そうすれば、やがてバッファローが現れ、あなたたちは、簡単に狩ができようになり、バッファローの肉を手にすることができるでしょう。それで、子供達も、男達も、女達も十分な食べ物を得ることができるし、幸せになることができます。”

そして、その美しい娘さんは、彼ら、人々がみんなで幸せに暮らすにはどうしたらよいかを話しました。人々が祈禱をし、大地に祈りをささげるときのことを教えました。さらに、彼女は儀式のときの飾りをどうすればよいかも教えました。

“大地は”と彼女は言いました。“あなた方の母なのです。そう、だから特別の儀式をするときには、あなた方は、あなた方の母親のように自分たちを——黒や赤色に、茶色や白色に、飾らなければならないのです。これは、バッファローの色でもあるのです。”

“こうしたことをした上で、もう一度、私の上げたものは、平和のパイプであることを思い起こしなさい。すべての儀式の始まる前に、そのパイプでタバコを吸うのです。あなた方は、約束事をするときもその前にタバコを吸うのです。そうすれば、自分たちのこころの中に和やかな気持ちが湧いてきます。もし、あなた方が、偉大なる天の人と、母なる大地に祈るときにそれを使うなら、あなた方は、間違いなくあなた方が望む祝福を受けことができるでしょう。”

その娘さんは、自分のメッセージを言い終わると、向きを変え、やがてゆっくりと歩き出し、離れていってしまいました。みんなは、彼女を、神を見るような気持ちで見っていました。円形になった広場の外に、彼女はちょっとの間立ち

止まり、そして、その大地の上で横になりました。そして、再び起き上がると、彼女はバッファローの牝牛になっていたのです。三度目に、彼女が横になると、今度は、茶色のバッファローになったのです。そして、四度目は、これが最後でしたが、彼女は、一点の混じりけもない純白なバッファローになりました。そして、北のほうに向かって歩いてゆき、次第に遠くなり、やがて、丘のかなたに姿を消してしまいました。

Bull Walking Upright は、その平和のパイプをいつも大事に包んでしまっておきました。そして、いつも、彼の部族のものを呼んだときには、ほんの少しだけ、その包みを開き、あの綺麗な娘さんから教わったことを繰り返し練習しました。そして、彼は、自分が100歳を超えるまで、祈祷や儀式を執り行うときには、いつも、そのパイプを使うようにしました。

体がすっかり弱ったときに、彼は、盛大な宴を開きました。そこで彼は、そのパイプと、その扱い方を **Sunrise** という、勇敢な男に授けました。こんな風にして、そのパイプのことが、何世代も何世代も受け継がれてゆきました。“パイプが使われている限り”、と、その美しい娘さんは言いました。“あなたの部族は、生き続けていくでしょうし、また、幸せになるでしょう。もし、それを忘れるようなことがあれば、たちまち、人々は滅びてしまうでしょう。”と。

Lakota 族は、今のミネソタ、サウス・ダコタ、ネブラスカ一体に住んでいたインディアンたちの総称で、有名なスー族、オマハ族などの一族です。今でも、ミネソタの南西部にパイプストーンという町があり、この地で産出される石で造ったものを特別に平和のパイプと呼んでいるようです。この石が特別加工しやすいものだったからでしょうが、これが、平和のシンボルとして使用されているのは、ここで紹介したような言い伝えがあったからだと思います。オマハ族は温厚でしたから理解できますが、しかし、本当は、平和のパイプを一番必要としたのは、戦闘的だったスー族かも知れません。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

31. Mooin(熊の子供)

アメリカインディアンの Lore

今は、昔、昔のことですが、あるところに、Sigo という少年が住んでいました。彼のお父さんは、Sigo がまだ赤ん坊であったころなくなっていました。狩をして、家族のみんなを養うような食料を準備するには、彼は歳が若すぎましたので、彼のお母さんは、仕方なく別の男と一緒にいる決心をしました、が、その新しいお父さんとなった男は、嫉妬深く、意地の悪い人間でした。そして、たちまち、このまま息子が嫌いになりました。彼は、自分よりも子供のことばかり気にしていると思ったのです。そんなことから、彼は、この邪魔な少年を何とかしようと考えました。

“なあ、お前さんよ。”と彼は言いました。“その子もそろそろ森で仕事をすることを習う時期だとおもうんだが。今日、私が彼を連れて行き、狩を教えることにしよう。”

“オーッ。だめですよ!”と彼の妻は泣き叫びました。“Sigo は、とってもまだそんな歳ではありません!”

しかし、夫は、その子供の手をとり無理やり彼を森につれて行きました。お母さんは、その男の嫉妬深い気持ちを知っていたので、その間、悲しくてしくしく泣いていました。

義理のお父さんは、森の中の洞穴がとても奥深いと言うことを、そして、その穴が岩山の方にまで繋がっていることを知っていました。この洞穴のなかに、彼は、このまま息子を連れて雪、彼に、その中に入ってウサギの後を追いかけて捕まえてくるように言いました。少年はびっくりしてしり込みをしました。

“中は真っ暗だよ。僕、怖いよ。”

“怖いだと!” 男は嘲り笑いました。“お前は、立派な獵人になるんだ”と言って、彼はその少年を無理やりに洞穴の中に押し込んだのでした。“そこに、ワシが出て来いというまで、じっとしているんだ。”

そして、その意地悪なお父さんは棒を持ってきて、その洞穴の入り口が完全にふさがってしまうように、それを大きな岩のしたに並べ、倒しておきました。

彼には、洞穴の入り口が開けられないことがわかりました。このままでは、その少年は、永遠に閉じ込められて、やがて飢えて死んでしまうのです。

この意地悪な御父さんは、少年にお母さんに、彼は、言うことを聞かず、かつてにどこかに居なくなってしまい、迷子になってしまった。そして、自分は彼を探したが見つけることはできなかったと言おうと、その場を立ち去りました。かれは、そのまま、まっすぐに家には戻りませんでした。途中で時間をつぶし、彼はその少年を懸命に探した振りをしたのでした。そして、彼には別の考えが浮かんできました。それは、**Blomidon** という浜に行って、自分の妻のために上げるために、**Glooscap** の紫石を探そうというものでした。彼女は、きっと疑うに違いないが、しかし、それを証明するものはなにもないはずだ。そして、誰も何がおこったのか分かるはずがない、かれは、そう考えていました。

誰もいない? いやいや、ここで起こっていたことを既に知っている人が一人居ました。偉大なる酋長のグルースキャップは、ここで何が起きているのかを気づいていたのです。そして、かれは、腹を立て、大変怒っていたのでした。彼は持っていた魔法の槍を **Blomidon** (ブロミドン) の赤い石と、大地の割れ目をつないでいる鎧(かすがい)に突き刺しました。すると、大地と石とがひっくり返し、その意地悪な義理の父を埋め尽くし、たちまち彼を殺してしまうほど浜のほうに覆いかぶさっていきました。

そして、グルースキャップは、**Porcupine** (ポルキャバイン) という信頼のあつい召使を呼び、彼に仕事を言いつけました。

丘の上にある洞穴の名が暗くなり、**Sigo** は、淋しくなり、また恐ろしくなって泣き出してしまいました。彼はまだ 6 歳を過ぎたばかりで、お母さんに会いたくて仕方がなかったのです。と、そのとき、何処からか声が聞こえてきたのです。

“Sigo や、こっちにおいで”

彼に、暗闇の中に光っている目が見えました。そして、がたがた震えながらそちらに歩いていったのです。だんだんとその目が大きく、明るく輝いてきて、そして、とうとう、それが、年老いたポルプキュパインの目であることが分かりました。

“私の息子よ。もう、泣くのはやめなさい。”とポルプキュパインは言いました。“私は、お前を助けにここに来たんだよ。”という、少年はもう怖くはなくなりました。そして、ポルプキュパインが洞穴の入り口に行き、入り口をふさいでいる石を懸命に動かしているのを見ていました。しかし、その石はとても重く、動くようなものではありませんでした。そこで、ポルプキュパインは、大きな岩と丘の縁との間の光が差し込んでくるところに唇をあてて、こう叫びました：

“グルースキャップの友よ！ こっちにきておくれ。そうだ。友達、みんなだ！”

その声を聞いた動物達が次から次へと集まって着ました。——狼が、アライグマが、カリブーが、亀もやって着ました。オポッサムも、ウサギも、そして、リスも、さらに、七面鳥からハチドリにいたるまで、森にいるすべての鳥たちまでも集まって来ました。

“ここに子供が殺されそうになって閉じ込められているんだ”と、洞穴の中から年をとったポルプキュパインが叫びました。“私はこの岩を除けるだけの力がないのだ。何とかわれわれを救ってくれ。そうでないと、われわれは死んでしまうよ”

動物達は、呼び戻されて、そして、みんなでその岩をどけようと一生懸命試してみました。最初は、アライグマがまえに出てきて、そして、その岩を包むように腕を回しました。しかし、彼らの手は少し、小さすぎたのです。それから、キツネがやってきて、その大きな岩に噛み付き、そして、引っかきはじめました。しかしねこれも、ただかれは、自分の唇から血を流すだけでした。次に、カリブーが飛び乗り、そして、岩の割れ目に彼女の長い角を突き刺し、その石を何とかほじくりだそうと試みました。しかし、それでも、岩は動かず、カリブーの片方の角が砕けてしまいました。その角は、もう使い物にはなくなってしまいました。そして、とうとう最後には、みんなは諦めて、もう、岩を動かすことはできないと考えるようになってしまいました。

"Kwah-ee," とどこかで新しい叫び声が聞こえました。“一体、何がおきたのかね?” 彼らは振り向きました。すると、そこに **Mooinskw** という、メスの熊が居たのです。森の影から静かにこちらにやって来たのです。ちっちゃな動物たちの何匹かは、恐ろしくなって、物陰に隠れてしまいました。しかし、残ったものが、**Mooinskw** に、そこで何が起きているのかを話しました。すると、彼女は、俄かに、洞穴の入り口をふさいでいる巨大な石に抱きつくと、これをありったけの力を出して持ち上げました。すると、その岩は、ごろごろと音を立てて崩れ、割れてしまいました。こうして、**Sigo** とボルキュパインは洞穴から、喜びに溢れて抜け出ることができました。

ボルキュパインは、動物達に彼らが力をあわせて助けようとしてくれたことにとても感謝しました。そして、“私は、この少年の世話し、育ててくれる。私の持っている食べ物は、彼にとっては必ずしも最上のものとは言えない。多分ここには、彼に食べさせるもっと適当な食料を持ったものが居るはずだ。この少年はいま、お腹が空いているに違いない。——だれか、彼に食料を運んできてくれるものは居ないかね?”

すると、そこにいた者達は一斉に食料を探しに、あちこちに出かけて生きました。そして、最初に戻って来たのは、渡りカラスでした。そして、彼は、その少年の前に何匹かの虫を広げておきました。次にやってきたのは、ビーバーでした。彼は、樹皮をもって来ましたが、少年は彼の首を振りました。他の者達は、植物の種や、昆虫をもってきたのですが、しかし、**Sigo** は、お腹は空いていたのですが、それらのどれにも口をつけることができませんでした。そして、最後に来たのは、あの **Mooinskw** でした。彼女は、ブルーベリーでつくったおいしいようなケーキを持ってきました。すると、それを見た少年は、夢中でそれを口にし、必死にそれを食べたのです。

“オーッ。これはなんてすてきなのだろう。” 彼は泣き叫びました。そして、ボルキュパインは、賢明にも、うなずきました。

“よしよし。いまから” と彼は言い、“**Mooinskw** が彼の育ての母親になるだろう。” と付け加えました。

こうして、**Sigo** はその熊たちと一緒に生活をするようになりました。お母さん熊のほかに、二匹の少年熊と、さらに、二匹の少女の熊が一緒でした。だれもがこの新しい家族を歓迎し、直ぐに、**Sigo** に森の仕組みと秘密を教えてあげました。新しい友達との生活は、**Sigo** にとってもとても楽しい毎日でした。こう

して、だんだん、彼は自分の昔の生活のことを忘れたのでした。そして、熊たちがするように時々、四本足で歩いたりするときには、彼は、もはや自分が熊であるかのごとく思うようになり、自分の本当のお母さんの顔さえも記憶が薄れていきました。

Sigo が十歳になった春のある日のこと、熊たちは、キュウリウオという魚を取りに川に出かけました。Mooinskw は、水の中に入って息、そして、お尻を下にして腰掛け、キュウリウオを捕まえ始め、それを土手にいる子供熊たちの方に放り投げていました。子供達は、Mooinskw が岸の方に向かって、突然、“子供達、急いでこっちにおいで！”とさけびながら大きな声を出した時には、もう、夢中で楽しく遊んでいました。お母さん熊は、人間の匂いを感じていました。“逃げるのよ！”

子供達が走り出すと、彼らが自分たちの巣に安全に戻るまで、お母さん熊は彼らを守るために後に残り、そこに立ち止まっていました。

“お母さん、あれは、なんという動物だったんですか？”、Sigo が聞きました。

“あれは、猟師だったんだよ”と彼の育てのお母さんが言いました。“彼らは、食料のために熊を殺す、お前と同じような人間なんだ。”そして、お母さん熊は、みんなに、猟師にはくれぐれも注意をするように言い聞かせました。“お前達は、猟師を見たら、彼らに見付からないように、そして、匂いを嗅ぎつかれないようにいつも遠くに逃げていなくてはいけないよ。”

それから、まもなくして、熊の一家は、ほかの熊の家族と一緒に冬の間の食料を蓄えるためにブルーベリーの実を集めに行きました。そして、小さな子供の熊が、実を集めるのに直ぐに疲れてしまうと、一番上の子供の熊は、突然、あるいたずらを考え付きました。

“みんなの居るところまで、僕を追い立てておいでよ。”と彼は、Sigo に言いました。“、ちょうど、猟師たちが熊の狩をするときにやるように。ほかの者達は、きつとびっくりして怖くなり、逃げたすよ。そしたら、僕達は、ここにあるベリーを全部、一人占めにできるよ。”

こうして、Sigo は、大声で叫びながら、ほかの熊たちのほうに彼の兄弟を追い掛け回しはじめた。そして、熊たちは、一斉にあちこちに散らばって逃げました。その声が、自分が育てた子供の声だということを知っている母熊以外は、みんな同じような行動を取りました。

“どうしようもない子供たちだよ、ほんとに。”と母熊は叫びました。“こんなときになんていたずらをしようというんだい？”そして、彼女は子供たちを取り集め、大きな音をたて尻を叩いてしかりました。もちろん、**Sigo** もです。

こうして、太陽が空をいる時間が段々短くなって行きました。そして、ついに、母熊は、彼女の家族を大きな洞穴のある木に作った、自分たちが冬を越す巣に連れて行きました。冬の半分の間は、彼らは、たくさんのブルーベリーのお菓子があり、おなかを空かすこともなかったので、幸せに、そして、安全に過ごすことができました。そして、ある日悲しいことが起こりました。猟師がその木を見つけたのです。

その木の幹についた爪でかいた後を見つけて、その中に熊がいると考え、熊を追い出すために、煙をたく用意をはじめました。

Mooinskw は、それが、これからどんなことになるかを、そして、もはや、みんなと一緒に逃げることはできないということをよく知っていました。

“最初に、私が飛び出すからね。”母熊は言いました。“そして、お前達、二匹の小熊が飛び出し、逃げ切るまで男達の注意を引いているから。そしたら、**Sigo**、今度はお前の番だよ。お前が出ていき、お前の妹を何とか助けてもらうように御願ひするんだ。多分、彼らは、お前のために彼女を助けるだろうから。”

こうして、いよいよ、この勇敢でやさしい母熊のいったとおりのことが起こりました。彼女が木から、下りて行くと、インディアンたちは、彼女を射止めるために鉄砲を撃ちました。しかし、二匹の雄の小熊は逃げる時間を見つけることができました。そして、今度は、**Sigo** が泣き叫びながら、飛び出てゆきました。

“私は、あなた達と同じ、人間です。彼女の小熊を助けてください。私を育ててくれた姉妹です。”

びっくりしたインディアンたちは、持っていた弓とやりを下に置き、そして、**Sigo** の話を聞き、彼らは喜んで、小さなメスの小熊を助けることにしました。そして、自分たちが、インディアンの子供をやさしく育ててくれた **Mooinskw** を殺してしまったことを心から反省したのでした。

Sigo は、自分を育ててくれた母熊のことを嘆き悲しみ、硬い誓いを立てたのです。

“私は、これからずっと、熊の子の **Mooiin** と呼ばれることにしよう。そして、大きくなって、獵人になっても、けっして、母熊や、子供の熊は殺さないようにしよう！”

そして、実際に **Mooiin** はそれを実行したのです。

彼は自分と一緒に、彼のインディアンのお母さんを喜ばすために、一緒に育った妹熊と、もとの村に戻ってきました。そして、インディアンのお母さんは、その子供の熊が大きくなって、何でも自分でできるようになるまで、やさしく面倒をみてあげました。

そして、このことがあってから、インディアンは、洞穴のある木から煙が上がっているのを見たときには、それは、お母さん熊がそこで子供の熊のために料理をしているのだと考えて、その木は、そのままにしておくことにしたということです。

あとがき

インディアンの伝説のなかには、熊が登場する伝説がたくさんあるようです。しかし、そのなかで決して熊は、恐ろしい動物ではなく、やさしい、そして、インディアンの味方として出てくることが多いようです。インディアンは、熊が冬眠から覚めるのは、ちょうど死者が蘇ることと同じことのように考えています。ですから、熊を自分たちよりも神に近い存在、神聖な生き物として理解しているようです。この話のなかにも、そんな熊の姿が描かれているのではないのでしょうか。

さて、この話、あなたのところの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

32. バッフアローダンス

アメリカインディアンの Lore

アメリカインディアンたちの間の年中行事のなかで最も熱狂的なものはバッファローダンスといわれるものでした。八人の男達が、バッファローの毛皮を背中に被り、そして、黒や、赤、そして、白い化粧をして踊りをするというものでした。踊り手たちは、まるで、自分たちが大平原にいるバッファローであるかのように夢中になって踊るのです。

それぞれの踊り手たちは、右手に鈴を持ち、そして、左手には 6—フートもある棒を持っています。そして、頭には、緑色の柳の大きな枝の髪飾りをつけています。ちょうど、バッファローがこの地にもどってくるのは、柳の木の枝に緑の葉が生い茂る時と同じ季節だったのです。

もうひとつの踊りというのは、バッファローが来る可能性のある四つのだいたいの方角を言い表す四人の部族のものだけで踊るものでした。中央にカヌーを置いて、よく獵師を攻撃するグリズリーのような衣装をきた二人の踊り手が、それぞれに自分たちの場所をとります。そして、儀式とともに邪魔に入るようなものには誰にでも、彼らはその人のほうに行き、飛び掛って脅すのです。

見物人たちは、グリズビーに餌を投げて彼らをなだめようとするのです。2 人の踊り手は、そのえさに飛びつくようにして、それをバッファローが来るようにできるだけ彼らの眼につくよう、平原のあちこちに撒き散らすのです。

儀式の踊りをしているあいだ、部族の年寄り達は太鼓をたたき、バッファローの狩がうまく行くように祈祷師たちと打ち合わせをするのです。

バッファローの踊りの 4 日目の終りに、ひとりの男が飢餓の悪魔の精の変装をしてキャンプに入ってきます。すると、たちまち、彼は、若い Mandans の男達、彼らは、その儀式に積極的に参加しようとして控えていたのですが、彼らの罵声と投石により、退散させられるのです。

こうして、飢餓の悪魔をうまく退散させると、部族のもの全部が参加して、Mandans の狩猟する場所にバッファローが直ぐにも戻ってくることを象徴した、たくさんのご馳走が用意された感謝の祝宴が開かれるのです。

アメリカインディアンにとって、バッファローは自分達と同じ動物だと考えていました。かれらは、自分達に食料を与えるために殺されていくのであると考えていました。ですから、バッファローはインディアンの生活そのものを支えるものとして、バッファローの死体で、無駄に捨てられるものは何ひとつなかったと言われています。それほど大事なバッファローですから、かれらは自分達の必要とするもの以上のものは、決して狩猟しなかったのです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか

33. ブルーバードとコヨーテ

アメリカインディアンの Lore

昔、昔、そのまた、昔のことですが、ブルーバードの羽は、非常にくすんでいて、あまり綺麗な色をしていませんでした。水が流れ出ることも、また、入ってくることもないので、決して変わることはない、それは、素晴らしく綺麗な青色をした水をたたえる湖のほとりに住んでいました。その鳥は、青い水をとて素晴らしいものだと思っていたので、4日の間、毎朝、四度その湖で水浴びをしました。その間、毎朝、こんな歌が聞こえてくるのでした。

青い水がここにある。

その中に、私が入っていくと、

私の全てが青くなる。

4日目の朝になり、全ての羽が抜け落ちてしまったのです。そして、肌がむき出しになってしまいました。しかし、5日目の朝になると、今度は青い羽が生えてきたのです。

こうして鳥におきたことを実は、じっと見ているものがおりました。コヨーテです。彼は、飛び掛っていき、鳥を捕まえてかれの晩御飯にしようとおもったのです。しかし、彼は、青い水のことを気になりました。しかし、5日目の朝に彼は、その青い鳥に言いました：“どうやったら、君のその醜い色がすべてお前さんの羽から消えたんだろうかね、そのあと、どうすれば、体中が明るく綺麗な青色になることができるのかね？ お前さんは、そらを飛んでいるほかの鳥よりもずっと綺麗だよ。私も、青くなりたいんだ。”

“私は、たったの四回だけね行っただけですよ。”と青い鳥は応えました。それから、コヨーテにそのときに歌った歌を教えてあげました。

すると、今度は、コヨーテは、勇気を振り絞って、その湖の中に飛び込んでゆきました。かれは、それから4日間、同じようにして、青い鳥が彼に教えた歌を歌いました。そして、5日目に彼は、青い鳥と同じように、体が青くなったのでした。

こうして、コヨーテは非常に自分に誇りを持つようになりました。あまりにも自分が青いコヨーテであることを自慢しましたので、かれが歩いているときには、彼は、だれかが自分のことをどれだけ素敵な青い色をしているのかということに気づくかどうか、いつもあちこちあたりを見回していました。

そして、かれは、自分の影もやっぱり青く見えるのかどうかを確認するために、猛烈な勢いで走り出しました。彼は、道など見ていませんでした。そのため、かれは、切り株に勢いよく引っかかってしまいました。あまりにも、ひどく引っかかってしまったので、彼は、土の上に投げ出されてしまいました。挙句の果て、かれは、体中が泥だらけになってしまったのです。こうして、今日でも、コヨーテはみんな、汚れた土の色になったということです。とさ。

欲張りで自慢ばかりしているコヨーテは、どこか、鼻の高い意地悪な人に似ていますね。

正直で、素直であればコヨーテのようにはならないという話でした。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

34. アパッチの誕生の話

アメリカインディアンの Lore

自然のなかの動物、さまざまな要素、そして、太陽系のシステム、さらには、自然の現象がアパッチの人々には、とても崇拝されています。こうした、自分たちの理解を超えているものは、いつも超自然のものとして考えられているのです。

この世の創造の始まるときには、何も存在していませんでした。この地球も、空も、太陽も、そして、月も存在しませんでした。ただあるのは、暗闇だけがあったのです。

そして、突然、あるときに暗闇のなかから、一枚の薄い円盤が、一方の面は黄色、そして、もう一方の側は、白色で、これが、上空にうっすらと現れてきました。その円盤の上には、髭を生やした小さな男、そうなのです、この人こそ、創造の神であり、天界に住んでいる人だったのですが、その人が座っていました。あたかも、長い転寝から目を覚ましたかのごとく、彼は両手で自分の目と顔をこすっていました。

かれが何処までも広がる暗闇のなかに目を向けると、そこの上のほうになにやら光が見えてきました。そして見下ろしてみますと、それは、光の海になりました。そこで、彼は、東のほうに黄色の溝を作りました。すると、西のほうにはいたるところに、ほのかにたくさん色が現れ始めました。そこには、いろいろな色の雲も現れてきました。

その創造の神は、汗をかいた顔をぬぐい、両手をこすり合わせて、そして、手を下のほうに向けて押し付けました。見よ！ すると、輝いた雲が出てきて、その上に一人の小さな少女が座っているではありませんか。

“立ち上がりなさい。そして、あなたが何をしようとしているのか私に話さない。”と創造の神が言いました。しかし、少女は何もそれには応えませんでした。彼は、自分の目をもう一度こすり、そして、彼の右手を、親のいない少女のほうに差し出しました。

“貴方は何処から来たのですか？”彼女が彼の手を掴んで、そう聞きました。

“今、光っているあの東のほうからだよ”と、彼女が乗っている雲に踏み込んで彼はそう応えました。

“大地は、何処にあるのですか？”と彼女が聞きました。

“空は何処にあるのかね？”今度は、彼が聞きました。そして、“私は、次に何をつくろうか、考えて、考えて、考えているのです。”と歌うように言いました。実は、これが魔法の数字なのですが、四度もその歌を繰り返し歌いました。

創造の神は、彼の手で顔を拭き、そして、両手を合わせてこすりました。それから、こすって出てきたものを、あたり一面に放り出しました。すると、それらの前に、太陽の神が立っていました。そして、創造の神は彼の汗の出た額をこすり、その手から小さな少年をしたに落しました。

こうして、四人の神が、小さな雲の上に座り、一生懸命考えていました。

“私たちは、この次に何を作り出そうか？”と、創造の神が尋ねました。“この雲は、どうも、私たちがこの上で生活してゆくには、少し小さすぎるようだ。”

そして、彼は、毒蜘蛛のタランチュラ、北斗七星、風、稲光を作る人、そして、彼が作ったばかりの稲妻の音をしまっておく西の雲をいくつか作り出しました。

その創造の神は、歌いました。“さあ、大地を作ろう。私は大地のことを考えているのだ。大地、大地；私は、大地のことを考えている。”かれは、四度、繰り返し歌いました。

四人の神がみんなで手を振りました。そうしていると、そのうち、彼らの汗が一緒に混じり、創造の神が、手のひらをこすりますと、そこから、小さな丸いもの、茶色の色をしたボールが転がりおきました。それは、豆粒ほどの大きさもない小さなものでした。

それを、創造の神が足で蹴ると、そのボールが段々多きくなってゆきました。親無しの少女が今度は蹴りました。すると、もっと大きくなりました。太陽の神と、小さな少年もまた、順番に同じように力いっぱい蹴りました。と、そのたびにそのボールは大きくなってゆきました。創造の神が風に、そのボールのなかに入り、それを吹いて大きくする様にいいました。

毒蜘蛛のタランチュラが黒い糸を吐いて、そのボールに取り付け、東のほうに向かって、彼のありったけの力でその糸を引っ張りながら、すばやく這っていききました。タランチュラは同じように、南の方角には、青い糸を、そして、西には黄色い糸を、最後に北の方角には、白い糸を張りました。それぞれの方角に力いっぱい引っ張りましたので、その茶色の玉は、とてつもなく大きなものになりーそれが地球になったのです！ ただ、そこには、丘も、山々も、あるいは、川も、見えるものは何もありませんでした。；あるのは、ただ、まっ平らな木も生えていない、茶色の平原があるだけでした。

創造の神は、自分の胸を掻き、指をこすりますと、そこには、ハチドリがでてきました。

“北に向かって、そして、南にも、東にも、西にも飛んでお行き。そして、お前が見たものを私に聞かせなさい。”と、創造の神は言いました。

“すべて、うまくいっています。”と、戻ってきたハチドリが報告しました。
“地球は、西側のほうが、水が溢れていて、一番素敵です。”

しかし、地球は上に下に、踊り、転がり続けていました。そこで、創造の神は、地球を支えるために、四本の巨大な杭を作りました。一黒と、青と、黄色と、そして、白い杭です。風がその四本の杭を運びそれをその地球の4つの重要な箇所の下に設置しました。こうして、地球は安定にいられるようになりました。

創造の神が歌いました。“世界が、今、作られた。いまや、安定してそこにある。” かれはこの歌を四回繰り返しました。

今度は、創造の神は、空についての歌を歌い始めました。なにもないけれども、かれは、そこには、ひとつのものが足りないと考えていました。そのことについて四度ほど歌を歌うと、28 人の人が現れて、その地球の上に空を作る手伝いを始めました。創造の神は、地球と空のために酋長を決めるように大きな声で繰り返し言いました。

かれは、光の主をその世界を回るように送りました。そして、かれは、トルコ石の殻のなかで見付かった、まだ、十分に出来上がっていない三つの創造物、二人の少女と一人の少年と一緒に戻って行きました。彼らは、目もなく、耳もなく、髪も、口も、鼻も、そして、歯もありませんでした。腕と足はありましたが、指や、つま先はありませんでした。

太陽の神が、来て、作業小屋を作るよう昆虫を呼びに行きました。親無しの少女がそれを四つの思い雲で覆いました。東のドアに通ずる道に彼女は、汗を流して疲れたあと使うように足に巻く毛布となるよう、やわらかくて、赤い雲を用意しました。

四つの石が作業小屋の中にある火で熱せられました。その三つのまだ完全に出ていまい創造物は、その中におかれていました。ほかの者達が、外で、作業が終わるまでの間、癒しの歌を歌っていました。魔法の赤い雲の毛布の上に立った、三人の不完全のものが出てきました。創造の神が彼らにそれぞれ指とつま先と、口と、目と、耳と鼻、そして、髪を与えるために、手を彼らの方に差し出し、手を振りました。

創造の神は、その少年に、天上の人々 **Sky-People** の酋長になるものということで、**Sky-Boy** と名づけました。少女につけた名前は、彼女が大地と、その作物を生み出すものということで、**Earth-Daughter** という名前でした。もう一人の少女の名前は、**Pollen-Girl** で、これは、すべての地球上の人々 **Earth-People** の健康を見守るということでつけられた名前でした。

その地球が、平らで、まだ荒地だったとき以来、創造の神は、動物や、鳥、そして、林や、丘を作ったら楽しいだろうと考えていました。彼は、鳩を呼び、世界がどのようになっているか見てくるようにいいました。4 日経って、彼がもどって来て、次のように報告しました。“世の中を取囲んでいるものは全て素晴らしい状態です。しかし、いまから 4 日後に、地球の別の側の水が溢れ、そして、たいへんな洪水を起こすことになるでしょう。” と。

そこで、創造の神は、非常に背の高い松の木を作りました。親なしの少女が松のヤニで木の枠を覆いました。こうして、大きな、しっかりした入れ物ができました。

4日後に洪水が起きました。創造の神は、28人の協力者と一緒に雲の上に上って行きました。親なしの少女は、他の者達を、大きくて中空の容器に入れ、上にしっかりと蓋をしました。

12日後に水は、丘の天辺に打ち上げられた大きなボールを残して、引いていきました。猛烈な勢いで流れていた洪水は、平原を山と、丘と、谷と、そして、川に変えていました。親なしの少女が、打ち上げられた容器の中から、新しくできた地球に神々を連れ出しました。彼女は、彼らが協力者達と一緒にいる創造の神に会うまで彷徨いながら彼らを彼女の雲の上に連れて行きました。創造の神は、地球に洪水が起きている間に、空を作るという仕事を終えていました。

二つの雲は、一緒になって谷の方に降りて生きました。そこで、親なしの少女は、みんなを集め、創造の神のほうに耳をかたむけるように言いました。

“私は、あなた方を残して行く積もりです。”と彼が言いました。“私は、あなた方、みんなが完全で、幸せな世の中をつくるように全力を尽くすことを願っています。”

“そこの、雷の音を作る人、あなたは、雲と水を作ってください。”

“そこの、Sky-Boy、あなたは、Sky-People のみんなの面倒を見てください。”

“Earth-Daughter、あなたは、全ての作物と Earth-People を準備してください。”

“Pollen-Girl、あなたは、彼らの健康に注意をし、彼らを導ってください。”

“Girl-Without-Parents のお嬢さん、私は全てのものを作るためにあなたをここに残します。”

創造の神は、Girl-Without-Parents のほうに向き直り、そして、彼らの脚を手で、摩り、素早く、彼らを下界に力いっぱい放りだしました。すると、たちまち、彼らの間に、ものすごく大きな柱が立ち上がり、それに創造の神が手をかけると火が燃え上がりました。

煙が渦となって大きな雲になり空に上って行きました。この雲の中に、創造の神が消えていったのです。ほかの神たちも、地球の人たちのために 28 人の働き手を残して、彼に続いて別の雲の中に消えて行きました。

太陽の神は、自分の住む東に行き、そして、太陽とともに旅をしています。親のない少女は、西の水平線のずっと向こうに住むために離れて行きました。小さな少年と花粉の少女は、南に雲の家を作りました。北斗七星は夜になると北の空に見えるような位置に残っています。そして、みんなの目印になっているのです。

北斗七星が、この地球ができるときに、太陽や、月と同じように大事な働きをしていたことがよくわかります。インディアンの世界にも、こうした自然のなかの超自然のものが、自分たちの創造にかかわってきたという考えがあるのは、とても楽しい気がします。

それにしても、四人の神、そして、28 人のお手伝いの人たち、この 28 という数字は、陰暦の一月ですし、これを 4 で割ると 7 になり、一週間となるのです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

35. タスキギー

アメリカインディアンの Lore

すべての創造の始まる前には、何処にも水が溢れていました。しかし、人は誰も居らず、また、動物も、そして、地球するも見ることができませんでした。

しかしながら、すべての大地と水を持ったならきっと素敵なことになるだろうと会議をしている鳥たちがいました。“大地を持とうではないか。そうすればわれわれは、もっとたくさんの食べ物を手に入れることができるのだから”と、

鳥のだれかがいいました。するとほかの鳥が、“こんな風にわれわれは見ずが好きなことから、全部の水を持つことにしよう”と言いました。

そうして、みんなでワシをどちらの道に行くべきか決める彼らの酋長に決めました。わしは、大地の上に立つ決心をし、みんなに尋ねました。“だれか、大地を調べに行くものはいなかだろうか？”

はとが最初に進んで名乗りをあげ、そして、飛んで見に行きました。そして、4日間、彼は狩を済ませたあと、戻ってきて、“結局、私は、何処にも大地を見つけることができませんでした。”と、報告をしました。

ザリガニが泳ぎながらやってきて、打ち合わせをした人たちから大地を調べる手伝いをするように頼まれました。そして、彼は、4日の間、姿を水のしたにかくして消えていました。そして、彼の姿が再び水面の上に現れたときには、彼は、そのはさみになにか汚れたものを持っていました。かれは、水のずっと下の方に、すこしの大地を見つけたのでした。

ザリガニはその汚れたもので丸いボールを作り、酋長のワシのところに差し出しました。すると、ワシは、それを遠くに投げたのでした。そして、4日がたつと彼は、戻ってきて、みんなにこう言ったのです。“さあ、大地がありました。島が作られているのを見ることができます・・・私についてきてください。”

すると、そこに住んでいる鳥たちがみんなワシの後につづいて飛んで行き、まだ、非常に小さかったけれど、できたばかりの大地を見に行きました。そうしているうちに、段々地球が、大きくなり始め、水面は次第に下がって行きました。あちこちにたくさんの島が現れ、それが一緒になって大きなものになってゆき、こうしてできた大きな島が、終いにはひとつの地球になっていったのです。

これは、アメリカインディアンにつたわる、地球誕生の物語です。ワシが最初に酋長に選ばれたのは、ワシが非常に神に近い存在と考えられているからです。ワシは、人間よりも神に近いところ、つまり空高く、いつも人間達の生活を空の上から見下ろすように飛んでいます。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

36. その老人はどのように人を作ったのでしょうか

アメリカインディアンの Lore

これは、ずーっと、ずっと昔の、そのまた、まだ、昔のこと。それは、まだ、この世界ができたばかりの頃の話です。その頃には、そこに住んでいるのは、その老人の Na-pe と、あるときは、彼の友達であり、また、あるときは敵でもあったコヨーテの Ape'si、それと数頭のバッファロー、たったそれだけしかいませんでした。それ以外には、他の人も他の動物もいませんでした。しかし、老人は全てのそれを変えてしまいました。その老人は、孤独だったし、また、怠けものでしたから、彼は先ず第一にそれを変えたのです。；そして、多分、そうすべきではなかったかもしれませんが、しかし、とにかくではありますが、彼はそれを実行したのでした。つまり、彼は、こんな風にしたのです。

ある日、Na-pe は、なかに自分で楽しいことをしようと、あれこれ考えながら、火のそばに座っていました。彼は、若いバッファローを腹いっぱい食べていたので、狩に行く必要がありませんでした。自分の家があり、働く必要はなにもないし、火をおこす必要もありませんでした。彼は、とても快適な生活をしていたのですが、しかし、気分が満たされているというわけではありませんでした。唯一、彼と一緒にいたコヨーテの Ape'si は、自分のする仕事があり、そのためにどこかに行っていました。とにかく、彼は、Ape'si と喧嘩をしているので、お互いにあまりいい関係ではありませんでした；だから、たとえ彼がそこにいたとしても、老人は、やっぱり孤独だったのです。彼は、火のなかを杖でついたり、川に 1,2 個の石を投げたりしていました。パイプに火をつけて、その辺りを歩きまわったり、・・・課と思うと、腰を下ろして、だれか一緒にタバコを吸う友達がいたら、そして、“自分とおなじような、誰か”と話をすることができたらどんなにか素敵なことだろうかなどと考えていました。そして、また、火のなかを杖で突つき、小石を川に投げっていました。

彼は、考えました。“なぜ、そうではないのだ？ 私は老人なのだ！ 私は自分が欲しいものは何でも作ることができるんじゃないか。なぜ、自分は、私と同

じような別の人を作ってはいけないのだろうか？”そして、彼は、突然歩きだしました。

最初に、彼は、小さな静かな池を見つけました。そして、そこに写った自分の影を、自分が作りたいと考えているものがどんなものであるかを知るために、注意深く覗き込みました。そして、彼は、できるだけたくさん、数えられるだけの自分の骨格を数え、かの形をしっかりと頭に入れました。

次に彼は、粘土を取りにいき、そこで、自分が記憶した形の骨をたくさん作り、それを火で焼いて、硬くしました。彼がすべての骨を作り上げると、今度は、それを取り出し、よく眺めて見ました。すると、だいたいのは非常によくできていたのですが、なかに、曲がってしまったもの、あるいは、細すぎたり、また、焼いているうちに割れてしまったりしたものなどがありました。そして、それらは横に山積みにおきました。

つぎに、彼は、うまくできた粘土の骨だけを集めてそれを人間の形に組み立てて行きました。そして、彼は、それらをバッファローの腱で結んでゆき、バッファローの脂肪を使って、注意深く肉をつけてゆき、なめらかな体にしました。今度は、バッファローの血が混じった粘土を使い、それを塗ってゆき、バッファローの体のなかから取り出した肌ですべてを覆うようにキチンと張りめぐらしました。こうして、形が出来上がると彼は、座ったタバコにもう一度火をつけました。

彼は、かなり注意深く作り上げたその人間をよく見ました。それは、彼が作りたと思っていたものとはかなり違ってはいましたが、それでも、ないよりもましというものでした。

“私は、もったきちんと仕上ることにしよう。”と、Na-pe は言いました。

彼は、こうした作った新しい人間をもちあげ、彼の目、鼻、そして、口に、タバコの煙を吹き込みました。すると、その人形に生命が宿ったのです。Na-pe は、その人間を火のそばに座らせ、彼にパイプを持たせました。そして、また、粘土のあるところに行きました。

そこで、Na-pe はたくさんの人を作るために一日中働きました。ところが、骨を作るときに、なかにはたくさんのあまりよくできていないものがあり、それを捨て、また、別のものを作りましたので、とても長い時間がかかりました。それでも、とうとう彼は、何人かの男の人間を作ることができ、それらを火のそ

ばに座らせて、パイプを順にまわしました。Na-pe は彼らと一緒にそうして座っているととても幸せに感じました。かれは、自分の家のドアの外に捨てた骨を山積みにして置きました。

それから、Na-pe と男達は、彼のキャンプのなかで一緒に生活し、男達は狩をすることを学び、Na-pe と連れ添って、あるものは一緒にタバコを吸い、みんな、とても、満足な生活をしていました。

しかし、ほったらかしにされた骨の山は、とても厄介なものでした。男達が、Na-pe の小屋に出入りする時には、いつも彼らは、その骨につまずいたのです。

風が、夜、恐ろしいほどの音を立てながらそれらを吹き飛ばしました。骨は時々、もっと厄介な状態に崩れおちていました。そんな状態でしたので、Na-pe は、その骨を川に捨てようと考えていましたが、彼は、ちょっとばかりそれが面倒くさいと考えていました。そして、なかなかそれを実行しなかったのです。というわけで、骨はいつまでもそのままの状態になっていたのです。

このとき、それまで居なかったコヨーテの Ape'si が何処からか帰ってきました。彼は、大勢の人がいることに気がついて、キャンプのまわりにやってきました。そして、Na-pe の手作り作業でそんなものを作ったとは思わなかったといって、非常にびっくりしていました。また、彼は、家の前に山と積み重ねられた骨を見て非難をしました。“お前さんは、何とかそれを使って・・・人間になるようにすべきだと思うんだが。”とコヨーテの Ape'si が言いました。

“分かった。じゃー、そうすることにしよう。”と Na-pe が言い、“だが、非常に上手にとは行かないよ。それらから人間を作るとはとても難しいだろうから!” “分かった。なら、私が手助けしよう。手伝うよ!”と Ape'si が言いました。“私にいい智恵があるから、それで、お前さんがつくった貧弱なものよりももっとすばらしいものが造れるよ!” そういつて、二人は早速仕事に取り掛かりました。カチカチ音を立て、ぺちやくちゃ話しをしているそこに捨てられていた骨を選び出し、これを結びあわせました。それから、Na-pe は粘土とバッファローの血を混ぜ合わせ、それらは覆いました。彼は、その骨から人が出来上がっていくことに非常に満足していましたが、コヨーテの Ape'si のほうは、絶えず、いろいろと調整をしていました；ですから、仕事が終わったあと、出来上がったものは、前のものとはまったく違っていたのです。Na-pe はそれを疑わしげに観察して、それから、その目、鼻、口に、彼が男達を作るときにしたように煙を吹き込みました。そして、女たちに命が宿りました。

Ape'si と Na-pe は、残りの骨で女達を作りました。そして、彼らがそれぞれに命を吹き込む仕事が終わると、おんなたちは、たちまちおしゃべりを始めたのです。Ape'si は、こうして自分たちがした仕事を非常に喜びました。“私が男達を作った時には、” と Na-pe が言いました。“私は彼らにタバコを吸わせるために火のそばに座らせたんだがね”

この時代でさえも、もし、あなたが一塊の男達と、一塊の女達を別々に持っていたとしても、その男達は、多分、火のそばに座ってタバコを吸いたがっていたでしょう。一方、女達は、おしゃべりをしていたでしょう。なぜ、そうだったのかは、それは、カチカチ音をたてて、おしゃべりをしていた捨てられた骨から作られたからなのか、あるいは、コヨーテの Ape'si が ——彼自身が非常にざわざわした生き物なのですが、かれがそれらを作るのに一役かっていたからかどうかは、誰もそのことを明らかにすることはできないのです。

これは、この世に男と女が創造された時の話です。男は、タバコを吸う人間として、すなわち、タバコは平和の象徴ですから、部族を守る役目は生まれながらに男に授かったものということです。一方、おんなは、生まれたときからおしゃべりが好きだったということです。これは、西洋人ばかりではなく、インディアンの世界でも同じということで、とてもこっけいな気がします。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

37. イロコイ族の国の起源

イロコイ族

アメリカインディアンの伝説

およそ、1390年の頃、今のニューヨーク州の辺りは、5つの強力なインディアンの部族が力の均衡を保っていたところでした。かれらは、後に、南のほうから来た、タスカロラ族という巨大な国に統合されてしまいました。しかし、結局、イロコイ族、モホーク族、オネイダ族、オノンダガ族、そして、カユガ族は、考えを一緒にしてひとつにまとまり、大きなイロコイ族となりました。こうして、1715年には、タスカロラ族は、イロコイ族の国に吸収されてしまいました。

五つの部族

昔、昔、そのまた、昔のことですが、天の世界の聖霊の一人が地球にやって来て、様子を見ていました。彼は、その辺りを旅して回り、そこがとても素晴らしい場所であることが分かりましたので、かれは、そこで生きてゆく人々を創造しました。天に戻る前に彼は、かれらに名前をつけ、そして、みんなを集めて彼は、自分がかれらに与える分け前の話をしました。

“モホーク族には、とうもろこしをあげます。”とかれは言いました。“我慢強いオネイダ族には、ナッツとたくさんの果物の木をあげることにします。勤勉なセネカの人々には、豆が与えられます。ここのやさしいカユガ族には、食料になる根株を上げます。聡明で雄弁なオノンダガ族には、食料として葡萄とカボチャを、そして、キャンプファイアーで吸うタバコを与えましょう。”と言いました。

彼が話しをした多くのものたちは新しい人々でした。そして彼は、自分を光り輝く雲で包み、空を飛ぶ矢のように太陽のところに行ってしまいました。そこは、彼が帰ってきたので、彼の兄弟の天の聖霊たちは非常に喜びました。

六つの国

昔、昔の、そのまた、ず一っと昔のこと、まだ、この地球上に人々は居ませんでした。そこは、どこもかしこも深い水に覆われていました。空には、一面に鳥たちが飛んでいました。そして、たくさんの怪物たちが、その水を所有していたのです。

ある日、鳥たちは、その空の上から綺麗な娘さんが落ちていくのを見ました。そして、直ぐに、大きなアヒルたちは、会議を開いたのです。

“どうやったら、われわれは、彼女が水のなかに落ち込んで行くのを防ぐことができるだろうか” 彼らは、考えました。

長いこと、あれこれ議論した後、かれらは自分たちの羽を広げれば、彼女が落ちていくその力を食い止めることができると結論しました。こうして、アヒルたちは、お互いの羽が繋がるようにいっぱい自分たちの羽を広げたのです。そして、この美しい娘さんは、無事、彼らの元にたどり着くことができたのです。

すると、今度は、水の奥深いところにいる怪物たちが、どうすれば、綺麗な娘さんを水の恐怖から防ぐことができるか、それを決めるための会議を開きました。一両日して、怪物たちは、彼らが彼女を守ることができないと、ただ、**Giant Tortoise** (大カメ) だけは、彼女の重さを支えるだけの十分な大きさがあると決断しました。彼は自分から進んで、彼女を自分の背中にやさしく乗せたのです。**Giant Tortoise** は、不思議にも体がドンドン大きくなり、そして、見る見るうちに大きな島になったのです。

しばらくしてから、天の世界の娘さんが双子の子供を生みました。そのうちの一人は良心の聖霊でした。彼は、この地球上のすべての善良なものを作り、とうもろこしを作り、果物を作り、そして、タバコを育てるために種を恵みました。

2人のもう一人は、悪の聖霊でした。彼は、雑草の根と、いろいろな虫や昆虫を作りました。さらに、善良な動物や鳥達の敵となるような悪魔を作りました。

一方、**Giant Tortoise** は、熱心に、どんどん、どんどん、手を広げて行きました。ですから、世界が大きく、大きくなってゆきました。そして、あるときには、**Giant Tortoise** は、丁度、大地が地震で揺れるような、そんな大きな動きをしました。

何年か、長い年月が過ぎ、**Sky-Holder**、インディアンは、彼のことを **Tarhu-hia-wah-ku** と呼んでいるのですが、彼が、何人かの人間を作る決断をしました。彼は、そうして作った人間は、美しさも、強さも、そして、勇敢さも、こうしたものが誰にも負けないようになることを願っていました。彼らが住んでいた島の奥まったところから、その **Sky-Holder** は、6組の人間を生み出して来ました。

一番最初の一組は、現在では、**Mohawk** 川と呼ばれている川の近くにおいて行かれました。そこで、この人たちは、**Mohawk** インディアンと呼ばれるように成りました。二番目の組のものは、大きな石のそばに自分達の家を造るように移されました。彼らの子孫は、**Oneidas** 族と呼ばれています。そして、彼らの多くは、**Oneida Lake** の南側に住んでいますが、残りのものたちは、**Oneida Creek** の盆地に住むようになりました。三番目の組は、高い丘の上においていかれ、**Onondagas** 族と呼ばれる人たちになりました。

そして、四番目の組のものは、**Cayugas** 族の先祖になり、碁盤目の組のものは、**Seuecas** 族の先祖になりました。彼らは、どちらも、いまの **New York** 州のあたりに定着しました。しかし、**Tuscaroras** 族は、**Roanoke** 川に沿って、今日、**North Carolina** として知られている地方に連れて行かれました。そこで、**Sky-Holder** は、彼が、これらの人々や、その子孫に、役にたつ芸術や工芸の技術を教えながら、自分の家を建てたのでした。

Tuscaroras が、彼らと一緒に彼が居ることが彼らをほかの **Iroquois** の部族よりも強くしているのだと言い張るのです。しかし、ほかの五つの部族は彼にこのように言おうと考えているのです。“われわれの部族は、それぞれ **Sky-Holder** が地球に居た時に彼の家と一緒に建てたとても親切な部族でした。”

Onondagas は、“われわれは、会議をするための火を持っています。これは、われわれが選ばれた部族だということを意味しています。” といっています。

こうして、何年かの間に、非常に沢山の **Iroquois** の家族が国中に散らばって生きました。そして、その人たちが、いまでは、ペンシルバニア、カナダの中西部や、南東部に住んでいるのです。ある人たちは、自分達の狩猟をする熊たちがすんでいる地域に住み付きました。そうです。こうした人々は **Bear Caln**(熊一族)と呼ばれるようになったのです。また、ある人たちはビーバーが非常に沢山棲んで意いところで生活をするようになりました。彼らは、やはり、**Beaver Clan**(ビーバー一族)と呼ばれるように成りました。こうして、同じような理由で、鹿、狼、シギ、カメ一族などという名前の部族があちこちにできたのでした。

この話は、アメリカの東部に住んでいたインディアン達に伝わる、人類創造の伝説です。イギリスからメイフラワー号で西洋人が来る前には、インディアン達は東部にも随分と沢山の部族が住んでいたのです。

北の方から、

MICMAC, MALECITE, PASSAMQUODDY, PENOBSCOT,

PENNACOOK, MAHICAN NIPUC

ONEIDA ONONDAGA, CAYUGA, SENECA IROQUOIS,
WAPPINGER,

NANTICOKE CONOY, NOTTOWAY WEAPEMEOC SECOTAN,

TUSCARORA, などなど。

数え上げれば、きりがなほど沢山かの部族が平和に暮していたのです。やがて、彼らは、西洋人の押されて、アパラチア山脈を越えて西へ、西へと移り住んでいったのです。当時は、アパラチアの西は、インディアン達の天国だったのです。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

38. クモ岩〔ロック〕

ダイン/ナバホ族〔ナバホ語〕

アメリカインディアンの Lore

色鮮やかなアリゾナの Chelly 峡谷国立公園(ダ・シェイと呼ばれているところですが)のなかに、高さが 800 フィートにも及ぶとても威厳に満ちた、そして、美しい岩が聳えています。その岩は、蜘蛛岩と呼ばれてきました。国立公園局の地質学者の話では、「その岩ができたのは、2 億 3 千万年前のこと」なのだそうです。

長い年月の風化により、壮大な赤い色をした巨大な砂岩が作られたのです。そして、ずっと、ずっと昔に、Dine のインディアン(ナバホ族) は、その岩に蜘蛛の岩という名前をつけました。

何層にも重なり、様々な色をした崖の壁がその峡谷を取囲んでいました。そして、何世紀も、何世紀も時代を経て、Dine のインディアン達(ナバホ族) は、その崖の壁に大きな洞穴を掘り、ここにに住むようになりました。こうして作られた洞穴は、敵の襲撃や、大洪水から逃れるために、峡谷の谷からはずっと高いところに作られていました。

蜘蛛の部族の女は、Dine(ナバホ) の部族が、第三次の世界から、この第四次の世界に生まれ変わる、その創造のときに超自然を身につけていました。

その頃は、怪獣たちが暴れまわり、沢山の人々がその犠牲になっていたのです。蜘蛛の女が人々を愛するようになると、彼女は、Monster-Slayer(怪獣退治をする男) と、彼らの父となる Sun-God を探すために Child-Born-of-Water に、超能力を授けました。そして、彼らが Sun-God を見つけると、彼は、どうすれば、この大地から、そして、この海の中から怪獣を退治することができるか教えたのです。

彼女は、彼らを保護していましたので、**Dine**(ナバホ)族の人々は、蜘蛛の女を彼らのもっとも大切な、そして、誉ある女神のなかに奉ることにしました。

そして、彼女は、自分のいる場所として蜘蛛の岩の頂上を選びました。ずっと、ずっと昔に、**Dine**(ナバホ)のインディアンの先祖たちに機織の技術を教えたのは彼女だったのです。彼女は、みんなに、“私の主人の、蜘蛛の男は、この世界：太陽の光のよじれた光線、織物をするための長い糸；岩の結晶でできた頭の部分と光るシート、繊維の最初の状態を維持するために、天界に十字の柱と地球に畝を作る機織の機械を作りました。その当て木をするところには、つなぎ目をしっかりするために太陽の後光を使い、沢山の蜂の巣状の住居をつくるために、細かく区分するような方法できちんと立ててゆくために白い貝殻を使うことにしました。”何世代にも渡って、**Dine**(ナバホ)の人々は、こうしていつも機織に精を出してきたのです。

Dine(ナバホ)の子供たちは、年配者から、もし、彼らが行儀を悪くするようなら、蜘蛛の女が蜘蛛の巣の梯子を降りてきて、その子供を彼女の家まで引き連れて行き、食べてしまうと聞きかされていました。

子供たちは、また、蜘蛛の岩の天辺は、行儀のよくないために食べられてしまった**Dine**(ナバホ)の子供たちの骨が太陽の光にあたり、色あせて、白くなっているのだ！とも聞きかされていました。

ある日のこと、洞穴に住んでいた善良な**Dine**(ナバホ)の若者が、**Dead Man's**(死んだ男)の谷、ここは、**Chelly**の峡谷の一部になっているところなのですが、そこで狩をしていると、突然、彼の目の前に敵の部族があらわれ、彼を峡谷の奥深くまで追い掛け回して来ました。善良な**Dine**(ナバホ)の男は必死に走って、あちこち隠れる場所がないか、あるいは、何とか逃げ切れる場所はないかと探しながら、逃げ回りました。

そうしているうちに、彼は、塔のように非常に高く聳え立つ蜘蛛の岩のまん前に来たのでした。さあ、一体彼は何ができたのでしょうか？ 彼には、その岩を登るのは到底無理なことがよく分かっていました。彼は疲れきっていたのでした。と、その時、彼の目の前にその岩の塔の頂上から絹のような糸が垂れ下がっているのを見つけました。

その**Dine**(ナバホ)の若者は、十分に彼を支えることができるほど強そうなその魔法の糸にすがりつき、それを、自分の腰に巻きつけたのでした。そのおか

げで彼は、高い塔をよじ登ることができ、そのときにはもう彼を追いかけるのを諦めていたのですが、その敵から無事に逃れることができたのでした。

善良な Dine(ナバホ)の若者はその塔の頂上に着くと、やっと一息つくことができました。彼は、そこには空腹を満たすワシの卵と、喉を潤すためには夜露があり、とても素晴らしいところだということに気が付きました。

彼を助けてくれたのは、蜘蛛の女の人だということを彼が分った時、彼がどれだけ驚いたか想像してみてください。彼女は、彼に、彼女がどんな風にして彼を、そして、その苦境の状況を見まもっていたのか、話して聞かせました。そして、彼女はまた、どの様にして強くて丈夫な蜘蛛の糸を作り、それを、岩にしっかりと結びつけたのか見せてあげました。そのあと、彼を助けるために蜘蛛の巣の糸の端を吊りおろし、彼がああゴツゴツした蜘蛛の岩によじ登れるようにしてやった方法を教えてあげました。

暫くして、その善良な Dine(ナバホ)の若者は敵がもはや居なくなつたと確認すると、彼は、心から、その蜘蛛の女にお礼を言いました。そして、今度も、また、彼女が用意してくれたその魔法の糸を使って峡谷の下まで無事に降りたのでした。彼は一目散に家に走って戻り、そして、部族の人たちに、自分の命が、蜘蛛の女の力によってどんな風に守られたのかを話して聞かせたのでした。

(訳者注)

何年か前に、「スパイダーマン」というヒーローが大活躍をする映画がありましたが、インディアンにとっては、蜘蛛の憧れの生き物でもあるようです。

そのインディアンは、夢を見ることは超能力の一つと考えているようです。夢に出てくる動物は、その人の守り神とされています。中でも、熊はとりわけ強い超能力を持ったものとして崇められて来ました。その熊に劣らず、強い力を持っていたのが蜘蛛です。蜘蛛の巣は、槍や弓矢が飛んで来て、付きぬけても、全く変化しないところから、蜘蛛の巣は不死身の象徴とされ、戦うことが自己主張であったインディアン達には、たいへん、ありがたいものだと考えられていました。

蜘蛛の巣の形をした、「ドリームキャッチャー」というのは、素晴らしい夢を見るお守りのようなものです。さあ、あなたは、今晚、どんな夢の世界に彷徨うでしょうか。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

39. イーグル話

アメリカインディアンの Lore

あるワシの死

by Brookie Craig

最近、私は、オレゴンにある、Warm Springs 居留地を訪ね、そのあと、Ashland Oregon にあるワシの連邦埋葬所に行きました。

あなたは、おそらくこれまで、Nathan Jim, Jr のことを聞いたことなどないでしょうが、彼は、連邦政府により 2・3 年前にワシの羽根とその剥製を不法に所有しているということで罪をかけられた Yakima インディアンでした。そして、彼は、裁判までの 14 ヶ月の間、連邦刑務所のなかで暗い日々を送って来ました。彼の弁護人は、それは、原住民のインディアンが彼らの宗教的な儀式を遂行するためにワシの羽根を所有してもよいという権利を保証している、新しく地域的に解放された行動であると主張しましたが、その主張が通らなかったために、彼は、連邦政府は、彼を再び有罪にし、そして、再び、服役に処することになるを恐れて、自らの命を絶ってしまいました。

このことが、彼の US 地方検事を動かし、彼はワシの連邦埋葬所から一束のワシの羽根を持ち出したのです。(そうです。その仕事にわれわれの払った税金が使われているのです。) そして、インディアンの居留地に行きましたので、彼らは、Nathan の聖霊を死後の世界に送るためにそれを使うことができたので

すが、しかし、彼の到着が遅すぎたために、Nathan は、亡くなるときに一枚の羽も持つことができませんでした。

そして、私は、連邦政府に対して訴え続けることを決断し、彼らが死んだワシを保管している Ashland Oregon に出かけていきました(層手図、政府はそこにワシの埋葬場所を持っているのです)、そして、畏敬の念と恐怖を感じて、(われわれ、原住民アメリカ人は、決して、連邦政府、これまでどれだけ沢山の懲罰を受けてきたことか、を信用していません) そして、もっとも悪い状況を想像して、その道を身震いしながら進んで行きました。私は、受付の場所で、そこでボランティアとして働いているという 1 人の老婦人に会わされました。そして、片方の手に私のインディアン関連担当局の身分証明書と、もう一方の手には、チェロキー部族の住民票を持ち、私に声高に誇りを持って話をするように望むであろう先祖のことを思い出そうと試みていました。ほんの少しばかり、背伸びして私は、こういいました。“私は、宗教上保証された自由の行動のもとの権利としてワシの羽根がほしいのですが” と。私は、そのとき、稲妻のような衝撃が落ちてくるものと予測していましたが、しかしそのかわり、私がみたものは、やさしく、にこやかに“もちろんです。”と言う彼女の顔でした。そして、こちらに歩いてきて、私に、野生生活管理の US 担当曲のポートランド事務所に行くために必要な書類が書き込まれた合衆国の小さな書類の包みをくれたのです。

私は、自分が、別の長老の署名の入った証明書と私が正真正銘のインディアンであるということを自分の部族が証明したインディアン関係事務所 AND の認定書を持っていなければならないということを読んだときに心が躍りました。これこそまさにワシの羽根の証明書に他ならなかったのです。

彼女は・・・“あなたは、白頭ワシ、それとも、黄金ワシのものを欲しいのですか?” と尋ねるのです。 えっ。選択できるの!?!?。そんな心の準備は私にはできていませんでした。・・・“あなたは、翼が必要なのですか、それとも、鉤爪でしょうか、あるいは、頭のところですか・・・ワシの全体でしょうか?” なっ、なっ、なんと !?!?!? わたしは、一枚の羽を求めてきただけでも容疑をかけられると思ってここに來たのに、彼らは、ワシ全体を私に提供するんだと!?! 私のその提案に全く困惑してしまいます。そして、彼女は私がこの全く世にも珍しい鳥のどこかを選択するかなど全く準備ができていなかったことを理解したようです。そこで、彼女は、私がおそらくその鳥の一部を絵に書いたものを見て、私が欲しいものが含まれているところを囲うのがよいと思ってい

るのではと、ニコニコしながら暗示するのです。・・私は、この瞬間、彼女の淑女ぶりに完全に打ち負けているのです。

私は、彼女にかれらが私のところにワシを送り届けるのか尋ねると、彼女は、**U.S.Mail** で届けると返事をするのです。郵便で!?! 私は、郵便で死んだワシを受け取るなどというこは想像することができません。そして、私は、その受け取りかかる郵送代を負担しなければならないと考え、気が重くなるのでした。

私は、一端ドアの外にでて、もう一度、冷静に考え、メインロビーにガラスのケースに入れられて、威風堂々と木に静か止って、展示されている剥製のワシを見るのです。そして、別のワシが空から落ちてくるのを現実知るときに私の気持ちは、抗し難い悲しみに包まれ、・・・、しかし、また同時に、彼の信念のために立ち上がったのではあるが、そして、誰も注目しないような私が考えていることについての動機を決して思い起こされないそんな男は、その時に恐ろしくもなるのです。ワシは、われわれの創造の主からのメッセージを運んでくれる神聖な情報の伝達者である、という人々の信仰のために、彼のむなしさのなかに落ち込む思いが、私を深い悲しみで一杯にさせるのです。誰もワシのためのメッセージが母なる地球に突っ込んだことを聞くこともないだろうし、多分、人々は、かつて、その神聖なものを耳にするチャンスがあったかもしれないが、しかし、いま・・・それを決して知ろうとしていないという考えが私を打ちのめすのです。

その中には、恐ろしいほどに悲劇的なものがあります。わたしは、このメッセージを誰かが聞いてくれることをねがっているのです。そして、**Nathan Jim, Jr.** と、空から落ちてきたワシの面倒をみってくれることを望んでいるのです。

国のシステムの中には、どうしても避けることのできない悪が存在しています。それは、宗教的な迫害から逃れようとしている人々に支えられているのです。そして、それが、そうした人々の気持ちを、自分達が宗教の自由の基本的な権利であるとして認識すべきものを自ら否定しているのだというそんな恐怖で満たしているのです。

by Randy Macey, Mohawk(モホーク族)

まだ、地球ができたばかりであった頃、全能の創造主は、全ての鳥達を作り出しました。そして、想像の主は、丁度咲き誇る花束のように鳥達の羽にとりどりの鮮やかな色をつけたのです。そして、想像主は、それぞれに鳥達が彼らが歌を歌うときの見分けがつくような歌をあげました。創造主は、鳥達に新しい日々を祝うように、揃って歌う合唱を教えました。そして、多くの鳥達の中から、創造の主は、リーダーとしてワシを選んだのです。そうです。ワシは、全ての鳥達のなかでは、一番高いところを飛んでいますし、また、一番とおくまで見通すことができるからでした。ワシは、創造の主への伝達者なのです。われわれは、四つの神聖な行事を執り行っているときには、自分達の頭にワシの羽根をつけるつもりです。そうしたワシの羽根で飾ったり、身に付けているというのは、創造の主が直ぐにわれわれに気づくようにするためなのです。ワシの羽根で、創造の主は、もっとも高い地位に崇め奉られるのです。

ある男がワシの羽根を授けられるということは、その人が、感謝の気持ちと、愛情と、そして、永遠の尊敬の念で認められているということなのです。その羽根は、そのためにたかれた神聖なタバコを携えていなければならないのです。このようにして、ワシと創造の主は、その新しくワシの羽根の保有者となった者の名前を知らされるのです。ワシの羽根の保有者は、人間の心の自然の状態を変えるようなどんなものも(お酒や麻薬など)は、決して、その神聖なワシの羽根に近づけるようなことはしないと硬く心に誓わなくてはなりません。そして、その羽を保管しておくための小さな家を造らなければならないようになります。そのワシの羽根は、必ず有効に使われなければならないのです。あなたは、そのワシの羽根を神聖な行事のときにしっかりとをもっていか、身につけるのです。こうすることによりワシの羽根は、再び神聖な力を注ぎ込まれるのです。決して、ワシの羽根を粗末にしたり、ぞんざいに扱ったりしてはなりません。そして、あなたをその羽根を汚したりしていけないのです。Mohawkの男は、彼の、Kahstowa(羽根のついた帽子) には、3本のワシの羽根を飾りにつけるのです。

by Erik Phelps

この地球が創造されたときに、その地平線に、非常に巨大な雷雲が湧いてきたのでした。稲光が光、そして、猛烈な音がして、雷が木の上に落ちて来ました。

そして、霧が晴れると、その木の一番高いところの枝に止まっているワシが現れたのです。そして、そのワシは、そこから飛び立って、ゆっくりと地上に降りてきました。地球に足がつくと、彼は、自分の足を前方に伸ばし、そして、その大地に足を踏み出すと、見る見るうちに彼は1人の男になったのです。

こうしたことから、われわれは、ワシが創造の主の使いであると考えており、われわれの神に対する行動の言葉を運んでくれるものと頼りにしているのです。ワシが、われわれが働いているところに来たときには、神がわれわれのことを気にかけ、そして、われわれを見つめてくれているのだということを私たちはよく知っています。

by D'Arcy Rheault

長老の Michael Thrasher があるとき、私に、こんなことを話してくれました。それは、ワシというものは、両方に翼をもっているのだ。もし、その翼が片方しかなかったなら、ワシは、飛ぶことさえできないんだ。一方の翼に、われわれは、心/知的な能力、体/運動機能を持った組織、そして、精神/感情を見つけるのだ。もし、その羽根が枝分かれをしているようなら、その人の心も分裂しているようになる。そして、もう片方の翼には、社会のしきたり/教育(これは、決して西洋式の教育のことを言っているのではない)、過程(物事が進んで行くときの動き)そして、儀式というものがあるのだ。ひとたび、こうしたものがバランスを持てば、その人の人生も、また、バランスの取れたものになる。その羽根の両方の側のバランスがとれたときには、われわれは、礼儀正しい人間になることができるのだ。

面白いことに、・・・ワシは、翼に両方のものがあるなどということを少しも気にしていない。・・・ワシは、その翼を精一杯広げて、創造のの神のところに飛んでゆくのだ。

Miigwech

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

40. ウサギとキツネ

アメリカインディアンの Lore

ある冬のことでありますが、そのウサギがキツネと出会ったのは、彼が雪のなかを走っているときのことでした。キツネは、すでにウサギの臭いをかぎつけていましたので、その時にはもう隠れることはできなかったのです。

“俺は **Ongwe Ias** だ。お前を食べるぞ!” とキツネが吠えたのです。“お前さんは、もう私から逃れることなどできないのだ。” ウサギはそのキツネから何とか逃げようと木のまわりを、岩の間を、大きな輪を描きながら力の続く限り、懸命に走りまわりました。しかし、彼が振りかえってみると、キツネは、もうすぐそこまで来ていて、今にも捕まえられようになっていました。“ワシは、**Ongwe Ias**” だと、もう一度キツネが吠えました。“お前さんは逃げ切れるものか。”

ウサギは、ここは何とか知恵を働かさなければならないと 気がつきました。かれは、はいていたモカシンを脱ぎ捨て、こう言いました。“私の前を走って。” すると、モカシンは雪の上に足跡を残して走り出しました。それから、彼は不思議な力を使って、自分は、あたかも死んだような振りをし、半分腐ったような臭いをだして、その足跡の横に倒れたのです。

キツネがその死んだウサギのところに來たのですが、彼は、それでも、その臭いをかぎつけるのをやめませんでした。“この肉は、もう悪くなっているようだ。” と彼はいいました。そして、雪の上に残っている足跡を見ながら、彼は、再び、猛烈な勢いを追いかけたのです。そして、ついに、ウサギの古びたモカシンに追いつき、それを捕まえました。

“ウへえー。” キツネは、齒軋りをして唸りました、“今回はウサギにしてやられた。しかし、この次はそれがどんなに腐っているように見えても、絶対に食べてやるからな。” かれは、こういいながらもどって行きました。彼は、丁度、あのウサギが死んだふりをしたところと思われるところに來たときには、

そこにはもう何もいませんでした。そこには、藪のほうに一本の足跡の線が残っていたので、キツネはそのあとを辿り始めました。

かれが、その足跡の脇に座っている年老いた女のところにやってきたのは、それから程なくのところでした。彼女の前には鍋があり、彼女は丁度シチュウを作っているところでした。

“まあ、そこにおかけなさいな、孫よ。”と彼女は言いました。“このおいしそうなシチュウを少し食べないかね。”

キツネはそこに座りました。“ここを ウサギが走って行くのを見なかった?”

“やあ。”と老婆は、あったかいシチュウが一杯はいった綺麗な木を彫って作った容器を彼に差し出して言いました。“とても、やせてガリガリなウサギがここを走っていくのを見たよ。骨ばかりでおいしそうな肉はなかったし、それに、歳とって、硬そうに見えたもんだよ。”

“そのウサギを食べようと思っていたんだよ。”とキツネが言いました。

“えっ、ほんとうかいな?”と老婆は言い、“確かに、そのウサギが、とてもへとへとになっていて、おそれおののいていたから、お前さんはほんとうに草するつもりだったんだね。ウサギは、お前さんがすんでの所まで来ていることを知ってなきゃならなかったんだよ。さあ、私があげたシチュウをお食べよ。”

キツネはシチュウを食べ始めました。そして、そうしているあいだ、彼は、その老婆のほうを見ていました。“お婆さん、あなたはどのように自分の頭のうえにそんなに高い羽を二つもつけているんですか?”と彼が尋ねました。

“ああ、この羽のことかね?”と老婆は言いました。“これはね、獵師をやっている息子のことを 思い出すようにつけているんだよ。おお、うしろをご覧よ・・・彼がいまここにやってくるよ。”

キツネが振り返った、その時、老婆は、彼女は自分の身につけていたコートを投げ、そして、空中高い跳ね上がりました。彼女はキツネの頭の右のほうにまわり、そして、そのコートの下に隠してもっていた大きな木の枝でキツネを嫌というほど強く叩きつけました。

キツネが気がついたときには、彼の頭には強烈な痛みが走りました。そして、シチュウの鍋を夢中に探しましたが、しかし、そこにあったのは、ただくぼみのある切り株だけでした。木でできたスプーンの器を探しましたが、見つかったのは、泥と汚れた水の入った容器の形をした木の皮だけでした。そして、彼の周りにはあたり一面ウサギの足跡があったのです。“そうか、また、このワシを馬鹿にしたな。”とキツネは気がつきました。“よし、今度こそ、これが最後だ。”彼は、飛びはねて、また、そのウサギの足跡を追いかけ始めました。

そして、ほどなく、彼は、その足跡のそばに座っている一人の男のところにやって来ました。その男は、手にはカメの甲羅でできたガラガラを持ち、いかにも祈祷師のような服を着ていました。

“ここをウサギが通らなかったかい?”ときつねが、聞きました。

“いかにも。”と祈祷師が応えました。“だけれども、なにか病気のように、とても弱弱しかったよ。”

“そのウサギ、そのウサギ。それを私は食べようとしているんだ。”とキツネが言いました。

“あーっ”と祈祷師が言いました。“それでかね。そのウサギは随分怖がっていたよ。あんたのようなとても強い戦士が何かを捕まえようと一度考えたら、かれなど絶対に逃げおおせないよ。”

キツネは、得意になりました。“そのとおり。”と彼は言い、“私こそ、Ongwe Ias なのだ。私から、逃れて生きていられるウサギなんて何処にもいないよ。”

“ちょっと待った。若いしよ。”祈祷師は、亀の甲羅でできたがらがらのお払いを鳴らしながら言いました。“ところで、その頭は一体どうしたというんだい？ 何か怪我をしているようだが。”

“ああ、これかい。これは何でもないんだよ。ちょっと、木の枝が落ちてきてぶつっただけだよ。”とキツネが言いました。

“お若いの。”と祈祷師は、“ああ、よくないね。ちょっと私に見せてご覧よ。そうすれば、直ぐに腫れが引くよ。ウサギなんて、そんなに遠くにはいけっこないんだから。さあ、こっちに来て、座んなさいよ。”

こうして、キツネが座ると、祈祷師が彼の直ぐ横にやってきました。そして、彼のかばんを開けると、そのなかから何かを取り出し、それをその傷の周りにふりかけはじめました。

キツネは、その祈祷師の男を近くでよく見ました。“どうして、あなたは、二つのはねを身に着けているんですか？”と彼は尋ねました。

“ああ、この二つの羽かね”、と祈祷師は言い、そして、“これはな、私が偉大な力を持っているということを示すものだよ。おお、丁度、わたしはこれをこうして振り回さなければならなくなった。するとワシがここに降りてくるんだ。見てみろ、あそこだよ！ ワシが今、降りてくるところだ。”

キツネは、指されたほうを見ました。その途端、その祈祷師は、キツネの頭越しに空中に飛び上がり、そして、彼の持っているカメの甲羅でできたガラガラのお払いの棒で彼を思い切り叩いたのです。

それから暫くして、キツネが気づいた時には、彼は、空き地の中に一人ぼっちになっていました。彼の頭にはひどい傷でまくれ上がり、かさぶただけになっていました。そして、もう、そこには祈祷師はいなかったのです。辺りにあるのはウサギの足跡だけだったのです。

“もう、騙されないぞ。”とキツネは怒鳴り散らしました。彼は、辺り一面に聞こえるように大きな、恐ろしい唸り声を上げました。“おれは、**Ongwe Ias**だぞ。”彼は、叫びました。“俺は、キツネなんだぞ!”

足跡のずっと前の方で、ウサギがこのキツネの叫び声を聞いていました。彼は、まだその時も、疲れきっていてとても走って逃げることはできませんでしたので、彼は古い枯れた木の中にもぐりこみました。

キツネがその木のところに来て立ち止まりました。“この木はひょっとするとウサギに違いない。”と彼は言い、そして、小さな枯れた枝の一つを叩いてみました。すると、その枝が折れて地面に落ちて来ました。“これは、いけない。”とキツネはいいました。“これは、まずかった。”

実は、その木は本物だったのです。そして、かれは、自分が追いかけている足跡が、古いものであるということがはっきりするまで、また走りだしました。そして、彼は、何時までも輪を書いてぐるぐる回っていたのです。“あの木だ!”と彼は言いました。

かれは、さっきの木が倒れていたところまで急いで戻りました。でも、そこには木はもうありませんでした。そこにあったのは、あの小さな枝が落ちたところに、少しばかりの血の跡だけが残っていたのです。キツネは、それに気がつかなかったけれども、彼が叩き落したその枝は、実は、うさぎの鼻の先だったのです。そして、それ以来、ウサギの鼻は、実に小さなものになってしまったのでした。

藪の方に向かっているのは、まだ新しいウサギの足跡でした。“今度こそ、捕まえてやるぞ!” とキツネは叫びました。

ウサギは、もう、くたくたになっていました。

彼は、もう、自分の持っているとりつくを全部使い果たしてしまったのです。それなのに、まだ、キツネは彼のあとを追いかけて来ていました。彼は、その足跡の横の古い木のところに来ました。彼は、その周りを四度ほど回り、そして、最後の力を振り絞り、すぐそばにある沢山のブラックベリーの実の真ん中当たりに大きくジャンプして飛び込んで行きました。そして、息を殺してじっと彼を待っていました。

キツネが古い木のところにやってきて、その周りにあるウサギの足跡を眺めていました。“ハハーン。” といってキツネがニヤニヤしました。“また、お前さんは、私を騙そうと言うんだな。” 彼は、その古い木に噛み付きました。すると、その腐った木のかげらが彼の口に入りました。“ハハーン。” キツネは、“なんだ、お前は、まだ、自分を腐った木のような味にしているんだな。だが、わたしは、Ongwe Ias なのだ。キツネだぞ。もう、お前さんは私は二度と馬鹿にすることはできないんだ。”

こうして、キツネは、その腐った木を吐き出したり、噛んだりしながら、全部食べてしまいました。ブラックベリーの藪のなかの隠れたところから、ウサギがこれをじっと見ている、必死に笑うのをこらえていました。キツネが腹が満腹になりましたが、それでも、彼はまだ咳き込み、そして、口をもぐもぐさせ、ちっともすっきりしていない様子で、そこからどこかに行ってしまいました。

そのあと、ウサギは自分が隠れていた藪のなかからゆっくり出てきて、そして、悠々と自分の好きなほうに行ってしまいました。

この話の中に、ウサギの鼻が低くなった話がでてきますが、動物達の特徴をこうした話のように説明されると、なんとなくなるほどと思うのは、これこそ、昔話の味のような気がしますが、・・・・。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

41. お爺さんの話

Native American Lore

“お爺さん、それは偉大なる聖霊、がこの地球の上で、もう一度私を見守ってくれています。そして、私のいかにも消えそうな声に耳を傾けているのです。そうです、あなたが最初に存在していました。そして、あなたはあらゆる必要なものよりも古く、そして、どんな祈禱をする人よりも年長なのです。全てのものはあなたの僕なのです-----二本足のものも、四足の動物も、そして、空を飛んでいる鳥達、さらに、生命を持っている全ての植物もそうなのです。

“あなたは、御互いに近づけるため、地球の四等分されたそれぞれに力を与えました。あなたは、私に快適な道と、困難を伴う道を交叉するようにさせました。そして、それらが交叉しているところは、聖域なのです。明けてもくれても、いつも、永久に、あなたは、全てのものの命なのです。”

ブラックエルク：Oglala Sioux 族の神聖な男

Grandfather Cries(お爺さんの嘆き)

Charles Phillip Whitedog

お爺さん、私がわかりませんか？

私は、あなたの一族

あなたの息子のそのまた息子

私がここにやって来たのはあなたに尋ねるため。

お爺さん、私がわかりませんか？

私は、自分がインディアンであることをやめることができますか

インディアンでありたいと思っている人がほかにもいます。

そして、もし、何も無いところから始めることができるなら

何かから留まることのできるはずですね？

お爺さん、私がわかりませんか？

お爺さん、私はあなたのようには見えないし、

私は、あなたの知っていることも分かりません。

青ざめた肌の下に隠すことはたやすい。

でも、誰も私の苦しい思いを知ってはいないし、

あなたの偉大な孫達のために流す私の悲しい涙を見ることもないでしょう。

お爺さん、私がわかりませんか？

お爺さん、見てください。私が自分達の世界のためになしたことを。

母なる大地は、彼女のヒザの上にあり、

蛇とふくろうが一日を仕切っているのです。

お爺さん、あなたの話す言葉が理解できない私です。

お爺さん、私がわかりませんか？

お爺さん、わたしは、自分のペプシが欲しい。

リーバイスのジーンズも、ポルシェも。

そして、私は、みんなが行くところに行きたいのです。

みんなが目にするものを見たいのです。

昔、おじいさんが踊っていたやり方でダンスをするには時間がないのです。

お爺さん。

お爺さん、なぜ泣くんですか？

お爺さん、なにが悲しいんですか？

お爺さん、嘆くのはもうやめて。

お爺さん、私がわかりませんか？

An Indian Prayer

(インディアンの祈祷師)

by H. Kent Craig

わたしのお爺さんは燃える炎だ

私のお婆さんは、風だ

大地は私のお母さん

偉大なる聖霊は私のお父さん

世界は、私が生まれたときに止まった

そして、私の足元によこたわったのだ。

やがて、私が死ぬときには、その地球全体をのみこんでしまうだろう。

そして、地球と私は一つになるのだ。

偉大なる聖霊、わが父を崇めよ、彼なしでは、だれ 1 人存在することはできないのだ

なぜなら、彼のいないところに、生命はやどらないのだ。

大地、私の母を崇めよ。大地なくして、なんの食料も育つことはないし、それにより、生命は餓死してしまう

風なるわがお婆さんを崇めよう。彼女こそ、われわれの作物を豊かに実らし、われわれを生き生きとさせてくれる、愛と生命をもたらす雨を運んでくれる。

火なるわが父を崇めよう。

なぜなら、彼がもたらすその明かりと、温みと、快適さがなければ、われわれは、人間でなくて、動物となってしまう。

わが両親とわが祖父母を崇めよう。

彼らがいなければ、私だって、あなただって、否、誰だって生きて行くことはできないんだ。

命が、新しい命を約束してくれる命を与えてくれるのだ

偉大なる聖霊、大地、風、火を崇めよう、声を高くして私の両親を称えよう。彼らこそ、あなたの両親でもあるのだから。

おお、偉大なる聖霊よ、わたしに生命を授ける人よ。祈祷師のささやかな捧げものをお受けください、この賞賛の言葉を。あなたに対する愛のこもった真実の畏敬の念を。

Dancing Spirits

踊りの聖霊

by Crying Wolf

お爺さん、実に沢山の人が、あなたが創造したものを壊そうとして来ました。その踊りの聖霊は、奥深い私の心のそこに行ってしまいました。彼らは、あなたが私の心の中に作り上げた神聖な輪を守ってくれるでしょう。神聖な踊りのようなあなたの贈り物は、母なる大地のいとし呼吸のようなものです。彼女の鼻にかけた怒りは、踊りの聖霊が踊っているその大地を傷つけたりすることはないでしょう。

私の孫よ、この神聖なサークルの美しさを知っている子供たちよ、お前は、まさしく、自分がその一部であることを知っている。お前達の兄弟は、お前のそばに立っている。この手を取りなさい。そして、お前のパワーを増すのです。川の流れが一つになるようなときにうねって流れる川のほうに行き彼の知恵を求めなさい。あなたは、彼が **Mighty Redwoods** が神聖な空に対して手を伸ばしたように、彼があなたに手を差し伸べてくれたことに敬意を表するようになるでしょう。

長老よ、私は、スタンディングベアのようになるでしょう。彼の強さが彼に過酷な試練を与えました。死んだ木になるという偉大なる戦士についてのあなたの教えは、賢明なものです。かれらは、いったいどれくらいの歳月がくれば岩になるのでしょうか？ 私の前にいる人たちが私の心の中に埋もれている踊りの聖霊を保ってくれることでしょう。

あなたがそのように創造した、若い戦士達は、あたかも **Paha Sapa** のように、非常に強力なものになっています。私たちは、過去を変えることはできないが、しかし、父なる太陽は、われわれの明日を導いてくれるでしょう。踊る聖霊であるあなたを称えてきたのは、それは、私にほかなりません。あなたは、私の息子達、戦士が、木になり、そして岩になるということをよく知っています。偉大なる風があなたの耳にその囁く言葉を聞いてください。あなたは、あなたの女達や子供たちに飢餓にするような人々とのうつろな約束では、生きてはいけない。私の息子よ、誰にも、その踊りの聖霊の神聖なサークルを壊すようなことはさせるな。

ありがとう、お爺さん。

神聖なる飛行 (Sacred Flight)

by Crying Wolf

偉大なる祖父である、全能のワシは、とても賢明な知恵を持っている。なぜなら、彼は、長老たちの歩んだ道を辿って行くからである。あなたの新しい旅路があなたを偉大なる湖の彼方に導いてくれる。あなたは、絶えず、私のそばを歩み続けることになるでしょう。なぜなら、あなたの中に、私は自分の進む道を見つけたからです。あたしは、森の木々が歌を歌っているのを聞き、それが私のところに響いたのです。山々と雲との間にあるこの申請な場所は、あなたの聖霊で一杯になるのでしょうか？

孫達よ、それが新しい水を提供してくれるのだから、新鮮な冬の雪のようになりなさい。それは、私自身なのだから、彼の矢を導くワシは、あなたのために備えをしてくれるでしょう。ワシの視野のようにあなたの見る感覚を鋭くしなさい、彼の偉大なる翼のようにあなたは強くなりなさい。われわれの行くべきところは同じところなのです。空は、沢山の影を作っています。神聖なる雨がやってくる時は、あなたに喜びを与えるためなのです。

お爺さん、あなたの弓は、とても強力なものです。あなたの放つ矢は、ずっと遠くまで空を飛んで行きました。あなたの強力な盾は、沢山の敵からあなたが傷つくのをまもってくれました。全ての私の強さのなかに、私は、私自身の盾を持つ知恵を見つけ出すでしょう。**White Eagle** は、私に悲しみの思いを残して行きました。神聖なる空のなかに、私は、あなたの顔を見るでしょう。父なる太陽が、あなたにぬくもりを運んでくれるでしょう。

若き、勇敢な戦士たちよ、お腹をすかしている沢山の人々のためにいって、狩をしてきなさい。私のようになるのはあなた自身なのです。**Mighty Eagle** は、いつも、知恵の矢を握っています。あなたの仲間たちに、彼らのお腹が一杯になるような食事を与えてはなりません。私は、沢山の手段と共にあなたに満たされるに違いない精神をあげました。私のやりは、あなたの部族の者達にぬくもりを与えるような毛皮をもたらすでしょう。私たちは、自分たちの長い旅の中で、多くの季節を過ごすときに沢山の知恵を与えて来ましたね。

お爺さん、私の心は、嘆いています。そして、私の涙は、神聖な鳥達のように音を立てずそっと流れています。私は、ワシが彼の食べ物に捕獲するところを見るでしょう。そして、私の弓矢がその同じ風のなかを飛んで行くでしょう。あなたの残した足跡を私は辿るでしょうから、お爺さん、是非、安全なたびをしてください。

ありがとう、お爺さん。

嘆きの狼は、南部カリフォルニアに住んでいるインディアンの詩人であり、画家です。この二つの断片は、私たちが直面している永遠の苦悶と、そして、私たちが先祖のなかに見出す強さに対する話しかけです。

詩の訳が、とても難しいものであることが分かりました。

ただ単なる文章の訳とは違い、そこに、なにか余韻ののこるような言葉を探すことが必要な気がしました。とても、そんな成果は見られませんが、なんとなく、その詩の心が見えてくれば、と挑戦してみました。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

42. カリフォルニア創造の伝説

Yokut

原住民アメリカ人の伝説

昔、昔、そして、そのまた昔のこと。この地球上にとてつもなく大きな洪水がありました。そして、その地球全体がまだ水にうずもれている間は、そこには、どんな生き物も生きてはいませんでした。

そうしているうちに、ある日のこと、空の一角から一匹の巨大なワシが、自分の背中に乗せた黒いカラスと共に降りる場所を探しながらゆったりと飛んでいました。

ワシは、目的にかなう木の枝か、あるいは、それとも彼が止まって休むことができるような止まり木の代わりになるようなものが見つかるまで、ぐるぐると回ってしました。そして、ついに、平らになった場所に、ワシとカラスがねぐらとするに十分なほどの広さの一軒の家があるのをみつけました。ここから見ると、彼らが見わたすことのできる限りの場所は全て緑がかった灰色の水が覆っていました。空は、ほんの僅かの漂う白い雲を浮かべて壮麗な青色に光輝いており、時たま、そよ風がそこを渦巻きながら通り抜けて行きました。ワシとカラスにとっては、すべてのものが平和のように思われました。

そして、時たま、まるでしゃいであるかのように海面から飛び上がりながら、小さな魚が水のなかを泳いでいるのを見ることができました。お腹がすいていたので、ワシとカラスは、時どき、自分達の食料を確保するために、さぁーとこれを捕まえに急降下して行きました。すると、これは、たちまちのうちに、二匹の鳥の間で、どちらのほうか魚を沢山捕まえることができるかという競争の形になって行きました。しかしながら、止り木に戻ってくると、彼らは、いつも、その名誉を分ちあっていたのでした。

ワシの体は非常に大きかったし、また、羽もとても広かったので、空高く舞い上がることもできたし、また、広い領域にわたって見渡すことができました。そして、二匹の鳥は、時には、大地を求めて別々に両方の方角に飛んでゆくこともできました。しかし、彼らはどこにも大地を見つけ出すことはできなかったのです。ほかに空を飛んでいる鳥さえ見つけられなかったのです。しかし、彼らはいつも木の枝の上につくった巣に戻ってきたのでした。

彼らは何時しか不思議に思うように成りました。“どうすれば、われわれは、大地を作る方法に思いつくことができるのだろうかね?”

“われわれは、泥の底を見つけられるほど深くは潜ることができないことはわかっているし、魚といえば、彼らは食料になること以外に何の役にも立たないのだから。”

大地を求めて探検したり、どうやったら大地を作ることができるかを考えたりするような日が、来る日も来る日も、繰り返されました。ただ、彼らは、だんだん沢山の魚を捕まえて、巣にはしっかりと戻ってきていました。

それから、程なくして彼らにとっても驚くようなことがおこりました。一匹のアヒルが彼らの巣のある止まり木のまわりをぐるぐるまわって泳いでいたのです。そして、時々、そのアヒルが水の底、深いところまで潜り、小さな魚を口にくわえて、その魚を飲み込むために首を横に振り振りしながら、また、水面まで戻ってきたのです。そして、あるとき、アヒルは、その口に魚よりももっと大きな泥をくわえて浮かび上がって来ました。

これをみて、ワシとカラスはとても興奮して、“もしかしたら、アヒルは、われわれのための大地をつくるのに必要なぶんだけの泥をもってくることができるかもしれないよ。”と、彼らは、こんな思いをめぐらしました。

どうすれば、彼らは、その泥が自分達にもっとも必要としているものだと知らせることができるのでしょうか？

ワシに一つの考えが浮かびました。そして、カラスに話しかけたのは、“もし、われわれがアヒルのために魚をとってあげれば、アヒルは、魚よりも沢山の泥を持ってくると思わないかい。”

こうして、二羽の鳥はあれこれ試行錯誤しながら、アヒルがそこにある魚は、泥と引き換えのためにおいてあるものだ！と分かるまで、アヒルのために魚をとってきてやり、それを自分達の巣の端において置きました。

アヒルが深く潜ったあと、水面に浮かんできたところで、ワシとカラスは、自分達の羽を使ってアヒルのくちばしや体から泥を掻き落としました。こうやって、なかなか仕事ははかどりませんでした。しかし、少しずつしっかりと泥がたまってゆきました。

なんと、うれしいことに、やがて、ワシは、自分達の止まり木のすぐ横に泥の柱を作ることができました。カラスは、彼の巣の横にやはり似たような柱を立てることができました。それは、どちらも、アヒルのために彼らが自分の巣のそばに魚を置いた場所でした。そして、そのアヒルは、それからもせっせと泥をワシとカラスのために運んでくる役割を果たしていました。こうして、いまや魚と泥の交換というとても儲かる事業が出来上がりました。

アヒルのほうは懸命になって働きましたから、彼はいつもお腹が空いていたのです。ワシとカラスの二羽の鳥は、それぞれ自分たちの柱が、日に日に大きくなっていくのを見てとてもびっくりしていました。彼らの会話のなかからこんなことが聞こえて来ました。“アヒルがわれわれの新しい世界を築き上げる手助けを一生懸命してくれている。これは、われわれは新しくできてくる世界を同じように共有しなくてははいけないね。”と。

時々、ワシとカラスは、大地のなにか新しい兆候はないか探しに水平線の向こうまで飛んで行きました。しかし、かれらは、何の新しい情報もなしに帰ってきたのです。しかしながら、彼らは、自分達の止まり木の周りの水が唸りをあげている光景に気づきました。

“きっと洪水が終りに来ているに違いないよ。”とカラスとワシは話をしていました。

こうして、彼らはそれから毎日、水が引いていくのを見つめていました。一方、彼らの泥の柱は、日に日に高くなっていきました。まじめなアヒルは、ワシやカラスが彼のために魚を取ってきてあげるのと同じように、彼の仕事をせさせとしていました。そして、新しい世界の両側にその彼の体から泥を掻き落とし積み上げて行きました。

また、別の日にワシは、乾いた大地を探しに空高く、そして、ずっとと奥まで飛んで行き、よる遅くまで帰って着ませんでした。太陽は沈み、彼の棲みかは暗闇で包まれてしまいました。次の日の朝、ワシを驚かせたのは、そこに、これまで自分達が手にした泥よりもずっと多くの泥があったのでした。これを見て彼は多いによろこびました。しかし、カラスの泥の柱のほうと見て、もっとびっくりしたのは、彼が居ない間にカラスのほうの泥は自分のほうよりも二倍も多かったのです。

“新しい世界を同じように共有しようというのはカラスのアイディアだったよね?”と、ワシが念を押しました。

勿論、これで彼らはその日は一日中喧嘩をすることになりました。そして、次の日は、カラスの不正について喧嘩をしたのです。しかし、その次の日には、彼らは、また、元のように新しい世界をつくるために一生懸命仕事に励みました。ワシは、絶対に遅れを取り返して見せると心に誓いました。そして、かれは、アヒルのために二匹の魚を捕まえてきて、それを彼がいつもの場所におい

ておきました。すると、アヒルは、彼の二匹の魚と交換しようとワシのところには、二倍の泥を運んで来て、彼に応えました。三羽の鳥は、こうして、何ヶ月も、何ヶ月も懸命に働いたのです。

段々ワシの方の新しい世界は、カラスの方もワシの同じように一生懸命働いてはいたのですが、カラスの方のものよりもずっと高くなりました。アヒルは、自分の仕事にとっても忠実で、泥を運ぶのに彼の努力を惜しみませんでした。勿論、アヒルは、自分に二匹の魚を用意してくれるワシの方には二倍の泥を運びつづけたのでした。ところが、カラスは、ワシの方のものが自分のものよりドンドン高くなっていくのがどうしてなのか分っていないようでした。

ある日の朝、太陽が輝いているときに、二羽の鳥は、水面のしたにあるものを眺めて居ました。そして、底に大地があることに気がつきました。

“そうだったのか。アヒルが泥を見つけてきたのはあそこだったのだ” 二羽の鳥はそんな風に話をしていました。彼らは、水がだんだん引けて行くのを楽しみに見ていました。やがて、それがどんなにか高く、そして、乾いた彼らの新しい世界になるかということを想像して、とても嬉しくなりました。

ところが、ことはそう簡単には進みませんでした。というのは、まさしく、その日の晩のこと、猛烈な稲光が水面を横切り、そして、雷が此方の水平線から、もう一方に水平線に至るまで唸りを上げて鳴り渡り、やがて、溢れんばかりの雨が降ってきたのです。ワシとカラスは、止む無く自分達の泥でできた柱に開けた巣の中にもぐり込みじっと様子を伺っていました。こうして、一晩中雨が降り続き、たちまちのうちに、新しくできた世界の殆どがまたしても海の底に沈んでしまったのです。

そして、雨が止むと、こんどは、太陽があがって来ましたので、ワシとカラスは、水面の上に出てきて見ました。すると、此方の水平線から、天空を通り、もう片方の水平線まで、七色に輝くアーチを見ることができました。この輝かしい、現象が、彼らの好奇心をひきつけました。一体、誰がこんなことをしたのだろう？ 彼らは、その空一杯に広がる七色の輪がどれくらい長いのか不思議に思いました。ワシは、もっと近くでそれを見ようとそのほうに飛んで行ったのですが、やがてそのアーチが消えてしまいましたので、戻って来ました。

ワシとカラスは、話をしているなかで、前の晩の嵐がきっとそれを洗い去ってしまったのだろうとか思いました。こうして、かれらは再び、自分達の大地を

作るという大事業に取り掛かりました。アヒルが泥の運び屋として、彼の仕事に戻ることを期待しながら。やがて、太陽の光が辺り一面を照りつけ、そして、泥がしっかりと固まるほど、熱くなりました。アヒルが出てきて、こうして三人で新しい世界の半分ずつを作るチームがまた出来上がったのです。

日が経つにつれて、だんだん水が引いてきますと、新しい大地が水際に姿を現し始めたのですが、しかし、それは、ワシとカラスが作っている新しい世界の、遥かずっと下の方でした。ワシの作った半分の、だんだん高くなり、そして、熱い太陽で非常にしっかりと固まりはじめました。カラスが作っていた新しい世界の部分は、これも非常に大きなものになりましたが、しかし、それは、ワシが作ったものほど大きくなることはありませんでした。

この新しい世界の創造の話を繰り返すなかで、**Yakut** 族の歴史を語る人は、いつも、ワシの作った半分のほうが、おそらくシェラネバダの山々になったのだと主張しています。彼らは、また、カラスのつくった世界が、海岸山脈にどうしてなったかということも話していました。

Yakut 族の歴史家は、ワシとカラスが新しい世界を創造しているときに、カラスのほうは、すこし不公平な振る舞いをしたので、少しばかり狭い場所を与えられたのに対し、勇敢で強いワシのことについては、どこに住んでいる人々も、

Yakut、あるいは、**Yakuto** 族は、カリフォルニア州の中央辺りに居住していたインディアンの部族です。ヨセミテ公園のあるのが、シェラネバダの山々、そして、海岸線にあるのが、海岸山脈。この間に挟まれてところがシリコンバレーで有名なナパバレー。この辺りが彼らの本拠地です。私がボーイスカウトのリーダーとして国際親善を推進していた相手のリバモア市は、丁度、このナパバレーの端にあり、この話はとても身近に感じられ、ついつい夢中になった話です。それにしても、ワシを愛するインディアンの気持ちがとてもよく理解できるのではないかと、この話を伝えてきた **Yakuto** 族の人々の想像性の豊かなことに改めて感心した次第です。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

43. 動物や鳥達が創造された頃のこと

Makah

Native American Lore

ワシントン州の北西の端のもっとも遠いところで生活をしているインディアン達が、一人の変った人のことではなくて、なんでもものを変えた2人の男の話をよくしていました。そうです。彼らは、**Juan de Fuca** の海峡に横たわる、**Vancouver** 島に住んでいた、ごく近い親戚同士でした。

この世界がまだできたばかりの頃には、この地球の上にはまだ人間は住んでいませんでした。鳥達も、そして、勿論、動物達もいなかったのです。そこにあったのは、草と、砂と、動物でも、また、人間でもない、けれども、人の形跡のような何かか、あるいは、動物の形跡の何かを持ったような生き物だけで、ほかには何もいなかったのです。

そんなときに、太陽と月の2人の兄弟がその地球にやって来ました。彼らの名前は、“なんでもものを変える二人の男達” という意味の **Ho-ho-e-ap-bess** といいました。彼らは、インディアンの新しい部族のためにこの地球を作るためにやって来たのでした。その2人のなんでも好きにものを変える事のできる男達は、すべてのものを彼らのための生き物と呼んでいました。あるときには、彼らは動物や鳥達に変えました。そして、また、あるときには、木立や、あるいはそれと同じような植物に変えたのでした。

かれらの中に、あるあまり素性のよくない盗賊がいました。彼は、いつも、漁師たちや狩人となっていた生き物から食べ物を掠め取っていました。ものを変える二人の男は、彼を密閉した罫いの中に連れてゆき、そして、彼の腕を短く

して、彼の足に結び付けてしまいましたので、彼の足だけが、動くことのできる状態になりました。そうして、その罫いを海の放り込み、彼にいったのです。

“どうだ。これからは、もし自分が何かを食べたいというなら、自分のものは自分で捕まえなくてはならなくなるだろう。”

生き物の中の一つは、偉大な漁師でした。彼は、いつも岩の上に居るか、さもなければ、彼の長い魚取りようのモリを持って歩きまわっていました。彼は、さかなを取るためにいつでもそれを投げ入れる準備をしていました。彼は、小さな袖なしのマントを身につけ、それは肩のところで白くなって巻きついていました。物を変えた2人の男達は、彼を偉大な青いサギのところに連れて行きました。するとその肩掛けはその偉大な青いサギの首のまわりについた白い羽となりました。そして、その長いもりは、彼の鋭い先の尖ったくちばしとなったのでした。

ほかに作られたものは、漁師と盗人の2人でした。彼は、貝殻でできたネックレスを盗みました。なんでも物を変えてしまう2人の男は、彼を魚とりの王様 **Kingfisher** のところに連れて行きました。すると、貝殻でできた首飾りは、魚とりの王様の首の周りのネックレスになったのです。それでも彼は魚とりなのです。彼は、水を見つめて、そして、魚を見つけると、水しぶきを上げて頭から水の中に飛び込んで行くのです。

2人の生き物は、巨大な食欲を持っていました。彼らは、自分達が見つけたものはなんでもむさぼり食ってしまいました。なんでも変えてしまう二人の男達は、そのうちの片方をワタリカラスのところに連れて行きました。彼らは、彼の女房をふつうのカラスに変えてしまいました。ワタリカラスとふつうのカラスは共に、とても強いくちばしをもらいましたので、彼らは自分達の食料を小さく引きちぎることができました。“**Cr-r-ruck!**”とワタリカラスが泣きわめくと、女房のカラスが大きな声で、“**カー、カー!**”と応えるのです。

何でも変えてしまう二人の男達は、**Bluejay** の息子を自分達のところに呼び、そして、尋ねました。“お前さんは、鳥になりたいかね、それとも、魚のほうがいいかな?”

“私は、どっちにもなりたくないよ。”と彼は応えました。

“それなら、私たちはお前をミンクのところに連れていくことにしよう。お前は、大地の上に住むようになるだろう。そして、お前が海で捕まえてきたり、岸で吊り上げたりして、魚を食べるようになるだろう。”

そして、2人のなんでも変えてしまう男達は、新しい人々が、いろいろな目的のために樹木が必要になるだろうということを思い出しました。

そこで、生き物のなかのあるものを自分達の所に呼び、こう言いました。“インディアンが、弓を作るために頑丈な気を欲しがらるだろう。彼らは、楔を作るために硬い木を欲しがらるだろう。だから、彼らは丸太を裂くことができるのだ。あなたは、頑丈で、とても、強いのだ。われわれは、あなたをイチイの木に変えることにしよう。”

こんどは彼らは小さな生き物を自分のところに呼びました。“新しい人々は、矢を作るために、沢山の細長くて真っ直ぐな棒を必要とするでしょう。お前さんたちは、ガマズミの木になりなさい。そして、初夏の頃沢山の花をつけてあたり一面、白一色になるでしょう。”

次に彼らは、大きくて、太った生き物を彼らのところに呼びました。“インディアン達は、カヌーができるような柔らかくて、大きな木の幹が必要になるでしょう。お前は、ヒマラヤスギになるがいい。そうすれば、お前さんたちの樹皮や根からインディアンは沢山のものを作ることができるだろう。”

なんでもものを変えてしまう2人の男は、インディアンは薪が必要になることを知っていました。そこで、彼らは、年老いた生き物を自分達の所に呼びました。

“あなたは歳をとっているし、心がとても乾いているよ。あなたの油は非常に硬くて、ピッチになるだろうから、あなたはとてもよいたきつけになるでしょう。あなたは、トウヒになるとよいでしょう。あなたが歳とった時には、ふなたは、いつも乾燥した木になり、火を起こすのに丁度よい木になるでしょう。”

彼らがほかの生き物達に向かってこう言いました。“お前さんがたはベイツガになるがいいでしょう。そうすれば、その樹皮は、毛皮をなめすのに役立つから。そして、その枝葉、心地よい小屋を作るのに使うことができるだろうから。”

怒りっぽい性格の生き物がいましたが、かれらは、それを“お前はいつもすっぱい果物を実らせているように”と言って、野生の林檎に変えてしまいました。

彼らはまた、沢山の生き物をさくらんぼの木にしました。ですから、新しく生まれた人々は、果物の実を収穫し、さくらんぼの木の樹皮を薬に使うこともできたのです。

薄っぺらで、頑丈な生き物をハンノキに変えましたので、これからは、カヌーのパドルにする硬い木を得ることが出来ました。

このようにして、なんでも変えてしまう二人の男は、新しく生まれた人々のために、そこに来て生活できるように、世界の準備をしたのです。彼らが、その世界を、インディアンたちが住めるようにしたのでした。

自分達が生活している世界は、自分達が生活できるように誰かが準備してくれたのだという伝説です。ですから、インディアンは自然の生き物を大事にしたのだと言うことがよく分かります。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

44. 男達が空を訪問したという話

Seminole

Native American Lore

この世の中が始まった、ついその矢先のことですが、5人のセミノールのインディアンの男達が偉大なる創造の神に会いに天界に行きたいと思っていました。

彼らは、まず、東に向かって一ヶ月ほど歩き続けました。そして、大地の果てに着いたのです。その端のところで彼らは自分達の持っていた荷物を放り投げ、そして、自分達も、その大地の果てから消えてしまいました。

こうして、インディアン達は天界に昇り始めるまえに、下へ、下へと、そして、まだまだ下へと暫く落ち続けたのです。とうとう、彼らは、1人のそれはそれはとても年老いたお婆さんの住んでいる小屋に辿りつきました。

“お前さんたちは、一体誰を探しているというんだね？ 私に言ってごらん。”とそのお婆さんが弱弱しく尋ねました。

“自分たちは、天にいる偉大なる創造の神に会いに行く途中なんです。”と彼らが応えました。

“彼に、今、会うことはできないよ。”と、彼女は言い、“とにかく、まずはここに暫く留まっているんだね。”と付け加えました。

その晩のこと、5人のセミノールのインディアン達は、その老婆の小屋から少し離れたところ、そこは、彼らが白い毛皮の衣装を着て羽根をつけた天使たちに出会った場所なのですが、そこをぶらぶらと歩いて回りました。そして、彼らは、セミノール族が楽しんでいるボールゲームをして遊びました。

男達のうちの2人のものが、そこに残って天使になることを決意しました。残りの三人は、自分達の大地に戻ることにしました。すると驚いたことに、そこに偉大なる創造の神が現れ、そして、こう言いました。“そうするがいい!”

大きな料理用の鍋が火にかけられていました。そして、お湯が煮立ってくると、そこに留まることを望んだ2人のセミノールの男が、料理されてしまいました。彼らの骨だけがそこに残ると、偉大なる創造の神は、その鍋からそれを取り出し、彼らの骨をもう一度もとのように並べました。そして、白い衣装で、それを綺麗に包み、彼の魔法の杖で、それにそっと触れました。こうして、偉大なる創造の神は、2人のセミノールのインディアンに再び命をもたらししました。彼らは、美しい白い羽根を纏っていました。そして、人間の天使と呼ばれるようになりました。

“三人の男達よ、お前達はどうしたいのかね?”と偉大なる創造の神が尋ねました。

“できれば、自分達は、大地にあるセミノールのキャンプに戻りたいのですが。”と、三人のセミノールが応えました。

“じゃー、自分達の荷物をすぐに取りまとめ、まず、一眠りするといい。”と、創造の神が言いつけました。

こうして、三人のセミノールの男達が、眠りから目を覚ましますと、彼らは自分達が無事、もとのインディアン部落に戻っている事に気づきました。

“自分達は、こうして、戻ってきて、大地にしっかりと足をつけて生活している。なんと幸せなんだろう。もう、決して、神秘的な出来事を探しに天界に冒険に行こうなんて思わないようにしよう。” 彼らは、そう、セミノールの酋長に報告したのでした。

大地に戻ったインディアン達が、自分達は、この大地で慎ましやかに生活をしようと考えを改めたというお話し。われわれもこのようにすこし謙虚になりたいものですね。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

45. 呪術師にまつわる伝説

その呪術師というのは、とても素晴らしい精神を持った **Glooscap** の男です。言い伝えは、**Glooscap** のお父さんは、大地の下にある偉大な滝の下に住んでいる生き物であるということでした。彼の顔は、半分赤みがかかっている、そして、片目ではありましたが、彼はなんでも見える目を持っていました。彼は自分の所に来る人には、誰に対してもその人が望む祈禱をしてあげることができるの

です。Glooscap は、ずっと遠くのところで、いつでもこの世に戻ってきて、戦争を起こさせるように準備をしながら、彼の弓矢をせっせと磨いているのです。

Passamaquoddies 族は、彼らの古い言い伝えをすべて事実のものとして話し伝えています。ですけれども、ほかの話は、彼らはそれを“彼らが耳にする話”として、あるいは、単なる噂として話をしています。

これは、ずっと昔、昔の、いつも決まって森を抜けて行ったり来たりして旅をしていた Passamaquoddy インディアンの女についての伝説です。彼女は、ありとあらゆる木陰からやってきて、そして、小枝を噛みだすと、これらのうちの一つから、彼女は子供を宿しました。彼女のお腹はドンドン大きくなり、とうとう彼女は、もう、旅を続けることができなくなるほどになってしまいました。でも、彼女は、とても綺麗な水が流れているその河口の近くにテント小屋を建てました。

そして、ある日の晩、彼女に赤ん坊が生まれました。最初、彼女は、自分はその子供を殺さなくていけないと考えました。しかし、彼女は、木の皮でできたカヌーを作り、それに彼女の子供を乗せて流そうと決断しました。彼女は、それを川に浮かべ、流れに沿って漂わせることにしました。川の流れは場所によってはとても激しいところもありましたが、それでも、その子供は、溺れることもなく、何とか無事に流されていきました。

こうして、そのカヌーは、沢山のテント小屋が集まったインディアン達のいる部落の近くの砂浜まで辿りついたのです。そして、その部落の中の1人の女がその赤ん坊を見つけ、自分の家に抱いて帰りました。すると、それからというもの、毎朝、村の赤ん坊の1人が死んだように思われました。村人達は、彼らの赤ん坊に一体どんなことがおきていたのが知らなかったのです。

むらの近所の人々が、その助けられた子供が毎晩毎晩、どうして川のほうにヨチヨチ歩いて行き、そして、直ぐにまた戻ってくるのか不思議に思いました。彼女は、このことが沢山村の赤ん坊が死んでいくのと何か関係があるのでは疑いました。やがて、彼女は、その子供が小さな舌を持って帰ってきて、それを焼き、食べているのを見ました。そうして、横になって一晩中寝ていたのです。

次の日の朝に、別の子供が死んだという話が村中に流れました。その時、インディアンの女は、誰がその子供を殺したかを確信したのです。彼女は、その亡

くなった子供の親に、確かめるようにいい、その子供の舌がなくなっていることが分ったのです。その子供は、出血が多量で死んだのでした。

そこで、その殺人者をどうすべきかを決めるために部族の協議会が開かれました。誰かが、その犯人を切り刻んで、川に放りこむようにいいました。ほかの者は、焼いてしまえといいました。これが、結局、最終的な結論になりました。彼らは、そのどうしようもない子供を焼き殺してしまいました。そして、あとに残ったのは、ただの灰だけだったのです。

普通なら、誰もが、その子供はこれで死んでしまったと考えるでしょう。しかし、その日の夜が来ると、彼は、また、小さな舌を持って村に帰ってきたのでした。そして、それを焼き、また食べていたのです。そして、次の日の朝になると、別の子供が夜の間に死んでいるのが見つかりました。その異様な子供は、まるで、焼き殺される前と同じように、いつもの場所に寝ているではありませんか。そして、彼は、みんなにこういいました。もう、自分はこれ以上子供たちを殺しはしないだろう。私は、現に、このようにずっと大きな少年になったのだから、と。

その大きな少年は、彼の骨の一つを自分のそばに置くだろうといいました。これが、彼の仕事の始めでした。そして、その骨の全部が、その時、同時に彼の体の周りに散らばって行きました。彼は、彼の目隠すように、彼のまぶたの上に自分の指で引き寄せるようにして目を閉じました。すると、彼は、骨がなくて動くことができなかったのですが、こうして、非常に大きな体になって行きました。

彼は、こうして偉大なる呪術師の男となりましたので、**Passamaquoddies** 族を大いに驚かせました。彼は、訳があって彼らが望むものはなんでも、喜んで与えました。しかしながら、後になって、彼の部族は、自分達の旧い部落からどこかに移って行ってしまいました。彼らがそこを去る前に、彼らは、その呪術師のために素晴らしいテント小屋を建てました。彼らは、彼の超能力に頼ることが習慣になりましたので、何か、自分達に望みがあると、それをかなえるために彼のところに戻って来ました。彼の部族の者達は、彼に、ありとあらゆる魔法をお願いしました。かれが、自分達の望みをかなえて上げたときに、かれがみんなに頼みました。“私をひっくり返してごらん。そうすれば、みんなは、私の下に隠れている自分達の魔法を見つけることができるから。”と。

ある若い男がやってきましたが、彼は、若い娘さんの愛を得たいと思っていました。そこで彼は、愛の薬を頼みました。すると、呪術師はこう言いました。“私をひっくり返しなさい。”　そこで、若い男は、魔術師をひっくり返し

そして、そこにハーブを見つけました。“お前さんは、決してこれを遠くへやったり、投げたりしてはいけないよ。”と年老いた男が言いました。こうして、その若い Passamaquoddy の男は、彼のテントに戻って行きました。

暫くして、彼は、いつも村の中で、若い娘さん達が自分の後をついてくるのに気が付きました。事は、彼は、その変わりようのために1人になりたかったのです。彼は、女達に追い掛け回されるのが嫌だったのです。そして、とうとう、彼は、あまりにも部族の女達に悩まされたので、その呪術師のところにもう一度やってきて、このハーブの愛の薬を彼に返したのです。こうして、その若い Passamaquoddy の男は、それを持たずに去っていったのです。

また、別の若い男が助けを求めて魔術師のところにやって来ました。そして、呪術師の男が尋ねました。“一体、お前さんは何がお望みなんだね。”　するとこの男は、“私は、この世がある限り長生きをしたいんですよ。”といいました。

“お前さんの望みというのは、なかなか理解しがたいね。しかし、何とか、そうなるように全力を尽くしてみようじゃないか。”と、その呪術師は応えました。“じゃ。私をひっくり返してごらん。”　すると、彼の体の下はハーブだったのです。彼は言いました。“さあ、行きなさい。そこは、何もないところ他のです。本当に草木一本生えていないような何もないところへ行って、そして、そこで、立っていなさい。”　その呪術師は、若い男に向かって、行くべき方角を示しました。

その若い男は、時々、その魔法使いのほうを振り返りながら、そして、呪術師が教えたとおりに歩いてゆきました。こうして、その男が言われたところで立っていると、彼は、自分の体の回りに枝や、若い木の葉の芽が生えてくるのに気が付きました。彼は、こうして、永久に誰のためにも役に立たないものとして立っているヒマラヤスギにだんだん変わっていったのです。

少し欲張りな望みをしたために、却って、災難を被ることになるのは、いつの世にも同じですね。私たちも慾を出すのは、程ほどにしたいものです。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りました

46 スズメバチとアリの話

NezPrece/Nee-me-Poo

Native American Lore

妬みというものが、なかの良いともだちを仲たがいさせることがよくあります。ありは、自分は十分な食料を持っており、快適な生活をしていたのですが、アリが抱いたスズメバチに対する嫉妬というのは、彼が鮭を食べたというものでした。ありは、自分の周りの者のプライバシーを侵して、自分たちの友情を壊したのです。どちらも彼の忠告を聞こうとしませんでしたので、コヨーテは彼らをやがてやってくる人間達に対する見せしめとなるように岩の中に閉じ込めてしまいました。

こうして、スズメバチたちとアリたちは、Clearwater 川の上流 10 マイルほどのところにある Tse-me-na-kem(アイダホにある Lewiston)の丘の上で、いつも一緒に生活するようになりました。二つの家族は、時々部族の誰かが、それは、もう動物以外の何者出もないような争いを起こすことはありましたが、本当に仲良くくらしていました。

それは、ほんの些細な嫉妬でしたが、スズメバチの酋長と、アリ族の酋長との間に妬みがありました。これは、実際には、たいした恨みではなかったのですが、しかし、お互いが、彼の権利が丁度よい具合のものではないと認めていま

した。全体的には、2人のボス達は、自分の妻や沢山の子供たちの面倒を見ながら、かなり仲良くやっていました。

スズメバチの酋長は、よく、ある決まった岩の上で、食事をするのが習慣になっていました。そして、かれの大好物は、乾燥した鮭の肉でした。ある日、彼は、この岩の上に腰掛けて、この岩の上で、彼の妻が予め、大きな皿に盛って用意をしたその乾燥した鮭を静かに食べていました。

そこに、アリ族の酋長がやってきて、スズメバチの酋長が、夕飯をおいしそうに食べているのを見つけ、非常に怒りました。彼がもし、そうしようとするなら、鮭を乾燥するために使うことのできる別の岩が彼の近くにあったのも事実です。しかし、スズメバチの酋長の態度が彼を怒らせたのでした。“おい。そのスズメバチ”と、彼は大きな声で話しかけました。“一体、お前はそこの岩の上でなにをやっているのだ？ 私だって、お前と同じ様にする権利はあるはずだ。ワシに断りなしにそこで食事をするのはけしからん。”

スズメバチの酋長は、びっくりしました。“なに。アリ族よ。なにを怒っているんだい？。私は、いつだってこうしてこの岩の上で夕飯を食べているんじゃないか。”

“どっちだって同じだ”とアリ族は言いました。“なぜ、お前は、そのことをワシに断らなかったんだ？”

これを聞くと、スズメバチも怒り出しました。彼は自分の羽をばたばたさせ、足をどたどたとやり、大きな声でわめきました。“お前には関係のないことだろ。このちびめ”

“よくも、私のことをちびだと言ったな。”とアリが怒鳴りました。“いままで、誰だってわたしのことをそんな風に馬鹿にしたものはいないぞ”

そう言うと、アリは、その岩の壁を登って行きました。そして、とうとう、その上で彼は、スズメバチと格闘を始めたのです。彼らは、正面から相手を腕で掴み取っ組み合いをしました。そして、お互いに後ろ足でたって、自分達の大事な体を噛み付いたり、突きあいをしたのです。

すると、そこに突然大きな声が響き渡って来ました。“これ、これ。アリもスズメバチも、いい加減にやめなさい。”

それは、川の向こう岸をたまたま通りかかったコヨーテでした。かれは、必死に喧嘩をしている彼らを見ていましたが、しかし、喧嘩に夢中になっていて彼らはどちらも彼に気がつきませんでした。

そこで、コヨーテがもう一度、大きな声で言いました。“おい。アリも、スズメバチも、もう、喧嘩はやめろと言っているんだ。私が臣下は戦えないのだ。みんなのために沢山の家はあるし、食料だって十分じゃないか。それなのに、なぜ、そんなばかなことをするんだ?”

こんどは、彼らは、この言葉が耳に入りました。でも、まだ、どちらも喧嘩を止めようとはしませんでした。とうとう、三度目にコヨーテは、注意をしました。“これが最後だぞ。これから私がお前達に言おうとしていることをよく効くがいい。喧嘩を止めろ。さもなければ、私は、お前達、両方とも、石にしてしまうぞ。そうしたら、やがて **La-te-tel-wit**(人間たち) がやってくるので、お前達はもう、偉くもなんでもないものになってしまうのだ。”

そう言われても、かれらは何も気に留めませんでした。そこで、コヨーテは、彼の魔法をつかい、彼の足をうねるように動かししました。すると、アリとスズメバチは、丁度アーチのように反り返り、そして、そのまま、石にされてしまいました。

こうして、今日に至るまで、誰でもが見ることができるよう、彼らは、御互いに腕を組んだままの状態に固まって、そのスズメバチが彼の食事をしていて、そして、意地汚い思いのために闘う羽目となったその大きな岩の頂上に残っているのです。

出所: **Allen Slickpoo, Leroy Seth, and Deward E. Walker, Jr.**

「**Nu-Mee-Poom Tit-Wah-Tit: Nez Perce の伝説.**」 1972.

アメリカをドライブしていると、有名にアーチーズ国立公園はもとより、あちこちで岩山の上に沢山のアーチを見ることができます。この自然の造詣は、まことに地球の歴史を感じさせてくれる素晴らしい芸術品です。これをインディアンは、一つの戒めの話として言い伝えているところに、とても、こころが洗われるような気がしました。昔のひとの、想像力の素晴らしさを教えてくれる話でした。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

47. コヨーテと Kamiah の怪獣のはなし

Nez Perce/Nee-me-poo

Native American Lore

この話は、コヨーテがどのようにして、**Nez Perce** 族も含めて、様々な部族の人々と、今日見ることができるような動物たちを作ったかという話です。そして、怪獣を負かすようなコヨーテの賢明な知恵がなければ、今日の人間や動物達は、いまもその怪獣のお腹のなかに閉じ込められていたでしょう。

それは、それは、ずっと昔のことですが、コヨーテが、**Celilo** のところにある滝を駆け下って行き、そこに、上流に住んで居る人たちが捕まえる魚が遡上して行けるように、泳ぐはしご段を作りました。ここで、彼は、誰かが、彼に向かって、“あなた、そこで何をしているのですか？ 怪獣が来て、そこにみんな食べてしまったので、人々はもうどこかに行こうとしていますよ”と、叫んだときまで、せっせと忙しそうに働いていました。

“分かった。”とコヨーテは独り言をいい、“それなら、この仕事は彼らのためにやっているんだから、彼らがいつてしまうなら、私もやめにすることにしよう。そして、私も一緒に行くことにしよう。”

そこから、彼は上流に向かって、**Sahmon River** 村の道の所まで行きました。そして、彼がその道を歩いているときに、彼は、マキバドリの足を踏んでしまい、その足を骨折させてしまいました。マキバドリは、狂ったように泣き叫びまし

た。“リマ、リマ、リマ！ 貴方は、こんな風に歩いていて、一体、どんな風にその人たちを見つけ出せると思っているんだい？”

コヨーテが言いました。“私のおばさん！ どうか、私に、何があったのか教えてください。そうすれば私は、あなたのためにチョークチェリーの木の新枝で新しい足を作ってあげます。”

そこで、マキバドリは彼にこのように話しました。“そこにいた人たちはもうとっくにその怪物に飲み込まれてしまったのだよ。”

コヨーテが応えました。“じゃあ、そこに私もこれから行くことにしましょう。”と言って、彼は、マキバドリの足をチョークチェリーの枝で固定しました。そして、そこから、彼は旅に出ました。道すがら、彼は、素敵な風呂に入り、そして、自分にこういいました。“私は、怪物が好きになるような食べ物になることにしよう。”と言って、適当な風呂に入りました。そして、“こうすれば、彼は、私を吐き出したりすることはないだろう。”といいながら、素敵な服をまといました。コヨーテは、自分を生皮の紐で、Tuhm-lo-yeets-mekhs(目当ての丘)、Se-sak-khey-mekhs(七人の悪魔達の山)、そして、Ta-ya-mekhs(ポプラの木の丘)という、三つの大きな山にくくりつけました。後に人々がやって来た時には、これらと同じ山々が、若い男や女達に、wey-a-kinや、自分たちが生きていくときに彼らを導いて助けてくれる聖霊を探すための特別な場所として利用されるようになりました。

そこから、コヨーテは山に沿って上って行き、峰を越えて行きました。と、突然、彼は、大きな頭に出会いました。彼は、とっさに草むらに隠れ、じっとそれを見つめていました。それは、彼がこれまで見たどんなものとも似ても似つかぬものでした。その頭は途轍もなく大きく、そして、その体のどこか遠くのほうから汗の臭いがして来ました。そこで、コヨーテは彼のほうに向かって叫びました。“オーッ。怪物君。どうだろうか、ここで、御互いに飲み込み会おうではないか！”すると、怪物の大きな目がコヨーテを見つけようと辺りを見回しました。ところがかれを見つけることができませんでした。それは、コヨーテが自分の体を泥で塗りたくり、そして、まわりの草と同じ様な色をしていたからでした。そこで、コヨーテがもう一度、大きな声で叫びました。“怪物君、御互いに飲み込みあいをしようではないか！”コヨーテは自分が座っている草を前後に揺らしました。

たちまち、怪物がその揺れている草を見つけてこう言いました。“オーッ。コヨーテか。なら、まずお前が飲み込んでみろ。最初は、お前が先にわしを飲み込むのだ。”すると、コヨーテが挑戦しました。思い切り、そして、大きな音をたてて息を吸い込みました。しかし、その大きな会ぶちは、ほんのちょっと動いて、揺れただけでした。

そして、コヨーテが言いました。“さあ、次は君が僕を飲み込む番だ。君は、もう、沢山の人たちを飲み込んでいるんだから、私も一緒に飲み込むがいいだろう。わたしも1人で居たくはないし。”その怪物は、コヨーテが背中に、火打石でできたナイフと、火起こしの道具、そして、燃料のピッチが入った袋を持っているとは気がつきませんでした。

こうして、怪物は、まるで強力な風のように吸い込みました。彼は、コヨーテをまず、右のほうに持っていきました。が、コヨーテが入っていったときに、入れは、偉大なる *keh-mes*(*Camas bulbs* ヒナユリの茎) と 偉大なるナナカマドの実のあるほうに、“*La-te-tel-wit*(人間達)は、来るのはそんなに時間がかかるわけではないし、ここで、みんながそれを見つければ、きっと喜ぶに違いない、”と言いながら、左のほうに向かっていきました。コヨーテは、すでに一本のロープを手にもっていましたが、かれは、それをナイフで刻みました。そして、猛然と怪物の口のほうに駆け出してゆきました。

コヨーテは、回りを見回し、そして、怪物の喉のあたりに下りてゆきました。その途中、彼は、そのあたりに散らばっている沢山の骨を見ました。そして、かれは、こう考えたのです。“沢山の人が乾ききっているのがよく分かる。”彼は、進んで行くにしたがい何人かの少年たちに会いました。そこで彼らは、“怪物の心臓はどの辺りにあるのかな？ こっちに来て、教えてくれないか”そして、みんなでその方角に向かってゆきました。グリズリーの熊が彼らに向かって、吠えながら走りだして来ました。コヨーテが、“そうなのか！ お前は、私におびえているだけなんだね”と言い、彼はその熊の鼻のどこを蹴りました。その結果、熊は、今日でも、その鼻が低いと言うわけなのです。

そして、さらに進んでいくと、今度はガラガラヘビが興奮してガラガラ音を建てていました。“そうか、お前は、私にちょっといたずらをしようというんだね。私たちは、ちょっと糞をかけるくらいのことしかしないよ。”といって、ガラガラヘビの頭を押さえつけて、平たくしてやりました。ですから、彼らはいまでも頭が平らなのです。

それらか、コヨーテは、“自分は怪物があなたを最後まで残しておいたのを見た。アーッ、何とか、あなたが人々を助けようとしているところを見たいものだ!”という、ヒグマに会いました。

しかし、それからは、行く道々で、人々はこの偉大なコヨーテと出会うようになりました。そして、彼に話しかけたのです。彼の非常に親しい友達のキツネが、彼のそばに出てきてこう言いました。“怪物は本当に危険な奴ですよ。その怪物をこれからどうしますか？”

コヨーテは彼に言いました。“お前さんも、そして、少年達も、小枝でも、なんでもいいから燃えるものを集めてきてほしいんだ”

この頃、コヨーテは、怪物の心臓近くまで来ていました。彼は、そのとてつもない心臓から脂肪の壁を厚く切り取り、それを人々のほうに投げ渡しました。“腹が減っていたのではまことによろしくない。さあ、これを食べるんだ。”

と、言いながら、コヨーテは、その一方で火打ち石を使い、火を起こしていました。そして、怪物の目、鼻、耳、そして、御尻の孔にも一杯の煙を送り出しました。

怪物が言いました。“オーッ。コヨーテ！ なにをやるんだ。だから私はお前を信用しなかったのだ。どうか、俺の体からお前さんを吐き出させてくれ。”

コヨーテが言いました。“もし、あなたがそうするなら、人々は、あとでこういうだろう。『吐き出して彼は人々に鮭を与え続けるのだ』”と。“分った、分った。じゃ、私の鼻から出てきてくれ。”と、怪獣がいうと、“しかし、かれらは、まだ同じことをいうだろう。” “分った。分った。だから、耳の穴から出てきておくれ。”と怪獣はいいました。

．“もし、私がそうするなら”とコヨーテが応えました。“彼らは、こういうに違いない。”ここに、人々に食べ物を与える、古い耳垢がある“

“はん、はん、はん、オーッ。コヨーテよ。これが、私がお前を信用しなかった理由だ。じゃ、尻の穴からでてゆけ。”

すると、コヨーテが応えました。“そこでも、人々はさけぶだろうよ。『ふるい糞が食料をみんなに与えるだろうよ』”

そのころ、火はすでに怪物の心臓辺りまで燃え広がっていました。そして、彼は、苦しくなり始めました。コヨーテは、心臓の壁を切り刻み始めましたが、途中で彼の石のナイフの一つが壊れてしまいました。直ぐにかれは別のナイフを取り出し、それで、また、切りつづけました。か、しかし、このナイフもやがて壊れてしまいました。そこで、コヨーテはみんなに言いました。“さあ、みんなで、ここに骨を全部集めるんだ。そして、それをこの怪物の目のところ、耳、口、そして、御尻の所に運んでくれ。こうして集めた骨は積み上げておき、怪物が死んで倒れるときに、それらをそれぞれの孔からけりだすのだ。”三番目のナイフで彼が心臓の壁を切り出しました。でも、その三番目のナイフも壊れたのです。そして、四番目のもの、もう、これしか残っていませんでしたが、これを使いました。彼は、みんなに言いました。“いいかい。彼はすぐに死んで倒れるから、みんな、準備をするんだ。それぞれが、自分の一番近くの孔を通して外に出なくてははいけないよ。年寄りの女と男の人は、外に出易いように、入り口の近くにいるようにしてあげなさい。”

そして、いまや、心臓は、少しだけの筋肉を残すだけとなりました。そして、コヨーテは、彼の最後のナイフを使って、そののこりを切り落としました。怪物の心臓は、コヨーテの最後のナイフが壊れても、それでも、かろうじて踏ん張っていました。コヨーテはみずから心臓に体当たりをし、自分の手をばらばらにしたのです。すると、怪物は、ついに力尽きで、自分の体のいろいろなところの孔を広げて行きました。こうして、みんなは積み上げてあった骨を蹴りだし、そして、自分達も外に出たのです。勿論、コヨーテも一緒に外にでました。

怪物は、死んで倒れてしまい、御尻の孔が閉じ始めましたが、ニオイネズミはまだなかに残っていました。丁度、御尻の孔が閉じる直前に彼は何とか、外に這い出してくることができましたが、彼の尻尾は、捕まってしまいました。彼は必死になって、その尻尾を引っ張り、引っ張りし、結局、尻尾の毛がなくなってしまったのです。コヨーテが彼を叱りました。“今、お前さんは何をしていたんだね？ 多分、最後の瞬間に何か考えていたのだろう。お前さんは、いつでも、最後なんだから。”

そして、コヨーテがみんなに言いました。“さあ、骨を全部集めるんだ。そして、それをうまく並べてくれ。”みんなは言われたとおりにしました。そのあと、コヨーテが、こう言いました。“さあ、これからみんなで、怪物を切り刻むのだ。”コヨーテの手が血で汚れました。そして、かれはねこの血を骨の上に撒きました。と、突然、怪物の中にいる間は死んだ状態だった人たちがたち

まち生き返ったのです。だれもが、その巨大な怪物を刻みました。そして、コヨーテは、その土地のすべての部族のいる場所に、太陽の上がる方角に、そして、太陽が沈む方角にも、北の方にも、南の方にも、その体の部分をばら撒き始めました。その肉の届いたところに、彼は、部族の名前をつけ、そこの人たちの容貌がどんなものになるかを語りました。**Cayuse** 族が生まれ、彼らは背が小さく、興奮しやすい部族でした。**Flatheads** は、平らな頭をした部族と成りました。**Blackfeet** は、背が高く、スマートで、そして、戦闘好きな部族となりました。**Coeur d'Alene** と彼らの北の隣人たちは、賭け事が上手な部族となりました。**Yakima** は、背は小さかったのですが、がっちりとしていて、とても魚とりが上手な部族になりました。

彼は、このようにした怪物の体をすべて利用しました。すると、そこにキツネがコヨーテにこう言いました。“コヨーテさんよ、これは一体どうしたというのかね？ 君は怪物の体を全部使って、しかも、それを みんなあちこちにばら撒いてしまうなんて。もう、ここには自分のためにも何も残っていないではないか。”

“いいんだよ”とコヨーテは大きな声で笑っていました。“どうして、君はそれを先に私に言わなかったんだね？ 私は、あんまり忙しかったものだから、そんなことついぞ考えもしなかったよ。”そして、かれはみんな方に振り返り、こう言いました。“私を、どこか、手の洗える水のあるところに案内してくれ。”彼は、自分の手を洗うと、その水が血のように赤くなりました。すると、その血のように赤くなった水を自分の周りの大地に撒きながら、“みんなは、決して大きくないかもしれない、しかし、みんなは力強くなるだろう。みんなは、私が怪物の体を十分に上げなかったから、小さいかもしれない、しかし、非常に勇敢だし、知恵が備わっていて、働きものになるだろう。そんなに時間がかからずに、**La-te-tel-wit**(人間こと)が、やってくるだろう。そして、みんなは、**Nu-me-poo**(後に、**Nez Perce** となった人々)として、あるいは、**Rsoop-nit-pa-lu**(大分水嶺の近くに住んでいる部族)として知られるようになるだろう。こうして、**Nu-me-poo**の国が生まれました。今日、怪物の心臓と肝臓は、**Nez Perce**部族のふるさととなった**Idaho**の美しい**Kamiah Valley**で見ることができると違いありません。このようにして、**La-te-tel-wit**(人間)の誕生が手近に語られるようになったのです。

Source: Nu-Mee-Poom Tit-Wah-Tit: Nez Perce Legends. By Allen Slickpoo, Leroy Seth, and Deward E. Walker, Jr. 1972.

コヨーテは、インディアンの中では、知恵者として崇められているようです。人間が生まれる前に、インディアンが生まれたという話です。インディアンの尊厳を語る伝説のような気がしました。

さて、この話、あなたのこころの中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

48 Mt. Shasta グリズリーの伝説

by Joaquin Miller

Native American Lore

まだ、この地球に人間がまったく居ない頃のことですが、偉大なる天の創造の神たちの酋長は、天がいつも寒かったので天空の世界の彼の家でいつも震えていました。そこで彼は、空の片隅にまわりを石で囲った穴を作りました。そして、近くに大きな丘ができる間で、その穴の中から雪と凍りを掻き出しました。この丘こそ、**Shasta** の山だったのです。

こうして、天の神は空から山の上に降り、下っていきました。そして、かれは、丁度、半ばほど下ったときに考えました。“そうだ。この山には森がなくてはいけないな。”そこで彼は、あちこちに指をたてて大地をつつきました。するとそこに木が生えてきたのです。彼が行く先々で、行きが融け、そして、その水が集まり川になりました。

天の神は、天から降りるときに持ってきた、歩くときにつかう大きな杖の端を削り、それを川の水の中に投げ込みました。その削ったもののなかの長いものは、ビーバーとカワウソになりました。もっと小さなものは、魚になったのです。彼の杖のもう一方の端を使って、彼は動物達を作りました。

その動物達のなかで一番大きなものがグリズリーの熊だったのです。彼らは、丁度、今日でも見られるような毛皮で覆われていて、鋭い爪を持っていました。が、しかし、かれらは後ろ足で歩くこともできなければ、話をすることもできませんでした。彼らは、それはそれは、恐ろしい顔をしていたので、天の神は、彼らをその山の奥深い、底に住まわせようと送ったのです。

山の木々から枯葉が舞い落ちるころ、天の神は、それらにフッと息を吹きかけました。すると、木の葉は鳥達になったのでした。

こうして、その天の神は、地球の上に住む決心をし、彼の家族を向かえました。

Shasta の山が彼らの住居になったのです。彼は、その山の中腹に大きな火を起こしました。そして、頂上にむけて、煙と炎のどる孔を開けました。彼は、いつでもその火を燃やすために大きな薪をくべていたので、地球は、揺れており、炎がその山の頂上から空に噴出していたのでしょう。

春の遅い時期、風の神がとても強く吹き続け、そのために煙が穴を通じて反対に流れ、天の神の家族の目を焼いてしまいました。天の神は、彼の一番年下の娘に向かい、風の神のところに言って、そんなに強く吹かないでくれと頼むようにいいました。

天の神は、彼の娘に注意をするように言いました。“お前は頂上に着いても、決して自分の頭を突き出してはいけないよ。その風はきっとお前の神を掴んで、そして、引っ張り出そうとするから。しっかりと自分の腕で押さえて、そして、合図をして、それから風の神に向かって話をしなさい。”

その小さな少女は、急いで山の頂上まで上り、そして、風の神に話かけました。彼女が帰り始めたとき、彼女は、彼女の父が、きっと海が山の

頂上から見えるに違いないと話していたことを思い出しました。彼は彼の家族が山のほうに移ってから海を作りましたので、彼の娘はそれを見たことがなかったのです。

彼女は、自分の頭を穴から出して、そして、西のほうに目をやりました。さあ、風の神が彼女の髪の毛を掴み、彼女を山の穴から引き出しました。彼女は、氷や雪の上を滑って転がってゆき、ながく赤い髪の毛を雪の上にたらしながら、山の樹木の限界線のところの低く茂ったモミの木の中に落ちてゆきました。

そこで、グリズリーの熊が彼女を見つけたのです。彼は、その小さな少女をいったい何者なのだろうかと思いながら自分の家に運びました。グリズリーの母熊は、彼女を優しく労わり、そして、彼女を自分の子供たちと一緒に面倒をみました。こうして、小さな少女と小熊達は兄弟のように育ってゆきました。

彼女が年頃になると、彼女と、グリズリーの一番上の息子が結婚をしました。何年か経つと、彼らの間に沢山の子供が生まれました。その子供たちは、彼らの父親とも、あるいは、母親とも似ては射ませんでした。

森中のすべてのグリズリーの熊たちが、この新しく創造された生き物を誇りに思いました。彼らは、あまりにも周りから祝福されたので、赤い髪をしたお母さんと、そして、彼女の不思議な容貌の子供たちのために新しい小屋を作ってあげました。その小屋のことを、小さな **Shasta** の山と呼ぶようになりました。

それらから何年か経ち、グリズリーの母熊は、彼女がもうすぐに死ぬことを悟りました。彼女が、その小さな少女を育てたことは悪いことをしたのではと心配して、彼女は天の創造の神の酋長に言葉を送り、彼の許しを得るべきだと感じました。そうして、彼女は、グリズリーの人々を小さな **Shasta** の山の小屋に集め、雲に覆われた **Shasta** の山の頂上に、創造の神の酋長がそこで彼の娘を見つけないことができるかと伝えるために、彼女の一番大きな孫を送ったのです。

父は、非常に喜びました。彼は、大またで山に駆け下りて来ました。あんまり急いだので、その熱さに雪が溶け出しました。彼の押しあを今日でも見ることができます。

彼が、その小屋の近くまでくると、彼は、自分の娘を大声で呼び出しました。

かれは、彼女を最後に見たときのような小さな少女を想像していました。彼がそのなんとも不思議な創造物をみたときには、彼の娘は、とても気を使いました。彼は、彼らが彼の孫であることを聞かされてびっくりし、そして、非常に怒り出しました。彼は、その老いたお婆さんを厳しいまなざしで睨みつけましたので、たまらずお婆さんは死んでしまいました。こうして彼は、すべてのグリズリーを呪ったのです。

“手を ついて、ひざまずけ。そして、いまから、すべてのグリズリーは四足で歩くのだ。お前達は、決して話をする事は許されない。私を中傷したのだ。”

かれは、彼の孫達をその小屋から連れ出し、そして、彼女の娘をかれの肩に担いで、山に登って戻って行きました。それ以来、彼は森に来ることはありませんでした。彼は、かれの小屋の真ん中にある火を消し、そして、かれの娘と一緒に天に帰っていったという人もいます。

こうして生まれた、不思議な子供たちは、方々に散らばってゆき、地球上のあちこちを彷徨い歩きました。かれらこそ、最初のインディアン達であり、すべてのインディアンの部族の先祖なのです。

Shasta の山の周りに住んでいるインディアン達がグリズリーを殺さない理由はこうしたことからです。彼らのだれかがグリズリーに殺されたようなときには、いつも、かれの体は、その場でただちに焼かれます。そして、何年ものあいだ、そこが彼の死んだ場所であると言う立派な目印となるまで、そこを 通った人は、石を積み上げて行くのです。

インディアンの先祖はグリズリーであることという、熊とインディアンのかわりが、彼らの熊崇拝の背景をあることがよくわかりましたが、し

かし、そこになんともなく物悲しさを感じました。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

49 バッファロー岩の伝説

Native American Lore

ブラックフィートのインディアンたちによって呼ばれているように、バッファローの岩とは、普通、大平原で見つけることのできるある種の化石となった骨のことでした。誰だろうと、この骨を見つけた人は、バッファローの偉大なる能力が与えられると考えられていましたので、とても幸せ者だったのです。その持ち主は、その化石を自分の小屋のなかの、囲炉裏のそばに置き、いつもそれに祈っていました。この物語は、石の使い方について物語るだけではなく、インディアンたちが馬に乗って狩をする以前に、どのようにしてバッファローの狩をしていたかについても明らかにしてくれるものです。

あるところに、とても貧しい男が居ました。彼の二番目の奥さんはブラックフィートの人間でした。彼女の身にまとっていたバッファローの毛皮は、とても古びており、そこらじゅうに穴が空いていたし、バッファローの毛皮でできたモカシンは、擦り切れ、あちこちが破れていました。彼女と彼女の仲間達は、

バッファローがよく通る崖からそう遠くないところでテントを張っていました。彼らは、着ていた物がぼろぼろだったし、また、食料にも窮していたので、どうしてもバッファローを捕らえなければなりませんでした。ある日のことです。この貧しい女が薪を集めていた時、彼女は、何処からともなく聞こえてくる歌の声を耳にしました。辺りを見回すと、その歌声はどうも、バッファローの岩のほうから聞こえてくることが分かりました。その歌声は、“私をつれてお行き。私をつけてお行き。私はとてつもない力をもっているんだよ。”と歌っていました。

そこで、その女はバッファローの石を拾い上げました。彼女は、自分の小屋に戻ると、自分の夫にこういいました。“男達をみんな呼んでおくれ。そして、彼らにバッファローを連れてくる歌を歌わせてくださいな。”

“お前、正気かね？”と、彼女の亭主が尋ねました。

“ああ。正気だともさ。”とその女が返事をしました。“男達を呼ぶんだよ。そして、熊の祈祷師の男の所からバッファローの背中の骨をもらってきてそのかけらを持たせなさいな。そして、その中から何人かの男を選んで、彼らに自分たちが使っているガラガラ楽器を四つ持ってこさせてください。”

男は、自分の妻の指示に従って、言われたようにしました。そして、彼女は、たくさんのヤマヨモギとバッファローの糞を使って小屋の中を四角の形に模様変えをする、そのやり方を夫に教えてやりました。第一夫人が、その亭主の隣に座るのが当時の習慣ではあったのですが、その男は彼の第二夫人にほかの女の衣装を着させ、彼の隣に座るように指示しました。すべての準備が整うと、そこに呼び出された男達が、小屋のなかのその女と彼女の亭主の横に座りました。すると、どうでしょう、そのバッファローの石が歌を歌い始めたではありませんか。“バッファローたちがまた、戻ってくるよ。バッファローが戻ってくるよ。”と、歌い始めました。

この歌を聴いて、その女が若い男達に外に出て行って、沢山のバッファローの糞を集めて一列に並べるように頼みました。“そこにきちんと並べたあと、バッファローの毛皮で四回ほどそれを扇ぐのです。そして、それに向かって大声で歌を歌うのです。そうすれば、四回目になったときに、そのバッファローの糞のすべてがバッファローそのものになって、崖のほうに向かって歩きだすでしょう。”

若い男は彼女の指示に従い、言われたとおりにしました。すると、その糞がバッファローになったのです。それとときを同じくして、その女が小屋の中にいる人々に歌を歌わせたのです。一つの歌は、ほかのバッファローたちをある道のほうに導いていくバッファローの歌でした。人々がその歌を声をそろえて歌っていると、一匹の雌牛が先頭に立ち、残りの群れがそのあとに続いていっ

たのです。そして、彼らは、その崖の上から突っ込んで行き、殺されてしまったのです。

それから、その女が歌いました。

百頭よりももっと沢山のバッファローが
崖の上から飛び込んでいったんだよ。

私が彼らを飛び込ませたのさ。

だから、この地球上の男はみんな、私の歌に耳を傾けているのさ。

百頭以上のバッファローが
崖の上から飛び込んでいったんだよ。

こうして、人々はその岩が非常に偉大な威力を持っていることを知りました。その時以来、彼らは、バッファローの岩を非常に大事にし、それを拝んでいるんです。

バッファローは、インディアン達にとって、ただの食料だけではなく、毛皮は、衣類、毛布になったし、また、角は、水入れ、食料を入れる容器、そして、骨は武器や様々な生活の道具を作るのに使われました。だから、彼らはバッファローを非常に大事にしていたわけです。そのバッファローを遊び半分に狩猟していたのが西洋系のアメリカ人だったのは、とても悲しい話です。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。

50 この世のできた時の話

Native American Lore

この世の中が始まった頃、その当時は、ふんわりとした暗闇のほかには何もありませんでした。そして、ワタリガラスは、その暗闇が地球の塊のほうに包み込まれてゆくまでばたばたと羽ばたいていたのです。そして、そこには、凍った黒い色をした大海原と狭い一筋の海岸があるだけでした。しかし、直ぐに、人々がその海岸に沿って生活をするようになりました。すると、ワタリガラスは、彼らが貧相であり、太陽の光も持たずよわよわしい生き物であることを知り、非常に気の毒に感じました。彼らは、ナッツや木の葉を噛んだり、飲み物を確保するために老木の木の根を砕いたりして生活をしていました。

“これは、彼らを助けなければいけないな。”とワタリガラスは思い；“がぁ一つ。がぁ一つ。がぁーッ！”と鳴き声をあげながらこの地球上に降りてきました。そして、人々を一同に集めたのです。かれらは、じめじめした暗がりのなかで、まるで幽霊のように、ぼんやりと青ざめた表情をしていました。

“ワタリガラスがやって来た。”と彼らは口々に叫びました。“かれこそ、まさしく、物事を間違いなく作り出すワタリガラスだ”

この貧相な者達は勇気付けられました。そして、彼らは丸く集まって、彼が何をするのか見つめていました。

ワタリガラスは、ハンノキから枝を折ってきて、その葉っぱを池の水面に撒き散らしました。すると、その葉っぱは一度は水の中に沈んだのですが、やがて、池の水には泡が立ち始めました。そして、暫く、池の水が沸騰していると、その水面が綺麗になり、魚がそこで飛び跳ねだしました。そうです。これが、ワタリガラスが人々に魚を恵んだ方法なのです。

とはいっても、彼らは食料にする魚は手にはいりましたが、逆に、これまでに喉が渇くように成りました。彼らは、ワタリガラスを頼りにしました。そして、かれが、またやってきたのです。すると、人々はこう言いました。“ここにいるワタリガラスこそ、この世の中で、ただ1人、新しい水が湧き出てくる泉があることを知っているワタリガラスなのだ。” **Ganook** という名前の1人の男が、その周りに家を立て、彼は、その水をほかの人にわたせることを拒絶しました。

“おそらく、”とワタリガラスが考えました。“私は、その人たちに上げられるだけの沢山の水を飲むことができるだろうよ。”

ワタリガラスは、その家のほうに行き、中に入っていいか頼みました。すると、**Ganook** は、友達ができたことを非常に喜びました。ワタリガラスはそこに座り、親しく話をし、暫くして水を飲んでいいかお願いしました。

“まあ、しかたないや”と **Ganook** が不承不承言いました。そして、彼に、岩のそこから湧き出て、綺麗な水の池となった泉を教えてあげました。

“全部、飲むんじゃないよ!”と **Ganook** が彼に注文をつけました。“お前さんもよく知っているように、この水は、この世の中で唯一の新鮮な水なんだから。”

ワタリガラスは、そんなことは百も承知でした:だから、彼はそれを求めてきたのです。しかし、彼は言いました。“ほんの、ちょっとだけだよね!”と。そして、彼は、自分がよろめくほど水を飲みました。

“そこまでにしろよ。ワタリガラスくん!”と **Ganook** が叫びました。“お前さんは、その泉を飲み干してしまうつもりかい?”

ワタリガラスがやろうとしたことは、そのことでした、が、彼はそれを軽く受け流しました。彼は、ほどよく、火のそばに近づき、そして、“**Ganook** くん、私にある物語を話させてくれないか。”と言いました。

こうして、ワタリガラスは、だらだらとした旅にでた4人のノンビリした兄弟のとても長い退屈な話を始めました。そして、その話にさらにだらだらとした出来事をつなげていると、**Ganook** の目が閉じてしまいました。そこで、ワタリガラスは、やんわり、そして、もっと、もっとゆっくり話しを続けました。すると、**Ganook** のあごが、彼の胸のほうにうなだれてきたのです。

“それからね。”ワタリガラスは、**Ganook** に目をやりながら、穏やかな調子で話しをしました。“長—い、長—い暗がりの谷にそって、やんわりとした暗—い霧がその四人の背の高い、くすんだ兄弟達のところに進んで生きました。さあ、今だ、眠ってしまいなさい。”こうして、**Ganook** はいびきをかき始めてしまいました。

ワタリガラスは、思いつくや否や、その泉のほうに向かって走って行き、そして、彼のくちばしのその水の中に突っ込みました。しかし、彼は、**Ganook** が恐ろしい鼻息で息を始めるよりも、水を飲み込むために彼の頭を上げたのはそれ

ほど早かったわけではありません。かれは、“つづけろ、つづけろ。私は聞いているんだ！ ねむってなんか居ないぞ” こうして彼は、自分の頭を叩きながら、目を瞬かせて、“ワタリガラス、お前は何処にいるんだ？ 何をしているんだ？”と言いました。

“ちょっと、運動のために歩きまわっているのさ。” 分かりガラスが彼を納得させました。そして、彼は戻って行き、低く、そして、単調な声でその四人の兄弟の長—い話を続けました。そして、彼は、**Ganook** がい眠りをはじめ、彼のあごが垂れ下がり、そのあと、急にそれを起こしてうしろに踏ん反りかえるや否や、目を開け、ワタリガラスをにらみつけるのでした。そして、彼の頭をたれながら、“つづけろ。その後、どうなるんだ？”と言い、また、彼の頭を自分の胸のところまで落すのでした。

“それからね。そしてね。” とワタリガラスはゆっくりと話しました。“丘の上に、その背の高—い四人ののんびりした兄弟達は上っていったのさ。空気は、重苦しく、どんよりと彼らを包んでいたんだ。そして、霧は、山々を優しく覆って見えなくしていたんだ。彼らの先にも、彼らの後にも、優しく、どんよりとした霧がかかって居たんだ。そうだ。あなたは眠るんだ！”そして、また、**Ganook** は居眠りを始めました。

ワタリガラスは、そお一つと泉のほうに忍びながら近づいていきました。そして、ガブ、ガブ、ガブと、こんどは、その池が干上がるまで水を飲んでしまいました。しかし、かれが最後の一飲みこもうと頭を上げたときに、**Ganook** が、さっと起き上がり、彼がしているところを見ました。

“そうか、ワタリガラスめ！” と **Ganook** が叫びました。“お前は、私を居眠りさせておけば、私の水が盗めると思っていたんだな！”

かれは、棍棒を取り上げ、そして、ワタリガラスを追いかけて、火の回りを回り始めました。ワタリガラスは、二三步走り、そして、羽を広げて羽ばたき、床からほんのわずかの高さまで舞い上がりました。そして、できるだけ力を振り絞り、煙突の穴のほうに向かって飛んで行きました。しかし、彼はあまりにもたくさんの水を飲んでいたので、その煙突の開いたところで引っかかってしまい、**Ganook** が、“この、やぶにらみのワタリガラスめ。今、お前を捕まえてやるからな！ お前こそ、哀れなこそ泥なんだ！” と叫んでいる間、何とか逃げ出そうと懸命にもがいていました。そして、**Ganook** は、緑のハンノキの枝

を火にくべて、その煙突中に充満するようにすごい勢いで煙を炊きました。こうして、ワタリガラスは、ほとんど窒息して死にそうになってしまったのです。

ワタリガラスは、彼が最後の最後の力を振り絞り何とかそこから抜け出すまで、彼は、ほとんど息ができず、そして、もだえながら、引っかかったままの状態だったのです。しかし、やっとそこから抜け出し、彼は、重々しい格好で、ふらふらよろめきながら空を横切り、飛んでゆきました。彼は、あまりにも重かったのも、あちらにとび、此方にとびという具合だったのです。そして、彼が飛んでゆくときに、彼のくちばしから少しずつ、水が流れてもれていったのです。それが、後に川となりました。最初は、Nass と Sitka の川ができました。そのあと、Taku と Iskut と Stikine の川ができました。ワタリガラスが真っ直ぐに飛びことができなかつたので、これらの川は、ちょうどヘビのようにくねくねと曲がっているのです。こうして、つぎに彼は、一滴、一滴、水を落しました。それがやがて、狭い溝になり、鮭の住む湖になったのです。

そして、ワタリガラスは、人々にも水を運んで上げました。しかし、彼の体には、あの煙突の穴の跡が、それからずっと残っていました。彼は、Ganook のところに行ったときには、偉大なる、白い、雪の聖霊として行ったのですが、しかし、その日から、ワタリガラスは、まさしく、終わることのない夜のあの真っ暗闇のように黒くなってしまったのです。 とさ。

インディアンの伝説の中では、ワタリガラスは、意地悪であつたり、あるいは、ずるがしこかつたりするのですが、ここに出てくるカラスは、とても、勇敢で、頭がよくて、賢い性格の持ち主として登場します。そのカラスが大活躍をしたというこの話のなかに、カラスが黒くなった話が出てきて、とても愉快です。

さて、この話、あなたの心の中にはどんな思いが巡りましたでしょうか。